

目次

9 8 1 — 2 0 2 3 N O . 3 4 (2 0 2 3 . 8)

| | |
|-------------------------------|-----|
| 小誌風の薔薇 | 3 |
| 風の薔薇叢書 | 4 |
| 水声通信／別冊水声通信 | 5 |
| 水声文庫 | 11 |
| 文学 | 21 |
| 中村真一郎コレクション—中村真一郎手帖 | 76 |
| 小島信夫長篇集成—小島信夫短篇集成—小島信夫批評集成 | 80 |
| ヘンリー・ミラー・コレクション | 86 |
| パスカル・キニヤール・コレクション | 90 |
| レーモン・クノー・コレクション | 93 |
| ヴァイクトル・セガレン著作集 | 96 |
| バルザック幻想・怪奇小説選集—バルザック芸術／狂気小説選集 | 98 |
| —バルザック愛の葛藤・夢魔小説選集 | 101 |
| マルキ・ド・サド全集 | 103 |
| アルノ・シュミット・コレクション | 104 |
| セルバンテス全集 | 104 |
| フィクションの楽しみ | 105 |
| フィクションの楽しみ | 105 |
| 叢書エル・アトラス | 113 |
| 現代ウイーン・ミステリー・シリーズ | 115 |
| アンデスの風叢書 | 117 |
| フィクションのエル・ドラード | 119 |
| ブラジル現代文学コレクション | 124 |
| 批評の小径 | 126 |

| | |
|----------------------|-----|
| エコクリティシズム・コレクション | 129 |
| イタリアルネサンス文学・哲学コレクション | 131 |
| 文学／雑誌 | 132 |
| 語学 | 133 |
| 芸術 | 136 |
| 現代美術スタディーズ | 170 |
| シュルレアリスムの25時 | 171 |
| ロックの名盤! | 174 |
| 人文科学 | 175 |
| ミハイル・バフチン全著作 | 189 |
| 叢書二十世紀ロシア文化史再考 | 191 |
| 言語の政治叢書 | 192 |
| 記号学の実践叢書 | 196 |
| 叢書人類学の転回 | 201 |
| 今福龍太コレクション「パルティータ」 | 205 |
| 神秘学 | 206 |
| 神秘学叢書 | 208 |
| ロサ・ミステイカ叢書 | 210 |
| シュタイナー教育・医学 | 212 |

小誌風の薈薇

文学・芸術・人文科学の問題を、とりわけ言語（記号）の問題として、ジャン
ル横断的に考察すべく、《言語学のための、というよりはむしろ、言語のため
の機関》として創刊された小雑誌。毎号特集形式によって、今日の最も根源的
な知的実践の現場へと誘う。

A5判並製

① 言語、ささも 一九八二年夏号

執筆||豊崎光一、渋谷孝輔、浅沼圭司、土岐恒二、小林康夫 今日における言
語の問題の多様な局面を、シモン『農事詩』の中に、デイヴィッド・ジョーンズ、
エイゼンシュテイン、丸山圭三郎、竹内芳郎等の中に探る。 装画||加納光於。

四〇頁五〇〇円

② 相互テクスト性の問題 一九八三年夏号

執筆||豊崎光一、三浦信孝、小林康夫、ローラン・ジェニー、ヴィクトル・セ
ガレン、ジュリア・クリステヴァによって定式化された《相互テクスト性》の
概念の射程と有効性をセガレン、ヴァレリーの中に、そして翻訳の問題の中に
探る。 装画||加納光於。

八〇頁六五〇円

③ シュポール／シュルファス 一九八四年夏号

編集||松浦寿夫 執筆||松浦、岡崎乾二郎、フィリップ・ソレルス、マルスラン・
ブレネ、ミレー、カーヌ他 五月革命の衝撃の中から誕生し、テルケル派と雁
行しつつ、美術の大胆な脱構築を企て、今日のフランス美術に大きな影響を与
え続けるS/Sの全貌を伝える。

一〇四頁八〇〇円

④ ジャン||フランソワ・リオタール 一九八六年夏号

編集||小林康夫 執筆||ジャン||フランソワ・リオタール、今村仁司、谷川渥、
松浦寿夫 《社会主義か野蠻か》の戦闘的左翼から欲動の哲学へ、そして未聞
の《文》の哲学へ。ポスト構造主義の代表的哲学者リオタールのための全頁特集。

二二八頁二二〇〇円

⑤ ウリポの言語遊戯 一九九一年秋号

編集||松島征 執筆||松島、酒詰治男、フランソワ・ルリヨネー、ジヨルジュ・
ペレック、ジェラルド・ジュネット 古今東西の言語遊戯の理論的探求と新た
な言語遊戯の果敢な実践をつづけるウリポ・グループの驚くべき成果をあかす。

二九頁一五〇〇円

風の薔薇叢書

編集 金井美恵子 十坂部恵子 清水徹 十豊崎光一

《どこかに、単純にそして純粹に、言語と呼ばれるべきジャンルは存在しえないだろうか。詩と散文という形式的な対位法のみではなく、文学とそれ以外のものという対象の区別をも越えて》。還元不可能な言語へ向う現代日本のテクニクの実践の新しい様相を伝える。

四六判並製函入

鏡・空間・イメージ

宮川淳

実体論的思考を蝕む《鏡》、この《似ていること》の魅惑と危険について、《自己同一性の間隙からのある非人称の出現》について語る、天折した美術批評家の犀利な長篇評論。《そこにいるのは誰か、そして、誰が語っているのか》。栗 浅田彰・中沢新一・小林康夫・丹生谷貴志他 二二二頁十別丁函版二四頁 二五〇〇円

文手箱

豊崎光一

《「あいだ」は「空間」の「間」であると同時に、「人間」の「間」でもある。あいだ、まゝ、つまりはどちらも「存在」ではないのだ。ブランショ、ブローカー、クロソフスキー、宮川淳等を巡って、文学・哲学・美術の「間」において書かれた十九のエッセイ。 二五二頁 二五〇〇円

クロニク

豊崎光一

常に第一線のフランス文学者として、欧米、とりわけフランスの文学、芸術、思想の状況を鋭く克明に観つづけてきた著者の二十数年間におよぶ長短さまざまな批評的エッセーの集大成。今日のフランス文化の一面面を鮮やかに浮き彫りにする。 二八三頁 二五〇〇円

不可能なものへの権利

小林康夫

《思考が私の意志にも可能性にも義務にも属さないことが告げられる場処。思考と私とが無限の《荒唐》によって引き離されている切迫の場処》、この非一場処において問われるゲーム、死、共同体の問題。今日の哲学的思考の可能性を示す好著。 二五九頁 二五〇〇円

無の透視法

小林康夫

《死の思考、不可能性の思考、無の思考》を求めて、近代芸術を支える理念と神話の失墜以後を生きる芸術家たち（デュシャン、アルト、ケージ、三島由紀夫等）へ肉迫する芸術論集。気鋭の哲学 二重の処女作。《語るのは死である》。 二二三頁 二五〇〇円

ポストアート論

室井尚

今日の先端的アートシーンを高速度に横断しつつ、物語なき前衛なき芸術なきポストモダン時代の《芸術》の驚くべき変貌を、《作患》の消滅とパステイッシュの氾濫、そしてとりわけメディアの専制との関連のうちに問う若き美学者の意欲作。 二二三頁 二五〇〇円

吉田健一頌

丹生谷貴志・四方田大彦・松浦寿輝・柳瀬尚紀

絶対への渴望とその不可能性の深淵に、果てしなく雪崩れゆく「近代」世紀末。この病める意識からの脱出という類例のない試みを生きた《文人》吉田健一。その作品世界に斬新な思考の可能性を見出す若手批評家による書き下し吉田健一論集。 二二三頁 二〇〇〇円

水声通信

A5判並製

④ ロシア・アヴァンギャルド芸術 06年2月号

二十世紀初頭のロシアにおいて、文学・芸術のあらゆる分野を席捲したこの運動に、第一線の研究者たちが迫る。執筆〓桑野隆、浦雅春、戸田ツトム、武隈喜一、江村公、タチヤナ・コトヴィイチ、セリム・ハンマゴメドフ他 連載〓小林、松浦、高橋、野村、中村 一七八頁 一〇〇〇円

① 荒川修作の〈死に抗う建築〉 05年2月号

近代建築に死を！ 東京の西郊に出現した異形の建築〈三鷹天命反転住宅〉を巡る大特集。執筆〓荒川修作、瀬戸内寂聴、馬場駿吉、塚原史、河本英夫、高橋順一他 特別寄稿〓清水徹 連載〓小林康夫、松浦寿夫、高橋透、桑野隆、野村喜和夫、中村邦生 総一四四頁 一〇〇〇円

⑤ 野村喜和夫詩の未来に賭ける 06年3月号

腐朽しゆく現代詩に死を！ 出版以来、一作ごとに旋風を巻き起こしてきた詩壇の革命児の全貌をあかす。執筆〓野村喜和夫、吉増剛造、小林康夫、中沢けい、藤沢周、鈴木和成、城戸朱理、山田せつ子他 追悼〓鳥敦彦、O J U N、松井智恵 連載〓桑野〔完〕、松浦、中村 一四四頁 一〇〇〇円

② 小島信夫を再読する 05年12月号

私小説的な装いのもとに、一貫してメタフィクショナルで実験的な作品を発表し続けてきた日本文壇最長老へのオマージュ。執筆〓小島信夫、大庭みな子、三浦清宏、堀江敏幸、千石英世、中村邦生、芳川泰久、斎藤環、茂木健一郎、千野帽子他 連載〓小林、松浦、高橋、桑野、野村、中村 一六〇頁 一〇〇〇円

⑥ ジョルジュ・ペレック 06年4月号

〈ワリボン〉グループ最大の小説家への極東からのオマージュ。執筆〓ジョルジュ・ペレック、酒詰治男、塩塚秀一郎、松島征、M・F・フェリエ、原野葉子、湯沢英彦、宮川明子、若島正、オクヤナオミ、春日武彦、宮下誠 連載〓松浦、高橋、野村、中村 追悼〓佐野衛、黒田杏子 一四四頁 一〇〇〇円

③ 村山知義とマヴォイストたち 06年1月号

近代日本最大のアヴァンギャルド集団の多様な側面を、同時代的な文脈において、また今日的な視点から読み説く。執筆〓五十殿利治、松浦寿夫、水沢勉、林淑美、ジュニアファー・ワイゼンフェルド、白川昌生、滝沢恭司、波瀾剛、正木喜勝、喜多恵美子他 連載〓松浦、桑野、野村、中村 一三六頁 一〇〇〇円

⑦ ダダ 1916-1924 06年5月号

二十世紀の文学、芸術の様相を一変させた《ダダ》の運動を九十年の後に徹底的に再考する。執筆〓塚原史、宮下誠、鈴木芳子、鈴木雅雄、井口壽乃、村田宏、波瀾剛、マルク・ダシー、白川昌生、平井正、香川檀、谷昌親、平芳幸浩他 特別寄稿〓荒川修作 連載〓松浦、中村、野村 一六〇頁 一〇〇〇円

8 加納光於の芸術 99年9月号

銅版画から出発しながら驚くべき油彩画へと至った加納光於の全体像へ迫る。
 執筆||加納光於、大岡信、吉増剛造、平出隆、谷川渥、巖谷國士、建昌哲、中村隆夫、野村喜和夫、土屋誠一、暮沢剛巳、谷川晃一他
 特別掲載||高遠弘美
 新連載||小林康夫 連載||松浦、高橋、野村、中村 総五二頁 一〇〇〇円

12 宮川淳、三〇年の後に 99年10月号

主体とディスタールの近代的概念の破砕を企てた美術批評家への遠くからのオマージュ。インタビュー||吉田喜重 執筆||清水徹、浅沼圭司、岡田温司、土屋誠一、桑田光平、神山亮子、野田吉郎他 連載||小林康夫、松浦寿夫、高橋透、野村喜和夫、中村邦生 二八頁 一〇〇〇円

9 軽井沢という記号 96年7月号

軽井沢という多面的な記号をポスト・コロニアルに読み解く! 執筆||千葉一幹、中村邦生、千石英世、芳川泰久、鈴木貞美、川崎淡、千野帽子、福田真人他
 特別掲載||馬場駿吉、乗松亨平 展評||須藤哲生、榎木野衣、和田忠彦、土屋誠一 連載||小林、松浦、野村、中村 総五二頁 一〇〇〇円

16 何のための出版? 99年11月号

電子メディアの登場によって出版は死滅するという俗説を笑いつつ、(何のための)出版なのかを問う。執筆||立仙順朗、私市保彦、石塚純一、長谷邦夫、山崎勉、中村邦生他 インタビュー||西沢栄美子+小林康夫 新連載||宮下志朗 連載||小林康夫、松浦寿夫、野村喜和夫 二二頁 一〇〇〇円

10 ジャン||リュック・ナンシー 99年8月号

デリダ以降、最大の哲学者の来日を記念する、本邦初の大特集! 執筆||ナンシー、ジャック・デリダ、小林康夫、鶴飼哲、西谷修、増田一夫、湯浅博雄、合田正人、大西雅一郎、上田和彦、守中高明、西山雄二 特別掲載||イーデン ソール+コタリ 連載||小林、松浦、高橋、野村、中村 一四四頁 一〇〇〇円

14 戦後マンガ史論をどう書くか 99年12月号

史上最大の出版部数と最高の(?)芸術的表現に到達した《戦後マンガ》の六〇年を考える。執筆||斎藤環、長谷邦夫、梶井純、永山薫、吉村和真、竹内オサム、校條剛他 新連載||桑田光平 連載||小林康夫、松浦寿夫、高橋透、野村喜和夫、中村邦生 九六頁 一〇〇〇円

11 表象とスクリーン 99年6月号

「表象の危機」の時代へ肉迫する《表象文化論》の果敢なる試み。執筆||小林康夫、松浦寿輝、吉田喜重、岡田茉莉子、加国尚志、原和之、具沢哉、大橋完太郎、北野圭介、中島隆博、ミハイル・ヤンポリスキー 連載||松浦寿夫、野村喜和夫、中村邦生、デリダ×ナンシー 二二八頁 一〇〇〇円

15 《こころ》のアポリア 97年12月号

アリストテレスの『デ・アニマ』から最新の脳科学の知見までを組上りへのせ、「こころ」へ迫る。執筆||坂部恵、黒崎政男、中島隆博、小林康夫、高田康成、山本久美子、信原幸弘、原壘 書評||浅沼圭司、田野倉康一 連載||宮下志朗、松浦寿夫、野村喜和夫、桑田光平、中村邦生 二二頁 一〇〇〇円

16 ジョン・ケージ 07年3月号

二十世紀の音楽、芸術の状況を一変させた稀代の作曲家。思想家の全貌。執筆
|| 近藤譲、藤枝守、渋谷慶一郎×池上高志、柿沼敏江、椎名亮輔、中井悠他
展評 || 北沢憲昭 追悼 || 坂部恵他 新連載 || 湯沢英彦 連載 || 宮下志朗、小林
康夫、高橋透、野村喜和夫、桑田光平、中村邦生 二二頁 一〇〇〇円

17 甦るライプニッツ 07年4+5月号

甦る〈ヴェルブム〉の形而上学。の源流、ライプニッツ。その思想の現代的意味
を考える。執筆 || 佐々木能章、小田部胤久、松田毅、酒井潔、森田園 座談会
|| 坂部恵×黒崎政男×山内志朗×小林康夫 連載 || 宮下志朗、湯沢英彦、高橋
透、野村喜和夫、桑田光平、中村邦生 二八頁 一〇〇〇円

18 阿部良雄の仕事 07年6月号

この一月に急逝した世界的なボードレール学者にして美術史家の仕事を検討し
追悼する。執筆 || 出口裕弘、堂本尚郎、清水徹、連實重彦、渡辺守章、中地義
和、四方田犬彦、松浦寿夫、稲賀繁美、鈴木雅雄、湯浅博雄、鈴木啓二、横張
誠、吉村和明、北村卓、山田兼士、海老根龍介他 一六八頁 一五〇〇円

19 《視点》をめぐる7年7+8月号

誰が視るのか？ 誰が語るのか？ 《主体》の問題と深く交錯する《視点》の
問題を、美学・言語学・物語論のまじわる場所から考える。執筆 || 浅沼圭司、
松浦寿夫、中山真彦、赤羽研三、田口紀子、喜田浩平、井元秀剛 連載 || 高橋
透、湯沢英彦、桑田光平、野村喜和夫、中村邦生 二二頁 一〇〇〇円

20 思想史のなかのシュルレアリスム 07年9+10月号

シュルレアリスムに同伴しつつ、あるいはそれに抗して、同時代を生きぬいた
人々の肖像。執筆 || 鈴木雅雄、塚本昌則、永井敦子、郷原佳以、三ツ堀広一郎、
丸山真幸、塩塚秀一郎、星埜守之、齊藤哲也 特別掲載 || 松浦寿夫、ロマン・
ヤコブソン、朝妻恵里子 連載 || 宮下史朗他 一六八頁 一五〇〇円

21 ヘンリー・ミラー 07年11+12月号

二十世紀の小説を根底から革新したミラーの多様な側面に光をあてる。執筆 ||
本田康典、山崎勉、芳川泰久、小林美智代、松田憲次郎 連載 || 小林康夫、松
浦寿夫、高橋透、湯沢英彦、桑田光平、中村邦生 九六頁 一〇〇〇円

22 サミュエル・ベケット 08年1+2月号

ジョイスの衣鉢をつぐ小説家にして極度に縮減された詩的戯曲の作家ベケット
に迫る。執筆 || ベケット、北文美子、近藤耕人、井上善幸、メアリ・フライデン、
岡室美奈子、西村和泉、景英淑、野間勉、堀真理子 連載 || 宮下志朗、本田康
典、湯沢英彦、高橋透、桑田光平、中村邦生、松浦寿夫 一四四頁 一五〇〇円

23 シュルレアリスム美術をどう語るか 08年3+4月号

モダニズム批評によって否定され排除されてきたシュルレアリスム美術を現代
美術史のなかに復権する。執筆 || 林道郎、鈴木雅雄、齊藤哲也、中田健太郎、
河本真理、長尾天、神保京子、長谷川晶子、永井敦子、星埜守之、合田陽祐
他 連載 || 小林康夫、宮下志朗、湯沢英彦、中村邦生他 一八四頁 一五〇〇円

24 交感のポエティクス 08年56月号

ネイチャー・ライティングや環境文学として現れつつある、自然と人間の新しい(交感)の可能性を探る。執筆||野田研一、近藤耕人、菅啓次郎、喜納育江、山里勝己、中川僚子、伊達直之、結城正美、小峯和明、書評||山田幸平、山梨俊夫、連載||宮下志朗、松浦寿夫、高橋透、中村邦生他 一四四頁 一五〇〇円

28 黒田アキ 09年12月号

執筆||黒田アキ、M・テュラス、P・ラクター||ラバロ、小林康夫、宮島達男、J・アルイユ、C・ファラン、本江邦夫、森裕一、道家洋、千種成顕、特別寄稿||中村亨、矢口裕子、A・ステットナー、書評||望月哲男、連載||宮下志朗、松浦寿夫、湯沢英彦、桑田光平、本田康典、中村邦生 二二六頁 二〇〇〇円

25 シュルレアリスム美術はいかにして可能か

08年78月号

「図」としてのシュルレアリスム絵画、遠近法的空間とシュルレアリスム絵画をめぐる白熱の討議。執筆||鈴木雅雄、林道郎、塚原史、千葉文夫、齊藤哲也、永井敦子、中田健太郎、中村尚明、宮下誠、書評||小口雅史、連載||宮下志朗、松浦寿夫、湯沢英彦、桑田光平、本田康典、中村邦生 一九二頁 二〇〇〇円

29 ポスト・ソウルの黒人文化 09年34月号

執筆||木内徹、T・エリス、B・D・アッシュ、西本あづさ、森あおい、石田依子、山本伸、中地幸、三石庸子、堀邦維、坂下史子、アルフレッド・ジャリ小特集||J・シュー、合田陽祐、特別寄稿||白川昌生、連載||宮下志朗、湯沢英彦、高橋透、桑田光平、本田康典、中村邦生 二二四頁 二〇〇〇円

26 カズオ・イシグロ 08年9+10月号

執筆||小池昌代、阿部公彦、平井杏子、中川僚子、遠藤不比人、新井潤美、藤田由季美、木下卓、岩田託子、武井博美、特別寄稿||白川昌生、書評||吉田文憲、追悼||長谷邦夫、連載||宮下志朗、松浦寿夫、湯沢英彦、高橋透、桑田光平、本田康典、中村邦生 一六〇頁 二〇〇〇円

30 ジョルジュ・バタイユ 09年56月号

執筆||M・シャブサル、D・アルバン、A・ジユフロワ、D・オリエ、谷口亜沙子、高桑和巳、濱野耕一郎、合田正人、丸山真幸、荻野厚志、M・リチャードソン、G||F・ルエト、神田浩一、西谷修、古永真一、門間広明、鈴木雅雄、連載||宮下志朗、湯沢英彦、高橋透、本田康典、中村邦生 二五四頁 二〇〇〇円

27 ジュール・ヴェルヌ 08年11+12月号

執筆||ル・クレジオ、横尾忠則、芳川泰久、F・デース、私市保彦、島村山寝、大友徳明、石橋正孝、新島進、堀千晶、藤元直樹、R・シエラード、特別寄稿||塚本昌則、齊藤哲也、鈴木雅雄、書評||田之倉稔、追悼||柳原孝敦、連載||松浦寿夫、高橋透、本田康典、中村邦生 二三四頁 二〇〇〇円

31 アナイス・ニン 09年78月号

執筆||ヘンリー・ミラー、アントナン・アルトー、ケイト・ミレット、杉崎和子、木村淳子、冥王まさ子、山本豊子、矢口裕子、金澤智、渡部あさみ、柴田元幸、書評||白田紘、特別寄稿||小笠原鳥類、アントワーン・コンパニオン、連載||宮下志朗、松浦寿夫、桑田光平、本田康典、中村邦生 二〇六頁 二〇〇〇円

㊸ ジャン・ピエール・リシャール 〇〇年〇+〇〇月号

執筆||ジャン・ピエール・リシャール、ミシエル・コロ、芳川泰久、野村喜和夫、桑田光平、堀千晶、田中成和、湯沢英彦、ジェラルド・ジュネット、山崎敦、三ツ堀広一郎、西脇雅彦 書評||三浦清宏、平井杏子 連載||宮下志朗、松浦寿夫、高橋透、本田康典、中村邦生 一五八頁 二〇〇〇円

㊹ エコクリティシズム 一〇年第一号(一〇年七月)

執筆||結城正美、H・シラネ、野田研一、笹田直人、小谷一明、生田省悟、喜納育江、G・ガリー、中川僚子、小山亘、岩井洋、山里勝己、村上清敏、豊里真弓、山本洋平、高橋龍夫、波戸岡景太、加藤睦、一ノ瀬和夫、D・ブラットン、巽孝之 特別寄稿||J||L・スタインメッツ、今井勉他 連載||宮下志朗他 二九二頁 二五〇〇円

㊺ 『社会批評』のジュールジュ・バタイユ 二一年第一号

(二一年八月)

執筆||ジュールジュ・バタイユ、ジャン・ベルニエ、ボリス・スヴァーリン、レイモン・クノ、岩野卓司、丸山真幸、有馬麻理亜、彦江智弘 連載||宮下志朗、松浦寿夫、桑田光平、本田康典 特別寄稿||齊藤哲也、野崎敏、西谷修、鈴木雅雄、中田健太郎、豊崎由美、塩塚秀一郎、D・ラバテ、中村邦生 全号総目次 二八五頁 二五〇〇円

別冊水声通信

セクシテリテイ

執筆|| ジャック・デリダ、ジュリア・クリステヴァ、デイティエ・エリボン、エレーヌ・シクスー、フランソワーズ・ファン・ロッスム|| ギュイヨン、湯淺博雄、澤田直、合田正人、岩野卓司、大西雅一郎、関修、吉川佳英子、郷原佳以、丸山真幸、大森晋輔

127 三二五頁 二八〇〇円

坂部恵

A5判並製

バタイユとその友たち

執筆|| 村上陽一郎、木村敏、鈴木忠志、磯崎新、加藤尚武、藤井貞和、佐々木健一、関根清三、荻部直、黒崎政男、山内志朗、乗立雄輝、山根雄一郎、小林康夫、野家啓一、小田部胤久、田中綾乃、伊古田理、高橋克也、伊藤邦武、伊豆藏好美、森田團、下野正俊、川中子義勝

116 三五〇頁 二八〇〇円

執筆|| P・ソレルス、J・ヴァール、岩野卓司、郷原佳以、門間広明、有馬麻理亜、J・シエニウ|| ジャンドロン、長谷川晶子、永野潤、R・クノー、A・コジェーヴ、加藤美季子、丸山真幸、伊藤直、伊原木大祐、大原宣久、R・ゲ|| クロズイエ、築山和也、永井敦子

147 四一九頁 三〇〇〇円

ジュリアン・グラック

執筆|| ミシエル・トゥルニエ、ピエール・ミション、ドミニク・ラブルダン、ミシエル・ミュラ、パトリック・マロ、マリアンヌ・ロレンジ、天沢退二郎、安藤元雄、堀江敏幸、塚本昌則、永井敦子、三ツ堀広一郎

112 二六一頁 二五〇〇円

シモーヌ・ヴェイユ

執筆|| A・カミュ、G・バタイユ、E・レヴィナス、M・ブランシヨ、R・シュナヴィエ、P・バシエ、E・ガブリエリ、稲葉延子、西文子、鈴木順子、竹内修一、福島勲、伊原木大祐、上田和彦、馬場智一、有田英也、渡名喜庸哲、丸山真幸、吉川佳英子、安原伸一朗、大辻都、今村順子、岩野卓司、大西雅一郎、伊原木詩乃

172 一九三頁 二八〇〇円

水声文庫

四六判上製

制作について

浅沼圭司

混沌とした現代社会のあり方と制作の(へいま)の姿との関係をあきらかにするために、絵画、音楽、小説をとりあげ、芸術制作の起源ともいえる(模倣)から(表象)、(表現)への展開の変容をプラトン、バルトラの著作をふまえ考察する。

1611 三七三頁 四五〇〇円

宮澤賢治の「序」を読む

浅沼圭司

幼少期に賢治を読んだ記憶、太平洋戦争中の「学徒動員」という名の労働体験、美学への思いなどを横軸に『春と修羅』第二集「注文の多い料理店」につけられた短い「序」を読みとくことで、話すように書く詩人のあり方、生、その願いをたどる書き下ろし評論。

1619 二二三頁 二八〇〇円

物語と日常 二本の映画と二つの物語作家の動機に

浅沼圭司

よる四つの断章

〈日常、このありきたりで、わかりきった、しかしまた、その正体をとらえがたいもの……〉。タール・ベラの『トリノの馬』、アキ・カウリスマキの『ル・アーヴル』、そして宮部みゆきの『杉本三郎シリーズ』などを読み解き「日常」とはなにかという問題を美学的視点から考察する。

21.6 一三三頁 一五〇〇円

物語るイメージ 絵画、絵巻あるいは漫画そして写真、映画など

浅沼圭司

これまでの物語の基盤を揺るがした(3・11)以降、どのように物語を語ることに生きることができるのか? 絵巻、漫画、写真、動画などさまざまな視覚媒体をもとに、物語の未知なるコスモスを追求する、新たな物語論。

1912 三〇八頁+別丁カラー図版四頁 三五〇〇円

昭和あるいは戯れるイメージ

浅沼圭司

「既存のイメージ体系に依拠しない、あたらしいモデルイメージを創出することはもはや不可能なだろうか。」(昭和)をめぐる自己と他者の記憶、不在の体験を想起し、時代の心性をテキスト化する新しいイメージ論。

1621 二五〇頁 二八〇〇円

映画美学入門

浅沼圭司

技術の進歩はめざましく、五〇年前の映画製作の状況はかなり変化しているとはいえ、その理論的状況をメリエス、リュミエール兄弟、エイゼンシュテイン、アラン・レネ、ベルイマンらの作品をたどり、映画の発生から「映画芸術」の成立を改めて考察する。

1611 三二八頁 四〇〇〇円

ソレルスの中国 オリエンタリズムの彼方へ

阿部静子

先鋭なアヴァンギャルドとしてエクリチュールの実験を押し進め、『テル・ケル』誌を通して多くの作家や哲学者を送り出してきた《麥節漢》の闘争の記録。文化大革命の狂乱から遠く離れて、彼の創作活動を貫く「中国」の様相を描き出す。

22.10 一七三頁 二〇〇〇円

平成ボーダー文化論

阿部嘉昭

平成の不気味について——犯罪、メディア、若者、音楽、写真、女性、アダルトビデオ、漫画などを縦横に論じながら、「平成」という時代を裏側から考察した異色の日本文化論。

153 四三三頁 四五〇〇円

幽霊の真理 絶対自由に向かうために

荒川修作 小林康夫

荒川の声が聞こえる——。身体の可能性を〈建築〉に見出そうとする荒川修作と、哲学者・小林康夫が、美術・文学・哲学を縦横に横断しながら、あらゆる既成の概念の根幹を問い、「知の総戸」を指す、衝撃の対話。

153 三〇二頁 三〇〇〇円

『悪の華』を読む

安藤元雄

「同時代の詩」を書くとは、どういうことなのか。継父への反発と母への愛憎、政治への期待と落胆、芸術家の使命の標榜、権力への反抗、羨慕と挫折、都市の移ろいと陰、老いと病、そして虚無……近代人の矛盾と動揺を「悪」のうちに結実させた詩集への「たそがれ」。

185 二四九頁 二八〇〇円

フランク・オハラ 冷戦初期の詩人の芸術

飯野友幸

一九五〇—六〇年代のニューヨーク、ポロックやギンズバーグ、ケージやフェルドマンといった作家・芸術家の間を飛び回り、戦後の狂騒と冷戦の抑圧下で早世した異能の詩人に焦点を当て、その特異な詩学に迫る。

191 二二九頁 二五〇〇円

映像アートの原点 一九六〇年代 東京、ニュー

飯村隆彦

日本のという以上に、世界の実験映画の新しい地平を切り開いてきた著者が、自らの原点としての《一九六〇年代》を、興味深いエピソードとともに語りつくす。

163 二四〇頁 二五〇〇円

バルザック詳説

柏木隆雄

一言一句、目を凝らして小説世界を追いかける——びたりと符号する文字の並び、登場人物の変化、会話の妙、読者を巻き込む位相、そして他の作品への目配せ——バルザックの『人間喜劇』に張り巡らされた仕掛けが動き出す、冴え渡る読みの手ほどき！

201 四五二頁 四〇〇〇円

ヒップホップ・クロニクル 時代を証言するポピュ

金澤智

誕生から半世紀近くを経て、アメリカ社会が抱えている暴力、銃、ドラッグ、人種差別、性差別などの問題を可視化したヒップホップをとおして、アメリカ社会を読み解き、その歴史をたどる比較文化論。

202 一九九頁 二五〇〇円

アメリカ映画とカラーライン 映像が侵犯する人

金澤智

種境界線
いまや人種境界線は可視の要素ではなく、曖昧かつ不安定で不可視なものになりつつある。そのカラーライン（人種／階層）の問題を、「招かれざる客」「ジャキー・ブラウン」「8 Mile」「ビッグ・フィッシュ」などのハリウッド映画にさぐる最もアクチュアルなアメリカ文化・映画論。

142 二三三頁 二八〇〇円

ソヴェイト科学の裏庭 イデオロギーをめぐる葛藤と
共存
金山浩司編

スターリン時代の哲学者・科学者たちは、教条的なイデオロギーと権力に翻弄されるばかりであったのか。マルクス主義、遺伝学、量子力学、植林計画をめぐる論争を中心に、闘争する研究者たちの科学的探求の試みに光を当てる、ソヴェイト科学史研究の最前線。
2034 三〇六頁十別丁四頁 三五〇〇円

三木竹二 兄鴟外と明治の歌舞伎と

木村妙子

好色、残忍、妄誕、荒唐無稽と、近代からの批判に曝された歌舞伎に深く魅せられ、その衰退を押し止めるべく、歌舞伎の《型の記録》《型の保存》に邁進しながら、若くして逝った、森鴎外の弟にして劇評家、編集者の生涯と仕事を克明に描き出す初の評伝。
2005 四九六頁十別丁四〇頁 四〇〇〇円

ロラン・バルト 偶発事へのまなざし

桑田光平

バルトについて（書きはじめる）ことの意味を問いつつ、ステレオタイプに疲労し、意味に疲労し（私）に疲労し、（私）を放棄することに疲労するバルトの姿にさまざまな側面から肉薄する気鋭の研究者の処女作。
1112 二四三頁 二五〇〇円

危機の時代のポリフォニー ベンヤミン、バフチン、
メイエルホリド

桑野隆

一九二〇年〜三〇年代という《危機の時代》にあつて、鮮やかな光世をはなつたベンヤミン、バフチン、メイエルホリド、そしてロシア・アヴァンギャルドの運動、ファシズムとスターリニズムに圧殺されたその悲劇的な営為に秘められた可能性の核心に迫る。
0910 三三五頁 三〇〇〇円

小説の楽しみ

小島信夫

稀有の実験精神によって戦後文学を領導してきた著者がシェイクスピア、セルバンテスからチエーホフ、カフカ、ベケット、P・ブルックまでを縦横に論じながら、現代における《小説の自由》《小説の可能性》に肉迫する、最晩年の白熱の語り下ろし。
一四八頁 一五〇〇円

書簡文学論

小島信夫

『アペラールとエロイーズ』から『パミラ』『危険な関係』『貧しき人々』『チェーホフの手紙』『チャリニング・クロス街84番地』そして自作『女流』まで。古今東西の書簡文学、書簡体小説を、闊達自在に読み解く、書簡体による書簡体小説論。書き下ろし。
一八五頁 一八〇〇円

演劇の二場面

小島信夫

「オイデパス王」、説教「をぐり」、「ハムレット」からカントールに至る古今東西の演劇を逍遙しながら、《軌道から外れ、軌道に復したときには予想もしなかったものをまともとて》やつてくる演劇の諸相を軽やかに考察する異色の演劇論。
二〇〇頁 二〇〇〇円

《人間》への過激な問いかけ 煉獄のフランス現代
哲学（上）

小林康夫

二〇世紀後半に世界を席捲したフランス現代哲学の中を、ひとつの星屑流星として漂流した著者による、内部観測のドキュメント。論文、書評、対談、エッセイを収録。上巻はバルト、フーコー、リオタールとの遭遇を記録する。
2009 二八四頁 三〇〇〇円

死の秘密、《希望》の火 煉獄のフランス現代哲学

(下)

小林康夫

「過激な問いかけ」に、ダンスをするように応答すること——フランス現代哲学の星座の中を駆け抜けた著者による、「友愛」の実践としてのフィロソフィア。下巻はデリダ、ナンシー、デュラスとの遭遇を記録する。

2012 四二二頁 三八〇〇円

クリスチャンにささやく 現代アート論集

小林康夫

ささやくように、語りかけるように……「二人称のクリティーク」というスタイルによって《美》と《倫理》を激しく問い、現代アートを縦横無尽に論じた、破格の美術批評。クリスチャン・ボルタンスキーを論じた表題作に加え、森村泰昌、荒川修作他を論じた全十六編を収録。

2016 二〇〇頁 二五〇〇円

零度のシュレアリズム

齊藤哲也

シュレアリズムとは「何」か？ シュレアリズムは「死んだ」のか？ いま、なぜシュレアリズムなのか？ シュレアリズムをめぐる《七つの謎》を鋭い研究者とともに考える、必携の入門書。図版多数。

11.5 二二七頁 二五〇〇円

実在への殺到

清水高志

二〇世紀の思想や文化、また西洋近代の世界観を乗り越えようとする、メイヤー・スーやハーマン、ヴィヴェイロス・デ・カストロやデスコラやストラザーン。彼ら彼女らの思想・哲学と強く共振し、深く共鳴しあひながら、世界に先駆け前世紀の哲学を突破した、著者渾身の評論。

17.8 二二二頁 二五〇〇円

マフルメの《書物》

清水徹

自然主義的、リアリズムの文学観を根本的に刷新し、現代文学への途を切り開いた詩人が死の床に至るまで構想しつづけた未開の《書物》とは何か。残された膨大なメモ、断章を子細に検討し、《演劇》でもあり、《パフォーマンス》でもあるものとしての《書物》の夢へ肉薄する。

11.8 一七九頁 二〇〇〇円

美術・神話・総合芸術「贈与としての美術」の源へ

白川昌生

ネアンデルタール人や初期ホモ・サピエンス、さらにはトロブリアンド諸島人の社会における《アート》の在り方を探究するとともに、近代のヨーロッパを席卷した、モデルネの怒濤のような運動を超え、《総合芸術》へと向かう。美術家である著者による、芸術の根源への問い。

19.8 二七〇頁 二八〇〇円

贈与としての美術

白川昌生

美術作品・芸術活動は、どのように価値が形成されるのか？ 未開社会のクラ交換、モースの「贈与論」、シュタイナーの経済理論をもとに、現在の腐朽した美術のあり方を根底から問いたです！

14.3 二二四頁 二五〇〇円

西洋美術史を解体する

白川昌生

《西洋》そして《美術》という伝統的な閉じられた枠組を解体し、相対化し、もうひとつの別の美術史を構想する、西洋美術史への新しい入門書。未知の地平へ向けて進む二十一世紀の美術を考える。

11.5 一五四頁 一八〇〇円

美術館・動物園・精神科施設

白川昌生

美術館、動物園、精神科施設の内外において《見せ物》にする／されるという関係における《倫理》とは何か？ エランベルジェと中井久夫の彼方へ向けて、今日の美術と美術館を考える。

104 二六八頁 二八〇〇円

美術、市場、地域通貨をめぐる『新装版』

白川昌生

バブル経済の崩壊とともに危機にみまわれた日本の現代美術とその市場に絶望した気鋭の美術家が、勃興する《地域通貨》の運動をてがかりに構想する新しい美術、新しい市場、新しい共同体。腐朽しゆく近代の《美術・制度》を根底から解体する。

1410 (0111) 一五九頁 二八〇〇円

ジョージ・オーウェル『一九八四年』を読む デイス

秦邦生編

動物、ジェンダー、情動、《ポスト真実》やポピュリズムといった多様な観点からの精読に加え、受容史やアダプテーションなど関連作品の分析を通じて、あらゆる領域へと越境し増殖を続ける現代の寓話の真価を問う。デイストピアに希望を探れ！

215 三四頁 三〇〇〇円

戦後文学の旗手 中村真一郎 『死の影の下に』

鈴木貞美

実験的構成の小説により戦後の日本文学を力強く領導した中村真一郎の作品群には戦前・戦中期の歴史が深く刻まれていた。最初期の、『死の影の下に』五部作のテキストと作家をめぐる文芸・文化状況とを自在に往還しながら、中村真一郎文学の淵源に迫る。

145 二〇〇頁 二五〇〇円

シュルレアリスム美術を語るために

鈴木雅雄×林道郎

シュルレアリスム研究と美術史学の二人の気鋭の研究者が、往復書簡、講演、対話によって、常に新しいシュルレアリスムの謎に迫る。《現実と夢の間に直接的な通路が穿たれ……》

116 二五〇頁 二八〇〇円

サイボーグ・エンツクス

高橋透

人間／動物／機械の境界を攪乱せよ！ ハイブリッドの共存のうちに、種の壁を越え、サイボーグの世界へと向かう新しい世紀の新しい倫理。われわれはみなサイボーグだ！

一八〇頁 二〇〇〇円

モートン・フルドマン〈抽象的な音〉の冒険

高橋智子

図形楽譜の発明者にして、演奏時間四時間を超える長大な楽曲を書いた作曲家、モートン・フルドマンとは何者だったのか。同時代の作曲家や抽象表現主義の画家たちとの交流を通じて、変転するその全貌を描き出す。ケージと並ぶ現代音楽の最重要人物、本邦初のモノグラフ！

2212 三五六頁 三八〇〇円

(不)可視の監獄 サミュエル・ベケットの芸術と歴史

多木陽介

これまで深く考察されることのなかったベケットと《監獄》との親密な関係を探究しながら、現代に生きるわれわれの実存を閉じ込めてきた《不》可視の監獄を浮き彫りにする、渾身のベケット論。

165 三六八頁 四〇〇〇円

マンハッタン極私的案内

武隈喜一

ユダヤ人 黒人、東欧系——この街に根付いた移民文化の深層を探るべく、街を歩き、美術館、博物館、そしてさまざまなパフォーミング・アーツを巡る。ニューヨークの文化と歴史の隅々にまで眼を凝らしたディープなマンハッタン案内。

196 三四四頁 三三〇〇円

マンガ編集者狂笑録

長谷邦夫

『カムイ伝』『巨人の星』『ブラックジャック』そして『PUTO』。マンガ史の舞台裏を支えた編集者たちの型破りな「マンガ愛」を、稀代のパロディイストにして赤塚不二夫の盟友が縦横無尽に描く、痛快無比・純情可憐・妄言多謝の書き下ろし。

三八〇頁 二八〇〇円

黒いロシア 白いロシア アヴァンギャルドの記憶

武隈喜一

〈革命〉によって、芸術文化が華開いた〈白いロシア〉の背後には、政治的抑圧によって社会的混乱に陥った野蛮な〈黒いロシア〉があった。ロシア革命からペレストロイカ以降までの芸術と政治の光と影を対照的に描き上げた、斬新な芸術—革命論！

158 三五四頁 三五〇〇円

マンガ家夢十夜

長谷邦夫

十人の天才マンガ家たちが〈夢〉と〈妄想〉を舞台に大競演の、奇想天外・疾風怒濤・ハチャメチャ過剰のフィクティヴ・フィクション！ パロディ・マンガの先駆者が描くマンガのパロディ小説、入魂の書下し。小説はマンガより奇なり!!

99 二六八頁 二五〇〇円

魔術的リアリズム ニ〇世紀のラテンアメリカ小説

寺尾隆吉

ボルヘス、ガルシア・マルケス、バルガス・ジョサ、そして莫言……ラテンアメリカという〈辺境〉に生まれ、今や世界を風靡しつつある〈魔術的リアリズム〉の代表的な作品を克明に辿りつつ、想像力による世界の変革の夢の意味を問う。

120 二三四頁 二五〇〇円

未完の小島信夫

中村邦生 十千石英世

小島信夫はつねに新しい。なぜ、いまなお私たちは小島文学に魅了されるのか？ とともに生前の小島と親しかった気鋭の小説家と批評家が縦横に語りつくす小島信夫の実像とその魅力。小島信夫との発掘対談、二篇も収録。

二九〇頁 二五〇〇円

桜三月散歩道 あるマンガ家の自伝

長谷邦夫

数々の〈伝説〉を生んだ奇代のパロディ・マンガ家が幼少時から現在までを書下した一〇〇〇枚におよぶ戦後サブカル史の貴重な証言。山下洋輔、タモリ、筒井康隆らとの交流、赤塚不二夫、石ノ森章太郎、手塚治虫らとの出会いと別れ……

121 四〇九頁+別丁図版一六頁 三五〇〇円

幽明譚

中村邦生

なつかしい場所を訪ねてはいけない——。神田川をさかのぼり、記憶をたどると、あやしく〈過去〉が立ち現れる。〈過去〉もまた、異界めぐりの時空なのだ。ドキュメントと夢想のまにまに、変幻する私はどこへ。あやかしの自伝小説、登場。

227 二九六頁 二八〇〇円

ブラック・ノート抄

中村邦生

「ある日、私のもとに謎のノートが届いた。小説 エッセイ、手記、アフォリズム、パロディ、宣伝文……。奇想か妄想か、さまざまの断章群の残骸と余熱。誰が書いているのか？ 誰が読んでいるのか？ 〈読むこと〉そして〈書くこと〉をゆさぶる先鋭なエンターテインメント小説！」 227 二六〇頁 二〇〇〇円

転落譚

中村邦生

《締切の近づいたある日、某駅の階段を上っていると、いきなり本書の主人公にあたる人物が私の頭のなかに転落してきたのだ。何者か、と思う間もなく消えてしまい、あわてて私は……。〈私〉はある小説の登場人物、本から外へすべり落ちてしまった……。未聞の長篇小説。」 117 三二頁 二八〇〇円

シユルレアリスムへの旅

野村喜和夫

ブルトン、アラゴン、エリュアール、アルトー、シャール、セゼール、瀧口修造、大岡信、吉岡実……現代詩のトップランナーが、シユルレアリスムの数々の詩を振り返り、この運動によって芽吹いたポエジーを訪ね歩く。懐かしくも新しい、ガイドブックにして探求の書。 229 三二七頁 三〇〇〇円

オルフェウスの主題

野村喜和夫

現代詩の最先端を疾走しつづける著者が、舞城王太郎からランボー／リルケ／マラルメ／宮沢賢治／吉増剛造……に至る古今東西の詩的テクストを涉猟しつつ詩作の根本動機そして詩／生／死をめぐって繰り広げる壮大な批評の冒険！ 二六九頁 二八〇〇円

パラタクシス詩学

野村喜和夫・杉中昌樹

パラタクシス、トランジット、メタファー、世界／セカイ……批評家が概念を打ち出し、詩人が詩作で応答する。創作行為の逆転現象を経て、互いの言葉はゆらぎ、思考の振幅は増し、共鳴・反転ののち、主体から解き放たれた言語のプラズマ状態へと読者を誘う、スリリングな往復書簡。 222 二八三頁 三〇〇〇円

越境する小説文体 意識の流れ、魔術的リアリズム、

ブラックユーモア

橋本陽介

小説の文体が国境や言語を越えて作用するとき、どのように模倣され、誤読され、変形されるのか。〈言語〉に密着し分析しながら、新しい文体の創出が個人的なものであるだけでなく、集団的な作用から生み出されることを明らかにする画期的な文学論。 176 三四〇頁 三五〇〇円

ナラトロジー入門 プロップからジュネットまでの物

語論

橋本陽介

プロップ、トドロフ、バルト、ジュネットは、どのように物語を分析したのか？ 文学研究の世界に影響を与えつづける「ナラトロジー」について、古今東西の文学作品を例に、体系的かつ平易に詳述する実践的入門書。 147 二四八頁 二八〇〇円

カズオ・イシグロ 境界のない世界「新版」

平井杏子

長崎に生まれイギリスで書き続けるグロバルな英語作家イシグロの全貌にせまる。デビュー作「遠い山なみの光」から、映画化され日本でも公開された『わたしを離さないで』、そして最新作『夜想曲集』までの全作品を徹底的に論じつくす、本邦初のモノグラフ。 1710 二六七頁 一五〇〇円

カズオ・イシグロの世界

小池昌代・阿部公彦・平井杏子・中川
僚子・遠藤不比人・新井潤美・藤田由季美・木下卓十・岩田託子・武井博美

長崎から英国へと移り住み、「過去にしか《ホーム》をもたない」と評される小説家の、それ故にこそそのアクチュアリティと多面性を縦横に読み解く。精緻な九編の論考と最新の書誌を収録し、カズオ・イシグロ研究の最新解を牽引する。

1712 二六頁 二〇〇〇円

カズオ・イシグロと日本 幽霊から戦争責任まで

田尻芳樹・秦邦生編

日本を舞台にした初期作品群の読解はもちろん、未刊行の草稿ノート類の調査によって見出された、日本をめぐる幻の作品たちも大々的に紹介・考察。イシグロに潜在し、イシグロを包みこむ、近くて遠い《日本》のかたちを見晴らす。

2010 三七頁 三〇〇〇円

カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を読む

ケアからホロコーストまで

田尻芳樹・三村尚央編

クローンをめぐる倫理の問題から、「信用できない語り」などの小説技法、介護の問題、「女同士の絆」といった現代的テーマ、さらには翻案作品にまで射程を広げ、「わたしを離さないで」を徹底的に読み込む最新/最深の成果。

189 三〇五頁 三〇〇〇円

「日本」の起源 アマテラスの誕生と日本語の生成

福田拓也

『古事記』の「天の岩屋戸神話」と山上憶良の「日本挽歌」に着目しながら、日本の起源ともいえるアマテラス誕生の謎をたどる。古来から連綿と息づき、いまも日本人の深層意識に眠る〈日本〉という複合的システム〉の在り処をさぐった画期的な日本論。

173 一八五頁 二五〇〇円

〈もの派〉の起源 石子順造・李禹煥・グループ〈幻触〉がはたした役割

本阿弥清

〈もの派〉の誕生に多大な影響を与えた、美術批評家の石子順造とともに静岡で活躍するグループ〈幻触〉。以上に〈もの派〉的な、独自の作品を作っていた〈幻触〉の活動を詳らかにし、〈もの派〉の真実に迫る。六〇年代美術史の真実！

1610 二六五頁 三〇〇〇円

絵画との契約 山田正亮再考

松浦寿夫・中林和雄・沢山遼・十林道郎

《Word》《Still Life》《Color》などのシリーズをはじめ五〇〇点もの作品をのこした山田正亮の制作の過程について、抽象絵画の系譜を検討しつつ画家、美術批評家、学芸員らがレクチャー、討議を重ね多角的に考察しその実像を別出する。

1612 二〇一頁 二五〇〇円

川上弘美を読む

松本和也

〈この物語が、いつの時代のものなのか、どこの言葉で語られたものなのか、誰も知りません……〉。「あのこと」のさなかなにも書き続けられた『七夜物語』、「あのこと」の後に書かれた「神様2011」、「センチセイの靴」、「真鶴」などの代表作を、〈ゆらめき〉の諸相から読み解く。

193 二六八頁 二八〇〇円

現代女性作家の方法

松本和也

江國香織、湊かなえ、青山七恵、小川洋子、多和田葉子、藤野可織、川上弘美ら七人の八作品を詳細に読み解き、小説家が、いかに読者に読ませる工夫をしているかを探る試み。

184 二六〇頁 二八〇〇円

現代女性作家論

松本和也

今日の六人の女性作家（小川洋子、川上弘美、鹿島田真希、西川美和、多和田葉子、川上未映子）の六つの作品の文体・表現を、「記憶・回想」「家族・身体」の視点からあざやかに読みとく。

二一九 二六八頁 二八〇〇円

太宰治『人間失格』を読み直す

松本和也

〈人間〉とは何か？ 〈物語〉とは何か？ 閉塞した社会を人間的に生きようとするれば、破滅せざるをえない。『人間失格』における物語の構造、そして「人間」という概念の意味を、六〇年をへて新たにときほぐす書き下ろし評論。太宰治、生誕一〇〇年の贈り物。

二二六頁 二五〇〇円

ジョイスとめぐるオペラ劇場

宮田恭子

テノールの歌手としても存在感を刷めたジョイスがいかにオペラの歌詞をわがものとし、『ユリシイズ』『フイネガンズ・ウエイク』に反映させたか。一四のオペラを通してジョイスを考え、ジョイスを通してオペラを語る。

一五六 三三三頁 四〇〇〇円

イメージで読み解くフランス文学 近代小説と

ジェンダー

村田京子

スタール夫人やバルザック、ゾラの文学などに現われる逸脱者としての女と男。ときに「宿命の女」「ヴァイナス」と呼ばれた彼女／彼らは何者なのか？ ギリシアの彫刻や、ダヴィッド、ドラクロワ、マネ、モローらの絵画から文学作品を読み解くことで、近代におけるジェンダー規範を照射する。

二〇八 二八八頁 三五〇〇円

福永武彦の詩学

山田兼士

若き日のポードレル体験や「マチネ・ポエティック」の活動を通じて得た詩の富を小説においても展開すべく、散文詩や音楽に限りなく接近した独自の文学世界を構築した福永武彦。作家最大の到達点『死の島』をはじめ代表作を読み解き、そこに結晶化した詩学の相貌を探る。

一九一〇 二二九頁 二五〇〇円

魂のたそがれ 世紀末フランス文学試論

湯沢英彦

ユイスマンス、ジャン・ロラン、メーテルランク、ラシールド等、十九世紀末を生きた作家たちの作品を読み解きながら、魂のありかを見失った（終わり）の時代の人々の、迷いと焦燥と闘いを浮かびあがらせる渾身の批評。

一三4 三〇六頁 三三〇〇円

金井美恵子の想像的世界

芳川泰久

文学の歴史と制度に戦略的に挑み続けてきた小説家のほとんどすべての作品を子細に読みとくとき、その全体像を解き明かす初のモノグラフィイ。『寄る辺なさ』と『不在』と『書くこと』と……

一七六 二七五頁 二八〇〇円

歓待

芳川泰久

Y字路に佇む男の内面を映す「途方に暮れながら」、謎につつまれた父の過去をめぐる「ホネガミ」、モニタの向こうの女を視察する「歓待」。仏文学者／文芸批評家として既存の言語システムを挑発しつづけてきた著者の描く日常の断片は幾重にも錯綜して……。第六回小島信夫文学賞受賞。

二二六頁 二二〇〇円

宮川淳とともに

吉田喜重＋小林康夫＋西澤栄美子

学生時代の宮川淳と誰よりも親しかったのちの映画監督・吉田喜重が宮川との思い出を語ったロング・インタビューに、哲学者・小林康夫が宮川、吉田の二人を戦後思想史のなかに位置づけるテクストを付す。天折した希代の美術批評家、宮川淳の後ろ姿が鮮やかに浮かび上がる。 2010 一六四頁 一五〇〇円

洞窟の経験

ラスコー壁画とイメージの起源をめぐって

吉田裕・福島勲編

一九四〇年九月、フランス南西部モンテイニャック近郊、嵐になぎ倒された大木の根元に、真っ黒な裂け目が口を空けていた……。シャルル、バタイユ、プランシヨ、ブルトン、ナンシーらの思考をプリズムに、人間とイメージの起源を問い直す。 2012 二六七頁 三〇〇〇円

文学／小説

ディアーナの水浴

ピエール・クロソフスキー 宮川淳・豊崎光一訳

水浴するディアーナに鹿に変えられ狼大たちに噛み裂かれるアクタイオン。この謎めいた神話の註釈の形をとりながら、ドゥルーズに《神学とポルノグラフィの合一》と評された著者が、《見る》ことの欲望と罰とを経回る。

A 6 麥判二八頁 二〇〇〇円

おしゃべり／子供部屋

ルイールネ・デ・フォレ 清水徹訳

《かつて書かれたもつとも奇怪でもつとも衝撃的な作品のひとつ》とジョルジュ・パタイユに評された中篇『おしゃべり』に、短篇集『子供部屋』をあわせて、きわめて寡作な、この《沈黙》と《孤独》の小説家の全貌を紹介する。

09.10 四六判三三二頁 二八〇〇円

さまざまな空間

ジョルジュ・ペレック 塩塚秀一郎訳

ページーベッド―寝室―アバウトマン……世界―空間。言葉あそび、引用、タイポグラフィを交えながら、日常から想像世界へ、あらゆる空間を「極私的」な物語でしるしづける企てが、やがて読む者の空間へのまなざしをも変える要約困難な中編小説。

A 5 麥判二三三頁 二五〇〇円

給料をあげてもらったために上司に近づくと技術と方法

ジョルジュ・ペレック 桑田光平訳

フランス文学の奇才が提案する、不透明な時代を生き抜くためのウリポ的昇給のススメ！ い段ぬきの「煙滅」など、奇想天外な作品ばかり残した、ペレックによる、新・実用書？ 本邦初、フローチャート文学！！

15.6 四六判並製一五五頁 二〇〇〇円

フランスの遺言書

アンドレイ・マキーヌ 星椋守之訳

フランスで生まれロシアに嫁いだ祖母の過去には、ベル・エポックの逸話と両大戦を生き抜いた女の悲痛な人生が秘められていた――。祖母への追憶のうちに自らの出生の謎に出会うロシアの少年の成長の物語。第八回日仏翻訳文学賞受賞。

四六判三二六頁 二六〇〇円

ある人生の音楽

アンドレイ・マキーヌ 星椋守之訳

ピアニストを夢見たロシアの少年は、「再教育」を逃れるため兵士になりすまし、《ソヴェエト》という時代を生き抜いた――。《歴史》に押し流されていた、ひとりの男の人生へのレクイエム。ロシア系仏ゴンクール賞作家の話題作。

四六判一四一頁 二〇〇〇円

八月の日曜日

パトリック・モディアノ 堀江敏幸訳

ニースの青い空、白い建物、棕櫚の木々。舗道に映る《私たち》の影、そしてあの男――。巨大なダイヤモンド《南十字星》をめぐる繰り返られる孤独な男女の迷行。フランスで最も人気の高い小説家による、ミステリアスな恋愛小説。

四六判三三八頁 二二〇〇円

痕跡

エドゥアール・グリッサン 中村隆之訳

カリブ海を代表する作家が、フォークナーの影響を受けた実験的な手法でカリブ海の歴史と幻想的な伝承を混交させながら、主人公マリ・スラのクレオールの一族の記憶を数世紀に渡って遡る、マルチメディア・サガ。

162頁 四六判二五五頁 二五〇〇円

かなり緩やかな愛の前進

ジャン・ポーラン 柳原直文訳

内向的な性格を矯正するために、三人の女性と愛を試みる男が登場する表題作をはじめ、マダガスカル滞在と第一次世界大戦の経験の色濃く残す全五作品を収録。二十世紀フランス文壇の中心人物による、知られざる初期短篇の世界。

228頁 四六判二四五頁 二五〇〇円

ペルーの鳥 死出の旅へ

ロマン・ギャリ 須藤哲生訳

一面に広がる鳥の屍体を踏み分けて入水する女、人間をセメント詰めにする男、大男の初恋を馬鹿にする小人……奇々怪々な白昼夢の世界に、人間の卑小さ、哀しみを、辛辣な皮肉とユーモアを交えて描き出す、ゴンクール賞を一度受賞した謎多き作家による十六篇の物語。

172頁 四六判二六三頁 二八〇〇円

ジャン・クリストフ物語

ロマン・ロラン原作 宮本正清翻案 宮本エイ子補訂

少年ジャンは様々な人生の苦難を乗り越え、音楽家としての才能を開花させることができるのか？ ベートーヴェンの生涯をモデルに書かれた傑作大河小説『ジャン・クリストフ』の少年時代編を、子供たちのために読みやすくコンパクトにまとめた物語。

239頁 四六判並製二〇二頁 一五〇〇円

その夏は忘れない

ジャン・ペロル 末松壽訳

幼い友情と父との別れ、性のめざめ、そして詩との出会い……。第二次世界大戦末期のフランスを舞台に、歴史の波に翻弄され、時代の狂気にのみこまれながらも懸命に生きる少年ジャンの成長を細やかに描く。

219頁 四六判三八四頁 三五〇〇円

老教授ゴバルの犯罪

アルベール・コスリー 田中良知訳

カイロの貧民街を舞台に、娼婦殺しをめぐって繰り広げられる誇り高き除け者たちのおかしな人生の物語。ヘンリー・ミラーとアルベール・カミュによって見出されたエジプト出身のフランス語作家の本邦初紹介。

四六判二六三頁 二二〇〇円

フランス式クリスマス・プレゼント

ジョゼ・ピエール他 にむらじゅんこ・大磯仁志訳

シュレアリスト作家の大御所、ジョゼ・ピエールやピエール・ブルジャッド、七〇年代にフランスの国民的セックス・シンボルだったボルノ女優アリジット・ラエなど個性的な書き手による、クリスマスをテーマにしたエロチックで幻想的な短編小説集。

四六麥判二八四頁 二〇〇〇円

残酷物語 ヴィリエ・ド・リラダン・コレクシオン

ヴィリエ・ド・リラダン 田上竜也訳

亡き妻の復活を神秘的に描き出す傑作短編「ヴェラ」をはじめ、死刑愛好者を描いた「最後の宴の会食者」、ブルジョワ社会を痛烈に皮肉る疑似科学小説「天空の広告掲示」「栄光製造機」など、「反レアリスムの美学」が結晶化した傑作短編集。詳註を付した決定版！

217頁 四六判四四二頁 三五〇〇円

倦怠の華

ピエール・ロチ 遠藤文彦訳

十九世紀末から二十世紀初頭にかけてフランス海軍士官として世界中を巡航した異色作家ロチが変幻自在な対話形式で練り広げる、奇妙きつな回想／夢／紀行／小説の数々。

099 四六判二七八頁 二八〇〇円

ロチの結婚

ピエール・ロチ 黒川修司訳

海軍士官としてタヒチを訪れ、島の女王の寵遇をうけたロチは美しい娘ララフと出会い、楽園的で牧歌的な恋を織りなしてゆくが…… 異国趣味あふれる悲恋物語。

1012 四六判二六三頁 三〇〇〇円

メフィス

フロラ・トリスタン 加藤節子訳

ユートピア思想の洗礼を浴びたフェミニストにしてジョルジュ・サンドのライバル、アンドレ・ブルトンによって「フランス・ロマン主義の心臓部」と称えられた女性作家の唯一の《プロレタリア小説》が世紀をこえて甦る。

1011 四六判三八八頁 三八〇〇円

チヌチヌ 世紀末風俗奇譚

プランセス・サツフォー 野呂康十安井亜希子訳

世紀末のバリを舞台に俗悪ブルジョワが練り広げる、キツチヌで奇矯な行動の数々。エログロ、近親相姦、フリークス、腐猫の宴、糞尿譚、罵詈雑言がいたるところ鑲められた露悪趣味文学の極北。

146 四六判函入一八〇頁 三五〇〇円

ウーリカ ある黒人娘の恋

クレール・ド・デュラス夫人 湯原かの子訳

「悲しいかな、私はもはや誰にも属していません。私は人類すべてに對して異邦人だったのです！」十八世紀、フランス革命のさなか、パリの貴族社会で愛に焦がれ、「悲恋」に存在を賭した黒人少女の、異色の愛の告白小説。

141 四六判一〇四頁 一五〇〇円

フランス名婦伝

ロベール・シヤール 松崎洋訳

生涯にわたる、作品は個人によつてではなく、共同体によつてこそ書かれるべきだと考え、「匿名」を貫き通した十八世紀フランスの謎めいた小説家が、その透徹した眼差しによつて、恋愛、この貴くも厄介な人間の自然な情念を克明に描く。三〇〇年の眠りから覚めた大長篇小説！

167 A5判五〇四頁 七〇〇〇円

うわずみの赤

イエリーン・ブラウワーズ 林俊訳

終戦間近の蘭領東インド。日本軍による占領下、女性捕虜収容所での悲痛な光景を目撃しつつ、作家となった「私」は、三十五年後、母の死の知らせを契機に、苛酷な生に立ち向かったひとりの女の姿を回想し始める。現代オランダ作家の自伝的小説。

四六判 九六頁 一八〇〇円

ポストモダン小説 positive 01

M・レイナー、W・ヴォルマン、H・ジェフィ、風間賢二他

ミニマリズムにはウンザリだ！ 既成の小説概念を解体したピンチョンやバーズ等を継承する八〇〜九〇年代アメリカのアヴァンギャルドでポップな《ポストモダン小説》の全貌を全篇初訳で徹底的に紹介する。詳細作家ガイド付き。

A5変判並製三五九頁 二〇〇〇円

嫌ならやめとけ

レイモンド・フェダマン 今村楯夫訳

アメリカ大陸横断を物語の横軸に、数々のメタ・フィクショナルな仕掛けや驚くべきタイポグラフィの使用によって、絶えず物語を創造／破壊する「ポスト構造主義小説」の傑作。現代アメリカのポストモダン小説の代表作のひとつに数えられる大長篇。

四六判七二六頁 五〇〇〇円

エロス、アンチ・エロス

ハロルド・ジェフイ 今村楯夫訳

荒野から摩天楼へ、摩天楼から荒野へと、エイズ時代のアメリカを自在に疾駆する、十四の倒錯した《愛の物語》。それぞれに独立しながらも絡み合い、時にフラッシュ・バックする、ポップでアヴァンギャルドな短編集。

四六判二六二頁 二八〇〇円

暗闇の楽器

ナンシー・ヒューストン 永井遼・いぶきけい訳

現代のマンハッタン／暗黒の中世フランス、二つの世界が時空を超えて交錯する奇跡のバラレル・ストーリー。『天使の記憶』『時のかさなり』の著者の最高傑作。高校生が選ぶゴングクール賞受賞。

10.5 四六判三二四頁 二八〇〇円

パラダイスの乞食たち

アーヴィング・ステットナー 本田康典十三保子ステットナー訳

一九四〇年代後半、ブルックリン育ちの《ぼく》は、ヘンリー・ミラーの影響をうけ、大西洋をわたってパリで放浪生活をする……水彩画家、編集者、詩人、作家として、アメリカ、ヨーロッパ、そして日本で活躍した著者の、みずみずしい自伝的小説。

四六判二九六頁 二五〇〇円

アナイス・ニンの日記

アナイス・ニン 矢口裕子訳

ヘンリー・ミラー、その妻ジューン、アントナン・アルトーなど作家・芸術家たちとの交友、恋愛、そして作家としての葛藤を綴った膨大な日記から奔放、かつ繊細に生きた生涯をたどる。ミラーが称賛した日記文学の白眉。

17.3 四六判五三六頁十別丁八頁 五〇〇〇円

リノット 少女時代の日記 1914-1920

アナイス・ニン 杉崎和子訳

愛に悩み、愛に溺れ、愛に生きる……のちに「性」の作家として世界的に名を馳せるニンが、その才能の萌芽を予感させる鋭い観察眼と繊細な感性によって、十一歳から十七歳までの多感な思春期の日々を赤裸々に綴った日記。

14.8 四六判二五二頁 二五〇〇円

信天翁の子供たち

アナイス・ニン 山本豊子訳

世界的に「日記文学」の名手として知られる著者による詩的・自伝的小説。父親との葛藤を抱えた女性ジューン（ニン）と、芸術家を目指す少年・少女たちとの親密な交遊、人間模様をパリを舞台に描く。

17.10 四六判二八四頁 三〇〇〇円

ミノタウロスの誘惑

アナイス・ニン 大野朝子訳

太陽きらめくメキシコの華やかなリゾート地。米国人ジャズ・ピアニストのリリアンは独りで演奏旅行に訪れ、現地のさまざまな人物たちと出会うなか、自分の本当の姿と向き合うようになる……旅と音楽をモチーフに洗練された筆致で描く珠玉の小説。

10.8 四六判三三三頁 二五〇〇円

人工の冬

アナイス・ニン 矢口裕子訳

異端の愛こそ美しい。——アメリカで長いあいだ発禁となっていた先駆的な性愛小説三篇（「ジューナ」「リリス」「声」）が原形（一九三九年パリ版）のまま七十年ぶりに甦る。

089 四六判三四頁 二八〇〇円

炎へのはしり

アナイス・ニン 三宅あつ子訳

家庭を捨て自責の念にかられるリリアン、生き生きとしたジューナ、そして破滅的なサビーナ、ヘレン。画家ジェイを間にお互い響き合い、共感の愛を見出し自己を探究していく女性たち。ニンがヘンリー・ミラー、その妻らをモデルにモダニズムのバリを舞台に描く愛の遍歴。 193 四六判三四頁 二五〇〇円

アナイス・ニンのパリ、ニューヨーク旅した、恋した、書いた

矢口裕子

《ここパリでは、道に迷うこともとびきりの冒険だ》とヘンリー・ミラーが記したパリ近郊で生まれ、本を読みあさった少女時代。パリからアメリカに戻り、日記文学で世界的に知られる作家となったアナイスの足跡を、多数の写真と「日記」の引用でたどる。

1812 A5判オールカラー一〇四頁 二二〇〇円

Anais Nin's Paris Revisited / Le Paris d'Anais

Nin revisité Yuko Yaguchi

『アナイス・ニンのパリ、ニューヨーク』の著者が「パリ編」に加筆し自ら英訳したものに、その仏訳（ル・ルー・ブレンダン訳）を添えた英仏二カ国語版エッセイ。ニンが生まれ暮したヌイイ、ルヴァシエンヌ、そしてパリでのミラー、アルトールとの交遊の地をたどる。写真多数。 216 A5判オールカラー一四四頁 三〇〇〇円

鉤十字の夜

キャサリン・バーデキン 日吉信貴訳

二十世紀の神聖ドイツ帝国。自民族男性中心主義のヒトラー教会社会において、女性たちは自由と美を剥奪され、家畜に等しいまでに虐げられていた……。ナチス政権の台頭を峻烈に風刺し、男尊女卑の過激化の果てに待つ暗黒世界を予言する（フェミニニスト・ディストピア小説）。 281 四六判二五九頁 二五〇〇円

私たちは幸運だった あるユダヤ人家族の離散と再会の物語

ジョージア・ハンター 墨かおり訳

歴史は繰り返す！ 一九三九年、ドイツがポーランドに侵攻。第二次大戦下、ユダヤ人一家の人びとは徴兵され、難民となり、またシベリアの強制収容所送りになり散り散りになった彼らが様々な経路で戦火を逃れ、戦後に再会を果たすまでの逃避行を描くノンフィクション・ノベル。 221 四六判三七〇頁 三五〇〇円

午後の人々

アントニー・ポウエル 小山太一訳

独特のブラックな感覚により、多くの熱狂的ファンを持つイギリス文壇の老驥の、本邦初紹介の代表的中編。兩大戦間期に青春を送る「失われた世代」の刹那的日常と退廃を、独特な会話のセンスにより優美に描き出すイギリス版「グレート・ギャツビー」。

四六判二九二頁 二八〇〇円

ドラキュラ【完訳詳注版】

ブラム・ストーカー 新妻昭彦訳 丹治愛注釈

今や英文学史上の古典の地位を確立したとも言える吸血鬼小説の傑作が、本邦初の完訳にて甦る！ さらに、その前章ともいえる短編「ドラキュラの客」と、「執筆ノート」「取材ノート」も収録。豊富な資料と詳細な注釈で、恐怖の原点に多面的に迫る。

A5判五三八頁 四〇〇〇円

マルタン・ゲールの妻

ジャネット・ルイス 杉浦悦子訳

突然の夫の失踪。そして八年後の帰還。しかし、帰ってきたのは？ 十六世紀南仏に実際に起きた事件をもとに、待ち続ける妻の揺れ動く心理を流麗な筆致で丹念に描き出した、本邦初紹介の現代アメリカ作家による特異な恋愛小説。

四六判一四九頁 二〇〇〇円

クー・クラックス・クラン 革命とロマンス

トマス・デイクソン・ジュニア 奥田暁代・高橋あき子訳

南北戦争後の混乱を極めた南部再建期に登場した白装束の秘密結社（クー・クラックス・クラン）の全貌を活写し、グリフィス『国民の創生』の原作ともなった歴史ロマンス。《アメリカ文学史上、最も危険な予言の書が、いまここに甦る》（巽孝之）

A5判四二頁 五〇〇〇円

長い夢

リチャード・ライト 木内徹訳

アメリカ南部で思春期を生きる主人公の父子の葛藤、白人による友人の殺害、売春宿での恋人の死、白人警察署長による父の謀殺等、一九四〇年にミシシッピで起きた火災事故を素材に、現代アメリカ社会に通底する人種差別問題を《事実と真実》で描いた長篇小説。

C11 四六判四九二頁 四五〇〇円

ヴァイティコー（全三巻）

アーダルベルト・シュティフター 谷口泰訳

十九世紀ドイツ文学に特異な位置を占めるボヘミア生まれの作家晩年の代表作。中世封建制度が確立しゆく雄大な乱世に活躍した騎手を描きつつ、ついに《救済》の歴史へと至る叙事詩的大長篇歴史小説。

A5判クロニ装函入 各巻平均三八四頁 各五〇〇〇円

【詳注版】カラマーゾフの兄弟

ドストエフスキー 杉里直人訳

歴代の邦訳の誤訳を徹底的に洗い出した十六番目の邦訳となる「本篇」と張り巡らされた聖書テキストへの言及を読み解き、当時の裁判・教育制度、諷衣服、風俗を解説する膨大な訳者による注釈を含む「注・解説・年譜篇」からなる豪華本。

A5判並製二分冊貼函入 本篇三〇二頁／別冊一五五頁十別丁函版六頁 一八〇〇〇円

チエーホフ小説選

松下裕訳

人間の悲哀やおかしみ、真実の姿を、厳しくも愛情溢れる透徹した文章で描き続けたチエーホフ。出世作「おおかえ猟師」から最後の作品「いいなすけ」まで、小説の代表作・傑作全二十九篇を一巻に収めた、著者の没後一〇〇年を記念する愛蔵本。

A5判六九九頁 七〇〇〇円

鏡のある館

アントニオ・ムニョス・モリナ 大河内健次訳

フランコ政権下の一九六九年、左翼思想を持つ作家志望の学生ミナヤは、二七年世代の幻の詩人の散逸した作品の調査を行い、博士論文にすることを思いつくが……。過去・現在・未来の物語が反射し合い、やがて、ある未解決の殺人事件の真相が浮かび上がる実験的推理小説。

B11 四六判四二〇頁 三五〇〇円

パティ・ディプーサ

ペドロ・アルモドバル 杉山晃訳

スペインの新世代を代表する世界的映画監督が、深夜の大都会を舞台に、あらゆる快楽を貪り尽す稀代のセックス・シンボルのダイナマイトな日常をメタ・フィクション的な仕掛けと極彩色のキツチュウ感覚で描くコミカル・ポップ小説。

四六判一四四頁 二〇〇〇円

知恵の木

ピオ・パローハ 前田明美訳

キューバをめぐる米西戦争のさなか、無気力で旧態依然の社会のうちに愛するものを失い、人生を模索する主人公の葛藤と軌跡。ヘミングウェイの『私よりもノーベル賞を受けるべき人だ』と評した、十九世紀スペインの「九八年の世代」を代表する作家の自伝的長編小説。
四六判三三二頁 三五〇〇円

フォルトゥナータとハシンタ(上・下巻)

ベニート・ペレス・ガルドス 浅沼澄訳

大富豪の御曹司に弄ばれる二人の女の悲/喜劇を通して、緻密に描写されるマドリッドの民衆の姿。《セルバンテス以降のスペインにおける最も偉大な小説家》と称される文豪による十九世紀スペイン文学の傑作!
A5判 上巻五二五頁・下巻五〇二頁 各二八〇〇円

ラサリーリョ・デ・トルメスの人生

岡村一訳

手練手管に長けた盲人、吝嗇漢の司祭、一文無しの郷土、様々な主人に仕えて下層社会を生き抜いてきた若者が物語る半生。作者不詳にもかかわらず近世ヨーロッパで大流行した、十六世紀スペインの生活の現実が息づく《ピカレスク・ロマン》の原点。
18・2 四六判一七五頁 二五〇〇円

バルセロナ・ストリーズ

ホアン・バルーチヨ、キム・ムンゾー他 田澤耕編訳

ピカソやミロ、ダリ、ガウディ等を生んだ文化都市バルセロナの言語ニカタルーニャ語による七作家の十三短篇によって、今日の《バルセロナの精神》を鮮やかに浮き彫りにする本邦初の現代カタルーニャ語文学短篇選集。
四六判一八二頁 一五〇〇円

穢れなき太陽

ソル・ケー・モオ 吉田栄人訳

メキシコの抑圧的な規範のなかで生きる落伍者や弱者たち。彼らに差す一筋の光を丹念に描きながら、先住民の伝統的なモラルそのものを批判し、「先住民文学」に新しい地平を開いた民族誌的ファンタジー。第五十六回日本翻訳文化賞(翻訳特別賞)受賞。
18・8 四六版三四三頁 二二〇〇円

チーホフの夜

中村邦生

《私はふと過去の風景を見つめているような気持ちになった。むしろ今という時間を遠く未来から懐かしんでいる気分と言うべきかもしれない。——ただ過ぎ去るためにある動き。すべてが懐かしい気持ちの中に吸い込まれていく。》
虚実の陰影を精妙な文体で刻む短編集。
8・2 四六判一八三頁 一八〇〇円

山高帽と黒いオーバーの背

近藤耕人

モンマルトルのユトリロ、セーヌ河岸の意識の流れ、パレ・ロワイヤルのマグリット、地下鉄の女。非人称的に描かれる《わたし》が、パリをさまよう中で見た光景、出会った人、通り過ぎていった空間と時間……。現実と虚構のはざまを往還する珠玉の短編集。
14・4 四六判三三二頁 二五〇〇円

石の中から聞こえる声

近藤耕人

《石垣の頭上で風が鳴り、さらに遠い洞窟から風の溜息が聞こえるようでもあり……》ニューヨーク、パリ、ロンドン、ダブリン、アラン島……。異邦の風景から浮かび上がる記憶とことば。写真研究者として知られる著者の初の短編集。
四六判三三四頁 二五〇〇円

モスクワの声

大石雅彦

魂のダンスを踊る少女(ヘコー)、暗躍するカルト集団(ニチエウオキ)。声なき声に導かれて、(ハイ)の奇怪な冒険がはじまる……。ロシア・アヴァンギャルド芸術、とりわけマレヴィッチの気鋭の研究者として知られる著者の初の長編小説。

四六判三〇六頁 二四〇〇円

助教横田弘道／ダヴィデ像

澤井繁男

マキアヴェリを教える新任の助教が、学長選挙をきっかけに大学内の腐敗した権力闘争に巻き込まれていく表題作他、イタリアルネサンス文化研究者であり作家としても活動する著者による、マキアヴェリの思想と活躍を克明な筆致で描き出す中篇小説二篇。

1712 四六判二六頁 一八〇〇円

日本原発小説集

柿谷浩一編

井上光晴・清水義範・豊田有恒・野坂昭如・平石貴樹
豊かな未来を実現する夢の技術か？ あるいは人類の滅亡を促進する絶望装置か？ 推進／反対の立場を超えて集成された、初原発文学アンソロジー。現在では入手困難な五篇を収録。

1110 四六判並製二四九頁 一八〇〇円

キアロスクーロ

織江耕太郎

原発によって最愛のものを奪われた五人の男たち……。都心のナイトクラブ「キアロスクーロ」に巢食い、原発利権をむさぼる政治家、官僚、財界、マスコミ、そして電力資本の暗部を告発し、復讐を誓った彼らの命運は……？

1312 四六判三三九頁 二八〇〇円

暗殺の森 キアロスクーロII

織江耕太郎

総理官邸に大型トレーラーが突入、爆発した。残骸のコンテナから発見された男女十二人の死体はすべて被曝していた……。福島第一原発の事故や特定秘密保護法の施行を背景に、巨大利権に戦いを挑む男たちの運命を描く(原発サスペンス)！

1914 四六判二五七頁 二五〇〇円

レ・ファンタスティック

上島周子

夢の記録を仕事とする青年と、胸に三三〇〇(ムーグ)の穴を患い失命の途につく王家の八女。おなじ夏、カフェで出会った二人は、それぞれの思いに耽りながら、特別な時を迎える……。ひと夏の夢と想念をめぐる書き下ろし小説。

1712 四六判二八八頁 二五〇〇円

ニポアンヌ

上島周子

『シエルプールの雨傘』などのフランス映画に恋するあまり、映画の美術監督ベルナル・エヴァンにファンレターを送ったアキコ。文通の末、いよいよ憧れの地を訪れる。(フランス語レベル・1)ニポアンヌの主人公が南仏で練り広げる、爆笑ユーモア日記小説！

1612 四六判二七四頁 二五〇〇円

林

河村陽子

教育者と文筆家の夢を追いながらも志半ばで没した(父)、画家として頭角を表した(母)、妻の死後愛人と同棲を始めた(兄)……迷い、もがきながらも生きる(人間)の姿がくつきりと浮かび上がる。九十三歳の新人作家が描くある家族の肖像。

1812 四六判二七五頁 二〇〇〇円

犬のしもべ

菊池英也

愛犬ボメラニアンが声なき声で語る（加曾利の犬）、一九〇九年のトルコ・イスタンブールでの野犬大虐殺事件、そして人間の犬への愛情と人工的繁殖、小型化へのあくなき欲望。その一七年の生涯を描いた感動のフィクション！

23.6 四六判二四四頁 二〇〇〇円

夢うつつ、旅

菊池英也

消え去った恋人の残した謎めいた本に導かれて、横浜、伊豆、軽井沢、陰岐、鎌倉、そしてインドへ！ 存在と不在の深淵を経巡る魂の旅。気鋭の小説家書き下ろしたミステイックな長編恋愛小説。

19.6 四六判三二二頁 二〇〇〇円

黒でも白でもないものは

加藤有希子

二〇五六年、太陽の異常活動により、人類は色覚と生殖能力を失った。激変する自然環境、破綻する経済…… 色彩を失った人びとは、黒と白の世界のなかで、やがて訪れる終焉を静かに待ち続けていた。滅びゆく世界のなかで、人びとが見出した究極の幸せとは……

23.2 四六判二四〇頁 二〇〇〇円

クラウドジャーニー

加藤有希子

ひそやかに迫り来る新型コロナウイルスの脅威。変容する世界の中で、美術史研究者の真希は乳がんと診断される。病の意味を問い、乳房を失うことの意味を問う中で、真希は自らの生のあり方を見出していく……。

21.7 四六判一九二頁 二〇〇〇円

吉田健一の時間

清水徹

ゆるやかな時間、酒という水、あたりまえの孤独。宴を浸す夕方の光……。フランス文学者として知られる著者が、初期評論から晩年の傑作『時間』まで、近代Ⅱ世紀末の倦怠をぬけだして〈生きる喜び〉を優雅に語った吉田健一の根元的主題に迫る。
A5判二八二頁 三五〇〇円

小説構想への試み

中村真一郎

日本文壇の私小説的風土に抗して、西欧的方法意識によって戦後文学を領導してきた著者のライフワークともいうべき『四季』四部作の詳細自注つき創作ノート。一六頁の別冊付録(対話Ⅱ清水徹・小佐井伸二)を付す。
A5判二〇四頁 二八〇〇円

〈よそ〉の美学

浅沼圭司

《生と死という、あい矛盾し拮抗するものの共存の故に》近代芸術に対する《ある種の否定性》として対峙する《晩年様式》。アドルノとサイードを参照しつつ、定家における《よそ》の美学、シヨスタコーヴィチ、グールド、オリヴェイラ等における《亡命》と《晩年》の意味を探求する。
A5判二九二頁 四〇〇〇円

続・小説構想への試み

中村真一郎

戦後文学の一記念碑ともいうべき『四季』四部作のうち『春』及び『夏』の創作ノートを収録した正篇に続き、『秋』『冬』のノートに書き下し詳細自注を取める。さらに、通説の際の便をも考え、四部作全体の人物表と事件年表をも付す。
A5判三三四頁 四〇〇〇円

物語とはなにか

浅沼圭司

ひとはなぜ物語を語る／書くのか。なぜ物語を聞く／読むのか――広漠たる物語の地帯を「物語的世界」と「語り」の点」という視点から鮮かに照らし出す。鶴屋南北「盟三五大切」と藤沢周平「蟬しぐれ」をモチーフとしたふたつの綺想曲。
A5判三〇五頁 四〇〇〇円

どこにもない都市どこにもない書物

清水徹Ⅱ宮川淳

《文学の総体はすでに書かれているのであり、現実の書物とは、すでに存在している書物の総体のごく一部が多少の変形と夾雑物をともないながら……》。書物と都市をめぐる清水のテクストを宮川が《書き直した》パフォーマンスとして書物。
A5変判並製函入二九頁 二五〇〇円

映ろひと戯れ 定家を読む

浅沼圭司

『新古今』のとう以上、日本の詩歌そのものの代表者ともいふべき藤原定家。その歌の根底にある極め難い美の源泉を、今日のヨーロッパの文学Ⅱ哲学理論を援用しつつ斬新な手法で分析する。厳選された定家の歌四十五首に美学的側面から徹底的に迫る。
四六判二〇四頁 二五〇〇円

ロラン・バルトの味わい 交響するバルトとニーチェの歌
浅沼圭司

構造主義の、ないしはポスト構造主義の旗手のひとりとして、すぐれて二十世紀的な著述家を、《いまここ》の思想家として読む。《浮遊し、迷走し、もつれつつ》、ニーチェの「歌」と交響するバルトの「歌」を聴く。

1010 四六判二四頁 二五〇〇円

思考の天球

小林康夫

ベンヤミンの《無果実》、カフカの《壁》、オースターの《幽霊》……、遠い記憶のなかの儚きものたちをめぐり乱反射する思考の残像を、寓話的物語形式のうち書きとめた断章集。しなやかな知の多重な声。言葉が紡ぎ出す即興曲。

四六変判二〇九頁 二〇〇〇円

風の配分

野村喜和夫

移動、律動、眩暈。フランスから南アフリカへ、彷徨する詩人の旅の記録。現代詩の先端を走り続ける詩人の研ぎ澄まされた五感に映る一瞬の風景が、きりめく断章形式のうちに蘇る。第三十回高見順賞受賞。

四六判三四頁 二八〇〇円

火星人にさよなら 異星人表象のアルケオロジ

鈴木雅雄

ドゥフォントネー、クロ、ブランキ、スミス……ユートピア文学の残骸とSFの予兆のあいだで引き裂かれた十九世紀という時代において、異星人という《不可能なイメージ》を描いた者たちの夢の軌跡をたどる異色の試み。

227 四六判二七四頁十別丁図版四頁 二八〇〇円

ビートとアートとエトセトラ

ヤリタミサコ

東京ポエクットの主宰者として知られる現代詩の新世代の旗手が、ギンズバーグ、北園克衛、カミングズとその周辺の詩人たちへ軽やかにかつ徹底的に肉迫する。

四六判並製二九三頁 二八〇〇円

詩を呼吸する 現代詩・フルクサス・アヴァンギャルド

ヤリタミサコ

日本の今日の詩とことばとアートの状況へコミットし続ける著者がみずからの交友をもまじえながら、若手詩人たちの詩に寄り添いつつ批評する。二冊、同時刊行！

四六判並製三二九頁 二八〇〇円

カミングズの詩を遊ぶ【新装版】

E・E・カミングズ詩集 ヤリタミサコ十向山守編訳

一篇の詩が言葉をこえて「詩絵」となる。独自のタイポグラフィを考案し、常套的な詩の書き方を打破したカミングズの詩空間をめぐる《詩の散歩》。時をこえて読みつがれるその詩を新たな感覚でおくる。

228 (107) A5判並製二二頁 二〇〇〇円

つながりを求めて シャルトルの翡翠

小島俊明

ピエール・ジャン・ジュウヴ、バルテュス、澁澤龍彦、小島信夫、多田智満子……フランス文学者として、また詩人俳人として知られる著者が、懐かしい人々との記憶のなかでの再会を、「西洋と東洋の架け橋 たらんとした若き日の想い出を、自らの俳句と共に綴る新しい俳文集。」

165 四六判並製一七六頁 一五〇〇円

歩くキノコ

飯沢耕太郎

ナイロビ、モンバサ、アテネ、イスタンブール、ブダペスト、プラハ……。食べたり飲んだり眠ったり、書いて描いて歩きつづけた六カ月。写真評論家として活躍する著者のユニークな視線に止まったカラフルなエピソードいっぱい旅のエッセイ。
四六判二三〇頁 二四〇〇円

耳をすます旅人

友部正人

七〇年代からシンガーソングライターとして旅を続けながら歌う詩人が日本各地で出会った風の音、海の音、古い友人のおしゃべり。全篇から音楽の聴こえてくる旅の連作エッセイ集。どの場所にもきつと一度は行ってみたいくなる。
四六判並製二八五頁 一八〇〇円

纏う

大宮勤一郎・神尾達之・嶋田由紀・廣瀬浩司他

ジメル、ラーヴァターからハイデガー、ドゥルーズ、寺山修司、コンドーム、中村うさぎまで……。六人の気鋭のヨーロッパ文化研究者による、脱表「層」文化系論集。
四六判二八八頁 二八〇〇円

わび・さび・幽玄

鈴木貞美・岩井茂樹編

和歌、能、茶、日本庭園、俳諧など、さまざまな領域において「わび」「さび」「幽玄」が日本の美学の核心として語られるようになった状況を歴史的に考察し、「日本の美学」の原点を探る、気鋭の研究者たちによる共同研究。
A5判五三八頁 六〇〇〇円

綺想の風土 あおもり

黒岩恭介

綺想の国あおもりが生んだ異色の芸術家たち——建部綾足、陸羯南、菊岡久利、小國英雄、棟方志功、太宰治、寺山修司、鈴木正治……。青森県近代文学館長を務めた著者が、彼らの作品に直接ふれることよって得た、新たな発見や経験について、丹念につづる美術エッセイ。
155 A5判二四三頁 三五〇〇円

髑髏の世界

中川徳之助

「仏界、入り易く、魔界、入り難し」。自ら「狂客」を称し、「風狂」を称し、「破戒」を称した室町時代中期の高名な禅僧、一休宗純和尚。「人間」一休の「生」の軌跡を詩偈のなかに読みとぎ、その実像に迫る。
133 A5判三四九頁 五〇〇〇円

亡霊論的テキスト分析入門

高木信

物語理論、精神分析、ジェンダー批評などの枠組みを導入しながら、現代文学、歌詞、原発映画をひもとき、テキストに刻印された「亡霊論」的（≠不確定的・多義的・攪乱的）な意味／認識／世界のあり方を探り出す。この支配からの逃走＝闘争！
229 四六判三七〇頁 三八〇〇円

亡霊たちの中世 引用・語り・憑在

高木信

自他の境界を攪乱する「語り」に潜む亡霊、時間と空間を混線させる「間テクスト性」に潜む亡霊……主体・意味・記号の「義性を破碎する（亡霊論的転回）」とは何か。「源氏物語」「平家物語」など日本古典の数々を緻密に読み解き、テクストに新しい時空と意味を導き入れる試み。
239 四六判三八〇頁 三八〇〇円

怪談異譚 怨念の近代

谷口基

怨みはらさておくべきか！ 江戸時代より語り継がれてきた《怪談》は、国民国家形成の過程でどのように変容し、時代の《闇》を描き出してきたのか。円朝や漱石から新発掘の文学作品にいたる諸資料を博捜し、《怨念》の力に現実突破の契機をみる異色の書き下ろし評論。
四六判二六〇頁 二八〇〇円

オッテイリエの掌 批評集成

有馬弘純

漱石『三四郎』に描かれる恋愛と婚姻制度をめぐる葛藤を考察した表題作ほか、別役実の長年の友人であった著者が、その死を契機に別役、佐々木基一、金鶴泳らとの交流を振り返るとともに、近代日本文学、フランス文学、映画をめぐる書き継いだ多彩な批評を集成する。
329 A5判並製三四八頁 三五〇〇円

江戸芸能散歩

東京都高等学校国語教育研究会編

巻頭エッセイ 柳家小さん、市川團十郎、葛西聖司、服部幸雄
現代東京に残る、歌舞伎、落語などの縁の地を訪ねる、江戸芸能散歩の決定版。便利なイラスト地図つき。江戸文化入門、古典芸能鑑賞ガイドも収録。
A5判並製一九八頁十別丁図版八頁 一五〇〇円

漱石の文法

北川扶生子

十九世紀末という日本語の根底的な変革期に、新たな読者層をまえに、漱石はどのようにして「世界」を獲得し、「小説」を切り拓いたのか？ 漱石文学の新たな可能性を問う。
124 A5判二八四頁 四〇〇〇円

鷗外のベルリン 交通・衛生・メディア

美留町義雄

カフェ、広告、鉄道、上下水道……。十九世紀後半のドイツへ留学した若きエリート、森鷗外。『舞姫』の舞台となるこの都市で、彼が実見し、日本の現実へと愛慕を試みたものとは？ 八十点以上の貴重な図版を駆使して浮かびあがる、二つの帝国の相貌。
108 A5判二三三頁 三五〇〇円

近代日本とフランス象徴主義

坂巻康司編 執筆 柏倉康夫・野村喜和夫・寺本成彦・森本淳生他

フランス象徴主義は、いかにして本邦に移入されてきたのか？ 上田敏の『海潮音』にはじまる明治大正期における受容からマチネ・ポエティクの時代へ、近代日本詩壇による受容から象徴主義の克服、そして現代までを総覧し、その意義を究明する。
162 A5判四〇八頁 六五〇〇円

日本近代文学と『獵人日記』

初内裕子

ロシア文学史上、リアリズムの成立に深く関わり、自然描写の転換をもたらしたツルゲーネフの『獵人日記』が、二葉亭四迷と嵯峨の屋おむろの翻訳を通して独歩、花袋、藤村ら自然主義作家たちに与えた影響、そしてそれが日本近代文学の発展に果たした役割を詳細に解明する。
A5判四〇九頁 六〇〇〇円

虎の書跡 中島敦とボルヘス、あるいはは換喩文学論

諸坂成利

始まりもなく、終わりもない（パベルの図書館）を訪れたものの文学とは？ 中島とボルヘスに典型的にみられる《換喩》的表現に現代の文学の美とリアリティを見出す鋭敏の比較文学者の野心作。第九回日本比較文学会賞、平成十七年度国際文化表現学会賞受賞。
A5判二七頁 三〇〇〇円

幻の《今井邦子像》の真実 彫刻家高村光太郎が

刻んだ歌人の魂

長谷川創一

《をとめ我この血汐もて涙もて思ふままもて歌はんものを》。高村光太郎の幻の《今井邦子像》をてがかりに、その才能と美貌によつて一世を風靡したこの歌人の生涯を、大正から昭和への激動の時代のうちに辿る。邦子の自伝的作品三篇を併載。
A 5判三五八頁 四〇〇〇円

絵本で読みとく宮沢賢治

中川素子 十大島丈志編

賢治の作品はどのように受容され、再創造されたのか？ 現代美術研究者、日本語・日本文学研究者、絵本編集者などさまざまな分野の執筆陣が画像化・絵本化された賢治ワールドを多彩な視点から読みとく。
13.11 A 5判二六三頁十別丁カラー図版八頁 三五〇〇円

小林秀雄 骨と死骸の歌

巡って

福田拓也

小林秀雄の初期批評の代表作「悪の華」一面「まで」とされてきた、ポードレールから小林への影響に異義を唱え、最晩年の「本居宣長」に至るまで続くポードレールと小林との関係について徹底的に考察する画期的な小林秀雄論。
15.7 A 5判二九二頁 四〇〇〇円

谷崎潤一郎と映画の存在論

佐藤未央子

映画を題材として取り上げるのみならず、媒体の特質、俳優の身体、興行形態、鑑賞行為などの構造的要素までも小説に移植した谷崎潤一郎。その強靱な映画的思考／欲望は、いかにして〈映画小説〉の血肉となったのか。
22.4 A 5判三七頁 四〇〇〇円

立原道造 故郷を建てる詩人

岡村民夫

故郷喪失感を抱えた東京人としての立原道造は、文学と建築という対照的領域の狭間に「第二の故郷」をいかにして創造したのか？ 従来の立原論が軽視してきた「詩人にして建築家」という二重性に着目し、双方を同等の比重でとらえる画期的論考。
20.9 四六判三四八頁 三五〇〇円

山椒魚の忍耐 井伏鱒二の文学

勝又浩

自然を愛し、地に足のついた生活実感のただなかで創作を続けた井伏鱒二。その小説には「人類古来の悲しみ」が静かに織り込まれている。巧まざる文学によつて生そのものを見つめた井伏鱒二の人と作品をめぐる文学的逍遙。
18.10 四六判二六八頁 二八〇〇円

人間山岸外史

池内規行

〈太宰治の初期から中期にかけてのきらめくばかりの才能の奔出も、山岸との切磋琢磨がなければありえなかった。太宰治の終生の友にして、天才を謳われた批評家／詩人の型破りの生涯を、日本浪漫派を経て戦後に至る軌跡の中に鮮やかに描く決定版評伝。〉
12.11 四六判四二二頁十別丁図版八頁 四〇〇〇円

〈殺し〉の短歌史

現代短歌研究会編 田中綾・谷岡亜紀・松沢俊二他

一九一〇年の大逆事件から、第二次世界大戦、戦後の政治運動を経て、二十一世紀の無差別連続殺人にいたるまで、この百年におよぶ〈殺し〉の近現代を、短歌という〈方法〉によつて別括する。
10.6 A 5判二七二頁 二八〇〇円

『新青年』の共和国

大石雅彦

本邦推理小説Ⅱ幻想文学史上に屹立する三大長篇——夢野久作『下クラ・マクラ』、小栗虫太郎『黒死館殺人事件』、久生十蘭『魔都』に気鋭のロシア文学者が挑む！ 現代的理論装置を武器に、錯綜する謎の迷宮を徹底的に解明する。

四六判二二九頁 二〇〇〇円

三島由紀夫小百科

井上隆史 十久保田裕子 十田尻芳樹 十福田大輔 十山中剛史編

没後半世紀を経てますます詳らかなる三島由紀夫の人生、文学、思想、創造力、洞察力、後世への影響力と予言、さらには来るべき時代を根底から揺さぶる衝撃、未来への警鐘……。三島文学が斬り拓いた曠然たる沃野を今こそ見晴らす。

21.11 A 5判四七四頁 七〇〇〇円

混沌と抗戦 三島由紀夫と日本、そして世界

井上隆史 十久保田裕子 十田尻芳樹 十福田大輔 十山中剛史編

激動と混沌の時代を生きる我々に三島由紀夫が遺したものは何だったのか。国内外三十名を超える豪華執筆陣による多彩な三島論を一挙に結集。豊饒なる混沌に満ちた三島由紀夫の淵源へと肉迫し、いまだ謎に包まれたその全体像を明らかにする。

16.11 A 5判並製四六二頁 五〇〇〇円

三島由紀夫の時代

松本徹

日本を背負って生き、書き、そして激動のうちに命を散らした戦後文学の怪物、三島由紀夫。謎に包まれたその生涯と文学の核心を、川端康成、濹澤龍彦、大岡昇平、細江英公、江藤淳ら、昭和を駆け抜けた文学者・芸術家との親交と離別をたどりながら鮮烈に描く。

16.11 四六判二七九頁 二八〇〇円

三島由紀夫 〈表面〉の思想

川上陽子

明晰な思考によって戦後文学を牽引した三島にとって〈私〉とは誰なのか。「仮面の告白」「金閣寺」から『豊饒の海』にいたる代表作の精緻な分析から、現実／虚構／言語／肉体に囚われた小説家の〈表面〉をあぶりだす。

13.3 A 5判二七五頁 四〇〇〇円

加藤周一を21世紀に引き継ぐために

加藤周一生誕百年記念国際シンポジウム講演録 三浦信孝・鷲巢力編

「戦争の世紀」を生きた加藤周一は、人間の生命と自由を侵す戦争に抗し、人間を信じ、言葉を愛し、人間の平等と尊厳を尊んだ。どんなに少数者になっても希望を捨てない。この加藤の思想と行動から出発し、次の時代をいかに歩むのか。それがわれわれの課題である。

20.9 A 5判四五六頁 六〇〇〇円

中上健次の「ジャズ」

安岡真

戦後生まれで初の芥川賞受賞者である中上健次。彼の土台にあったもの、そしてたどりついたものはいったい何か？ ジャズ、芸能、神話、古典から中上の〈根〉を探る。

13.10 四六判二五六頁 二八〇〇円

津島佑子の世界

井上隆史編

数々の喪失を乗り越え、生きるための〈夢〉を力強く求め続けた津島佑子。多彩な論考・エッセイ・座談によってその創作の軌跡をたどるとともに、今、そして未来における津島文学の尽きせぬ可能性を探る。大学新聞掲載の貴重な論文やエッセイも特別収録！

17.8 四六判二七四頁 二五〇〇円

日本探偵小説論

野崎六助

関東大震災の瓦礫のなかから、純文学やプロレタリア文学、映画や写真などの新興メディアをも巻きこみつつ自立してゆく〈探偵小説〉をつぶさに検証し戦後までに至るスリリングな通史。

1010 四六判四三九頁 四〇〇〇円

わが先行者たち 文学的肖像

栗原幸夫

危機の瞬間にひらめく回想……編集者、批評家、あるいはアクティヴィストとして、〈戦後〉という時代を協働した埴谷雄高、中野重治、堀田善衛ら、こよなき先行者たちの肖像と回想。自筆年譜を付す。

109 四六判四六〇頁 四五〇〇円

日本の文学理論 アンソロジー

大浦康介編 執筆 坪内逍遙 十廣津和郎 十久米正雄他

明治期以降の日本を代表する作家・思想家・詩人等、四一名の文学理論のテクストを、小説論、描写論、物語論、詩的言語論、フィクション論、読者論、起源論、発生論、文学とは何か、という八つの側面から精選し、気鋭の研究者たちによる解説を付した、文学研究の必携書！

176 A5判四六六頁 六〇〇〇円

小説は環流する 漱石と鷗外、フィクションと音楽

山本亮介

近代の夏目漱石、森鷗外から現代の奥泉光『シューマンの指』、村上春樹『1984』、古川日出男『南無ロックンロール』二十一 部経、伊坂幸太郎『魔王』などをとりあげ、複数の世界を越境する小説をめぐる芸術理論的探究。

184 A5判二七四頁 四〇〇〇円

文芸時評 1993-2007

川村湊

野中柊、角田光代から松浦寿輝、川上未映子に至る数百人の作家たちを畑上に、日本の小説界の激変を『毎日新聞』紙上で証言し続けてきた著者の十五年にわたる文芸時評を集成する。『持続は力なり』という言葉をこれほどに鮮やかに示している仕事もない。(松浦寿輝)

A5判六三頁 五〇〇〇円

コンテツ批評に未来はあるか

波戸岡景太

データベース化が進行し、人間と社会とがますます乖離してゆく現在(「コンテツ」)はどのように語りうるのか? 村上春樹、『シユタインズ・ゲート』からエミネム、『ものけ姫』に至る多彩な表現のうちに、この二十一世紀を讀み直す。

111 四六判三四頁 二五〇〇円

カルチャー・スクラップ

安原顯

『バイディア』、『海』、『マリ・クレール』と、時代の現場で文化を読み続けてきたスーパードキュメンタリーが、瀕死の《カルチャー》を愛惜しつつ、偏愛する書物・映画・音楽を語り尽くした世紀末の先鋭的カルチャー・クリティック。

四六判並製二七九頁 二五〇〇円

迷路のモノローグ★

菅谷規矩雄

《わたしは戦後世代は、いまだみずからの思想の文体を、モードをこえた文体の思想として成就していない》。現代日本の最も戦闘的な詩人の一人として知られる著者が、朔太郎、堀辰雄、埴谷雄高、吉本隆明を解説する。

A5判一四三頁 一九〇〇円

溶解論

遠藤徹

ホメロス「オデュッセイア」から、ダリ等のシュルレアリスム、あるいは永井豪「デビルマン」、そして最終作で溶解・拡散したゴジラまで、古今東西のドロドロ・イメージを縦横無尽に往還し、世紀末文化の様相を解説する！

四六判一九九頁 二〇〇〇円

プラスチックの文化史

遠藤徹

第二次大戦後、人々の行動様式と生活空間を無意識のうちに変化させた「魔法の物質」プラスチック。その化学的発明の歴史そして社会への伝播と影響を、ハイ・アート、ポップ・カルチャー等の具体例に則して解き明かす、斬新な技術文化論。

四六判三四頁 三五〇〇円

百人二死 詩人たちはいかに死んだか

井伊華言

自殺、殺人、病死、刑死、流謫の裡の死、奇禍による死、野垂れ死に……古代ギリシアから中国、ロシア、フランス、日本まで、古今東西の詩人の多彩にして碌でもない「死に様」を、屍成の奇人・枯骨閑人改め恍惚惨人が諧謔と痛憤をこめて綴った戯作・詩人往生絵巻。

286 A5判三五七頁 四五〇〇円

文人伝 孔子からバルトまで

ウィリアム・マルクス 本田貴久訳

過去のテクストを読み、注釈を入れ、ときには未来に向けてテクストを書く者。文人とはいかなる存在なのか？ 古今東西の文人たち——孔子から菅原道真、そしてロラン・バルトまで——のさまざまな「生」を題材に、その誕生から死までの「文人の一生」を二十四章で描きます。

173 四六判三三〇頁 三三〇〇円

文学との訣別 近代文学はいかにして死んだのか

ウィリアム・マルクス 塚本昌則訳

十八世紀、「崇高の美学」により栄光の頂点にまで昇りつめた文学はその後、自閉状態に落ち込み、影響力を失っていくことになる。近世から現代まで、文学と世界との関係が切り替わる転回点をたどり、大胆に文学史を読み換える新たなマニフェスト！

193 四六判三三九頁 四〇〇〇円

オイディプスの墓 悲劇的ならざる悲劇のために

ウィリアム・マルクス 森本淳生訳

ギリシア悲劇はほんとうに「悲劇的」だったのか？——ギリシア悲劇にそなわる四つのテーゼを明らかにすることで、ギリシア悲劇をめぐる近代の誤謬から、ほぼ完全に失われてしまった本来の悲劇を救う「不可能な」試み。

195 四六判三〇三頁 三五〇〇円

タルブの花 文学における恐怖政治

ジャン・ポーラン 榎原直文訳

文学が退廃し言語への不信が増大しているいま、批評にはなにができるのか。《常套句》を拒む文学の恐怖政治家に対し、文学は日常的な《言葉》に頼ってこそ花咲き誇ると唱える、二十世紀文芸批評における記念碑的作品。

224 四六判一七〇頁 二五〇〇円

越境する文学

土屋勝彦編 管啓次郎 十沼野充義 十西成彦 十田中敬子他

現代文学は《世界》とどう切り結ぶのか？ アフリカ、ロシア、南米、ヨーロッパ、そして日本——国家の領域を突破することで《複数性》を獲得した、移民・亡命者たちの文化表現とその実践をめぐる共同研究の成果。

09.11 A5判三〇六頁 四五〇〇円

引用の文学史 フランス中世から二〇世紀文学にお

るリライトの歴史

篠田勝英・海老根龍介・辻川慶子編

「オリジナル」の概念が希薄だった中世にはじまり、テクスト相互の緊張関係が高まりをみせる二〇世紀まで、フランス文学の豊富な事例を讀み解くことで、「引用」書き直し」がもつ多様な広がりにも焦点を当てるアクチュアルな研究成果。
1912 A5判三七二頁 五〇〇〇円

〈冒険〉としての小説 ロマネスクをめぐって

赤羽研三

バフチン、ルカーチ、ジュネットらの物語論を踏まえ、語り／読み／登場人物のレベルにおける〈冒険〉から、〈冒険〉としての小説の一般理論の構築へ向けて、十九世紀以降の小説を題材に、多様なジャンルにおける〈冒険〉の諸相に肉薄する。
1914 四六判四一三頁 四〇〇〇円

危機のなかの文学

赤羽研三・大鐘敦子・佐々木滋子・立花史・中山眞彦他

政治、経済、社会、文化のあらゆる領域で激動する二十一世紀の世界において、文学は成立するのか？ するとしたら、いかなるかたちで、何のために？ 《文学の自明性》を疑い、危機のなかの文学を問う。
1916 A5判二七四頁 三八〇〇円

ミメーシスを越えて

近藤耕人

ホメロス、ダンテ、ラブレ、ブルースト、ジョイス、ベケット。現代文学の原点にして頂点である不朽の作品群を通して、分離、転移、複合する「わたし」の変容を追い、人間の認識力の根源に迫る、壮大な批評の試み。
A5判三〇四頁 四〇〇〇円

ラブレとセルバンテス 近代小説の原点

中山眞彦

「ロマン」は歴史を批判する！ 近代の劈頭に現れ「この世界に秩序と意味」を与え、同時に解体した《ガルガンチュア》《パンタグリユエル》と《ドン・キホーテ》。そのふたりの偉大な作家と作品の深い今日性を問いつめる、《ロマン》(小説)についての著者の理論の到達点。
1910 A5判三五七頁 五〇〇〇円

ロマンの原点を求めて 『源氏物語』『トリストアンとイ

ズー』『ペルスヴァルまたは聖杯物語』

中山眞彦

彷徨するエクリチュール、解体する物語、揺れ動く登場人物たち…… 《源氏物語》は物語的型を壊し、型を超えて、世界の現実そのものに迫ろうとする。ロマンは世界のすべてに向けて開いたテクストである。《日仏の三古典を精緻に読み解きつつ、《ロマン》の復権をめざす。
四六判三三〇頁 四〇〇〇円

サッフオー 詩と生涯

沓掛良彦

プラトンによって「十番目の詩女神」と讃えられたレスボス島の詩人の現存するすべての詩編、詩断片を収録するとともに、その謎につつまれた生と詩的世界を精細に説き明かす。
A5判四五三頁 六〇〇〇円

焔の女ルイーズ・ラベの詩と生涯

沓掛良彦

「十六世紀のサッフオー」「リヨンのサッフオー」と呼ばれたフランス文学史上最も有名な女流詩人の、運命的な報われることのない激しい恋の果実ともいべき全詩作品の完訳を含む本邦初の本格的書き下しモノグラフィ。
A5判一九九頁 二五〇〇円

リヨンのルイーズ・ラベ

マドレーヌ・ラザール 菅波和子訳

十六世紀というルネサンスの最盛期に南フランスの文化都市リヨンに生きた、類いまれな美貌と知性を兼ね備え《綱目屋小町》と謳われた奔放な女性詩人の実像を、現代フランスの碩学が克明に描きだす異色の評伝。

A5判三三八頁 四〇〇〇円

テキストと表象

小西嘉幸

崇高／庭園／自伝／書簡体小説といった時代のトポスを、そしてルソー、モンテスキュー、ラクロワなどの謎めいたテキストを読みつつ、気鋭のフランス文学者が、表象の不可能を問い、十八世紀西欧の文学と思想を現代に解き放つ。

A5判三三二頁 四〇〇〇円

アンシャン・レジームの放蕩とメランコリー 繊細さ

の原則

ミシエル・ドウロン 鈴木球子訳

革命を果たした啓蒙の理性は、常にその身を欲望に晒し続けていた。ヴォルテールの寛容、デイドロの放縱、ルソーの孤独、サドの挑発……古典を通して、重苦しい時代の転換期を軽やかに生き延びるための術を手に入れよ！

206 四六判三三五頁 三五〇〇円

近代フランス小説の誕生

植田裕次編

十八世紀フランスにおいて、美学的・道徳的批判にさらされ、文学の下流に甘んじていた近代小説は、どのようにして自らを洗練させ、十九世紀にはその中心を担うまでに至ったのか。ルソー、レチフ、サン＝ピエール、メルシエ、サドなどからその諸相を明らかにする。

四六判二五六頁 二五〇〇円

フランス近代小説の力線

沖田吉穂

バルザックを基点としブルーストに至る近代フランス小説の展開を、同時代の自然科学の発展や、政治経済の動向との関わりの中で読み解き、自然史・社会史が作用する「場の力学」から跡づける。

1811 A5判四〇三頁 六〇〇〇円

ゴンクール兄弟とその時代

斎藤一郎

爛熟を極めた十九世紀パリの風俗を、鋭い観察眼と綿密な調査によって描き出した兄のエドモンと弟のジュール。文人たちとの交流、度重なる政治的動乱、娼婦の華々しい生活、ジャポニスムの隆盛……ゴンクール兄弟の生涯からあざやかに蘇る、フランスの真の姿。

219 A5判五八四頁 八〇〇〇円

ヴィクトル・ユゴーと降霊術

稲垣直樹

十九世紀後半のオカルト復興の嵐の中で『レ・ミゼラブル』の作家が、水死した長女の霊の出現を契機に没頭した驚くべき交霊会の模様を具体的に再現しつつ、文学創造と交霊術との深くかつ根本的な関係を問う異色の書き下し。

四六判二五六頁 二五〇〇円

メリメとロシア作家たち

浦野進

プーシキン、ゴーゴリ、トゥルゲーネフといった十九世紀ロシアの文豪たちを積極的にフランスに紹介したのはメリメだった。ロシアがメリメに与えた影響に光をあてるはじめての試み。

126 A5判二五二頁十別丁図版八頁 四〇〇〇円

我が生涯の記

ジヨルジュ・サンド 加藤節子訳

生誕二〇〇年を経て甦る異貌のフェミニニストの波乱の生涯。膨大な数の小説を書きつつ、シヨパンやミュッセとの恋愛にとどまらず、時代の政治と社会を鋭く批判しつづけた〈男装の麗人〉の激しくも美しい自伝。

A5判並製三分冊貼函入計一六〇三頁+別丁図版三二頁 一五〇〇〇円

フロベールと〈ジェンダー〉クイアな家族から「新しい女」へ

ジャンヌ・ベム 柏木加代子訳

フロベールの文体から生みだされた女性像にはジェンダー問題が投影されていた……。愛人たちと交わした書簡を読み解きながら、社会規範を逸脱していくエクリチュールの潜勢力を見極める。

2212 四六判三三三頁 三五〇〇円

モーパッサン伝

アンリ・トロワイヤ 足立和彦訳

母親から芸術家になるべく育てられた青年時代から、フロベールとの邂逅から作家として名を馳せたのち四十三歳で夭折するまでの、短くも激しい生涯を駆け抜けた作家の人生を稀代の伝記作家が描く。

233 A5判三六頁+別丁二六頁 五〇〇〇円

フロベール コンテンポラリーなまなざし

ジャンヌ・ベム 柏木加代子訳

巨匠フロベールには、コラージュ／パフォーマンス／インスタレーションと同じく、「ビジュアルな瞬間」としてエクリチュールを読者に体験させる思考実験があった。フロベールの残した草稿を手がかりに小説における視覚性を問う。

166 四六判二四〇頁+別丁カラー図版四頁 三〇〇〇円

モーパッサンの修業時代 作家が誕生するとき

足立和彦

『脂肪の塊』の華々しい成功によって脚光を浴びたモーパッサン。しかし、そこに至るまでの道のりは決して平坦なものではなかった……。従来顧みられることのない数多くの作品を仔細に読み込みながら、作家誕生の瞬間に迫る。

1710 A5判三六頁 五〇〇〇円

フロベール伝

アンリ・トロワイヤ 市川裕見子 十土屋良二訳

《何について書かれたでもない書物》を夢み、作品から作者を抹消することを願った現代文学の先駆者の日常を、当代きっての伝記作家が描く伝記文学の白眉。

A5判三七九頁 四〇〇〇円

フロベール 文学と〈現代性〉の行方

松澤和宏 十小倉孝誠編

現代文学の端緒を開いたフロベールの彫心鑿骨の作品世界は、膨大な書簡や草稿とともに、常に現代作家を虜にし、文学批評・研究の試金石となってきた。同時代を鋭く見抜き、未来の読者を待望するフロベールへ、既成の作家像を超えて迫る19のアプローチ！

2110 A5判三九九頁 六〇〇〇円

フロベール『サラムボー』を読む

朝比奈弘治

現代文学の先駆者フロベールの、謎めいた歴史小説『サラムボー』を四つの視角から精緻に読み直し、《何について書かれたでもない書物》の夢へと、そして今日における小説の運命へと肉迫する作品論Ⅱ小説論。

四六判二五九頁 三〇〇〇円

一五〇〇〇フランの顛末 フロベール『感情教育』論

川中子弘

愛はいくらで買えるのか？ ソラによって要約不可能といわれた小説、ギユースターヴ・フロベール『感情教育』。錯綜した物語を導く不可視の原理を、金銭と愛憎の貸借から浮かび上がらせる。

19.8 A5判二七二頁 四〇〇〇円

ボードレール詩と芸術 日仏会館ライブラリー1

中地義和編

近現代詩を開拓した詩人ボードレールは、近代芸術批評の起点に立つ批評家でもあった。日仏の研究者・作家が協同し、美術や音楽と共鳴しつつ深化するボードレールの詩学と、さらにはその女性観の考察を通じて、詩人の創作原理の真髓に迫る。

23.4 A5判三五二頁 六〇〇〇円

ボードレール伝

アンリ・トロワイヤ 沓掛良彦・中島淑恵訳

母への依存、浪費癖、借金苦、そして死後の栄光……。憂鬱と理想との間を揺れ動く《ダンディ》な《ボヘミアン》、《この世に適せざる存在》であり続けた天才詩人シャルル・ボードレールの生涯を、評伝の名手トロワイヤが鮮やかに描き出す。

A5判三六九頁 四〇〇〇円

ニーチェ・コントラ・ボードレール

道躰章弘

ニーチェがボードレールの読者だったことは今日、ようやく知られはじめているが、ニーチェとボードレール（そしてヴァーグナー）の深くかつ微妙な関係に光をあて、ボードレールの《二重性》の意味を探る哲学的肖像。

四六判二四九頁 二五〇〇円

存在の冒険 ボードレールの詩学

小林康夫

ボードレールの詩のひとつひとつに深く刻み込まれた《傷》を手がかりに、「悪の華」から『パリの憂愁』に至る詩人の冒険を、存在という観点から剔抉する。「イマジユ」、「劇（ドラマ）」、「希望の詩学」を補遺に収録。

21.12 四六判二四五頁 二八〇〇円

マラルメの宗教

ベルトラン・マルシャル 中畑寛之・十大出敦・十坂巻康司・十熊谷謙介訳

近刊

サロメ 詩と散文のはざまに——ボードレール・マラルメ・フロア

ベール・ユイスマンス ベルトラン・マルシャル 大鐘敦子・原大地訳

近代の偉大な文学者たちのテクストを対象として、間テクスト的、間生成批評的、間美学的手法を自在に用いながら、サロメ流行の根底にあった歴史的命題を浮かび上がらせる、マラルメ研究の泰斗による《サロメ》批評！

23.3 A5判三六〇頁 五五〇〇円

マラルメ——書物と山高帽

立仙順朗

《いたるところにあつてどこにもない》詩を求めて、マラルメ後期散文の謎めいた森の中へとわけいり、マス・メディアの支配する大衆社会の中の詩と詩人の運命を、言葉と沈黙の意味を問う。《失われた全体のかわりに断片を……》。

A5判三四頁 四〇〇〇円

祝祭としての文学 マラルメと第三共和制

佐々木滋子

六〇年代の〈危機〉を脱したマラルメのバリでの精力的な活動を克明に追いつながら、出現しつつあった大衆社会のなかで夢みられた未来の書物・未来の演劇・未来の祝祭の意味を問う。《過去は終わったが、未来が遅れている……》

123 A5判三七五頁 五〇〇〇円

『イジチュール』あるいは夜の詩学

佐々木滋子

ステファヌ・マラルメの代表作のひとつ『イジチュール』。「危機の夜の中に誕生した」この作品の言語実践とマラルメの詩的思考の意味に肉迫する、日本のマラルメ研究の水準を示すともいえるべき、世界的にも類例のない野心的試み。

A5判四〇二頁 七〇〇〇円

世紀末の白い爆弾 ステファヌ・マラルメの書物と演劇、そして行動

中畑寛之

至高の〈書物〉を孤独に試みる言葉の錬金術師マラルメ。十九世紀末のパリを騒然とさせた爆弾テロの閃光のなかで詩人が選んだ文学的〈行動〉の意味／戦略とは？ 氣鋭の研究者が、書くという行為に文学的爆弾を新たな視点で読み解く。

89.11 A5判六六四頁 八〇〇〇円

ステファヌ・マラルメの〈世紀〉

原大地

激動の時代を生き、生涯にわたり心に大きな虚無を生むこととなる幼い息子の死を経て、マラルメはどのように変容したのか？ 伝記的事実や作品を詳細に追うのみならず、文化的側面から詩人の本質を問うモノグラフィ。

19.11 四六判並製四五七頁 四〇〇〇円

〈彼女〉という場所 もうひとつのマラルメ伝

永倉千夏子

晩年の〈ミューズ〉メリー・ローランとは誰か？ メリーとの関係からマラルメの作品を読み解くと同時に、この偉大な詩人の文学的人生を縦横無尽に解き明かす、最新の異色の伝記。

124 A5判七八七頁 二〇〇〇円

マラルメと音楽 絶対音楽から象徴主義へ

黒木朋興

象徴主義を代表する詩人マラルメ、その難晦な詩句は〈音楽〉といかなる関係をとって結んでいたのか？ ヴァーグナーによる〈絶対音楽〉の影響から、当時の音楽学者たちの理論を丹念に洗いなおすことにより、詩人と〈音楽〉の関係を更新する。

139 A5判五〇四頁 七〇〇〇円

マラルメの現在

大出敦編 執筆 竹内信夫・立花史・松村悠子・永倉千夏子他

現代文学のみならず、様々な領域においてパラダイム変換をなしたマラルメは、同時代の言語学／韻文詩／音楽／写真などをいかに受容し、そこから逸脱していったのか。最新の研究を踏まえ多角的な視点から詩人の独創性に迫る。

13.11 A5判四〇〇頁 六〇〇〇円

マラルメの想像的宇宙

ジャン＝ピエール・リシャール 田中成和訳

マラルメのテキストのなかに「隠された同一性」を浮彫りにするテーマ批評「ヌーヴェル・クリティック」の最も力強い試み。《リシャールとともに〈真の文学批評〉が姿をみせる。必読である》(蓮実重彦)。再開第一回日仏翻訳文学賞受賞。

A5判七四六頁 九〇〇〇円

アナトールの墓のために

ステファヌ・マラルメ+ジャン・ピエール・リシャル 原大地訳

病により八歳で夭折したアナトール、息子の死に衝撃を受けたマラルメは、千々に引き裂かれる思いを書き遺した……。その存在が長らく知られることになったそのテクストと、文芸批評の泰斗リシャルの、魂をゆさぶる小論による双頭の書。

16x12 四六判二八一頁 三〇〇〇円

ステファヌ・マラルメ

ギイ・ミシヨール 田中成和訳

書くことの問題を、とりわけ《言語》の問題として極限にまで問いつめた十九世紀フランスの偉大な詩人、現代文学のプロブレマティックの隠れた中心ともいうべき、この難解をもって知られる詩人への定評ある最良の入門書。

四六判二八三頁 二八〇〇円

ロートレアモンと文化的アイデンティティ

ドール・デュカスにおける文化的二重性と三言語併用

ル・ペロネ・モイセス+E・ロドリゲス・モネガル 寺本成彦訳

十三歳で渡仏したウルグアイ出身のイジドル・デュカス。その彼がスペイン語を話せないわけがない！ 不問に付されてきたデュカスのバイリンガルの問題をラテンアメリカの二人の研究者が新たな視点から徹底的に問い直す。

12x11 A5判一七四頁十別丁図版八頁 二五〇〇円

アルチュール・ランボー伝

ジャン・リユック・ステンメッツ 加藤京二郎・斎藤豊・富田正二・三上典生訳

伝説の環からめとられた詩人、アルチュール・ランボー。その不可能な存在を歴史の場に連れ戻し、〈ひとつ〉へ「貫した」詩人の姿を、今日までのランボー研究の成果のうえに、生き生きと現前させる、最新の評伝。

A5判六二〇頁 八〇〇〇円

ヴィタリー・ランボー

クロード・ジャンコラ 加藤京二郎・斎藤豊・富田正二・三上典生訳

十九世紀フランスの詩人ランボーの母であり、巷間「悪名」の高いヴィタリーの知られざる生涯を克明にたどる。母子の〈反目〉と〈愛〉のなから立ち現れる早熟な〈天才〉、詩人の新たな一面。

A5判四二二頁 五〇〇〇円

ランボーと父フレデリック

チャールズ・ヘンリー・L・ボーデナム 加藤京二郎他訳

アルチュール・ランボーが、その〈見者の詩法〉を編み出したのは、父が残した書類の束のなかからだった。これまで語られることなかったアルチュールの父、フレデリックに光を当て、貴重な研究。

A5判二八四頁 三五〇〇円

ランボー家の方へ

イザベル・ランボー他 加藤京二郎・斎藤豊・富田正二・三上典生編訳

家族の目からみた《天才詩人》の最期の日々。詩人の妹の痛切な回想録をはじめ、両親、兄、妹の残した日記、書簡等、詩人のすべてを見続けた四人の家族の、現存するほぼすべてのテクストを集成する。

A5判二八二頁 三五〇〇円

ヴェルレーヌ伝

アンリ・トロワイヤ 沓掛良彦・中島淑恵訳

ランボーとの「恋愛」、放埒と困窮……。男たちを愛し女たちに恋した詩人の、矛盾に満ちた栄光の生涯をフランスの人氣小説家が綴る。

A5判四二九頁十別丁図版一六頁 五〇〇〇円

ピエール・ロチ伝

フラン・ケラーヴィレジェ 遠藤文彦訳

フランス海軍の士官として世界中を巡航しながら、「お菊さん」等 四十篇もの小説を残したエキゾティズムの作家の波瀾にみちた生涯を活写する決定版評伝。

1012 A5判六五二頁 八〇〇〇円

科学普及活動家ルイ・フィギエ 万人のための科学、夢想としての科学

榎野佳奈子

十九世紀半ば、日進月歩の科学技術を平明に説く科学普及活動家が誕生した。その第一人者として写真技術の普及に努めながらも、死後の世界を科学的に説く男がいた。なぜ彼は非科学的な言説に魅了されたのか？ 科学の「正しさ」をめぐる言説に隠された欲望を炙り出す。

232 四六判二五二頁 三〇〇〇円

ジュール・ヴェルヌ伝

フォルカー・デース 石橋正孝訳

ブルジョワとしての「市民ヴェルヌ」と、読書と個人の経験を織り交ぜ文学の素材とする「作家ヴェルヌ」の姿を一次資料、未刊行資料を博捜しながら描きつつ、驚異の旅の読み直しをも提唱する世界的権威による本邦初のジュール・ヴェルヌ評伝。

146 A5判六九九頁十別丁図版三二頁 一〇〇〇〇円

二声書簡 1888-1890

ジッド／ルイス／ヴァレリー 松田浩則十山田広昭十塚本昌則十森本淳生訳

フランスを代表する作家三人が、青春期に交わした八九通の往復書簡集。早熟の文学青年ジッド／ルイスの友情にはじまり、早くから才能の片鱗を見せていたヴァレリーがそこに加わる…… フランス文学、さらには近代文学一般について考える上での貴重なテクスト。

165 A5判六九五頁 八〇〇〇円

ジュール・ヴェルヌとライクシヨンの冒険者たち

新島進編

奇抜な冒険譚の裏側にヴェルヌが隠した文学的プログラムとは何か。ホフマン、ポー、デュマ、ブルースト、ルーセル、ドイル、ラスヴィッツ、レム、音二郎……ヴェルヌが耽溺し、ヴェルヌを偏愛した文豪たちとともにライクシヨンの極地探査へと、いま乗り出す！

219 四六判三〇六頁 三〇〇〇円

エロスの祭司 評伝ピエール・ルイス

沓掛良彦

『ピリテイスの歌』『女と人形』によってマラルメの絶賛をうけながら文学的名声の絶頂で文壇を去り古書と未発表原稿に埋もれて死んだ世紀末の詩人の、文学と友情、そして二五〇〇人の「女たち」に捧げられた狂熱の生涯に迫る渾身の書き下ろし。

A5判五三六頁 六〇〇〇円

シャル・クロ 詩人にして科学者 詩・蓄音機・色彩写真

福田裕大

世紀末の詩人として知られ、またエジソンに先立ち蓄音機を考案したともされるシャル・クロは、色彩写真と呼ばれる技術開発の先駆でもあった。これらの領域で練り広げられた探究を仔細に追ひ、彼の内側で詩と科学が交叉する地点を描き出す。

144 A5判三二八頁十別丁カラー図版八頁 四五〇〇円

評伝ポール・ヴァレリー

ミシェル・ジャルティ 恒川邦夫監訳

詩人の生涯をたどりながら、同時代のフランスそしてヨーロッパで起きた歴史的な事件、各界の人々との出会いの数々を描き出す。狭義の文学史の枠組みを遥かに超えた、二十世紀ヨーロッパの時代絵巻。

236 A5判並製三分冊貼函入計一九九四頁十別丁図版一六頁 三〇〇〇円

ヴァレリーにおける詩と芸術

三浦信孝・塚本昌則編

知性と感性の相克に懊悩する、(ヨーロッパ最高の知性)と呼ばれた詩人の実像が近年、明らかになりつつある。詩人の肖像に迫る第Ⅰ部、(他者とエロス)の問題に肉薄する第Ⅱ部、そして第Ⅲ部〜第Ⅴ部では芸術論の三つの諸相に焦点をあて、新たな読解の道筋を切り開く。

188 A 5判三六二頁 五〇〇〇円

愛のデイスクル ヴアレリー「恋愛書簡」の詩学

森本淳生・鳥山定嗣編

《知性の詩人》ヴァレリーの創作には、女性たちとの知性と情動の両面にわたる濃密な関係があった。ロヴィラ夫人、ポツジ、ヴォーチエ、ヴォワリエらめぐって紡がれた「恋愛書簡」を詳細に読み解きながら、知性の裏箔としてある《エロスの詩人》の側面を鮮やかに描き出す。

283 四六判二八八頁 三〇〇〇円

ヴァレリーの『旧詩帖』 初期詩篇の改変から詩的

自伝へ

鳥山定嗣

『若きバルク』を発表するまでの二〇年におよぶ「沈黙期」に橋を架けたのは初期の詩集『旧詩帖』だった。四半世紀にわたる改変の作業を辿り、作家の(詩的自伝)を問う。『旧詩帖』新訳を併録。第三五回(二〇一八年度)渋沢・クロール賞奨励賞受賞。

183 A 5判四六四頁十別丁六八頁 七五〇〇円

ヴァレリーの芸術哲学、あるいは身体解剖

伊藤亜紗

詩を用いて身体を解剖し、その機能を開拓する——二十世紀最大のフランス詩人が夢みた「純粋性」とは何だったのか。「カイエ」等の残された膨大な断片から、作品論、時間論、身体論を再構成する作業を通して、その謎に迫る。

134 四六判二七六頁 三〇〇〇円

クローデルとその時代

大出敦編

外交官として東洋に赴任することで、クローデルの作品に大きな転換がもたらされた時代とはいかなるものだったのか。生誕一五〇年を期に再評価の気運高まるクローデルに向かつての「日本」「演劇」「音楽」「宗教」の諸相から、詩人大使の多面性に光を当てて。

236 A 5判三七八頁 六〇〇〇円

ポール・クローデル 日本への眼差し

大出敦・中條忍・十三浦信孝編

大使として日本に滞在し、深く日本文化に親しんだ作家ポール・クローデル。その作品にも影響がみられる《日本》は、詩人大使にとっていかなるものだったのか? ポール・クローデル生誕一五〇年を記念して行われた国際シンポジウムを堂々書籍化。

213 A 5判三八七頁 六〇〇〇円

詩人大使ポール・クローデルと日本

アルバム・クローデル編集委員会

作家であり、外交官でもあった作家ポール・クローデルの生誕一五〇周年を記念するアルバム。大使として日本に滞在した期間の活動を貴重な資料から描き出す。執筆：中條忍、渡邊守章、大出敦、根岸徹郎、ミッシェル・ワツセルマン。

185 A 5判並製一三六頁 二五〇〇円

ポール・クローデルの黄金の聖櫃(詩人大使)の文化

創造とその遺産 ミッシェル・ワツセルマン 三浦信孝・立木康介訳

駐日フランス大使として日仏文化交流の要となり、日仏会館・関西日仏学館の創設に向けて尽力したクローデルの足跡を、第一級の史料をもとに辿り直す。クローデルの遺志を受け継いだ著者による、渾身のドキュメント。

234 四六判二四八頁十別丁四一六頁 三〇〇〇円

〈生表象〉の近代 自伝・フィクション・学知

森本淳生編 執筆 桑瀬章二郎・立木康介・大浦康介・千葉文夫他
文学・思想・芸術を構成する様々なジャンルやメディア、学知、学校教育といった近代固有の制度のなかで、人間の〈生〉はいかに媒介され表象されるのか？
〈近代Ⅱモデルニテ〉を横断的に再考する壮大な試み。
1510 A5判四九六頁 七五〇〇円

垂直の声 プロソポペイア試論

ブリュノ・クレマン 郷原佳以訳
このように語っているのは誰なのか？ レトリックの一つ、プロソポペイアに光を当てつつ、詩学総体をもみすえた独自の的方法論による、修辞学の脱構築！
国際哲学コレージュで院長をつとめた著者が、不在のもの「声」という、〈思考のフイギュール〉に迫る！
164 A5判三七二頁 四八〇〇円

狂気と文学的事象

シヨシャナ・フェルマン 土田知則訳
イェール学派の新鋭が、フーコー、デリダ、ネルヴァル、フロバール、フロイト、ラカン等の、哲学から文学に至る狂気に関するあらゆるタイプの言説を渉猟しながら、あくまで読解に抵抗する、《狂気》という文学的事象を撃つ。
四六判五七〇頁 五〇〇〇円

詩的言語の脱構築

バーバラ・ジョンソン 土田知則訳
イェール学派の泰斗が、デリダのグラマトロジー、ラカンのフロイト解釈等をもとに、ボードレール、マラルメのテクストを精密に読み解き、ついに《詩の危機》の瞬間を開示するにいたる、デイクンストラクション批評の最良の成果。
四六判二八八頁 三五〇〇円

作家の聖別 フランス・ロマン主義Ⅰ

ポール・ベニシュー 片岡大右十原大地十辻川慶子十古城毅訳
十九世紀前半、宗教的権力に代わり、世俗的な聖職者たらんとした詩人、文学者たちの「聖別」の過程を克明に追いながら、いかにして文学が高い精神の職務を担うよう求められるに至ったかを論じる。フランス・ロマン主義を徹底的に解明する著者畢生の大著の第一巻。
151 A5判六八七頁 八〇〇〇円

象徴主義と〈風景〉ボードレールからブルーストまで

坂巻康司・立花史・津森圭一・廣田大地編
十九世紀の文学運動のなかでつねに特権的な主題であった〈風景〉。ロマン主義や自然主義とは異なる〈風景〉を捉えた象徴主義の作家たちに焦点を当て、ボードレール以後の作家たちがいかに〈風景〉と対峙したのか、その意味を別扶する。
1810 A5判三八五頁 五五〇〇円

異貌のパリ 1919-1939 シュルレアリスム、黒人芸術、大衆文化

澤田直編
狂乱の二〇年代から暗雲が漂う三〇年代にかけて、サブカルチャーがパリに雪崩れ込んだ……写真、映画、黒人芸術、ジャズ、ダンスとそれらはハイカルチャーとどのように邂逅し、またすれ違ったのか。思想と芸術の豊穡なる交雑とその可能性を探る。
177 A5判二七五頁 四〇〇〇円

イマジナリー 十九世紀における文学とイメージ

フィリップ・アモン 中井敦子・福田美雪・野村正人・吉田典子訳
直線的にゆつくりと読まれるテクスト、ジグザクと複雑な動きですばやく解読されるイメージ。産業社会の中でイメージが氾濫する十九世紀、両者が出会い、交錯し、新たな文学史を生み出した……言語とイメージをめぐる、新たな表象文化論！
191 A5判四四八頁 七〇〇〇円

フランス現代作家と絵画

吉川一義 十岑村傑編

二十世紀フランスの作家たちは美術作品との出会いと対話をいかに創作の契機としたのだろうか。ブルースト、ヴァレリーからデュラス、ゴダールに至る十二人の作家たちにおける文学と美術の創造的な関係を多角的に読み解く。

A5判三四四頁 四〇〇〇円

評伝 ロラン・バルト

ティフェエヌ・サモワイヨ

桑田光平・伊澤拓人・伊藤靖浩・黒木秀房・清水雄大・福井有人訳

バルトの友人・知人への詳細な聞き取りだけでなく、近年まで未調査だった草稿や私信などを丁寧に調査し、バルトを個人的環境ならびに社会的・政治的文脈の中に置き直しながら、バルト自身の作品と関連づけた、気鋭の研究者による決定版伝記！

236 A5判六一五頁 九〇〇〇円

バルト以前／バルト以後

渡辺諒

ロラン・バルト『記号の帝国』の精緻な読解をもとに、異郷への関心に貫かれた作家／思想家たちを自在に往還し、「絶対マイノリティ文学」としてのフランスコフォン文学、ジャポノフォン文学を発見する鮮烈な文芸批評／エッセイ。

四六判三三五頁 三五〇〇円

ブルースト／バタイユ／ブランシヨ 十字路のエクリ

チュール

ロジエ・ラポルト 山本光久訳

「ブランシヨ以後、最もブランシヨ的な作家」と評される、現代フランスの特異な詩人にして作家、批評家が、「書くこと」と「倫理性」の問題、「読む」一書く、「翻訳する」ことの同一性の問題を問いつめた、極限へ向かう《エチカ》。

四六判二六四頁 三〇〇〇円

ブルーストと芸術

吉川一義編

ブルーストの文学には美術・音楽・歌劇・建築をはじめ、古典から最新流行まで、作家が見聞し味わった芸術のエッセンスが注ぎ込まれている。鑑賞と創作に身を浸し、芸術と人生の関係を追究した末に作家が作中にちりばめた芸術批評は何を物語っているのか。その真髓に迫る。

24 A5判三七七頁 六〇〇〇円

ブルースト的冒険 偶然・反復・倒錯

湯沢英彦

『失われた時を求めて』以前の生身の小説家の〈歴史〉の検証からはじまり、書物・物語という「記憶の場所」において、ブルーストの〈私〉が展開する真実の探求のあり方を、テクストによる冒険としてとらえ直す、入念なブルースト研究の見事な成果。

四六判三九〇頁 三八〇〇円

ブルースト的絵画空間

真屋和子

エルスチールのモデルは、ターナーだった。ラスキンの思想や同時代のさまざまな画家たちの作品を祖上に、従来はモネなど印象派の画家だと考えられてきたエルスチールのモデルをターナーだとする新たな説を呈示し、ブルーストの芸術観・文学観をあざやかに浮き彫りにする。

26 A5判四三四頁 六五〇〇円

ブルーストとの饗宴

中野知律

記憶と結びついたマドレーヌ菓子、舌平目の変身譚、アスパラガスの官能性……風味豊かな『失われた時を求めて』において、食をめぐる文化史を下敷きに世紀末に溢れた美食言説に逆らう作家のテクストを味読していく、壮大な饗宴への誘い。

209 A5判四六九頁＋別丁図版一六頁 五八〇〇円

印象・私・世界『失われた時を求めて』の原母体

武藤剛史

《著者の視点から考察するのでなければ、過去の傑作の解釈などありえないのだ。》——ブルーストのこの言葉を導きに『失われた時を求めて』を覆う「無意志的記憶」を解明し、巨大な作品を規定するテーマ・構造を統一的に捉え、ブルースト文学の真髄に迫る。

175 四六判二六九頁 三〇〇〇円

心はどこに在るか ブルースト、サンIIテグジュペリ、

まど・みちお

武藤剛史

真の自己を求めて内面に沈潜したブルーストを手がかりに、ベルナノス、サンIIテグジュペリ、ドーテル、まど・みちお、庄野潤三、ミシェル・アンリを通じて、世界と《私》が現われる場としての心の働きを捉え直し、愛の関係性に生きる《いのち》の論理を究明する。

201 四六判三〇七頁 三五〇〇円

シュレアリズム、あるいは作動するエニグマ

ジャクリーナ・シエニウIIジャンドロソ 齊藤哲也編

アヴァンギャルドからも、モダニズムからも、逸脱してみせたシュレアリズムは何をもって我々を誘惑II挑発し続けているのだろうか。現実と表象が《癡撃》に邂逅し、常に謎を誘惑させるディスクールを巧緻に読み解く、シュレアリズム研究の泰斗の足跡。

154 A5判三六八頁 五〇〇〇円

崇高点ブルトン、ランボー、カプラン

ジョルジュ・セバツグ 鈴木雅雄訳

ブルトンが『第二宣言』で記したシュレアリズムにとつての「精神の一点」が実際に南仏の渓谷にあるとしたら……ブルトンの残した秘密のメッセージの回路に電気を流し、その磁界へと読者を誘うシュレアリズムの観光II実践案内書！

1610 A5判並製二八五頁 三〇〇〇円

エリテールの自動記述

福田拓也

何の考えもなしに不意に書きはじめられた語は、なぜ自らを探し求めるように連鎖していくのか？——純粹な思考の表現を目指す一方で言語に頼らざるを得ないという逆説に引き裂かれた、解読不能寸前のシュレアリズム的テクニストを解剖し、その原理を露わにする。

184 四六判二三四頁 三〇〇〇円

評伝ジャック・ヴァンシェ

後藤美和子

黒いユーモアの体現者、戦場から謎めいた手紙を送り、作品を残すことなく早世した伝説のシュレアリスト。ブルトンによる偶像化を徹底的に排し、故郷ナントでの文学活動、苛酷な従軍生活、死の真相……記録や証言、手紙や草稿をもとに、知られざる生涯を克明に辿る。

221 A5判四五七頁 六五〇〇円

ピエール・ルヴェルデイとあわいの詩学

山口孝行

キュビスムとの交流、イマージュの生成ソレームへの隠遁……変貌するルヴェルデイ詩学の運動性を別抉し、雑誌『エフエメル』の実践を準備した詩人として位置づける、本邦初のモノグラフィイ。

216 A5判三〇五頁 五〇〇〇円

アントナン・アルトー 自我の変容（思考の不可

能性）から（詩への反抗）へ

熊木淳

初期の書簡から演劇論、そして晩年の思考までアルトーをつらぬくものは、先立つ《起源》への徹底的な反抗であった。あらゆる系譜を逆転させる戦略的な視点から現代詩への影響を論じた最もアクチュアルなアルトー読解。

148 A5判三六三頁 五〇〇〇円

バタイユ書簡集 1917-1962

ジョルジュ・バタイユ 岩野卓司・石川学・大木勲・神田浩一・谷口
亜沙子・永井敦子・長井文・中里まき子・中山慎太郎・福島勲訳
作品のアイディアから批評、日常の瑣事まで、青年期から晩年にかけてのバタイ
ユが友人・知人へ宛てた書簡を集成する。「バタイユの作品の測り知れない性
質を欺く」(M・シユリヤ) 膨大な書簡から知られざるバタイユが立ち現れる。
ブランシヨからバタイユ宛の書簡を併載。 2207 A5判七・九頁 一〇〇〇〇円

ジョルジュ・バタイユの反建築 コンコルド広場占拠

ドウニ・オリエ 岩野卓司・神田浩一・福島勲・丸山真幸・長井文・石川学・大西雅一郎訳
バタイユの第一作「ランスのノートルダム大聖堂」建築をめぐるこのテクストを
永遠に抹殺し続けること、それがバタイユにとつての「書く」ということだっ
た……。ベルナル・チュミなど「脱構築主義」の建築家たちにも絶大な影響を与
えた反建築論。バタイユ研究の必携書。 159 A5判三七八頁 四八〇〇円

ジョルジュ・バタイユ 神秘経験をめぐる思想の限界と

新たな可能性
岩野卓司
バタイユの経済理論、哲学・文学作品を精査し、アリストテレス以来の形而上
学の伝統そのものを問い直しながら、その「外」へと開かれた「経験」の思想
を明らかにする極限の哲学。 103 A5判三七頁 四五〇〇円

ジョルジュ・バタイユの《不定形》の美学

江澤健一郎
若き日のバタイユが『ドキユマン』誌で展開した、イデアリズムに抗する《不
定形》という思想のうちに、晩年のマネ論やラスコー論にまで直結する図像や
造形に関する思索を見出し、豊富な図版も交えながらその著作を精緻に読み解
く。 A5判三九四頁 四五〇〇円

バタイユと文学空間

福島勲
両大戦間期そして戦後という動乱の時代を生きたバタイユの夢みた新たな文
学、新たな社会とは何か。他者との不可能な交流の場、終わりに対話の場と
しての文学を問い、新たなコミュニケーションの形態をさぐる。 113 四六判一九九頁 三〇〇〇円

ピエール・クロソウスキーの現在 神学・共同体・イ

メージ
大森晋輔編
いまだ全貌が明かされているとはいえない特異にして多様な作家ピエール・
クロソウスキーを改めて読み直し、さまざまな角度から継承すべき遺産を見定
める。未訳のテクストや貴重な対談を収めたクロソウスキーの「いま」を問い
直す必携の書。 2011 A5判並製三四九頁 四〇〇〇円

レヴィナスとブランシヨ〈他者〉を揺るがす中性的な

もの
上田和彦
《私》に呼びかける「他者」とは誰なのか。「他者」の呼びかけに応える「私」
とは誰なのか。ともにハイデガールの存在論の彼方をめざした哲学者と作家の
数十年におよぶ友愛にみちた深く微妙な関係を鋭く問う気鋭の力作。 A5判三七頁 四〇〇〇円

甦るレヴィナス『全体性と無限』読解

小手川正二郎
これまで顧みられなかった理性論という観点から「全体性と無限」の独自性に
光をあて、主体論においてハイデガーと対峙し、なお根強い影響力をもつデリ
ダの読解を糺す。生きていくレヴィナス哲学を甦らせる変革の書。 152 四六判三四四頁 三五〇〇円

文学時評 1941-1944

モーリス・ブランショ 郷原佳以・門間広明・石川学・伊藤亮太・高山花子訳

第二次大戦期に『ジュルナル・デ・テバ』紙に連載された、小説、詩、評伝、比較神話学、歴史言語学、神学、文明論など多岐のジャンルにわたる時評。批評家、思想家として本格的に活躍する以前の、ブランショの思想の原点！

21.09 A5判五七二頁 八〇〇〇円

モーリス・ブランショ 不可視のパートナー

クリストフ・ピタン 上田和彦・岩野卓司 郷原佳以・西山達也・安原伸朗訳

ブランショの生と作品を、神話化することなく批判的な精神を保ちながら丹念に読み、その「自伝的なもの」を炙り出す、ブランショ研究の牽引者による、「顔のない作家」の本邦初の決定版伝記。

14.12 A5判六三三頁 八〇〇〇円

モーリス・ブランショ レシの思想

高山花子

モーリス・ブランショがその作品と批評を通して追求した「レシネ」＝物語とはなにか。初期から晩年までその思想をたどることによって、言葉が《出来事そのもの》として表出する空間を明らかにする。

21.9 四六判二八九頁 三三〇〇円

ルイ・ルネ・デ・フォレ

佐藤典子

バタイユが、そしてまたブランショが賞賛した「虚無のこぼれ」。「書く／読む主体」という観点から、「隠蔽することによって新たな事実を獲得する」と語った作家のメタフィクショナルな小説に迫る。

10.6 A5判二九九頁 四〇〇〇円

ベケット 果てしなき欲望

アラン・バディウ 西村和泉訳

不動の沈黙の先にはこぼれがあった。読むものに勇気を与え続けるベケットの詩作／思索の中で救い出されるものは何か？ フランス現代哲学の領袖が開く、ベケット批評の新天地。

四六判一七二頁 二〇〇〇円

サミュエル・ベケット！ これからの批評

岡室美奈子・川島健・長島確編

気鋭の研究者たちが、最新の研究を踏まえて、「不条理劇の作家」とは別の新たなベケット像を大胆に提示する、ベケット研究のスタンダード・ワーク。文献資料付き。執筆＝竹本幹夫・西村和泉・垣口由香・藤原曜・宮脇永吏・景英淑・菊池慶子・久米宗隆・片岡昇・木内久美子

12.2 A5判三六七頁 三八〇〇円

ベケットを見る八つの方法 批評のボードレス

岡室美奈子・川島健編

〈不可視の領域への刺すようなまなざしを持つ人、ベケット〉(J・M・クツツエー)。小説・哲学・演劇・美術・メディア等、多様で深遠な知の坩堝ともいふべき諸作品を精査する、ノーベル賞受賞者クツツエーを始めとする内外の研究者たちによるベケット研究の最前線。

13.3 A5判三八五頁 四五〇〇円

ベケットのアイランド

川島健

ベケット作品において繰り返し描かれる果てなき彷徨の原点は故郷アイランドにあった。様々な信条とイデオロギーが交錯する場、誰のものでもなく、誰のものにもなりえる空間＝「無人地帯」をキーワードに初期作品群に刻まれたアイランドの相貌の変化を追う。

14.2 A5判二七二頁 四〇〇〇円

クロード・シモン 書くことに捧げた人生

ミレイユ・カルリグリュベール 関未玲・上田章子訳

手記や創作ノート、絵画作品や写真、伯母の手帳など、さまざまな資料を検証し、作品と突き合わせながら、作家の人生の軌跡を描破する。難解な作風で知られるヌーヴォー・ロマンの巨人にしてノーベル文学賞受賞作家の、本邦初の決定版伝記！

2016 A5判四〇七頁 七〇〇〇円

マルグリット・デュラス〈声〉の幻前

森本淳生／ジル・フィリップ編

《私が表現しようとするのは、書く時に私が聞くものなのです》。ヌーヴォー・ロマンの枠を超えた作家マルグリット・デュラス。単なる日常性には還元できない中間的な領域——現前と不在、生と死——をたゆたう《幻前する声》を、小説、戯曲、映画において明らかにする。

2013 四六判二三八頁 二五〇〇円

ジャック・デュパン、断片の詩学

丸川誠司

ランボーとシャルルの流れを汲み、ブランシヨ、バタイユと接点を持つ現代フランス詩の巨星。本邦初訳のデュパン詩集と、その象の世界を解きほぐす解説。ツェランと同じく戦後の抒情詩を背負い、ミロ、ジャコモメティ等、二十世紀美術の巨匠とつながる詩的宇宙を読み解く。

2011 四六判二八四頁 三〇〇〇円

本当の小説 回想録

フィリップ・ソレルス 三ツ堀広一郎訳

ポンジュ、モーリヤック、アラゴン、バタイユ、ラカン、バルト——現代フランス文壇の鬼才、フィリップ・ソレルスが綴る回想録。女たちとの放蕩、前衛文学生活、「テル・ケル」の創刊、六八年五月、毛沢東主義者から法王主義者へ……文学と政治の季節がいま魅る。

1993 四六判三三七頁 三〇〇〇円

ミラン・クンデラと小説

赤塚若樹

今日の《世界文学》におけるメルクマールとして屹立するミラン・クンデラを支え続ける《小説の精神》を、その作品と、多くの研究を自在に往還しながら、小説のテーマ、ことば、歴史を軸に、立体的に論じる、本格的な作家論Ⅱ小説論。第九回木村彰一賞受賞。

A5判四五九頁 六〇〇〇円

アルフレッド・ジャリ 『エビュ王』から『フォーストロ』

ル博士言行録』まで ノエル・アルノー 相磯佳正訳

アプサンと自転車とピストルへの執着、船酔いとスカトロロジーと男性自身への偏愛——。《パタフィジック》を創始し、世紀末のバリを弾丸のごとく駆け抜けた天才詩人の半生を愛情あふれる筆致で描く、決定版評伝！

A5判五三〇頁 六〇〇〇円

ジルジュ・ペレック伝 言葉に明け暮れた生涯

デイヴィッド・ペロス 酒詰治男訳

フランス防衛のために闘った父親の戦死、アウシュビッツ・ビルケナウでの母親の死に終世とり憑かれることになった苦悩、滑稽かつ憎みかたき謙虚な生活、芸術と戯れる日々……ゴンクール伝記賞を受賞したペレック伝の決定版。

143 A5判七七六頁十別丁図版三三頁 二〇〇〇円

ジャック・ルーボの極私的東京案内

ジャック・ルーボ 田中淳一訳

数学者／小説家／ウリビアンが山手線で試作／詩作／思索するデイブ東京案内。《詩作は詩と一体となり、秘密を隠した子供の笑い声と化す》(円城塔)。

117 A5判並製オールカラー一〇五頁 二八〇〇円

ロベール・デスノスラジオの詩人

小高正行

ラジオ番組・広告を詩的実践の場所としておこない、音声によって集団的な(女夢)をリスナーと共有することでラジオの可能性を切り開いた詩人デスノス。二〇世紀マルメディアの先駆となった、番組・広告制作者としての詩人にスポットを当てる異色のモノグラフ。

1969 四六判二七三頁 三〇〇〇円

アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ イタリアをめぐる幻想の美学

松原冬二

フランスの作家でありながら、ヴェネツィアとパリを往復する生活を送り、イタリアを舞台にした長編小説を書いたマンディアルグはいかにしてその「異端」の幻想美学を作り上げたのか? 谷崎潤一郎と三島由紀夫を愛する、孤高の耽美的作家の本邦初のモノグラフ! !

1964 A5判四〇〇頁 八〇〇〇円

セリーヌ伝

フレデリック・ヴィトウー 権寧訳

『夜の果ての旅』『なしくずしの死』などの作品で知られる「反ユダヤ」的作家セリーヌ。「自伝的」著作や多くの書簡・証言等をもとに、これまでの定説・伝説を覆す画期的評伝。第三十三回日本翻訳出版文化賞受賞。

A5判六八四頁十別丁図版一六頁 八〇〇〇円

ドリユ・ラ・ロシエル

ベルナール・フランク 有田英也訳

一九三〇年代、共産主義と全体主義の狭間で揺れ続けた末、ナチス・ドイツに協力、大戦末期に自殺したフランス作家の生涯と作品を通して、自らもユダヤ人である著者が、現代に潜むファシズムの亡霊を浮き彫りにする、異色の作家論。

A5判三四七頁 四〇〇〇円

ポール・レオトリーの肖像

菅野賢治

ベル・エポックから戦後期のパリ文壇に生き、慧眼の劇評家として名を馳せる一方、日々の細密なメモを素材にした、長大な作品『文学日記』を残し、世を去った、二十世紀仏文学界の奇才のロマネスクな生涯が、生き生きと描き出される本格的評伝。

A5判三六〇頁 六〇〇〇円

ルネ・ヴィヴィアン伝

ジャンIIポール・グージョン 中島淑恵訳

ボードレールの衣鉢を継ぎ、サッフオーを現代に甦らせ、女男爵とただならぬ関係を経て、神経衰弱のうちに夭折した《神秘的な》詩人……数々の逸話とは裏腹に終生彼女を詩作に駆り立てたものは何だったのか? 女性による女性のための表現を求めた詩人を活写する!

2009 A5判五八四頁 八〇〇〇円

アルベール・ロンドル 闘うリポーターの肖像

真野倫平

二十世紀初頭、戦場、徒刑場、精神病院、植民地などあらゆる地に赴き、戦うヒーローとして、ルポルタージュを書き続けたアルベール・ロンドル。その記事によって社会制度を変えてしまうほどの影響力を持った稀代のジャーナリストの生涯を追う。

2013 四六判三八四頁 四〇〇〇円

また君に恋をした

アンドレ・ゴルツ 杉村裕史訳

サルトルに「ヨーロッパの最も鋭い知性」と評された八十三歳の老哲学者が不治の病に伏す妻に宛てて最後のラヴレターを書く。ともに人生を歩み、ともに暮を閉じる……

10.10 四六判三九頁 一五〇〇円

サン＝テグジュペリ

R・M・アルベレス 中村三郎訳

砂漠と鉱物的孤独にみちたこの惑星にあつて、『夢はひとつの奇蹟である』、あの『星の王子さま』の作者が夢想した数々の（生のウイジョン）を読みとぎながら、行動と瞑想によつて培われた生涯を克明にたどるサン＝テグジュペリの古典。

A5判二六頁 二五〇〇円

マダマ・ブワット／フランス 周縁からの文学 植民地・女性・移民

石川清子

フランス植民地時代から独立を経て、豊かな文学的土壌を築き上げてきたマダマ・ブワットの『植民地』、『女性』、『移民』をテーマに、周縁から中心へと波及するはかり知れない衝撃を観測する出色の文学論。

233 A5判四二四頁 六〇〇〇円

ルパンの世界

ジャック・ドウルワール 大友徳明訳

怪盗アルセーヌ・ルパンの人間関係や過去への偏愛、そして当時の衣裳風俗や社会階層、はたまた乗り物やアークセサリーや武器にいたるまで、多角的かつ詳細な視点からその実像に迫った、ルパン愛読者必携の書。

184 四六判三六七頁 三〇〇〇円

フランス・プロレタリア文学史 民衆表現の文学

ミシェル・ラゴン 高橋治男訳

〈無名の文学、ないがしろにされた文学、文学とはみなされなかつた文学、奇妙なことに資本主義体制からも社会主義体制からも等しく外部にとどまるようにと断罪された文学〉の歴史。中世から現代に至るフランスにおけるプロレタリア文学の唯一の通史。

110 A5判五五四頁十別丁図版二四頁 八〇〇〇円

コレットの地中海レシピ

シドニー・ガブリエル・コレット 村上葉編訳

踊り子しながら、シャルルなどと交流し、自立した女性の先駆けとして、時代の先端を歩み創作活動を行った女性作家による、素朴で豊かな、昔ながらのフランス料理の真髄に触れる、おいしいエッセイ。

1912 四六判一五四頁 二〇〇〇円

アナーキストの大泥棒 アレクサンドル・ジャコブの生涯

アラン・セルジャン 高橋治男訳

遠洋航路に出た幼年時代、そして非合法活動で捕まり南米ギアナの流刑地へおくれた青年時代、波瀾万丈の冒険と流刑地での地獄をくり返した稀代のアナーキストの驚くべき人生を辿った唯一のモノグラフ。

146 四六判三〇四頁十別丁図版八頁 三三〇〇円

わたしのパリ料理だより

村上葉

マダムたちが愛してやまない、ほんとうのフランス料理。いつの時代でも人を魅了する料理がある。翻訳家であり料理教室を主宰する著者による、文学作品を追逼しながらの、素朴でいて豊かな昔ながらのフランス料理をめぐるエッセイ。

2105 四六判一三九頁 一六〇〇円

シモーヌ・ヴェーユ研究★

村上吉男

不幸への並み外れた共感によって、労働の問題を文字通りの実践において問いつめ、三十四歳で逝ったシモーヌ・ヴェーユ。残された膨大なノート、論文、著作を渉猟しつつ、驚くべき生涯と思想の全体像に迫る大著。

A5判四八五五頁十別丁八頁 五五〇〇円

D・H・ロレンスとシモーヌ・ヴェーユ*

リチャード・リース 川成洋・並木慎一訳

性と生命力の深淵を宗教的情熱をもって探求し続けたロレンス、労働の問題の深淵へと降りたつたヴェーユ。二十世紀の煉獄を最も誠実に、勇敢に生きぬいたこの二人の文学者。思想家の作品を英国の俊敏な批評家が鋭く解明する。

A5判二四三頁 二五〇〇円

ブルームの歲月

ジョン・マツコート 宮田恭子訳

多民族・多言語都市トリエステ。「ユリシーズ」の主人公ブルームとモリーの人物を形成し、「ダブリン市民」「若い芸術家の肖像」を書きおえたジョイスはその地で「フィネガンズ・ウェイク」の言語をどのように創造したのか。彼の芸術と都市との関係を浮き彫りにする。176 A5判四六七頁十別丁八頁 七〇〇〇円

『ユリシーズ』と我ら 日常生活の芸術

デ克蘭・カイバード 坂内太訳

アイルランド文学研究の泰斗が二十世紀最大の作家ジョイスの代表作の全十八章を、「目覚める」「歩く」「食べる」といった人間の日常の、主として「身体的な行為」という素点から自在かつ独創的に読み解く。

1112 A5判三八四頁 五〇〇〇円

アイルランドの創出 現代国家の文学

デ克蘭・カイバード 坂内太訳

植民地化、ジャガイモ飢饉、アイルランド語の衰退、文芸復興、イースター蜂起、異境流浪……。ジェイムズ・ジョイス、サミュエル・ベケット、オスカール・ワイルドらの作品を読み解き、アイルランドの成り立ち、あり方、その未来を歴史、政治、社会など多角的に捉えた斬新な考察。189 A5判六九三頁 八〇〇〇円

ジェイムズ・ジョイスと東洋 『フィネガンズ・ウェイク』への道しるべ

山田久美子

多文化都市トリエステ、パリで見聞した東洋と日本文化、そして多言語はジョイスの作品にどのような影響をあたえたのか。イェンズ会の宣教、フェノロサの漢字論等様々なアプローチすることで、『フィネガンズ・ウェイク』にみられる日本や日本語との関わりを多面的に読み解く。

181 A5判三三八頁 四〇〇〇円

ジョイスをめぐる冒険

夏目博明

アリュージュを手がかりにテクストの成り立ちを探り、仕組まれたトリックをかいくぐり、『ユリシーズ』を読みとく。アイルランドの歴史、経済をも俯瞰しながら、さまざまな批評理論を駆使し、ジョイス研究の新たな方位をさぐる。

156 A5判三〇七頁 四〇〇〇円

四月はいちばん残酷な月 T・S・エリオット『荒地』

発表100周年記念論集 佐藤亨十平野順雄十松本真治編

現代詩の金字塔『荒地』誕生から一世紀。日本エリオット協会の気鋭の研究者たちが『荒地』について、日本での受容、ケイムズやブルームズベリー・グループとの関係など、多様な側面から考察する。

2212 A5判四五二頁 六〇〇〇円

一九二二年を読む モダンの現場に戻って

マイケル・ノース 中村亨訳

モダニズム文学の代表作『ユリシーズ』、『荒地』の誕生した一九二二年に焦点をあて、モダニズム文学が政治、社会、文化の事象といかに関わったかをウィトゲンシュタイン、フロイト、マリノフスキーそしてチャップリンらの著作をとおして包括的に読み解く。

2112 A5判四四八頁 六〇〇〇円

モダニストミナ・ロイの月世界案内 詩と芸術

フウの会編

エズラ・パウンド、T・S・エリオットらの賛辞を浴び、マルセル・デュシャンにも影響を与えた前衛詩人であり、女優、デザイナーでもあったミナ・ロイ。その詩と散文の翻訳に加えて、詳細な作家論、作品論、解説によって詩人の全貌に迫る本邦初の試み。 148 A5判三八七頁十別丁カラー図版八頁 四〇〇〇円

イーデイス・ウオートンを読む

大社淑子

一九二一年に女性初のピュリツァー賞を受賞し、コスモポリタンとして生きたイーデイス・ウオートン。いつの時代も変わらない社会と個人の葛藤、男女間の機微を多彩かつ冷徹に描いた代表作『エイジ・オブ・イノセンス』などを読み解きその魅力にせまる作家論／作品論。 187 四六判二七六頁 三〇〇〇円

ミューリエル・スパークを読む

大社淑子

いま、もっとも再評価が求められている英国の作家、ミューリエル・スパーク。有無を言わせぬ圧倒的な叙述によってエスカレートする、愛、諧謔、そして暴力。比類ない魅力をたたえたその文学を概観する、必携の作家論／作品論。 131 四六判三〇二頁 三三〇〇円

ドリス・レスリングを読む

大社淑子

アフリカに生まれ、SF・コミュニティムそして性愛にいたるまで、旺盛な想像力による多彩な創作活動で知られる二〇〇七年度ノーベル賞作家が半世紀以上わたって書きついだ作品のほぼ全てを詳細に読みとく。 112 四六判二二二頁 三〇〇〇円

カズオ・イシグロを読む

三村尚央

『遠い山なみの光』から『クララとお日さま』までの全長篇を読みこむ「作品編」。幽霊、動物、原爆、ケアなど、多彩なモチーフを糸口に創作のメカニズムを読みほどこく「モチーフ編」。ますます創造的で魅力的な読書体験への扉を開く、最良のイシグロ文学案内。 210 四六判並製二六九頁 二二〇〇円

カズオ・イシグロ失われたものへの再訪 記憶・トラ

ウマ・ノスタルジア

ヴオイチエフ・ドウロンク 三村尚央訳

イシグロ作品に通底する中心的概念である〈記憶〉と〈喪失〉の複雑な関係、フロイトをはじめとする精神分析理論、原爆の被爆者たちを対象としたトラウマ理論、ノスタルジアをめぐる文化理論などを援用しながら緻密に探る、はじめての批評的試み。 2010 四六判三五四頁 三五〇〇円

日常の相貌 イギリス小説を読む

中川僚子

『わたしを離さないで』『闇の奥』『フランケンシュタイン』『ダロウエイ夫人』『恋する女たち』等のイギリス小説にひそむ日常をおびやかす非日常との境界における生の陰影を、怪物の言葉、牧草地の廃墟、ドレスの綻び、漂着するゴミなどをとおして鋭く読みとく。 118 A5判二五七頁 三八〇〇円

『フランケンシュタイン』とヘルメス思想 自然魔術・

崇高・ゴシック

田中千恵子

錬金術・魔術、科学、自然の崇高、二重の生、ゴシックなどの主題をめぐり、ヘルメス思想を淵源とするさまざまな学や思想の観点から『フランケンシュタイン』を読み解き、ロマン主義的な科学と思想の未踏の領野を照らした了分野横断的研究。 1511 A5判三五六頁 四〇〇〇円

感受性とジェンダー（共感）の文化と近現代ヨ

ロッパ

小川公代・吉野由利編

今や「共感」は時代を理解するキーワードとなった。しかし、この感性は現代に始まったのではなく、十八世紀の「感受性」文化にその萌芽を宿していた。ロマン主義文学、道徳哲学、ジェンダーをめぐる言説を通して、「共感」の可能性から、その矛盾と限界までを探る！ 2013 四六判三〇八頁 三五〇〇円

ローリーの『シンシア』 悲しみを吸う蜜蜂

櫻井正一郎

十六世紀イギリスの高名な武人にして詩人のウォルター・ローリーが、エリザベス一世（Ⅱシンシア）の寵愛をうけ、突然それを失った苦悩を、ロンドン塔収監の失意のなかで、女王への賛美、諷刺、悲哀を織りませ昇華させた中篇詩の本邦初の全訳とその詳細な評釈。 2012 A5判三四〇頁 五〇〇〇円

シェイクスピアのファースト・フォリオ 偶像となった書物の誕生と遍歴

ピーター・W・M・ブレイド 五十嵐博久監訳

シェイクスピアの没後に刊行され、その作品群を継承する礎となった「ファースト・フォリオ」。今や天文学的な金額で取り引きされるこの聖像的な書物は、なぜ、またいかにして成立したのか？ 印刷、製本、流通、そして神話化の旅程を追走する。 2011 四六判二四四頁 二五〇〇円

英国ミステリーの部屋 ドイル／クリステイ室内装飾事典

昭和女子大学短期大学部文化創造学科

ミステリー界の二大巨匠、コナン・ドイルとアガサ・クリステイ。シャーロック・ホームズのパイプ、ポアロのタイプライター、謎のメモが燃やされる暖炉……。彼らの作品の中でインテリアはどのように描かれているのか。イギリス文化とミステリーを知るためのインテリア事典。 1013 四六判並製一七八頁 二〇〇〇円

戦争・詩的想像力・倫理 アイルランド内戦 核戦争、北

アイルランド紛争、イラク戦争 伊達直之／堀真理子／佐藤亨／外岡尚美

二十世紀後半以降の世界各地で勃発するテロ、民族紛争、内戦。この混沌の時代に文学、芸術はいかに対峙するのか。『オイデュープス王』、『勝負の終わり』、『しあわせな日々』、『アルカイダへの旅』などを、「癒し」〈倫理〉の視点を含めて、克明に解説し、考察する。 1613 A5判三九五頁 三五〇〇円

北アイルランドとミューラル

佐藤亨

北アイルランドという身体の全体に彫られた意味のわからない、痛々しい刺青のようなもの——街頭の激しく美しく圧倒的な壁絵（ミューラル）が映し出す血塗られた〈紛争〉の地の現在。 1113 A5判一三三頁＋別丁カラー図版八頁 二五〇〇円

北アイルランドのインターフェイス

佐藤亨

北アイルランドの首都ベルファストに散在する、プロテスタントとカトリックの対立／交流の場「インターフェイス」。その両義性から読み解く、北アイルランドの社会・歴史・文化、そして紛争の現在。 1411 A5判一四四頁＋別丁カラー図版八頁 二五〇〇円

北アイルランドを日撃する

佐藤亨

北アイルランドはどこへ向かうのか。一九九四年の停戦、九八年のベルファスト合意、そしてブレグジットの今日まで、北アイルランドの人々の平穏な暮らし、暮らしたなかの紛争をミューラル（壁絵）の変遷をとおして一九九三年から追いつけ、活写してきた著者の集大成。 2111 A5判オールカラー一八八頁 三〇〇〇円

アイランドの言葉と肉 スターンからベーコンへ

近藤耕人

《言葉》と《肉体》の相剋を鍵に、ジョイスやベケット、そして画家フランシス・ベーコンなど、アイランドに縁の深い作家たちの創造力の原点に肉迫する。今までにない斬新な切り口によってアイランド芸術論に新たな地平を開く迫真の評論。
177 四六判三七頁＋別丁カラー図版四頁 二八〇〇円

コンテンポラリー・ゴシック

キャサリン・スプーナー 風間賢二訳

現代社会においてゴシックは、いまや消費者が選択するライフスタイルの本質となっている。一九八〇年代から九〇年代にかけての従来のゴシック・カルチャーと二〇〇〇年代のゴス・サブカルチャーとの比較研究の成果をハイブリッドし、ゴシックに対する今後の視点と理論を提示する。
212 四六判二八〇頁 三〇〇〇円

オルタナティヴ・フィクション

風間賢二

マジックリアリズム、ミニマリズム、スリップストリームからアヴァン・ポップ、ポストコロニアル文学まで！ 六〇年代カウンター・カルチャーの洗礼を受けた英米小説の数々の《徒花》を概観する、ポストモダン小説入門／ブック・ガイド。
四六判並製三〇三頁 二五〇〇円

評伝 ウィリアム・フォークナー

ジョエル・ウィリアムソン 金澤哲・相田洋明・森有礼監訳

アメリカ南部史研究の泰斗が、『響きと怒り』、『八月の光』などで知られる二十世紀アメリカを代表するノーベル賞作家の生涯を究明に辿る。両親の家系をさかのぼり、黒人親族との秘められた関係をも明らかにし、その栄光と悲慘を描き出した決定的評伝。
222 A5判五四四頁＋別丁二六頁 八〇〇〇円

偽アメリカ文学の誕生

都甲幸治

《塵に訊け》とかつてジョン・ファンテは言った。「都甲幸治に訊け！」と私は言いたい。《偽アメリカ文学の誕生》を告げる本書は、すぐれた《偽アメリカ文学者》の登場を告げてもいる。《柴田元幸》二十一世紀もつとも話題のアメリカ文学者の注目の第一評論集。
四六判三五二頁 二八〇〇円

シルヴィア・プラス父の娘、母の娘

木村慧子

ジュリア・クリステヴァ、メラニー・クライン等の精神分析理論を参照しながら、三十歳で自殺した、この女性詩人の残したテクストを縦横に分析し、文学理論の新たな地平を切り開く野心作。
A5判三二六頁 四〇〇〇円

アイリッシュ・アメリカンの文化を読む

結城英雄 十夏目康子編 執筆Ⅱ吉川信・戸田勉・伊達雅彦他

十七世紀にはじまるアイランドからの移民が「想像上の共同体」アメリカでいかなる役割をはたしたのか。ケネディ家の光と闇 アン・サリヴァンの生涯、オスカー・ワイルドの講演、そして『風と共に去りぬ』、『ダイ・ハード』などの文学・映画作品をとりあげ、多彩な視点から考察する。
168 A5判三三六頁 三〇〇〇円

アジア系アメリカ作家たち

杉浦悦子

《どの領域にもどのアイデンティティにもとどまることなく流動に身を任せ、幾重にも層を成す未知の自己を探り出し、創造してゆく》ジークリッド・ヌネ、シンシア・カドハタ、カレン・テイ・ヤマシタ、ジュンパ・ラヒリの作品に「国境」「母語」そして「文学」の意味を問う。
A5判二三八頁 二八〇〇円

アメリカに響く。パレスチナの声 サイド、ダル

ウィーシユから、ネオミ・シーハブ・ナイへ 小泉純一

アメリカに生きるパレスチナ系の詩人ナイ、ダルウィーシユ、そしてエドワード・サイドがみた(9・11)。混乱の中東/アメリカ、そこに生きる民衆とりわけ子供たちの日々、死、そして希望に耳をすます。(故郷を失った痛みに対して文学は何ができるか)。

1110 A5判二五七頁 三八〇〇円

フリーモ・レーヴィ 失われた声の残響

ガブリエッラ・ポーリナ・ジョルジヨ・カルカーニヨ 二宮大輔訳

新聞や雑誌、ラジオやテレビで録音、録画されたテープ、または講演、討論のリポート……。レーヴィがさまざまな場で語った膨大な記録を巧みに組み立てなおし、いまだ謎につつまれる作家の人物像と、創作の秘密をあらわにする迫真の書。

185 四六判五一〇頁 四五〇〇円

ファシズム、そして

和田忠彦

究極のモダニズムとしてのファシズム。国家と歴史の境界を越え、先駆者/篡奪者/傍観者/抵抗者として生きた表現者たちの実験と実践を手がかりに、二十世紀イタリアの《夢》と《現実》に肉迫する。

A5判二七四頁 三〇〇〇円

カフカの夢分析

フェリックス・ガタリ 杉村昌昭訳

現代哲学の最大の異端児が遺したカフカ論。そして構想していたカフカについての映画のシナリオ断片を集成する。六十五の夢に導かれて、新たなカフカが立ち現れる。

四六判一六八頁 一八〇〇円

カフカのプラハ【改訳決定版】

クラウス・ヴァーゲンバッハ 須藤正美訳

カフカが書き残したエピソードと随所に織り込まれた写真を眺めながら、カフカお気に入りのカフェ、映画館、散歩道を訪ねるうち、きつとプラハに行ってみたくなる！ 図版百点収録、フアン必携のカフカ・ハンドブック。

229 (03.6) A5変判三三頁 二五〇〇円

カフカと〈民族〉音楽

池田あいの

チェコに生まれたユダヤ系ドイツ人のカフカにとって、〈民族〉とは何を意味していたのか。激動の十九世紀末プラハを舞台に、友人プロットや作曲家ヤナーチェクとの関係を検証しつつ、〈小説〉と翻訳、そして〈音楽〉のアイデンティティを問うカフカ研究の新しい展開。

181 A5判二二五頁 三五〇〇円

カフカの動物物語〈檻〉に囚われた生

山尾涼

様々な抑圧に曝され苦しむカフカの動物たちは、何を訴えているのだろうか？ 存在の危機に瀕する彼(女)ら/動物たちは、隠蔽された問題を我々/人間に暴露し始める……時代の〈破れ目〉を穿つカフカの文学に、〈人間〉を再考するための契機を見出す。

153 A5判二五三頁 四〇〇〇円

オーストリア文学小百科

鈴木隆雄 編集主幹

中世からハプスブルク帝国時代、そして現代に至る豊饒なオーストリア文学の世界を網羅する本邦初の事典。作家、作品、文学活動、思潮、様式はもちろん、文学活動の場となった都市、地域、演劇、映画、音楽、美術等、一千項目以上を収録。

A5判函入総七〇八頁 一〇〇〇〇円

オーストリア文学とハプスブルク神話

クラウディオ・マグリス 鈴木隆雄・藤井忠・村山雅人訳

夢・幻想・詩観の交錯する詩的空間で人生の奥義を探究するオーストリア文学の起源から今日までを克明に辿りつつ、その現実逃避と、文学の人工楽園のトポスを呪縛し続けた《ハプスブルク帝国》の神話とを明るみに出し、滅びの苦痛と困難を告げる。

A5判五〇四頁 六〇〇〇円

オーストリア中世歌謡の伝統と革新

松村国隆

中世オーストリア《恋愛歌謡》の伝統と権威に抗し、《格言歌》の世界を切り開いた、遍歴の歌人ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデの生涯と歌謡を中心に、十二―十三世紀オーストリアの歌謡の世界を跡づける画期的研究。

A5判二九九頁 四五〇〇円

アーダルベルト・シュティフター研究

谷口泰

十九世紀オーストリア文学を代表するこの小説家の静謐な文学空間に秘められた政治性と現代性を丹念に読み解き、憩いと調和を愛する小市民的な作家という日本における通俗的なイメージを一新する著者畢生の大著。

A5判クロス装貼函入四八五頁 八〇〇〇円

すべて過ぎ去りしひと……

マネス・シユペルバー 鈴木隆雄・藤井忠訳

今世紀初頭、東欧のユダヤ人町のラビの家に生まれ、ウィーンでマルクス主義者、心理学者、小説家となった著者は、スターリン主義と第二次大戦を生きぬいた！ 喪失、抵抗、放浪の記憶のなかに「人間の条件」を問う自叙伝。

A5判八二二頁 八〇〇〇円

フルバンあるいは絶滅の記憶

マネス・シユペルバー 鈴木隆雄訳

現代史の狂気を生き抜いたユダヤ人の小説家／心理学者が、忘却から浮かび上る《絶滅》の記憶に戦慄しつつ反ユダヤ感情の起源を追及し、宗教にも民族にも帰属せぬ「ユダヤ的な存在」の新たな像を探索する現代ユダヤ論集。

四六判三〇〇頁 二八〇〇円

ヴォリナ

マネス・シユペルバー 鈴木隆雄訳

ユダヤ人絶滅計画の猛威の前に、人々が自らに課した重いくびきと、残された者に刻まれた罪の刻印。ポーランド東部、ガリチアの地、厳格なユダヤの伝統が支配する架空の小村の悲劇を描く傑作中篇。《ヒトラー》という名の災禍も、我らを罰する鞭なのだ。》

四六判二六頁 二五〇〇円

歴史の横領

サロンと文学カフェから眺めた両大戦間期およびナチス体制下のウィーン M・ドゥブロヴィツチ 鈴木隆雄訳

憎悪の感情に引き裂かれた戦時下にあつて、信条の違いを越え、自由な精神が躍動し、数多の運命が交錯する舞台だった《カフェ》に集う、有名無名の作家、知識人、政治家、市井の人々。ウィーン新聞界の重鎮が回想する《現代史》のなかの日常。

四六判三八二頁 四〇〇〇円

サンティアゴへの回り道

セース・ノーテボーム 吉用宣二訳

キリスト教の聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラを目指す「私」は、スペインの歴史・風土・宗教・物語の坩堝、茫漠たる時空間の襲へと絡めとられていく……。現代オランダ文学の最高峰による、思索的／幻想的旅行記。

961 四六判三七四頁 四〇〇〇円

中世ヨーロッパの歌

ピーター・ドロング 高田康成訳

祈り、諷刺、ユーモア、恋する心…… 吟遊詩人が歌い紡ぎ、写本に綴られ今なお残る数多の中世歌謡を、汎ヨーロッパ的な伝統のうちにとらえ、多様性を秘めた（ひとつの統一）として読み解く中世ラテン文学の碩学による大著。
A5判六二頁 七〇〇〇円

デーモンと迷宮 ダイアグラム・デフォルム・ミメーシス

ミハイル・ヤンポリスキー 乗松亨平・平松潤奈訳

身体はデフォルムされる、「デーモン」あるいは「迷宮」という分身によって、リルケ、ユゴー、ソクーロフからロイ・フラー……現代ロシアの気鋭の批評家が幅広い芸術作品と五〇〇冊に及ぶ引用文献によって誘う、身体論の臨界。
A5判四七三頁+別丁図版一六頁 四八〇〇円

隠喩・神話・事実性

ミハイル・ヤンポリスキー 日本講演集 平松潤奈他訳

記号論から出発し、ソヴァエト文化批判、身体論をへて、〈政治的なるもの〉の考察へと向かった、現代ロシアの知のカオスの体現者の、昨夏の来日時の三篇の講演と長篇インタビューによって、その思想の核心に迫る。
A5判一九五頁 二〇〇〇円

ガリツィアの森 ロシア・東欧比較文化論集

伊東一郎

森のように広大で多彩な住人に満ちたロシア・東欧文化を文学、民衆文化、音楽をみつめながら追遡する。東欧各国、ドイツ、日本、様々な民族と言語の交流が拓く文化の地平を追い求める、東欧比較文化論の試み。
1911 A5判三九四頁+カラー別丁図版四頁 五〇〇〇円

リアリズムの条件 ロシア近代文学の成立と植民地

表象 乗松亨平

《書物に耽溺した者に亡霊がとりつく。現実という名の亡霊が。――構造主義以降の批評は、不可避の帰結として、「現実」に復讐される》。ロシア文学の植民地表象を分析しつつポストコロニアル批評の彼方をめざす。第一回表象文化論学会賞奨励賞、二〇一一年度日本ロシア文学会賞受賞。8020 A5判三三八頁 四〇〇〇円

ドストエフスキーと小説の問い

番場俊

ドストエフスキーは、「小説」という形式をいかなるかたちで探求しつづけたのか。フロイト、バフチンを武器に、手紙/告白/メディア/時間を巡って、ドストエフスキー研究の新たな次元を切り開く。第四回表象文化論学会賞奨励賞、二〇一三年度日本ロシア文学会賞受賞。1212 A5判三六三頁 五〇〇〇円

『罪と罰』をどう読むか（ドストエフスキー読書会）

川崎浹十 小野民樹十 中村邦生

黄昏のベテルブルグを彷徨するラスコーリニコフは誰を殺したのか？ 日本・海外の様々な文学作品や思想に言及しつづ、「罪と罰」の基本的な読み方を網羅した、初読者・再読者のための『罪と罰』入門書。『罪と罰』邦訳の歴史の深さがわかる「邦訳一覽」をあわせて収録。8020 四六判二五二頁 二五〇〇円

ドストエフスキーとの対話

井桁貞義十 伊東一郎編

急激な西欧化の矛盾に直面した十九世紀ロシアでドストエフスキーはどのように書いたのか。同じく近代化を遂げた明治・大正期の日本ではどのように読まれ、そして現代に至るまで読みつがれているのか。十三名の執筆者が多彩な角度から論じる。
2111 A5判四〇八頁 六〇〇〇円

ブーニンの「眼」 イメージの文学

宮川絹代

ロシア初のノーベル文学賞詩人にして小説家、イワン・ブーニンの恋愛小説集『暗い並木道』『日射病』『ミリーチャの恋』『最も美しい太陽』などをもち、ヘイメージ＝具体的表象の視点から、その不可視な本質に迫る。二〇一四年度日本ロシア文学会賞受賞。
13.10 A5判四三二頁 六〇〇〇円

自叙の迷宮 近代ロシア文化における自伝的言説

中村唯史・大平陽一編 三浦清美 奈倉有里・武田昭文・梅津紀雄著

十九世紀末のロシアで、「銀の時代」の始まりとともに、創作の手法としての自叙や、作家の伝記への関心が高まりを見せるようになる。現在と過去の錯綜の中に生起し、虚実入り混じる〈自叙〉の実相を、革命前後の時代を中心とする近代ロシア文化の焔めきの中に追う。
18.3 A5判二八八頁 四〇〇〇円

ペテルブルク神話と文学のコロムナ

近藤昌夫

サンクトペテルブルクの中でも庶民的な風景が広がる下町へコロムナ地区。プーシキン、ゴッゴリ、ドストエフスキの作品におけるこの地区の表象を読み解きながら、幻覚、奇譚、恐怖に彩られた幻想的な〈ペテルブルク神話〉の源流を民衆文化に探り当てる、十九世紀ロシア文学論。
23.6 A5判三四五頁 五〇〇〇円

都市と芸術の「ロシア」

近藤昌夫十鴻野わか菜十嵐田浩吉十杉谷倫枝十太平陽一十村田真一十竹内正美

ロシアの都市と芸術のなかに絶えず出現し、越境し、霧散してゆく〈ロシア的なもの〉。その姿なき姿を世紀末から革命の時代の文学、映画、演劇、電子音楽の中に探る、七人の若手ロシア文学者による論文集。
A5判二六頁 二五〇〇円

ロシアの物語空間

近藤昌夫十角伸明十樫本真奈美十高田映介十新井美智代

人工的な都市と豊かな自然のコントラスト、隠された宗教的シンボル、帰るべき場所を失いさまよう人々……近現代ロシアの作家十四人の長・短篇小説の核心部に隠された「ロシア的な」場所・空間の表象を解明する、ロシア文学入門の書。
17.4 A5判並製三七頁 三五〇〇円

十八世紀ロシア文学の諸相 ロシアと西欧伝統と革新

金沢美知子編 執筆＝長縄光男・矢沢英一・三浦清美・乗松亨平他

西欧化政策を推進したピョートル一世と啓蒙主義を標榜したエカテリーナ二世の二つの治世に挟まれた、壮大な謎・未知の領域である〈十八世紀ロシア〉を、プーシキンから始まる「ロシア文学」という偏頗な文学史観に疑問を呈しつつ、さまざまな角度から考察する。
16.3 A5判四〇二頁 五五〇〇円

スラヴァンスキイ・バザアル ロシアの文学・演劇・歴史

史 井桁貞義十伊東一郎十長與進編

一九四八年前後生まれ、同期のロシア／スラヴ研究者が数十年の時を経て一堂に会し、ロシア文学、記号学から、日露交流史、ロシア革命、古儀式派、チェコ軍団、現代ロシア演劇までを縦横無尽に論じる。それぞれの研究人生の軌跡を振り返る特別エッセイを付す。
21.1 A5判三四八頁 六〇〇〇円

聖ペテルブルク

大石雅彦

ソ連邦の解体とともに西欧的なものとロシア的なもののせめぎ合いの場となったサンクト・ペテルブルク。そこに内在する膨大な文学的／芸術的記憶を記号論以降の現代的理論装置によって解きほぐす。
四六判三〇四頁 三五〇〇円

プーシキン伝

アンリ・トロワイヤ 篠塚比名子訳

十九世紀前半、皇帝ニコライ一世の絶対的な権力支配のもと、高らかに《愛》と《自由》を謳いあげ、いまなお民衆から最も強く愛されている《ロシアの至宝》。一発の銃弾で幕をとじた、三十七年の短くも劇的なその生涯を描き尽くす決定版評伝。
A5判七二頁 七〇〇〇円

プーシキンの決闘

原求作

詩人とその美しき若妻とフランス人将校との間に生まれる奇妙な三角関係。そこに舞い込んだ一通の不隠な手紙……。いまだ謎に包まれた十九世紀ロシアの天才詩人の死の逸話を豊かな人物造形により蘇らせる異色の評伝II小説。
A5判二六九頁 二五〇〇円

トゥルゲーネフ伝

アンリ・トロワイヤ 市川裕見子訳

十九世紀ロシアの貴族社会に生まれ、フランスをも愛した男の情熱的な生涯。ドフトエフスキー、トルストイと並ぶもう一人のロシアの文豪の実像を追う。
104 A5判二六〇頁 三八〇〇円

セルギイ・ラドネシスキイ年代記

原求作

タタール支配下の中世ロシアの分裂と混沌を克明に描き、そこで人々の導き手となった隠者セルギイの生涯を描く書下し長篇歴史小説。主人公を時代に翻弄される個人として生き生きと甦らせる。《彼は祖国を救う運命にある》。
A5判六〇一頁 五〇〇〇円

トルストイ★

鹿島由紀子

ロシア文学史上最大の作家トルストイの諸作品を総巡りながら、《怒り苦悩する》《トルストイではなく、《日常の多色の》トルストイに照明をあて、その多面性、今日性を鮮やかに描くユニークなトルストイ論集。
A5判二七九頁 二八〇〇円

ロシア文学の庭

鹿島由紀子

ゴーゴリ、ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフらの作品を中心に、ロシア文学のアイデンティティを探索しつつ、世紀末知識人の《憂鬱》(タスカール)のうちに、ロシアの心性の一典型を確認するにいたるロシア文学論集。
四六判三二五頁 三五〇〇円

ロシアの十大作家

松下裕

プーシキン、ゴーゴリからドストエフスキー、チェーホフまで、日本の文学のみならず、日本人の心情と生活にまで深い影響を与え続けたロシア文学——その激情とユーモア、自由と反逆の精神を物語り豊かに語りかける、ユニークなロシア文学入門。
四六判二三八頁 二五〇〇円

世界の瞬間 チェーホフの詩学と進化論

高田映介

問題を評定ないし解決せず、《観察者》に徹することを旨としたチェーホフの詩学に、偶発的《進化》のみが紡ぐ、非目的論的な世界観を示して世界に衝撃を与えたターウインの進化論を並列させ、その新たな側面を照射する。
203 四六判三三八頁 三三〇〇円

チエーホフとサハリン島 反骨ロシア文人の系譜

糸川紘一

円熟期を迎えたチエーホフは、なぜ突如として危険な流刑地サハリン島への渡航を企てたのか。ドストエフスキーをはじめとするロシア（流刑文学）の系譜にチエーホフを位置づけ、しばしば（無思想的）とも解されるその作品が秘める思想性を闡明する。

18.5 四六判三四三頁 四〇〇〇円

美学の破壊★

渡辺雅司

十九世紀ロシアの《ニヒリスト》批評家ビーサレフ。そのニヒリズム思想の形成のプロセスを一念に跡づけ、十九世紀ロシア思想史が抱えていた問題の解明へと向かう本邦唯一のモノグラフィ―。略年譜、書誌を付す。

四六判九五頁 二〇〇〇円

日常と祝祭 ソヴイェト時代のある編集者の回想

アレクサンドル・プジコフ 木村妙子訳

知られざるソヴイェト文化・出版状況の現場からの記録。権力の介入、奔走する編集者、個人的な作家たちのエピソード。祝祭の気分にあちた文学大全集の企画のかけには日常的編集作業。そこにはいつも、文学があった。

四六判四二〇頁 四〇〇〇円

メイド・イン・ソビエト ニ〇世紀ロシアの生活図鑑

マリーナ・コレヴァ他 神長英輔 十大野斉子訳

レトロフューチャーなデザインの電化製品、不便な生活の中で生まれた独特な日用品……ソビエト連邦の生活雑貨、人気商品、党の行事にまつわるエピソードの数々を紹介し、今やロシア人にとっても懐かしい世界の日常風景を、豊富な図版とともに追想する。

18.3 四六判並製二五二頁 二五〇〇円

ぼくの旅のすがた★

米谷耕太郎

かつての全共闘世代、今はフリーのロシア語通訳の著者がみた素顔の、等身大のソ連と東欧。暖い眼差しと苦いユーモアのうちに捉えられたペレストロイカの光と影。ソ連・東欧をさすらい歩く新しい世代の新しい旅のかたち。

四六判一四七頁 一五〇〇円

東欧文学の多言語的トポス

井上暁子編 執筆 三谷研爾・阿部賢一・藤田恭子・越野剛他

多様な言語と文化の交錯、衝突が微細な〈中心〉と〈辺境〉の記述を生起し、常にアイデンティティを揺るがせる場所 Ⅱ〈東欧〉。地域文学史の記述、および文学作品中の周縁地域・言語の描写の分析を通じて、流転する〈東欧〉の言語文化が秘めるダイナミズムに肉薄する。

28.3 四六判二五四頁 三〇〇〇円

ブルーノ・シュルツ 目から手へ

加藤有子

イメージ／言語という二つのジャンルをこえた表象へと向かうシュルツの独自の世界観をトータルに捉え、ナチスに射殺されたこのポーランドの小説家／画家の全貌に迫る。第四回表象文化論学会賞受賞。

12.3 A5判三六八頁 四八〇〇円

スペインとスペイン人〈スペイン神話〉の解体

ファン・ゴイテイソロ 本田誠二訳

一枚岩の〈スペイン性〉なるドグマがつくられたスペインの〈黄金世紀〉、共存するイスラム教、ユダヤ教は迫害され、歴史的真相は抑圧されることとなる……「永遠の少数派」を選んできた亡命作家による比類なきスペイン文明論。

15.12 四六判二四八頁 三〇〇〇円

ポストフランコのスペイン文化

杉浦勉編 執筆Ⅱ 浜田滋郎・木下亮・M・キンダー他

独裁者フランコの死後、アントニオ・パンテラス、ペドロ・アルモドバル、パコ・デ・ルシア等を筆頭に、世界的アーティストを輩出し続ける民主スペインの文化の現在を紹介する、本邦初の現代スペイン・カルチャー・ガイド。

A5判並製二六九頁 四〇〇〇円

セルバンテスへ向けて

アメリカ・カストロ 本田誠二訳

小説そのものの創始者Ⅱ革新者は突然、出現したわけではない。『わがシッドの歌』から『ドン・キホーテ』に至るスペイン文学の歩みを現代スペインの碩学が独自の歴史Ⅱ文学観から綿密に洗い直す。

A5判八三四頁 一〇〇〇〇円

スペインの歴史的現実

アメリカ・カストロ 本田誠二訳

十三世紀初頭における三つの血統（キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ人）の間の共存と緊張関係こそスペイン民族のアイデンティティの起源なのだと看破し、秘められたスペイン史の深淵に分け入る文芸批評家Ⅱ歴史学者カストロ畢生の大著。

A5判六二八頁＋別丁八頁 八〇〇〇円

セルバンテスの芸術

本田誠二

小説そのものの起源にして、その最高の到達点ともいうべき『ドン・キホーテ』を生んだセルバンテスの創作理念を、長篇、短篇、戯曲、叙事詩等を含めた全作品から解き明かす。『ドン・キホーテ』出版四〇〇年を記念する大著。

A5判四二四頁 五〇〇〇円

歴史のなかのスペイン

アメリカ・カストロ 本田誠二訳

ユダヤ人
遠大な計画の夢想、信仰、名譽の追求に情熱を燃やすスペインの心性はいかにして醸成されたのか。騎士道物語、中世イスラム抒情詩、ユダヤ文学の比較分析という文学・言語学的方法によって（スペイン人）の歴史的生の深層に切り込む記念碑的書物。

A5判六五六頁＋別丁四版八頁 八〇〇〇円

セルバンテスの批評

本田誠二編

時代背景から宗教性まで、作家と作品の本質に切り込む諸論考により、批評と批判によって自らの文学観を構築した（自己洞察の天才）としてのセルバンテスの相貌を炙り出す。執筆Ⅱ本田誠二、アンソニー・クローリス、アメリカ・カストロ他

A5判四七八頁 六〇〇〇円

スペイン人とは誰か その起源と実像

アメリカ・カストロ 本田誠二訳

（レコンキスタ）以前、（スペイン）は存在しなかった——。スペインを代表する歴史学者／文芸批評家が人文諸科学の広範な文献を渉猟し、スペインとスペイン人の起源を根底からくつがえす。（スペイン）のアイデンティティの捉え直しを迫る論争の書。

A5判五四四頁 八〇〇〇円

《ドン・キホーテ》見参！ 狂気を失った者たちへ

桑原聡

《高貴なる人生》を歩むには？ 世界文学史に屹立するセルバンテスの大長篇のエッセンスを抽出し、その筋を忠実に紹介しながら、登場人物たちの、魂を震撼させる数々の名言を拾い上げ、さまざまな角度から『ドン・キホーテ』を再読し、現代人にとってのヒントを探る。

167 四六判三〇六頁 二五〇〇円

『ドン・キホーテ』に潜む狂気 正気を失ってしまっ

たのは誰か

田林洋一

登場人物全員狂人説! 脇役に至るまで誰一人正気でない登場人物たちの行動の分析、セルバンテス自身の狂的生涯の解説、さらには『贋作ドン・キホーテ』や様々な世界文学との比較を通じて、作品の内外にひしめく狂気を総覧する、狂的『ドン・キホーテ』体験への導きの書。 220 四六判三三六頁 四〇〇〇円

ドン・キホーテとライクシヨンのアウトサイダー

たち 社会から隔絶した孤高の騎士

田林洋一

スペイン黄金世紀の古典文学『ドン・キホーテ』を、秩序を離れ周縁を歩むキャラクターたちが描かれる『ライ麦畑でつかまえて』『異邦人』『審判』といった現代文学や日本の漫画・アニメと比較し、英雄を目指した孤独な狂人を主人公とする『アウトサイダー』の物語として読み直す。 220 四六判三五九頁 四〇〇〇円

シングルという生き方

カルメン・アルボルク 細田晴子訳

ひとりであるからひとりぼっちなわけじゃない。スペインのカリスマ女性国会議員が、フェミニズムの歴史を繙き、古今東西の独身者の文化を俯瞰し、シングル女性の性を語りながら、新しい女性の生き方を提案する。ヨーロッパのベスト・セラー。 四六判二六六頁 一九〇〇円

アルジェリアの闘うフェミニスト

ハリーダ・メサウーデイ 中島和子訳

「胸を張って立ち続けていること、それが大切なのです」——イスラーム原理主義者に命を狙われながらも、真の自由のために、女性の権利のために立ち上がり、のちにアルジェリアの文化大臣(二〇〇二—二〇一四)を務めることになった、凛々しい女性の証言。 157 四六判二七七頁 三〇〇〇円

カビリアの女たち

フアドマ・アムルシュ 中島和子訳

フランス統治下の北アフリカはアルジェリア、イスラムの閉鎖的な男性社会に私生児として生を享けた過酷な宿命に抗して、「愛すること」を支えに逞しく人生を切り開いた、一人のベルベル人女性が紡ぐ回想記。

A5判三三六頁 三五〇〇円

彼女たちのターニング・ポイント

笠原路子

スカイダイバー、織物作家、アシカ調教師、通訳、書店主、印章彫刻家……各界で奮闘する四七人の働く女性たちへの直撃インタビュー集! 仕事、結婚、離婚、育児……と、考え迷い決断するそれぞれの人生が鮮やかに浮び上る。

四六判並製二二頁 一八〇〇円

孤独の肖像

中村茂樹

どこにも居場所がないと感じている一〇代〜二〇代の若者たちは、孤独と向き合いながら何を考えているのか? いじめ、登校拒否、ひきこもり、家出……うまくは生きられないが、一所懸命に自分を探している若者たちを描き出すノンフィクション。

四六判並製三〇頁 一六〇〇円

さよならは何度でもガンと向き合った医師の遺言

ダヴィッド・セルヴァン＝シュレベール 二瓶恵訳

ガンが発見されて以来、自ら考案した「ガン克服」法を実践し、人生を賭けてガンと闘ったフランス人医師が遺した最後の言葉。家族や友人たち、すべての愛しいひとたちに(さよなら)を告げる希望に溢れたメッセージ。

1310 四六判並製一九〇頁 一五〇〇円

死と生についての五つの瞑想

フランソワ・チエン 内山憲一訳

老子やリルケに立脚しながら「死」が存在論的転回の契機となることを説きつつ、空虚と充溢、精神と身体、美と悪といった主題をめぐって展開する五つの「瞑想」。終わりなき生成へと誘う珠玉のエッセー。

189 四六判一八七頁 二〇〇〇円

魂についてある女性への七通の手紙

フランソワ・チエン 内山憲一訳

ある女性から届いた一通の手紙をきっかけに、「精神」とは異なる位相にある〈魂〉の煌めきを、デカルト、パスカル、ヴェイユら西洋の知性と、「気」〈道〉〈空〉などの東洋の思想とを手がかりに追跡する、美しい七通の手紙。

1812 四六判一八八頁 二〇〇〇円

美についての五つの瞑想

フランソワ・チエン 内山憲一訳

「美は世界を救うだろう」——世界の野蛮さを前に、なおもドストエフスキーのこの言葉を口にすることは可能だろうか？ プラトン、カント、メルローポンティをはじめとする西洋思想と、「氣風」〈氣韻〉〈神韻〉を芸術創造の鍵とする中国思想を手がかりに、美の倫理的なあり方を問う。

208 四六判一六八頁 二〇〇〇円

サブ・カルチャー

マンガを「見る」という体験 フレーム、キャラクタ

ター、モダン・アート

鈴木雅雄編

執筆||伊藤剛+野田謙介+齊藤哲也+加治屋健司+中田健太郎 マンガ批評・文学研究、美術史を専門とする気鋭の論者たちが、マンガをめぐる時間・運動・言説の問題を自在に語り、新たな理論的枠組から視覚体験としての「マンガ」を問いなおす。
147 A5判並製二六八頁 二八〇〇円

マンガ視覚文化論 見る、聞く、語る

鈴木雅雄+中田健太郎編

執筆||夏目房之介+三輪健太郎+岩下朋世+細馬宏通+泉信行+佐々木果+森田直子+宮本大人+伊藤剛+石岡良治 〈マンガ的体験〉を「見る」「聞く」「語る」という知覚体験から捉えなおし、コマ/フレーム/フキダシの理論を構築する画期的なマンガ論集。
173 A5判並製四三四頁 三〇〇〇円

マンガメディア文化論 フレームを越えて生きる方法

鈴木雅雄+中田健太郎編

執筆||増田展大+三輪健太郎+鷲谷花+宮本大人+細馬宏通+成相肇+林道郎+伊藤亜紗+ドミニク・チェン+藤本由香里+西兼志+伊藤剛 デジタルマンガの隆盛をうけて、マンガというメディアの境界線はいかに拡大されたのか? シリーズ三部作の完結編!
225 A5判並製四七六頁 四二〇〇円

マンガ探求13講

小山昌宏+玉川博章+小池隆太編

マンガ読解の基礎と応用を例示する第1部 マンガ産業の流通から今後の課題を探る第2部、グローバル世界のなかのマンガを論じた第3部を通して、マンガ研究をアップデートする。好評の前著『マンガ研究13講』を補充する、マンガ研究の最前線。
221 四六判並製四〇九頁 三〇〇〇円

マンガ研究13講

小山昌宏+玉川博章+小池隆太編

「マンガ」を論じる上で必要な基礎知識をテーマ別に紹介し、多角的な視点を提示する格好の入門書。「物語」「キャラクタ」など表現的な論点から、「観光」「ジェンダー」、そしてマンガ産業をとりまく環境までカバーする、最もアクチュアルかつ包括的な講義テキスト。
168 四六判並製四一六頁 三〇〇〇円

日仏アニメーションの文化論

大手前大学比較文化研究叢書13

石毛弓・大島浩英・小林宣之編

アニメーションに携わる日仏の研究者・クリエイターたちが、研究と現場双方の視点から、地域性・社会性・歴史性が反映されたプロダクション・システムを微細に紐解き、そのアイデンティティを問い直す。
171 四六判二六八頁+別丁カラー図版一六頁 二八〇〇円

なぜ学校でマンガを教えるのか? 大手前大学比較文化

石毛弓・小林宣之編

研究叢書15
今、どのようにして大学でマンガを教える/身に付けることが可能になったのか? 単に描き方を学ぶことに留まらない教育のあり方とは? 日本以外ではどのような教育が行われているのか? これからのマンガと教育を考えるための必読書!
191 A5判二三四頁+別丁カラー図版八頁 二八〇〇円

コロナ禍における体験型イベント

大手前大学比較文化研

叢書17

石毛弓編

二〇二〇年から続くコロナ禍によって、演劇やライブ、美術館、展示即売会、スポーツ観戦といった「体験型イベント」は、どのような被害を被り、耐え忍び、また変わりつつあるのか。その現状をつぶさに追う経過報告集。

212頁 A5判二八頁 二八〇〇円

運動としての大衆文化

大塚英志編

ポピュラーカルチャーは、カウンターカルチャーの後継でありながら、戦時下のプロパガンダとも密に結びついている。各種メディアが総動員に向けて活用されてゆく戦前・戦中から、創作と受容が市場に囲われてゆく現代まで、大衆文化の政治的社会的水脈を掘り起こす。

210頁 A5判四八〇頁 六五〇〇円

ターミナル・エヴァ 新世紀アニメの世紀末

永瀬唯編

執筆||永瀬・大月隆寛・斎藤環・坂本啓介・榎木野衣・西村謙一・村崎百郎・谷内田浩正『新世紀エヴァンゲリオン』をめぐる書下し評論集。ユニークで豪華な執筆陣が多様な視点から読み解く『エヴァ』の世界の全貌!

A5判並製一七二頁 二〇〇〇円

ザ・デイ・アフター・エヴァ 対論(新世紀アニメ)ふ

たたび

永瀬唯編

対話者||大原まり子、水民潤子、松代守弘、斎藤環、小谷真理、唐沢俊一『エヴァ』映画版再公開(九八年三月)を機に、編者がホストとなって「エヴァ騒動」を総括するとともに、その作品としての意味を問う画期的対話集。

A5判並製一五九頁 二〇〇〇円

欲望の未来 機械じかけの夢の文化史

永瀬唯

クロインやサイborgの系譜から、心霊写真、絶叫マシンの技術史、さらには久生十蘭『魔都』や『風の谷のナウシカ』まで、様々な分野の技術、思想、作品に表れた、人々の『未来』への夢想/妄想。理と文、学とオタクを越境する、ユニークな評論集。

四六判二六八頁 二五〇〇円

ボディ・エキゾチカ

秋田昌美

対抗文化、性文化の分野で旺盛に活動する著者が、奇形的身体の魅惑と謎に挑む。人工的身体変形術、見世物文化におけるフリックス趣味、江戸の博物学的性器論などを通して、規範を逸脱した身体をめぐる欲望と視線のありかを探る。

四六判二三四頁 一三〇〇円

スカム・カルチャー

秋田昌美

強度の個人的妄想については異端的芸術へと昇華する。オカルト猟奇殺人の系譜学、サタニック・ハヴィメタル、素朴アートのエクストリーム・テキスト、インダストリアル・ノイズ等、現代社会の裏面に隠棲する異形の文化を顕揚する。

A5判二〇九頁 一三〇〇円

裸体の帝国 ノード・ワールド01

秋田昌美

ヘア・ノード・ブームよ去れ! 今世紀、全世界を席卷したエクストリーム・ボディ・ムーブメント《ノードイズム》の歴史と思想を徹底的に解明するノード論シリーズ第一弾、欧州編。美麗にして珍奇、異端、カルト的な図版多数。

A5判二八頁 一六五〇円

ストレンジ・ヌード・カルトヌード・ワールド02

秋田昌美

ビバ男尊女卑! のCAD(スケコマシ)文化から、スペース・エイジ・パチエラー・セックス、ビートルズとセックス文化、狂気のグラフィズム軍団「HARAKIRI」の全貌まで、六〇〜七〇年代に発生した不思議の裸体文化を集成する!

A5判一八五頁 二五〇〇円

フリンジ・カルチャー

宇田川岳夫

ふくしま政美、宮谷一彦等の「肉弾劇画」J・A・シーザー、三上寛のフリンジ・ミュージック、そして八切止夫を筆頭とするコア・オカルトの知られざる展開……。九〇年代オタク文化に牙を剥く裏オタク文化の全貌!

A5判二二七頁 二〇〇〇円

マンガ地獄変

植地毅・宇田川岳夫・吉田豪他

《スーパー劇画王》梶原一騎のダークサイドから、伝説のトラウマ・カルト、ふくしま政美「聖マッスル」まで、七〇年代「埋没マンガ」発見の旅。大槻ケンヂ、浅草キッド等その筋の方々、大絶賛!《オタクは買わない! オトコは買え!》

A5判並製二八八頁 一八〇〇円

男魂(だんこん)マンガ高校(マンガ地獄変2)

植地毅・宇田川岳夫・吉田豪他

好評『マンガ地獄変』続編!『ハリスの旋風』『タヤけ番長』『男一匹ガキ大将』『愛と誠』『激! 極虎一家』男の汗と涙と意地がスパークするタイマン・バトル・コミックスが理屈など無視して今、蘇る! B面特集はグルメ漫画だ!

A5判並製三三三頁 一五〇〇円

トラウマ・ヒーロー総進撃!(マンガ地獄変3)

植地毅・大久保太郎・大西祥平他

《社会のウラはマンガで学んだ!》恐怖のマンガ大王 日野日出志から、反核トラウマ爆弾『はだしのゲン』、そして神様・手塚治虫の暗黒面まで、何も知らない子供の心にショックと残酷を植え付けまくったトラウマ漫画、総まくり!

A5判並製二四七頁 一五〇〇円

巨人マンガの系譜

蕪木和夫

『スポーツマン金太郎』から『ちかいの魔球』『黒い秘密兵器』『巨人の星』『侍ジャイアンツ』まで、長島 王、金田などキラ星のごときスターが在籍し、野球少年の憧れだった頃の名作巨人野球マンガの魅力を徹底解説!

四六判並製一九六頁 一五〇〇円

犯罪地獄変

犯罪地獄変編集部編

「津山三十人殺し」から「酒鬼薔薇聖斗」まで、新聞、週刊誌、TV等の各種メディアにおける犯罪の扱いを検証し、情報化社会における犯罪Ⅱ「エンターテインメント」化現象を追及する、本音で論じる全く新しい形の犯罪説(毒)本。

A5判並製〇四頁 一四〇〇円

爆走! アクション・ムービー・ジャンキーズ

植地毅編

今、アクション映画が途方もなく熱い。ブルース・ウィリスからセガル、スタローン、シユワちゃん、ジャッキー・チェン、リー・リンチェイまで、巨額予算をつぎこんだ大作アクション映画の魅力と魔力を完全解説。

四六判並製三四四頁 一五〇〇円

激辛！ アジアン・ムービー・ジャンキーズ

植地毅・木内玄・ギンティイ小林編

ジャッキー・チェン、サモ・ハン、リー・リンチェイから、「Mr・BOO」、アンソニー・ウォンまで、デスクウィットシュ・スタントとワイヤー・アクションで八〇年代ガキんちよバトル・スピリッツを燃え上がらせたアジア映画の完全観戦ガイド。
四六判並製二二六頁 一五〇〇円

超B級フーズク大全集

いその・えいたろう

TV番組「11PM」出演で知られる風俗ライターの草分け的存在が、三十年にわたるフーズク取材を集大成。インタビュ、エッセイ、ドキュメント等、様々な角度から、知られざる「B級フーズク」のウラ・オモテを全公開。
A5判並製二二九頁 二〇〇〇円

にっぽんフーズク改造論

田守公一

停滞するフーズク業界にあつて、斬新なアイデアで一大旋風を巻き起こした名古屋の革命児が、欲望産業の現在と未来を論じ尽くす。他では書けない内幕を白日に晒しながら、開かれたフーズクへの展望を語る赤裸々告白。
四六判一九八頁 一五〇〇円

フォーニヨン

トミ・アングラー作品集 日本語版監修 伴田良輔

『すてきな三にんぐみ』『こうもりのルーフアス』等、斬新な物語と独特なユーモアで知られる絵本作家の幻のエロティック画集。植草甚一や筒井康隆も絶賛したポップでシニカルな機械仕掛けのエロティシズムが横溢する迷宮的作品集。
四六判三三三頁 一八〇〇円

パロディ漫画大全

長谷邦夫

六〇年代〜七〇年代の戦後漫画の黄金時代にあつて、同時代の漫画、さまざまな文学・芸術作品、さらには政治・経済・文化のあらゆる領域からの果敢な引用、《盗用》によって、類例のないパロディ漫画を描き続けた著者の全パロディ作品の記念碑的集大成。
A5判九六頁 四〇〇〇円

パロディ漫画大全(特装版)

長谷邦夫

あのトキワ荘グループの末席(?)にすらなり、「フジオ・プロ」の知恵袋にして牽引車であった著者の肉筆画一葉を挿入した豪華特装版。残部僅少。
内容見本呈 限定六五部／著者サイン限定番号入／著者肉筆彩色漫画一葉入
造本 戸田ツトム／A5判クロス装クロス函入九二六頁 三〇〇〇〇円

天然【完全版】

根本敬

特殊漫画家大統領、根本敬の幻の名作復活！あの村田藤吉の極貧少年時代を描いた名作「生きる」と双璧をなす初期の大長編野球劇画「天然」甲編・乙編に大幅に加筆した、待望の完全版！全ての根本マニア垂涎の一冊！
A5判並製四〇六頁 一八〇〇円

時代の体温―陰核・混沌の隣人たち

根本敬作画 湯浅学作音

九九年初頭、世田谷美術館「時代の体温」展に出品された根本敬のインスタレーションと、そこで制作された三冊の画集。そして、会場に流れていた湯浅学の音響処理による「因果者」たちが放出した音霊。それらをCDブックに合体！
A5判三三三頁 二八〇〇円

音山「おんざん」

湯浅学

音楽評論家にして「幻の名盤解放同盟」の湯浅学による、圧倒的音盤ガイド。ロックをはじめ歌謡曲・演歌からヒップ・ホップ、韓国のボンチャックからアメリカ南部のザデイコまでを縦横無尽に語り尽くす音楽評論集。

四六判並製二三三頁 一八〇〇円

パリの空の下、人は流れる

船橋英雄・根本敬・湯浅学

幻の名盤解放同盟の船橋英雄によるマヌケでロンリーなパリ島旅行案内。根本敬の漫画「無能の人」、同盟員三人による旅についての鼎談「世界は駅前シリーズだ」、幻の名盤「旅モノ」デイスコグラフィーなど、盛りだくさん。

四六判並製二三三頁 一八〇〇円

幻の名盤百科全書

幻の名盤解放同盟（根本敬・湯浅学・船橋英雄）

幻の名盤解放同盟の仕事の集大成。『ディーブ歌謡』『夜、因果者の夜』に新たに一〇〇枚以上の書き下ろしを加えた決定版。「真理とは、断じて個的であらねばならぬこと」。

四六判五七〇頁 三〇〇〇円

オン・ザ・ロード、アゲイン

久信田浩之 写真Ⅱ芝田満之・堀清英

一九六〇年代のサイケデリック・バス・ミュージックから、レイブ・カルチャー、リサイクル・ムーブメントなどまで、脈動する米国オルタナティブ・シーンを体感し、現在に息づくビートニクのスピリッツに迫る、渾身のドキュメント。

A5判三〇八頁 二八〇〇円

バナナの皮はなぜすべるのか？

黒木夏美

人類の誕生以来、最もポピュラーなギャグⅡ《バナナの皮すべり》は、いつ、どこで、誰によって、どうやって生みだされたのか？ さまざまなメディアに描かれたバナナの皮を踏んで検証する。

104 A5判並製二四七頁 二〇〇〇円

うまい野菜料理人が教える本当においしい野菜の作り方と食べ方

我田大

究極のうまい野菜を求めて、見よう見まねで始めた、板前さんのゼロからの野菜作り！ 新潟県の南魚沼産、化学肥料ナシ、栄養たっぷりの本当においしい野菜をまるごと味わう本！ 南伸坊氏推薦！ 四〇種類の野菜の栽培法と旬のレシピつき。

141 A5判並製オールカラー九五頁 二〇〇〇円

詩歌

詩歌

ビリテイスの歌

ピエール・ルイス 沓掛良彦訳

古代ギリシア、性愛の悦楽渦巻くレスボス、キュプロスの島々を漂泊した伝説の女流詩人ビリテイスが愛欲と逸楽に充ちた生涯を自ら歌う濃艶な巻物……
《エロスの祭司》による官能詩集の白眉。付録Ⅱ「ビリテイスの秘められた歌」
(本邦初訳)。
A5判並製函入三八八頁 六〇〇〇円

私は知っている

イト・ナガ 中山慎太郎訳

私は知っている——でも、一体なにを？ 日常にひそむ思いがけない「驚き」と謎に満ちた世界への「愛」に満ちた眼差しを四六九の短詩で描き出す、類例のないポエジ！。
162 A5変判一四一頁 二五〇〇円

マチネ・ポエティク詩集

福永武彦・加藤周一・原條あき

子・中西哲吉・窪田啓作・白井健三郎・枝野和夫・中村真一郎
一九四二年に結成されたマチネ・ポエティク同人による、日本語定型押韻詩の試み。一九四八年に刊行された初版を底本に、若き詩人たちによる、日本語の「詩の革命」を再考する。解説Ⅱ安藤元雄・大岡信
145 A5判二四四頁 四〇〇〇円

夏の遺言

山崎剛太郎詩集

堀辰雄と立原道造に師事し、戦中から戦後にかけて、中村真一郎、福永武彦らによる「マチネ・ポエティク」の詩的実験に立ち会った著者が、筐底深く秘めてきた夢想と苦悩の恋愛詩篇が半世紀を経て甦る。
四六判二八頁 三〇〇〇円

ピエリアの薔薇

沓掛良彦訳詩集

前七世紀から紀元十世紀に及ぶギリシア詩の一大集成として夙に名高い『ギリシア詞華集』より、サッフォーからビザンチン時代に至る六〇詩人の二一〇詩篇を訳出した本邦最新、最大の古代ギリシア詩集。栗Ⅱ入沢康夫・井上輝夫
A5判クロス装クロス函入三二七頁 五〇〇〇円

ペトラルカ恋愛詩選

岩崎宗治編訳

イタリア・ルネサンスを代表する詩集『カンツォニエーレ』から四十九篇を選び、流麗な日本語に甦らせた稀有なアンソロジー。詩人の生涯と作品、そして後代への影響を探る編訳者による論考を付す。
2012 A5変判クロス装一三三頁 三〇〇〇円

夜のガスパール

アロイジウス・ベルトラン散文詩集 及川茂訳

散文詩というジャンルそのものを創始しながら、ボードレールやマラルメにそしてブルトンに、再発見され、大きな影響を与えるまで、不当に忘れられていたフランス小ロマン派詩人の残した唯一の散文詩集。
A5判クロス装函入二二三頁 四〇〇〇円

薔薇の枢・異国拾遺

山崎剛太郎詩集

九十五歳の研ぎ澄まされた眼が見据える過去と現在、生と死、そして愛あるいは永遠……。〈マチネ・ポエティク〉最後の詩人が静かにすぎゆく日常の時間を鋭く甘美にうたう瞳目の最新詩集。

137 B 5 変判五三頁 二五〇〇円

安藤元雄詩集集成

解説Ⅱ野村喜和夫

「詩そのものの存在証明」——詩を読むという経験の本源の困難さと悦びとをともにもたらす現代詩の最良の成果。孤峰の詩人が半世紀にわたって書きついで全詩業を一冊に収録。

191 A 5 判函入五八二頁 八〇〇〇円

果実の重み

佐岐えりぬ詩集 ベルナル・シトロエン仏訳

《四季》派の流れを汲む『山の樹』の同人として出発した、憂愁にみちた特異な抒情詩人の、日仏二カ国語による典雅な詩集。ここに封印された生きることの困難、恐れ、そしてその悦びは、読む者を打たずにはいないだろう。

A 5 判並製二九頁 三五〇〇円

果実の重み(特装版)

佐岐えりぬ詩集 ベルナル・シトロエン仏訳

本書の仏訳者であり、著者の友人でもあるフランスの彫刻家Ⅱ詩人ベルナル・シトロエンのオリジナル・シルクスクリーン一葉を挿入した特装版。残部僅少。

限定五〇部/著者、仏訳者サイン・限定番号入
A 5 判麻クロス装麻クロス函入二九頁 二〇〇〇〇円

よろこべ午後も脳だ

野村喜和夫詩集

脳のなかの奇妙な生き物とかくされたわたしたちがざわめきはじめる、昼と夜の響宴。前から縦組みの「AM」が、後ろから横組みの「PM」が始まり、午前不久後がまんなかで出会う。現代詩を牽引する詩人が、数字と言葉で戯れる、実験詩集成。

164 A 5 変判二〇六頁 三五〇〇円

惑星のハウスダスト

福田拓也詩集

第三二回現代詩手帖賞を受賞した詩人であり、文芸批評家でもある著者による第七詩集。増殖する言語の連鎖に襲われ、匿名の空間へと誘われる自動記述的な散文詩集。第五六回歴程賞受賞。

182 A 5 変判七九頁 二五〇〇円

私は母を産まなかった／ALLENとMAKOTO

と肛門へ

ヤリタミサコ詩集

子どもの頃の家族・人間関係のなかでの反発と否定、そしてギンズバーグ、白石かずこ、塩見允枝子らと反響しあう現在を、日常の言葉で強靱に、ときに郷愁をもって表出する注目の新鋭の第一詩集。写真Ⅱ萩原義弘

1211 A 4 変判五七頁 二〇〇〇円

散文

桑原喜一詩集

「愛猫」「キラキラネーム」「少年時代の追憶」から「三・一一」「原発」「三本の矢」に至るまで、見せかけの時代の中にあつて、迫りくる危機のなかの「日常」を、鋭敏で透徹した、ときにユーモラスな眼差しによって描き上げる三十六の詩篇。

1511 A 5 判並製二〇五頁 二五〇〇〇円

わたしの庭はわたしに似ている

川田靖子詩集

《わたしの庭には何でもある／急斜面も断崖も／古い井戸までかくし持つ／「……」／奥底の暗い鏡にうつるのは／あなた顔とはかきらない／現し世の現実ではなく／ときとして幻がうつる》。小熊秀雄賞詩人の最新詩集。《庭が私に似るのでなく、私が庭に似てきたのである》。A5判八七頁 二五〇〇円

夏の物語と歌

宮田直哉詩集

《山麓の木々にはまだ花が残っていた。私たちはそれらを背に座り、遠く落ち日が消えゆくのを眺めやった。互いの生の重みと温かさを確かめ合うように》。……四季折々の情景の中に静けさと祈りとを歌う、若き詩人の第一詩集。20・4 四六変判一〇五頁 二五〇〇円

レトロの街 童話詩集

須田慎吾

モザイク広場に集う子どもたち、卵の中で空の飛び方を考えている鳥族、夢を運ぶ南十字のシリウス、マカロン六番街を転がるまるめる、玩具祭とオモチャ・オブ・ジ・イヤールの受賞式……口笛吹きの歌声からこたえます《レトロの街》の物語。21・9 四六判函入二〇〇頁 三三〇〇円

青葙

春日井建歌集

三島由紀夫や中井英夫の推輓によって彗星の如く登場し、十代にして、塚本邦雄・岡井隆・寺山修司とともに《前衛短歌の四天王》の一人に数えられた著者が二十数年間の沈黙を破る衝撃的な最新歌集。A5判クロス装クロス函入二五〇頁 四〇〇〇円

松扇（ひおうぎ）

鹿島由紀子歌集

《通過する列車は何にせかざるいきなり秋とわれを残せり》。トルストイを中心とする近代ロシア文学の研究者として知られる著者の第二歌集。日常の風景が、そして相聞の場面が透徹した視線と思索のうちに鮮やかによみがえる。A5判二七頁 三〇〇〇円

扇面流図（せんめんながしず）

鹿島由紀子歌集

《五十路来ていつしか木には春が来て椿の花は血いろに咲けり》。《ひとひらのさくらを追える幼な児の小さき肩にさくらまた散る》。中年にまで至った人生のさまざまな情景を、四季折々の日常を彩り豊かに詠み込んだ著者の第三歌集。A5判一四九頁 三〇〇〇円

青春譜

武隈信夫歌集

下町生まれ、船橋市在住の歌人による処女歌集。昔懐かしい何気ない日常の光景と、歌人の青春の情景が鮮明に甦る一七〇首。

夢中夢（むちゅうむ）

馬場駿吉句集

《手に掲げて紫陽花はわが鬱の脳》。高名な医師にして美術批評家、そして俳壇から完全に離れた地点で書き続ける孤高の俳人の一九七六年以降の近作を収録する奔放にしてパロディ的、官能的な最新句集。造本Ⅱ加納光於。栗Ⅱ武満徹・吉増剛造。A5判クロス装貼函入一六五頁 三〇〇〇円

鼓直句集

「無私の人が（……）みごとに存在感ある日本語を成立させつつ、私かに淡い俳句を書き残していた」（高橋睦郎）。ボルヘス、ガルシア＝マルケスをはじめ、ラテンアメリカ文学の翻訳で知られる著者の遺句集。

22.12 四六判 三二頁 二五〇〇円

玫瑰（はまなす）

鹿島由紀子句集

『トルストイ』『ロシア文学の庭』で知られるロシア文学者のはじめての句集！老境にあつてなおみずみずしい生への渴望、そして深く静かな観想、自然のなかでの動植物との交感……

20.5 四六判 三二頁 二〇〇〇円

中村真一郎コレクション

〈第一次戦後派〉の代表的作家のひとりとして、二十世紀後半の日本の文学に決定的な転回をもたらした著者の、長篇、短篇、評伝、批評、エッセイ、さらには定型押韻詩にいたる多彩な作品を集成する。

A5判上製

中村真一郎 青春日記

池内輝雄・傳馬義澄編

のちの〈戦後派〉の巨人の旧制高校時代の膨大な日記の完全翻刻版。莫大な量の読書ノートにして、福永武彦・川俣晃目らとの交遊録でもある中村真一郎研究の第一級資料。翻刻Ⅱ荒川澄子＋安西晋二十石井佑佳＋岡崎直也＋河合恒＋北原泰邦 125 四〇二頁 五〇〇〇円

城北綺譚

解説Ⅱ菅野昭正

〈つつましい情熱の純愛物語と直截な文明批評との結合。愛の小説は、こうしてすこし位相をずらすと文明批評の小説になる。〉(菅野昭正)時代と家に翻弄されて人生を狂わせた老人の封印された忘れ得ぬ恋。新発見の遺稿の初の単行本化。 一六六頁 一八〇〇円

日本古典にみる性と愛

解説Ⅱ沓掛良彦

《中村真一郎氏が小説の実作者としての独自の視点からその深く愛する日本古典を樂しげに語る時、その筆先から生まれる古典評論は、独自の強い輝きを放っている。》(沓掛良彦) 記紀の世界から江戸の歌舞伎まで、日本の性愛史が鮮やかに浮かび上がる愛の古典文学論。 二二三頁 二五〇〇円

全ての人は過ぎて行く

解説Ⅱ飯島耕一

《わたしは三十歳をこえてまもない新進作家の中村真一郎講師に出会い、デュアマテルやジロドゥーの小説をめぐる講義を聴いた。大きなブライアーのパイプをつねに手にした、長身の、スマートな先生だった。》(飯島耕一) 最晩年の自伝「私の履歴書」と表題の連作エッセイを収める。 三〇二頁 三〇〇〇円

中村真二郎手帖

編集 中村真一郎の会

第二次大戦後の日本文学に西欧的な方法意識を導入せんとした《第一次戦後派》を代表する作家の多面的な文業を徹底的に考察する。《中村真一郎の会》の編集によって、年一回、四月に刊行する。

A5判並製

中村真二郎手帖 4

執筆 清水徹（故会長加藤周一さんを偲ぶ）、中村真二郎（一九三五年のノート）、堀川貴司（評伝という文学）、早川間多（『木村兼葭堂のサロン』をめぐって）、鈴木貞美（『魂の夜の中を』をめぐって）、W・J・タイラー、竹村民郎、エセイ 安井侑子、金岡秀実 連載 木島佐一 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 1

特集 中村真二郎の小説 執筆 加藤周一（巻頭言）、鈴木貞美（『死の影の下に』をめぐって）、清水徹（『四季』のほうへ）、杳掛良彦（中村真一郎と王朝文学）、エセイ 池内輝雄、三輪秀彦、高遠弘美 インタビュー 山崎剛太郎（聞き手 木村妙子） 他 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 5

執筆 中村真一郎（一九三五年のノート（続））、入沢康夫（『四季』四部作についての雑感一束）、小林宣之（『夏』の女主人公A嬢をめぐる補遺1）、鈴木貞美（『長い夜の終り』をめぐって）、エセイ 加太肇江、塩川治子、小島千加子、柏原成光 連載 高遠弘美、木島佐一 一〇四 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 2

執筆 池澤夏樹（『雲のゆき来』の私的な読み）、鈴木貞美（『シオンの娘等』論）、諏訪正（中村真一郎のラジオドラマ）、望月洋子（江戸後期文人の世界）、佐岐えりぬ（中村真一郎の日記について） エセイ 井波律子、小佐井伸二 連載 高遠弘美、木島佐一 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 6

執筆 中村真一郎（一九三六年のノート）、井上隆史（中村真一郎と三島由紀夫）、鈴木貞美（『仮面と欲望』について）、菅野昭正（『時間の迷路』をめぐって）、入沢康夫、諏訪正、小林宣之 エセイ 平山真理子、岸川典生、前野裕 連載 木島佐一 一〇四 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 3

執筆 加藤周一（中村真一郎と小田実）、小畑精和（『幻の映画』パリよ、さらば）と中村真一郎）、朝比奈美知子（近代との対峙を生きたる文学者）、小林宣之（中村真二郎に魅せるネルヴァル）、鈴木貞美（『愛神と死神と』をめぐって）、池内輝雄 エセイ 中村香織、前島良雄 連載 高遠弘美、木島佐一 九六頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 7

執筆 丸谷才一（中村真一郎の功績）、川崎渕（フランスの車旅）、富士川義之（中村真一郎とヘンリー・ジェイムズ） 『中村真一郎 青春日記』をめぐって 鈴木貞美、安西晋一、岡崎直也、石井佑佳 エセイ 山崎剛太郎、十河清 他 連載 小林宣之、木島佐一 一二四 一四三頁 一〇〇〇円

中村真一郎手帖 8

執筆||中村真一郎(初期短篇集)安西晋二編、清水徹、依岡隆児+竹内洋+鈴木貞美+石川肇(討議「中村真一郎 青春日記」と旧制高校)、井上隆史、近藤圭一、高井泉、中村香織、エセイ||下重暁子、鳥山玲、松本茂、小山正見、深澤茂樹、連載||小林宣之、木島佐一
134 一七六頁 一五〇〇円

中村真一郎手帖 9

執筆||加賀乙彦(中村真一郎さんの思い出)、池澤夏樹(「夏」を読む)、井上隆史(昭和三十七年の全体小説論)、三枝大修(「翻訳家・中村真一郎」)、貴船哲治、中村香織、深澤茂樹、矢代朝子、松本茂、連載||小林宣之、木島佐一
145 二八頁 一〇〇〇円

中村真一郎手帖 10

特集||〈マチネポエティク〉と中村真一郎(清水徹、安藤元雄、菅野昭正、池内輝雄)、執筆||影山恒男(中村真一郎と堀辰雄)、鳥山玲(「ミメーシスと継承」)、中村香織(父、真一郎の思い出)、連載||小林宣之、木島佐一
145 八八頁 一〇〇〇円

中村真一郎手帖 11

特集||堀辰雄、立原道造、そして中村真一郎(渡部麻実、岡村民夫、竹内清巳)執筆||田口亜紀(他者の視点の獲得)、國中治(木洩れ日のなかの写真と鹿)、山村光久(美しい本を求めて)、井上隆史、高遠弘美、連載||小林宣之
164 九六頁 一〇〇〇円

中村真一郎手帖 12

執筆||菅野昭正(文学を享受することを教授することについて)、井村君江(「死」をめぐって)、池内紀(記憶のなかの中村真一郎)、越智淳子(中村真一郎と大岡信)、大高順雄、前島良雄、金子英滋、大月雄二郎、深澤茂樹、連載||小林宣之
174 八八頁+別丁図版八頁 一〇〇〇円

中村真一郎手帖 13

執筆||荒川洋治(中村真一郎の風景)、尾崎真理子(中村真一郎さんから渡されたもの)、宮坂覺、朝比奈美知子、山本裕次、深澤茂樹、中村稔、平野新介、松岡みどり、鈴木康友、後藤俊行、連載||小林宣之
184 八八頁 一〇〇〇円

中村真一郎手帖 14

特集||生誕百年中村真一郎と福永武彦(戸塚学、西岡亜紀、山田兼士)執筆||岩野卓司(神々の黄昏)、朝比奈美知子(ロマン主義的魂で読む「とりかへばや物語」)、田口亜紀、吉澤公寿、菅野昭正、林浩平
194 一〇四頁 一〇〇〇円

中村真一郎手帖 15

執筆||中村真一郎(初期短編集II)安西晋二編、堀江敏幸(ゆき来する人)、富士川義之(中村真一郎と富士川英郎)、富士川英郎×中村真一郎(対話 西洋詩と江戸漢詩を繋ぐもの)、揖斐高、國中治、前島良雄、三島利徳
204 八八頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 16

特集Ⅱ中村真一郎と三島由紀夫（ドミニク・パルメ、井上隆史、鈴木貞美）
特集Ⅲ中村真一郎、この一冊（池内輝雄、近藤圭一、松岡みどり、朝比奈美知子、田口亜紀、渡邊啓史、小林宣之、木村妙子、大藤敏行） 執筆Ⅲ三枝大修、山崎吉朗、山村光久、松岡みどり、小山正見 21.6 一六〇頁 一五〇〇円

中村真二郎手帖 17

特集Ⅱ中村真一郎、この一冊（山田兼士、沓掛良彦、林浩平、富士川義之、岩津航、越智淳子） 執筆Ⅲ三枝大修（中村真一郎における『一体』）、渡邊啓史（『夢のなかへの旅』の展開）、國中治（中村真一郎が見た三好達治（Ⅱ）） 22.5 九二頁 一〇〇〇円

中村真二郎手帖 18

執筆Ⅱ安藤元雄（堀辰雄の遺産）、吉川一義（中村真一郎とブルースト）、三枝大修（中村真一郎のフランス文学翻訳）、助川幸逸郎、広瀬一隆、國中治、野川忍、本田由美子、鈴木貞美、大藤敏行、岩野卓司 23.4 一〇二頁 一〇〇〇円

小島信夫長篇集成

編集 千石英世・中村邦生 / 編集協力・解題 柿谷浩一

夫と妻、父と子、男と女、性と愛、生と死——人間をめぐるあらゆる関係性を、小説の可能性への問いとともに、生涯問い続けた小島信夫。入手困難であった作品をふくむ全一五長篇を集成する。《短篇集成》《批評集成》につぐ本集成によって、その驚くべき作品世界は、今ようやく全貌を見せることになるだろう。内容見本呈 A5判上製

④ 別れる理由Ⅰ

解説 千石英世

連載期間十二年半、全四〇〇枚。夫婦・親子・男女の愛の錯綜と混沌を凄絶なまでに描き尽くし、旧来の小説の方法を悉く破砕する伝説的問題作、著者随一の超大作にして日本文学史に異彩を放ち続ける現代小説の極大『別れる理由』。その覚醒を告げる第一巻。
151 六七八頁 九〇〇〇円

① 島／裁判／夜と昼の鎖

解説 春日武彦

人間存在にとつて〈状況〉とはいかなるものなのか？ 架空の島／ケンリ島を舞台に繰り広げられる奇妙な抗争を描きSFを彷彿とさせる長篇第一作に、寓話的筆致によつて社会と個人の関係に鋭く迫る、初期の野心作・異色作を収録。
151 六三七頁 八〇〇〇円

⑤ 別れる理由Ⅱ

解説 佐々木敦

異色のミュージカルの展開のもと、狂気の主人公・前田永造を衝えこむ奇々怪々な夏の夜の夢。喧々譁々の大激論、不義密通と乱交パーティー、いつ果てるとも知れぬセックス、そして女／虫／馬への変身……。いよいよ暴走をはじめると説世界。
158 六八一頁 九〇〇〇円

② 墓碑銘／女流／大学生諸君！

解説 石原千秋

極限状況における混血の兵士の揺れるアイデンティティを追い、人種と階級、生と性を問う『墓碑銘』、年上の女の憧れを瑞々しく描く自伝的な青春小説『女流』、そして幻の娯楽小説『大学生諸君！』——著者の成長と挑戦を標す作品群。
1512 八〇六頁 一〇〇〇〇円

⑥ 別れる理由Ⅲ

解説 千野帽子

虚構世界としての底が割れ、『別れる理由』は未聞の新局面へと突入する。作者、そして実在の人物たちが登場し、現実世界へと彷徨い出た前田永造と対話をおわす。虚実の境を踏み越え、ついには我々の生きる現実をも小説化してしまつた怪物的巨篇、完結。
159 六四三頁 九〇〇〇円

③ 抱擁家族／美濃

解説 小池昌代

新居の建設、妻の情事と死、後妻との結婚——執拗なまでに家庭を維持しようとして自己喪失の危機に陥る男の悲喜劇を綴る代表作『抱擁家族』、故郷にまつわる歴史や風土を織りこみながら未聞の小説世界を拓く『美濃』を収録。
161 五〇一頁 七〇〇〇円

⑦ 菅野満子の手紙

解説 近藤耕人

兄の身に起こつた恋愛事件をモデルにした自作『女流』をめぐる手紙や対話、さらには実在の人物までも交錯させながら、作品世界は時間と空間のはざまを揺動し、異様な自己増殖を繰り返す。小説の限界に挑む小島文学の新たな展開。
164 五四六頁 八〇〇〇円

8 寓話

解説Ⅱ保坂和志

ある日、かつて書いた長篇『墓碑銘』の主人公から作者のもとへ電話がかかってくる。創作であったはずの人物から届いた手紙に記された暗号を解説し続ける作者……。〈書くこと／書かれること〉を根本から問い直す。

166 五六四頁 八〇〇〇円

9 静温な日々／うるわしき日々

解説Ⅱ中村邦生

アルコール中毒に苦しむ中年の息子、健忘症を発症した再婚の妻。記憶を失いゆく彼らを前に、老作家は何を思い、何を願うのか。混沌を極める現代社会における家族と老いの問題を軽やかに描き、生の淵源を照らし出す。

167 四五三頁 六〇〇〇円

10 各務原・名古屋・国立／残光

解説Ⅱ平井杏子

「アイコさん、ノブさんが来たんだよ。コジマ・ノブさんですよ。作家とその家族が生きている現実、過去の小説、不確かな記憶、そして忘却……すべてを取りこみながら創作を続けた著者が最晩年に見出した、究極の愛のかたち。

168 四九三頁 六〇〇〇円

全巻完結 全一〇冊セット定価八〇、〇〇〇円

小島信夫短篇集成

編集 千石英世・中村邦生 / 編集協力・解題 柿谷浩一

生と死の不可思議を鋭く穿つ初期の代表作から、小説とは何かを問いかけて止まない晩年の実験的な作品群、さらには長らく入手困難であった作品や単行本未収録作品を多数含む、小島信夫が生涯を賭して書き継いだ全一八七短篇のすべてを網羅する。

内容見本呈 A5判上製

④ 夫のいない部屋／弱い結婚

解説 平田俊子

夫婦の性をさまざまな角度から考究する短篇群の他、長篇『抱擁家族』のための準備期間に書き継がれた多彩な作品群。男子中学生の同性愛のゆくえをたどる自伝的な異色作『ガリレオの胸像』、『抱擁家族』の前日譚とも言うべき『四十年代』など全二〇篇を収録（一九五九―一六六）。

151 五六〇頁 八〇〇〇円

① 小銃／馬

解説 千石英世

〈小説家 小島信夫〉の誕生と成長の軌跡――みずみずしい最初期の作品群、『小銃』『吃音学院』『微笑』などの代表作、著者随一の怪作『馬』などに加え、単行本未収録作『太陽が輝く』『男と女と神様の話』をふくむ二七篇を収める（一九二七―一五四）。

142 六〇五頁 八〇〇〇円

⑤ 眼／階段のあがりはな

解説 いとせいつこう

饒舌な語り手の独り語り、書簡体小説 エッセイ的、自伝的な要素を多分にふくむ小説など、著者の模索と挑戦が標された作品群。妻の入院・手術を滑稽かつ哀切に綴る『眼』、郷里への回想のうちにそこに息づく人々の本質を突く『郷里の言葉』など全二二篇（一九六二―一七〇）。

153 四〇頁 六〇〇〇円

② アメリカン・スクール／無限後退

解説 芳川泰久

終戦後の日米関係を鋭く諷刺する芥川賞受賞作『アメリカン・スクール』以後の小島文学の変遷を追う。最晩年まで脳裏を離れなかつた信仰の問題を先取りする『神』、冥界を思わせる空間を舞台に練り広げられる追走劇『鬼』など、全二六篇を収録（一九五四―一五六）。

142 六〇四頁 八〇〇〇円

⑥ ハッピーネス／女たち

解説 中村邦生

巨篇『別れる理由』への迂遠な助走となった連作『町』の作品群、そして、『菅野満子の手紙』『寓話』など破格の長篇のかたわら執筆され、小説とエッセイ、記憶と忘却を縦横無尽に横断／往還する、メタフィクショナルな短篇世界の全貌。全二三篇収録（一九七一―一八二）。

153 四六七頁 七〇〇〇円

③ 愛の完結／異郷の道化師

解説 堀江敏幸

アメリカ滞在、夫婦のセックスをめぐる考察を経て、新たな段階へと突入する小島信夫の小説世界。生／性と死が交錯する謎めいた名篇『愛の完結』、『姦通』というモチーフに男と女それぞれの視点から迫る『黒い炎』『神のあやまち』など全二〇篇を収録（一九五六―一五九）。

142 五九七頁 八〇〇〇円

⑦ 月光／平安

解説 保坂和志

愛妻との生活、別荘での日々、友人たちとの対話、芸術への思索、人智を超えたものへの関心、過去と現在、忘却と啓示――あらゆる記憶／思惟／時間が小説の（いま・ここ）へと流れこみ、混濁と錯綜のうちに新たな小説世界が拓かれてゆく……。全二三篇を収録（一九八二―一八九）。

154 五六一頁 七〇〇〇円

⑧ 暮坂／こよなく愛した

解説Ⅱ 千野帽子

家族とは、信仰とは、記憶とは、そして〈書くこと〉とは何なのか……？ 大正、昭和、平成を生きた小説家の最晩年、創作と現実のあわいを揺蕩いながら綴られた、文学の新しい地平を指し示す異色の短篇群二十七篇を収める（一九九〇―二〇〇四）。

1411 六〇四頁 八〇〇〇円

全巻完結 全八冊セット定価六〇、〇〇〇円

小島信夫批評集成

編集 千石英世・中村邦生・十山崎勉

目覚しい小説のみならず、〈柔軟な思考と融通無碍な文体、そして生き生きとした行論〉による特異な批評の書き手でもあった小島信夫の、生前に刊行されたすべての批評作品を八巻に集成する。小社創立三十周年記念出版。

内容見本呈 A5判上製

④ 私の作家遍歴Ⅰ

解説 保坂和志

小泉八雲の来日を契機として、古今東西の文学者たちを遍歴する出色の長篇評論がここに開始される。八雲と同時代に日本を訪れた外国人は、何を見、何を考えたのか。彼らが共通に抱いた問いを掘り下げ、人間のあり方を探究する不朽の名著(1980)。第十三回日本文学大賞受賞。 10・12 四一八頁 六〇〇〇円

① 現代文学の進退

解説 中村邦生

世界／日本の様々な作家と作品を具体的に論じつつ、現代文学の方法論に迫る『小島信夫文学論集』(1966)。現代文学論、作家論(漱石、秋声、独歩ら)、文芸時評など、批評の可能性を問う『現代文学の進退』(1970)。後の優れた長篇評論の出現を予感させる最初期の二冊を収録。 11・4 六四二頁 八〇〇〇円

⑤ 私の作家遍歴Ⅱ

解説 宇野邦一

稀代の作家による「遍歴」の続篇。東京大学における小泉八雲の最後の講義をきっかけに、芸術における恋愛や人生について大胆に、そして奔放に語りつくす。迂回や逸脱を繰り返しながらも、全篇にわたって、トルストイの芸術論を詳細に検討する珠玉の一冊(1980)。 11・1 四六四頁 六〇〇〇円

② 変幻自在の人間

解説 都甲幸治

小説家としての日常から、夫婦関係や性を論じる『小説家の日々』(1971)。古今東西の作家・文学についてのエッセイと時評を収録した『文学断章』(1972)。美術、演劇など、芸術表現についての批評を取めた『変幻自在の人間』(1971)。作家の本音と肉声にあふれる三冊を収録。 11・5 八〇七頁 一〇〇〇〇円

⑥ 私の作家遍歴Ⅲ

解説 阿部公彦

「遍歴」はついにトルストイやドストエフスキーから、農奴や奴隷の問題へ、そして奴隷であったにもかかわらず寓話を語り始めたイソップにまで及ぶ。寓話の動物たちのように、お互いを圧倒し合うロシア文学の登場人物たち。小説の方法に肉薄する三部作の完結篇(1981)。 11・2 四七六頁 六〇〇〇円

③ 私の作家評伝(全)

解説 千石英世

「先人の歩んだ道は、私たちの血の中に色こくあとをとどめている」と述べる著者が時代のペールをはぎながら、歴史を生きた文学者と併走する。森田草平、徳田秋声、夏目漱石、森鷗外、島崎藤村、二葉亭四迷、石川啄木、泉鏡花等を論じる(1972-75)。芸術選奨文部大臣賞受賞。 11・3 五五七頁 七〇〇〇円

⑦ そんなに沢山のトランクを

解説 堀江敏幸

「小説のように論じる」著者の本領が発揮された後の『作家遍歴』につながる「そんな沢山のトランクを」(1980)。忘れられていた俳人を現代に甦らせる『原石鼎』(1980)。美術という領域に同時代の生き様を探る『X氏との対話』(1997)。晩年なお躍動する批評精神の精華。 11・6 七三九頁 九〇〇〇円

⑧ 漱石を読む

解説Ⅱ千野帽子 年譜・書誌Ⅱ柿谷浩一

「明暗」の女性のいいしれぬエロスとは何なのか。夏目漱石の作品が先取りしている日本文学の可能性とその未来を掘り起こす。漱石と秋声という対照的な二人の作家が、著者の手によって架橋され、変容する。著者最晩年の傑作長篇評論(1993)。詳細な年譜・著作一覧を付す。 10.11 六七九頁 八〇〇〇円

全巻完結 全八冊セット定価六〇、〇〇〇円

小島信夫関連書

運命の謎 小島信夫と私

三浦清宏

小説家・小島信夫の導きによって文学と生き方に目覚めた著者が、高度成長期の活況、小島との出会いと居候生活、小島文学誕生の舞台裏、みずからの文学修行と見えない世界への関心、そして「長男の出家」での芥川賞受賞にいたる〈出来の悪い弟子〉の道程を克明に語る。 21.9 四六判二七〇頁 二五〇〇円

小島信夫の文法

青木健

現実の淵から生の深奥へと錘鉛を下ろす代表作『抱擁家族』を読みほしく評論とともに過ごした日々、小説の胎動を秘めた言葉の数々を振り返るエッセイ、さらには発掘対談を収め、小島信夫文学の沃野を見はるかす。 17.11 四六判二〇七頁 二五〇〇円

小島信夫の読んだ本 小島信夫文庫蔵書目録

昭和女子大学図書館編

不世出の小説家が最後まで架蔵していた蔵書三千余冊が昭和女子大学に寄贈された。小島信夫自身による様々な書き込みを含む昭和女子大学〈小島信夫文庫〉の全貌。テキストⅡ坂東真理子、柿谷浩一、中村邦生、千石英世、平井杏子、中西裕、太田鈴子。 12.5 A4判二七頁 五〇〇〇円

小島信夫の書き込み本を読む 小島信夫文庫関

昭和女子大学図書館編

作家の旧蔵書の他に、筐底に秘されていた草稿や創作ノート、メモ、日記等の諸資料一五〇〇点以上を収蔵する昭和女子大学の〈小島文庫〉の諸資料の目録。テキストⅡ江口雄輔、中西裕、平井杏子、太田鈴子、近藤耕人、竜野連、中村邦生、千石英世、柿谷浩一、猪俣和也。 12.3 A4判二〇九頁 五〇〇〇円

ヘンリー・ミラー・コレクション

編集 飛田茂雄 十本田康典 十松田憲次郎

性解放への企てと暴力的なまでに虚飾を排した挑戦的な文体によって、世界の文学界に一大センセーションを巻き起こしたミラーは今、ドウルーズ・ガタリヤステイヴ・エリクソン等によって新しく読まれようとしている。日本におけるミラー像を一新する、全巻新訳による新選集。
内容見本呈 四六判上製

④ クリシーの静かな日々

小林美智代 十田澤晴海 十飛田茂雄 訳

ポルノグラフィイとして書かれた著者の面目躍如たる表題作をはじめ、「マックス」「初恋」等、初期から晩年に至る猥雑にして詩的な7短篇を集成する。「ヘンリー・ミラー」の文章には、一切のものが存在している。」(ドウルーズ・ガタリヤ) 二五二頁 二五〇〇円

① 北回帰線

本田康典 訳

一九三〇年代、パリで貧困のどん底にあつてシュルレアリスムの影響をうけつつ、伝統的小説の「人工性と欺瞞とを」片っ端からたたき潰した、二十世紀前半の英米小説界を震撼させた最大の伝説的話題作。
三三四頁 三〇〇〇円

⑤ マルシーの巨像

金澤智 訳

第二次世界大戦の直前、ギリシャを訪れた著者はそこに今や現代社会からは失われてしまった混沌と情熱、神性と永遠を見出す。現代文明への痛烈な批判と独特の詩情が全編に迸る無頼の紀行文学。「ミラーの最良の作品、それは『マルシ』だ。」(フィリップ・ソレルス) 二四八頁 二五〇〇円

② 南回帰線

松田憲次郎 訳

《これらの出来事はすべて実際に起こったことなのだ》著者のパリ時代を描いた前作につづき、それ以前のニューヨークでの出来事を描きながら、フィクションと自伝の境界線を無化しようとする、早過ぎた《ポストモダン》的自伝小説。
三三八頁 三八〇〇円

⑥ セクサス 薔薇色の十字架刑 一

井上健 訳

マンハッタンの電信会社に勤める主人公は、マアラという名のセクシーなダンサーと恋に落ちる。「芸術家の女神」との運命的な出会い、そして大胆な性描写で繰り広げられる死と再生の磔刑のドラマ。自伝的長編三部作の第一弾。本邦初の完訳版。
一〇二 五九九頁 五〇〇〇円

③ 黒い春

山崎勉 訳

ニューヨークの底辺の人々の幸と不幸、希望と絶望、愛と憎悪、優しさと残酷さ、猥雑さ、無頓着、激情、呪詛、狂気、そして純真さへのパセティックなオマージュ。十短篇によって緊密に構成された、シュルレアリスムの影響のものとも色濃い、想像力の可能性の果てへの旅。
二五四頁 二五〇〇円

⑦ プレクサス 薔薇色の十字架刑 Ⅱ

武舎るみ 訳

晴れて正式に結婚したふたりの蜜月は、度重なる激突と生活苦とによって、破局へ向かっていく……巷の語り部ミラーが「運命の女」との情熱と苦悩に満ちた結婚生活を振り返り、猥雑、饒舌、エネルギッシュに語りつくす「あの三年」。
一〇二 六五一頁 五〇〇〇円

⑧ ネクサス 薔薇色の十字架刑 III

田澤晴海訳

作家志望の主人公は最愛の妻モーナと同性愛の女性画家ステイシャとの奇妙な共同生活を営みながら、雄大な構想の小説を書き続けてゆく。若きミラーが初めてヨーロッパへ旅立つ直前の一九二七年を背景にした自伝的長編三部作完結篇。
106 四五九頁 四五〇〇円

⑨ 迷宮の作家たち

木村公一訳

作家としてばかりでなく、読書家としても偉大だった著者が愛する七人の文学者たち（バルザック、ランボー、ハガード、ロレンス、ソロー、ホイットマン、アンダーソン）について論じる。バルザックの《神秘》、ロレンスの《性》、そして考察は芸術、人生、世界観にまで及ぶ。
三〇三頁 二八〇〇円

⑩ 殺人者を殺せ

金澤智十 飛田茂雄 十菅原聖喜訳

エロチックな描写、グロテスクな人物風刺、哲学的瞑想、痛烈な現代文明批判へと、自由自在に変幻する文章の魔術！二十世紀の文学に大きな衝撃を与え、文学の光景を一新した著者の代表的なエッセイと書簡、七編を収録。
二五七頁 二五〇〇円

第一期全十巻完結 全十冊セット定価三四、〇〇円

⑪ 母

小林美智代訳

アメリカでの作家修業時代に書かれた「エヴァアグレスへ」や最晩年の「母」中国」など、初期から最晩年までの、中・短篇五作品を収録。年齢を重ねるにつれ次第に円熟していくヘンリー・ミラーの実像を彷彿とさせる中・短篇集。
13・12 三三二頁 三〇〇〇円

⑫ 冷暖房完備の悪夢

金澤智訳

アメリカにおける悪夢とは、悪夢のなかでさえエアコンがきいて快適だと行うことだ……。「豊かな国」アメリカの虚妄の繁栄を暴き、現代文明の行く末を予見する、世紀を超えて読み継がれるアメリカ文明批判の書。
19・10 三二頁 三〇〇〇円

⑬ わが生涯の書物

野平宗弘 十佐藤亨 十河野賢司他訳

書物との出会いは現実の世界における人間との出会いと等しい、ないしはそれ以上のものである。ミラーの文学と人生に決定的な影響を与えた書物について、ミラー自身が詳述する。巻末に、一九五〇年にミラー自身が作成した千点におよぶ読書目録を掲載する。
14・12 五七六頁 五〇〇〇円

14 友だちの本

中村亨十 本田康典十 鈴木章能訳

晩年のミラーが失明に近い状態になりながら執筆を急いだ『友だちの本』は彼の自転車、そのほかの友だち『ジョーイ、わが人生におけるほかの女性たち』は没後七年目にして、『友だちの本 三部作』として刊行された。友だちのおかげで生き延びることができたと言語ミラーの回想録。 142 三九二頁 四〇〇〇円

ヘンリー・ミラー 関連書

15 三島由紀夫の死

松田憲次郎十 小林美智代十 萩野亮十 野平宗広訳

ブニュエルを称賛する「黄金時代」、ブラッサイを語る「パリの眼」、三島由紀夫自決の翌年に発表された出色の日本人論といえる「三島由紀夫の死」をはじめ一〇編のエッセイを収録。

1712 二四六頁 二八〇〇円

ヘンリー・ミラーの八人目の妻

ホキ徳田

文豪ヘンリー・ミラーの最後の妻が、一九六〇、七〇年代のロサンゼルスで駆け巡る！ 自由人ミラーの私生活とハリウッドの古き良き時代、そしてナイトクラブ開店騒動を描くドタバタ・エッセイ集。

1312 四六判四二六頁 三三〇〇円

16 対話／インタヴュー集成

松田憲次郎十 泉澤みゆき十 中村亨十 鈴木章能訳

一九五〇年代から最晩年までの対話とインタヴューを集成する。ミラーが自らの創作文学の系譜、猥褻性、ニューヨークやパリでの生活、友人や愛した女性との関係など多岐にわたって縦横に語りながら、座談家としての魅力や遺憾なく発揮する、ミラー自身と彼の文学を理解する上での第一級の冊子。 195ニ 二八四頁 三〇〇〇円

第二期全六巻完結 全六冊セット定価二〇、九〇〇円

この世で一番幸せな男

M・V・ディアボン 室岡博訳

《金もない資力もない希望とともないが、私はこの世で最高に幸せな人間だ。》セックスと自由と書物を崇め、《奔放な生》を生き抜いた文学の異端児の人生の光と影。膨大な資料を駆使しながら等身大のミラーを甦らせる、フェミニスト批評家による辛辣な評伝。

四六判四七八頁十別丁 図版二六頁 四五〇〇円

回想するヘンリー・ミラー

トウインカ・スノーボード編 本田康典十 小林美智代十 泉沢みゆき訳

〈人生において起こるすべてを信じるのだ。〉思い出と信念、そして未来へのメッセージ……老境のミラーが老若、男女、有名無名のさまざまな来客たちを楽しませた、無類のテーブル・トーク。

四六判二二〇頁 二〇〇〇円

ヘンリー・ミラーを読む

本田康典＋松田憲次郎編

『北回帰線』によって全世界に衝撃を与えたミラーを、同時代（ロレンス、ジョイス、ニン、シュレアラリスム）の文脈のなかに位置づけるとともに、その今日的意味を問う。執筆Ⅱ金澤智＋J・M・デッカー＋三宅あつ子＋中村亨＋木村公一＋B・W・リー＋大石健太郎＋野平宗弘＋K・バーチェル 四六判三四五頁 三五〇〇円

ヘンリー・ミラーの文学 愛の欠落から追求へ

小林美智代

二十世紀アメリカの偉大な反骨の小説家はパトスの知を伝えるための革命的な方法探求者だった——その主要作品の表現と形式を考察し、ミラー文学への新たな理解を提示する。

107 四六判二九八頁 三五〇〇円

ミラーさんとピンチョンさん

レオポルト・マウラー 波戸岡景太郎

野暮ったい測量器具を片手に荒野をゆく二人の中年男。その名もミラーとピンチョン。くしくも現代アメリカを代表する作家と同じ姓をもつ、彼らのゆく手に待ち受けるのは、女、ワニ、奇蹟、金星、そしてオオカミ少年……？ ウィーン発のグラフィックノベル。 105 A5判並製一八二頁 一五〇〇円

『北回帰線』物語 パリのヘンリー・ミラーとその仲間たち

本田康典

『北回帰線』の構想から誕生にまつわる謎を、そしてブラッサイ、ルイス・ブニエール、エズラ・パウンド、バーニー・ロセットらとの交友を軸に、アメリカでの発禁本がいかに世界的なベストセラーとなっていたかを縦横に綴る〈書物〉の伝記。 182 四六判四八六頁 四五〇〇円

パスカル・キニヤール・コレクション

編集 小川美登里 十桑田光平 十博多かおる

レヴィナスのもとで哲学を学んだ思想家であり、ゴンクール賞を受賞した卓越したストーリーテラーでもあるキニヤールの、本邦初訳の小説作品、そして芸術全体にも造詣の深い作家による音楽論・舞踏論・絵画論等を集成し、その全貌を明らかにする。

内容見本呈 四六判上製

音楽の憎しみ

博多かおる訳

音楽はそれを誰より愛したものにさえ、憎むべきものになる——死や苦しみに切り離せない音楽、視覚のように遮ることもできず強制的に人を服従させるリズム。見ることに先立つ聴覚を捉え直し、言語と音楽の関係を探りながら「群れを率いる音楽」の恐怖の源をたどる音楽論。 196 二二八頁 二五〇〇円

はじまりの夜

大池惣太郎訳

イメージとはなにか。人は誰しも、彼が孕まれた場面には、いい、ない、存在である。この不在の場が人間にとつての起源であり、人は不在の場面を生涯追ひ求め続ける。欲望がイメージを生み、幻想的な場面を創造する。夜の画家たちによつて生み出された作品たちと、それらをめぐる考察。 2012 二四六頁 二五〇〇円

謎

小川美登里訳

世界の民話蒐集家でもある著者による物語は、どこか不気味でなつかしい。グリム童話を彷彿とさせる『エテルロードとウォルフラム』、オイディウスの『変身譚』に着想を得た『失われた声』ほか、珠玉の六篇を収録した短編集。

17.3 二二四頁 二四〇〇円

約束のない絆

博多かおる訳

ブルターニュの海岸にある洞窟でリュミエール兄弟は世界初のカラー写真をつくった。同じ地でクレールは、幼い頃のピアノの先生や昔の恋人シモン、弟ポールらと不思議なつながりを生き、原初の海の光に浸されて世界の色彩を見いだす。作者自身が最も愛するという美しい小説。 1612 二五〇頁 二五〇〇円

ダンスの起源

桑田光平 十堀切克洋 十パトリック・ドウヴオス訳

失われたダンスを求めて〈子殺し〉のイメージで知られるギリシャ神話の「メデイア」をもとに、暗黒舞踏から、誕生以前の身体のダンスにまで遡る。数々の戯曲も手がける著者による、〈わたし〉ならざる〈わたし〉の身体の回復を目指す闇の舞踏論。 2112 二二六頁 二八〇〇円

涙

博多かおる訳

「ストラスプールの誓い」に立ち会った年代記作者ニタール、見知らぬ女の顔を探し求め彷徨するアルトニッド。反復する誕生、鏡像のような双子。カロリング朝を舞台に、史実と虚構を断章形式で織り交ぜ、フランス語の起源に肉薄する謎めいた小説。 185 一七八頁 二四〇〇円

さまざまえる影たち 最後の王国①

小川美登里・桑田光平訳

影たち——死者たちや失われたもの——との対話に捧げられた〈最後の王国〉シリーズ第一作。かつてこの世に生きた人々の熱い想いは絵画や文学作品の中にいまだその命を宿し続ける。キニヤールとともに過去をめぐる旅。

17.3 二〇二頁 二四〇〇円

いにしへの光 最後の王国②

小川美登里訳

ふたつの時間——一方で流れ去り過去となる時間、歴史や文化、習慣などの系譜学を作り出す時間と、もう一方では過去の源にとどまり続け、決して古びることのない永遠の往古(いにしえ)——をめぐる哲学的、人類的、文学的な考察。
16・12 三二八頁 三〇〇〇円

深淵 最後の王国③

村中由美子訳

〈時〉には、過去／現在／未来はなく、失われた時／差し迫った時しかない。時間⇨深淵という命題をめぐる、音楽、神話、古代史さらには自然科学のあわいを経巡り、性・言語・時間……つねに二極に引き裂かれ続けるものたちとともに「いまを生きる」ことを問う。
22・01 二八〇頁 三〇〇〇円

楽園の面影 最後の王国④

小川美登里訳

永遠を喚起する、誕生以前の「楽園」。精神分析における「自由連想」のように、複数の深淵を飛び越えながら、規範化された文学像を解体し、起源なき〈文学〉の固有の姿を想像／創造する。生に刻印された「楽園」の痕跡をたどり紡がれる、キニャール版『枕草子』。
22・06 三二五頁 三五〇〇円

もつとも猥雑なもの 最後の王国⑤

桑田光平訳

この世で行き場を失い、遺棄された「猥雑なもの」。生きる者を脅かし恐怖の念を引き起こすとともに、言語以前、意味以前の回復できない喪失としての「最初の王国」⇨楽園へのよすがともなる「もつとも猥雑なもの」が集積されたトポスについての思索。
22・06 二七二頁 三三〇〇円

静かな小舟 最後の王国⑥

小川美登里訳

かつてセーヌ河を往復する運搬船(コルベイユ)があった。実母から乳母へと赤子を運ぶその船は、現在の霊柩車(コルベイヤール)の語源となった。人生の出発点である「誕生」と終着点である「死」を足がかりに、変容しつづける「個」の可能性を描く、新たな小説論。
18・12 二六四頁 二五〇〇円

落馬する人々 最後の王国⑦

小川美登里訳

馬が嘶き、手綱は千切れ、地面にたたきつけられる。生死の境をさまよった末、血だまりのなかで息を吹き返した人間がみた世界。人馬一体の命運を転覆させ、戦争／平和、動物／人間、言語／イメージ、社会／自由の根幹を問い、起源を生き直すための忘我⇨脱自！
18・5 三三五頁 三〇〇〇円

死に出会う思惟 最後の王国⑨

千葉文夫訳

『黄金伝説』や『オデュッセイア』、ソクラテスはか古今東西の文学や哲学を道通し、独自の声で紡ぎ出す思考のポリフォニー。生と死のあわいをさすらう、キニャール版『野生の思考』。
21・03 二二二頁 二八〇〇円

全巻完結 全十四冊セット定価三九〇〇〇円

パスカル・キニヤール関連書

ル・アーヴルから長崎へ

パスカル・キニヤール＋小川美登里

甚大な戦禍を被った港町ル・アーヴルで幼年期を過ごした作家が、失われた故郷を皮切りに、日本を、そして長崎を旅する。「文学もまた、破壊から生み出された目も眩むような道程である」と語る作家が日本の友人とともに書き下ろした、〈人生〉という旅の記録。

2109 四六判二〇七頁 二五〇〇円

レーモン・クノー・コレクション

シュレアリズムからパタフィジックへ、そしてウリポの創設へ。(時代に抗して生きた破格の存在)が残した破天荒な小説作品のほぼすべてを十三巻に集成する。

内容見本呈 四六判上製

① はまびき

久保昭博訳

パリ郊外を舞台に繰り広げられる小市民たちの恋愛と陰謀の喜劇。だが突如勃発した戦争は、小説の時空間を奇妙にねじ曲げ……。パタイユやデスノスがこの作品を讀えんがために、ドゥマゴ賞を創設したという、実験と遊戯に満ちた処女作。

126 三七〇頁 三三〇〇円

② 最後の日々

宮川明子訳

冴えない哲学専攻の大学生たち、カフェに通う老人たち、時に客の星占いをしてやり、季節ごとに通り過ぎていく彼らを見守るウエイター、アルフレッド。彼らの最後の日々を描きながら、第二次世界大戦前の不穏なパリの雰囲気伝える、初々しい自伝的小説。

二二二 二八三頁 二五〇〇円

③ リモンの子供たち

塩塚秀一郎訳

実在の(狂人)たちをテーマに『不正確科学百科事典』を執筆するジャンベルナック氏と、あるブルジョワ一族。二つの世界が交差し、突飛な(狂人)たちの言行が、破局へ向かう時代の空気を照らし出す。人間の愚かさを根源的に問う知られざる傑作。第二十回日仏翻訳文学賞受賞。

131 三九五頁 三三〇〇円

④ きびしい冬

鈴木雅生訳

舞台は第一次世界大戦中の、地方都市ル・アーヴル。戦傷のため前線からの町にやってくる英国軍との連絡にあたっている将校ルアモーは、妻を亡くし、空虚な日々を送っていたが、ある少女と出会い……。作家の既存のイメージを覆す、叙情的な作品。

122 一六三頁 一八〇〇円

⑤ わが友ピエロ

菅野昭正訳

遊園地「ユニ・パーク」で働くこととなったピエロ。人はいいがどじな彼は、ひっそりと《ユニ・パーク》に隣接し、謎の王国ポルデーヴの王子がまつられているという礼拝堂の主と知り合う。そんななか、《ユニ・パーク》では、ある事件が巻き起こり……。

128 二六七頁 二五〇〇円

⑥ ルイユから遠くはなれて

三ツ堀広一郎訳

ボクシングの世界チャンピオン、ローマ教皇、巨大シラミの研究者……ありえたかもしれない無数の人生を夢見、白昼夢にふけるジャック。ある時、故郷のルイユを飛び出し……。夢と現実が交錯する、きわめて凡庸できわめて奇想天外な冒険小説。

121 二二五頁 二二〇〇円

⑦ 文体練習

松島征・原野葉子・福田裕大・河田学訳

ある男がバスに乗り、若い男と口論になり、二時間後、別の場所では先ほどの男を見かける。たったこれだけの内容を隠喩的に『予言的に』『ねちねち口調で』『食通スタイルで』など、九十九通りの楽しい語り口。文体で遊ぶ、エロコ、カルヴィーノ、イオネスコ絶賛の世紀の奇書。

129 二六〇頁 三三〇〇円

⑧ 聖グラングラン祭

渡邊一民訳

全く雨のふらない（ふるさとの都）では、圧倒的な権力を誇る市長ナポニードのもと、恒例の奇祭（聖グラングラン祭）が行われつつあった。一方、三人の息子たちによりナポニードのある陰謀が明らかになる……。ジョイスの手法を応用したクノー中期の代表作。

1110 三〇五頁 二八〇〇円

⑨ 人生の日曜日

芳川泰久訳

人はいいが、ばつとしない二等兵ブリュは、オールドミスで二十も年上の小間物屋ジュリアに見初められ、結婚する。誰とでもすぐのうち解け親密になれるブリュだったが、ひよんなことで妻がこっそりやっていた奇妙な副業の代役をつとめる羽目になる……。

123 二八一頁 二五〇〇円

⑩ 地下鉄のザジ

久保昭博訳

パリのガブリエル伯父さんに預けられた少女ザジ。彼女の願いはたったひとつ、地下鉄に乗ること。楽しみにしていたザジだったが、あいにくスト中。変態やうるさい未亡人につきまとわれながら、活気あふれるパリを駆け回る、ザジの三日間の冒険。

1109 三三三頁 二二〇〇円

⑪ サリー・マールラ全集

中島万紀子訳

アイルランド生まれの少女サリーが、習いたての仏語で書いた奇妙な作品からなる彼女の〈全集〉。彼女の初恋と処女的想像力からなる性の探求日記、「フイネガンズ・ウエイク！」を合言葉に郵便局に立てこもるアイルランドの闘志を描いた小説、謎の性愛散文集の三篇を収録。

1109 四九五頁 三五〇〇円

⑫ 青い花

新島進訳

十三世紀、十五世紀、十七世紀、十八世紀に姿を現し活動する、さながらドン・キホーテのようなオー・ジュ公と、現代、ある年の河岸に繋がれた船に暮らすシドロランの運命が交錯する。どちらが夢なのか、あるいはすべてが夢なのか。ユーモア溢れるクノー版〈胡蝶の夢〉。

1212 三三三頁 三〇〇〇円

⑬ イカロスの飛行

石川清子訳

作家ユーベルの書く小説から、主人公イカロスが逃げ出した。彼を探すために雇われたおとぼけ探偵や、他の作家たちの本から逃げだした登場人物たちが町に紛れ込み……。見るものなすこと初めてづくしのパリの町で、イカロス等待っていた運命とは……。

1210 二〇三頁 二〇〇〇円

全巻完結 全十三冊セット定価三、六〇〇円

レーモン・クノー 関連書

一〇〇兆の詩篇

レーモン・クノー 塩塚秀一郎・久保昭博訳

一日中、一年三六五日読み続けても、読了には二億年かかる！ 一行ずつバラバラにして組み合わせることが可能な10篇の14行詩、つまり、10¹⁴＝100兆通りの組み合わせが可能な、一冊あれば一生、いや何百万生のあいだ「楽しめる」ことうけあいの伝説的な作品。

137 B5変判並製三三頁 二五〇〇円

レイモン・クノー伝

ミシェル・レキュール 久保昭博・中島万紀子訳

シュルレアリスムの影響を受けた青年期から、物書き狂人の研究、コレージュ・ド・パタフィジックへの参加やウリポの創設などを経て、いかにしてクノーは規格外の言語遊戯作家になったのか。伝記研究の泰斗による、決定版評伝。

197 A5判四四五頁 七〇〇〇円

ヴィクトル・セガレン著作集

編集 清水徹十木下誠十渡辺諒

二十世紀初頭、フランス海軍の船医としてタヒチ、セイロン、中国を巡り、他の者の文化との衝突とそこに生起する《多様なもの》の経験から、《エグゾティスム》について追求しつづけた希有な作家の多岐にわたる作品群を総合的に紹介する。

内容見本呈 A5変判並製函入

① 記憶なき民「小説」

木下誠訳

船医としてタヒチに滞在した経験を契機に、初の「小説」として書かれたマオリ民族の失われた歴史。十八世紀末のクック来訪以降のマオリ文化の破壊と「文明化」の過程が、キリスト教への転向とそれへの抵抗の物語として語られる。

五三〇頁 七〇〇〇円

② ゴーガンを讃えて／異教の思考「評論・短編

小説・日記

丹治恆次郎・木下誠訳

架空のマオリ人が文明人を論難する哲学的対話「異教の思考」、偉大な芸術家の運命を描いた小伝「ゴガンを讃えて」、芸術家が世を導く創世譚「快楽の師」など、若きセガレンがゴーガンの遺作に触発され独自のエグゾティスムを開花させた作品群（小説、評論、旅日記）を収録。

St.6 六二二頁 一〇〇〇〇円

③ 二重のランボー／オルフェウス王「評論・中編

小説・戯曲

木下誠訳

タヒチから帰国後、中国に向かうまでの二年間のセガレンの思考の軌跡。文学と旅に引き裂かれたランボーを人格の分裂（ボヴァリスム）の理論によって論じた「二重のランボー」、ゴータマ・シッタールタ、オルフェウスをめぐる戯曲、ドビュッシューとの往復書簡などを収録。

10.5 六九九頁 一〇〇〇〇円

④ 天子「小説」

黒川修司訳

押し寄せる西欧諸国 守旧派との闘争と挫折 蟄居での孤独な生活……、十九世紀末、中国の歴史に翻弄された光緒帝の人生を、「天」と「地」の媒介者——「天子」による絶対の探求と多様性の統一を求める生の実験として、現実と想像を巧みに交えて描き出す。

三二五頁 四〇〇〇円

⑤ ルネ・レイス「小説」

黒川修司訳

光緒帝の伝記を書こうとしている「ぼく」に中国語の家庭教師として雇われ、紫禁城内部についての驚くべき話を次々と語るベルギー生まれの謎の男ルネ・レイス。彼の言動を通し、紫禁城の神祕の内部を探ろうとする日記形式の疑似探偵小説。

三二六頁 四五〇〇円

⑥ 碑／頌／チベット「韻文詩」

有田忠郎訳

中国語の縦書きの碑文と仏語の横書きのテキスト、それら全体を囲む黒い矩形の枠という形式による、また独自の韻律法による、全く特異な詩集「碑」をはじめ、「頌」、「チベット」の三詩集を収録。第十回日仏翻訳文学賞受賞。

二分冊計四六四頁 六〇〇〇円

⑦ 絵画／想像のものたち「散文詩・短編小説・エ

セー」

木下誠訳

全体が一続きの「香具師の口上」で成り立つ特異な散文詩集「絵画」。言葉によって様々な種類の中国絵画を現出させ、同時にそれらに批評を加えることで、絵画のイメージと意味を無限に増殖させてゆくこの作品に、「神秘的なもの」に関する「試論」などを収録。

六三八頁 八〇〇〇円

⑧ 煉瓦と瓦「旅日記」

渡辺諒訳

中国奥地へと向かう日々——黄土は瞬き、水面は渦巻き、彫像は語らい、寺院は天を突く。たえず顕現するヴィジヨンは後年の傑作の種となり、携えたノートは未だ見ぬ散文を鍛えあげるアトリエとなる。現実と想像、認識と感覚、瞬間と持続が混濁する旅日記。

216 三四五頁 五五〇〇円

全巻完結 全八冊セット定価五五、〇〇〇円

セガレン関連書

ヴァイクトル・セガレン伝

ジル・マンスロン 木下誠訳

ブルターニュからポリネシアへ、ゴーギャンとランボオの経験、ドビュッシーとの共作、中国の旅（多様性）の美学としての〈エグゾティスム〉、常に新たなその作品……時代に先駆けたセガレンの生々作品の全貌！

143 A5判上製六九三頁＋別丁図版八頁 一〇〇〇〇円

バルザック幻想・怪奇小説選集

編集 Ⅱ 私市保彦＋加藤尚宏

《人間喜劇》で知られる、未来の大小説家の出発点となった怪奇、幻想、ゴシックの恐怖にみちた流行小説群を五巻に集成する新選集。知られざるバルザックの全貌をあかす！ 全篇、新訳。本邦初訳、多数。

内容見本呈 四六判上製

① 百歳の人―魔術師

私市保彦訳

夢想を誘う七月の真夜中、岩山の懐からは煙が立ち上り、父親思いの娘が失踪する。若き天才ペランゲルト將軍の生涯につきまとう不気味な老人、人間を束の間の生の子ら」と呼ぶこの老人が姿を現すところ、不可解な事件が……。バルザック版《放浪者メルモス》。

074 三九三頁 三〇〇〇円

② アネットと罪人

私市保彦監訳 澤田肇・片桐祐訳

すべては乗合馬車の旅から始まった。あの金曜日に旅立ちさえしなければ……。しかし、すでにアネットの運命は、一人の男に愛されて大きく狂い始めている。運命の警告に怯えながらも、天使のような少女は破滅的な愛へと……。バルザック青年期の傑作盗賊小説。

075 四六〇頁 三五〇〇円

③ 呪われた子他

私市保彦・加藤尚宏・芳川泰久・澤田肇・片桐祐・奥田恭士訳

貴族の子でありながら、父に呪われて海辺の小屋に暮らす少年、母の愛と自然の神秘に育まれたこの繊細な魂は、封建制度と戦乱に……。彪大な《人間喜劇》から、神秘に彩られた八短篇を集成する。

077 四四六頁 三五〇〇円

④ ユルシユール・ミルエ

加藤尚宏訳

《あんな女に遺産をとられてたまるか！》裕福な医者ミノレとその養女ユルシユールをめぐって渦巻く、相続人たちの悪意と陰謀。《人間喜劇》らしい活気溢れる人物描写の背後で、保護者を亡くした娘の運命の変転はあの謎めいたメスメリズムによって……。

076 三四七頁 三〇〇〇円

⑤ 動物寓話集他

私市保彦・大下祥枝訳

何と滑稽な人間どもよ！ 恋する牝猫、旅する雀、おしゃれなライオン……時代と社会を観察し尽くした辛辣な一大風俗絵巻。グランヴィールの挿絵に彩られた表題作に、「魔王の喜劇」「廃兵院のドーム」を収録し、《諷刺と諧謔の作家》バルザックに光をあてる。全五巻、完結！

070 二九六頁 三〇〇〇円

全巻完結 全五冊セット定価一六、〇〇〇円

バルザック芸術／狂気小説選集

編集 Ⅱ 私市保彦 十加藤尚宏 十芳川泰久

狂気におちいる芸術家、過剰な想像力につかれ、時代を先取りし過ぎたが故に悲劇的な末路を迎える天才の物語……。ロマン派特有の天才の観念と重ねながら、小説に狂気を登場させた点で先駆的だったバルザックの芸術／狂気に関する作品を四巻に集成。小社創立三十周年記念出版。 内容見本呈 四六判上製

① 知られざる傑作他【絵画と狂気】篇

澤田肇 十片桐祐十 芳川泰久 十私市保彦 十奥田恭士 十佐野栄一 訳

命ある絵を描くため長年探求を続けるうち、ついに自らの絵を黒く塗り込めてしまふほどの狂気になった老画家を描いた「知られざる傑作」をはじめ、バルザックの絵画観を垣間見ることができる「鞠打つ猫の店」「財布」「ピエール・グラス」。「海辺の悲劇」「石榴屋敷」の、計六篇を収録。 106 三三〇頁 三〇〇〇円

② ガンバラ他【音楽と狂気】篇

博多かおる 十加藤尚宏 十私市保彦 十大下祥枝 訳

ガンバラは酒に酔ったときのみ天才的な演奏をすると気づいたアンドレアは一計を案じるが……。フランスで最初に音楽を論じた小説とされる「ガンバラ」に、音楽と小説が一体となって新たな芸術を生み出す「マツシミア・ドローニ」「ファチーノ・カーネ」「アデュー」の、計四篇を収録。 108 三三三頁 三〇〇〇円

③ 田舎のミューズ他【文学と狂気】篇

加藤尚宏 十芳川泰久 訳

裕福だが吝嗇でエゴイストの夫との田舎での虚しい結婚生活。パリで活躍する郷土出身の文筆家と愛人関係になり、パリまで彼を追ってきたデイナだったが……。書くことに追われ、書くことに生きたバルザック自身の姿にも重ね合わせられる表題作と「カディニャン公妃の秘密」を収録。 10・10 三八七頁 三五〇〇円

④ 絶対の探求他【科学と狂気】篇

私市保彦 訳

「ダイヤモンドを創造する」という考えにとりつかれ、実験に没頭する男。妻は死に、残された娘がとつた方法、そして男の行き着いた果てとは……。バルザックならではの神秘的科学観から時代の空気を感ずることができるとは、一赤い宿屋。人間の極限の狂気を描く二篇。 10・10 三八七頁 三五〇〇円

全巻完結 全四冊セット定価 三、〇〇〇円

バルザック関連書

神秘の書

オノレ・ド・バルザック 訳

北欧の神秘思想家スウェーデンボルグの思想の小説化を企てた「追放された者たち」「ルイ・ランベール」「セラフィタ」の三篇に著者の序文を付して刊行された一八三五年版を初めてそのまま邦訳する。神秘と狂気の世界を描き尽す、著者渾身の謎めいた三部作。 10・6 A5判クロス装クロス函入四三五頁 八〇〇〇円

バルザック『脳』と『知能』の小説家

東辰之介

「バルザックは描写したのではない。ヒトを解剖したのだ。」(近代リアリズム文学)の怪物バルザックは、なぜ「脳」に執着し、「脳」を描いたのか? 気鋭のバルザックが、脳生理学からバルザック秘術の人間学に肉薄する斬新な試み。 A5判 三三〇頁 四〇〇〇円

バルザック愛の葛藤・夢魔小説選集

編集Ⅱ 私市保彦＋加藤尚宏＋芳川泰久

十九世紀前半のフランスにおける人間の情念と社会の裏面のすべてを描きだそうとした、百科全書的な巨人バルザック。その喜びと悲哀と苦悩をふくめ、恋愛のあらゆる局面を描きだした作品を五巻に集成。

内容見本呈 四六判上製

① 偽りの愛人

私市保彦＋加藤尚宏＋澤田肇＋博多かおる訳

戦友で恩人のラジンスキ伯爵に仕えるパス。好意を抱く伯爵夫人を遠ざけるため、サーカスの女芸人マラガへの恋をでっちあげるが……。表題作と、愛と結婚によって狂わされていく女の悲劇を描いた「二重の家庭」「ゾーの舞踏会」「捨てられた女」の四篇。

1510 三五頁 三〇〇〇円

② 二人の若妻の手記

加藤尚宏＋芳川泰久訳

恋を夢見、ともに少女時代を過ごした修道院を去ることとなったルイズとルネ。恋愛と政略という、互いの対照的な結婚生活を手紙で綴る、書簡体小説の名作！表題作ほか、堅物の夫人に誤って届けられた恋文をめぐる騒動を描く「女性研究」の二篇。

163 三六五頁 三五〇〇円

③ マラーナの女たち

私市保彦＋加藤尚宏＋大下祥枝＋奥田恭士＋東辰之介訳

十三世紀から続く、娼婦の家系のラ・マラーナは、娘ジュアナの将来を愛い、厳しく娘の貞操を守っていた。そこに遊び人のモンテフィオーレ侯爵が現れて……血に呪縛された女の生き様を描いた表題作ほか、「オノリーヌ」「シャペール大佐」「フィルミアニ夫人」「徴募兵」の五篇。

166 三九四頁 三八〇〇円

④ 老嬢

私市保彦＋片桐祐訳

アランソンの町に、財産を持ち一大サロンを築くコルモン嬢をめぐる、婿の座争いが巻き起こる。老嬢を射止めるのは、文無しの老貴族か、欲得まみれの商人か、貧しい誠実な青年か？ 表題作と、「ボエームの王」「コルネリウス卿」「ふたつりの夢」の四篇。

175 三八〇頁 三八〇〇円

⑤ 三十女

芳川泰久＋佐野栄一訳

若気の至りで、無能な男と結婚したジュリ。次第に夫の本性に気づき、絶望していた。真の愛を求め、自らの過去の因果で、愛娘にも不幸がふりかかり……。六部構成で、波乱万丈の女の人生が壮大に語られる表題作と「家庭の平和」の二篇。

1512 三四〇頁 三〇〇〇円

全巻完結 全五冊セット定価一七、〇〇〇円

マルキ・ド・サド全集

編集 植田祐次＋私市保彦＋鷺見洋一＋原好男

激動の十八世紀末、生涯の多くの時を獄中にすごした異端のフランス作家の合法、非法のすべての作品を一行の削除もなしに完訳する本邦初の完訳版全集。本国フランスにおける本文批評の最新の成果をも反映させ、サドの全体像に迫る。

内容見本呈 A5判上製貼函入

① ソドム百二十日あるいは放蕩学校／閨房
哲学
橋本到・中村英俊訳

近刊

② 美德の不運／ジュステイーヌあるいは美德の不幸他
植田祐次・余語毅憲訳

近刊

③ 新ジュステイーヌあるいは美德の不幸他
鷺見洋一訳

近刊

④ ジュリエットの物語あるいは悪徳の栄え(上)
真部清孝訳

近刊

⑤ ジュリエットの物語あるいは悪徳の栄え(下)
真部清孝訳

近刊

⑥ 恋の罪、壮烈悲惨物語
私市保彦・橋本到訳

恋の駆引き、情欲、邪恋、嫉妬。近親相姦、多重相姦、姦通、陵辱。さらには政略結婚、野心と裏切り、策謀……美德と悪徳の限りない対立によって生み出される壮絶なピカレスク絵巻、ありとあらゆる欲望の変奏曲。初の完訳。

110 六四九頁 八〇〇〇円

⑦ こぼれ話、物語、笑い話他
橋本到・太原孝英訳

間抜けな夫、猫をかぶる妻、初心な娘、男装の麗人、非道な山師、猥らな司祭、杓子定規な裁判官、そして幽霊、悪魔まで……凝り固まった掟をからかう、陽気なエロティシズムとユーモア溢れる逸話集。本邦初訳の傑作『慰みもの』にされた法院長』を初収録！

216 四五頁 六五〇〇円

⑧ アリーヌとヴァルクールあるいは哲学的物語(上)

原好男訳

若き恋人アリーヌとヴァルクールの愛の運命をたどる、自伝的告白を含む書簡体の大長篇小説。美德と悪徳、感情と理性、慈善とエゴイズム等、人間の本性をめぐって、人間への怨嗟と社会への憎悪にみちた異端の思想が交錯する。

四〇三頁 四五〇〇円

⑨ アリーヌとヴァルクールあるいは哲学的物語(下)

原好男訳

アリーヌの父、悪徳法院長ブラモンの謀略により、二人の純愛は悲劇的結末へ。サンヴィルとレオノールの冒険譚で語られる、婚姻、財産、宗教を巡る独特の理想社会論が異彩を放つ。フランス革命一年前に獄中で構想された長篇の後半部。

四九八頁 五五〇〇円

⑩ ガンジュ侯爵夫人

橋本到訳

悪徳神父の奸計に美德の鑑Ⅱガンジュ侯爵夫人はどう対抗するのか。ゴシック建築の城、闇の回廊、予知夢等、暗黒小説的な設定のなかで、美德と悪徳が対等の権限をもって闘争する、著者の知られざる一面を映し出す傑作中編。本邦初訳。

三二七頁 三五〇〇円

⑪ フランス王妃イザベル・ド・バヴィエール秘史他

原好男・中川誠一訳

一四―一五世紀、シャルル六世治下におけるフランス王妃イザベルの恐るべき策略の数々。一一世紀、ザクセン大公妃アデルハイトをめぐる愛と陰謀のアラベスク。サド晩年の想像力が飛翔する、悪徳と美德に彩られた凄絶な歴史絵巻、二篇。

一四二頁 四七六頁 七〇〇〇円

サド関連書

サドのエクリチュールと哲学、そして身体

鈴木球子

理性によって秩序が編制された啓蒙の時代に、同時代の文芸・思想を捻じ曲げるようにして「道徳」を、そして「自然」を暴力的に書き綴ったサドの戦略と射程を見極める。

161頁 A5判二七三頁 四〇〇〇円

サドと二十世紀

エリック・マルティ 森井良訳

悪としてのサディズムのみに着目してきた十九世紀を経て、二十世紀、思想家そして哲学者たちはどのようにサドを捉えたか。ロラン・バルトの弟子であり、アンドレ・ジッド研究の泰斗による、サドをめぐる二十世紀思想史。

161頁 A5判四八八頁 八〇〇〇円

アルノ・シュミット・コレクション

現代的な散文形式を追求すべく、独自の書法を確立し、方言や俗語・造語に加えて数カ国語を駆使して諸科学と神話の融合を目指し、途方もないタイポグラフィの実験まで試みた、二十世紀ドイツ文学においてもっとも過激な前衛作家を紹介するシリーズ。全篇、本邦初訳。

四六判上製

ブランドの荒野／黒い鏡

和田洵訳

ポカホンタスのいる湖景／移住者たち

和田洵訳

ある牧神の生活から

北村優太訳

夏の避暑地で出会った男女四人を描き（神の冒険とポルノグラフィ）で訴えられた問題作、「ポカホンタスのいる湖景」。第二次大戦後の難民の辛苦と安息への旅を活写した「移住者たち」——まったく新しい散文形式《フォト・アルバム》で現代ドイツ文学を刷新した二篇。自作解説収録。 162頁 二二七頁 二二〇〇円

レヴィアータン

窪俊一訳

石の心

犬飼彩乃訳

ティナ／ゲート／コスマス

和田彩・北村優太・和田洵訳

近刊

近刊

近刊

近刊

セルバンテス全集

全巻完結 全七冊セット定価七〇、〇〇〇円

責任編集 篠直 編集委員 荻内勝之 十田尻陽一 樋口正義 本田誠二

没後四〇〇周年(二〇一六年)を記念し、近代的な意味での《小説》(さらには《メタ小説》)の創始者にして、《スペイン黄金世紀》の文学の最高峰、セルバンテスの全作品を集成する本邦初の試み。各巻に、近年の研究成果を反映した詳細で充実した注と解説を付す。

内容見本呈 A5判上製

① ガラテア

本田誠二訳・注

理想郷のごとき自然の中での波乱を含んだ恋の模様を、当時流行の《牧人小説》に倣い、散文と韻文の混淆形式を用いて描いて、最初期の実験的処女作。晩年まで後篇の執筆を切望していたが果たせなかった、セルバンテスの未完のライフワーク。

1711 七〇四頁 一〇〇〇〇円

② ドン・キホーテ [前篇]

岡村一訳 本田誠二注

騎士道物語に魅せられ《狂人》となった初老の男、遍歴の騎士ドン・キホーテの《荒唐無稽な》冒険譚。セルバンテスが、詩人・劇作家としての実績、兵士としての軍歴、捕虜生活、ナポリでの恋愛、自らの全てを素材として書き上げた、近代小説の《最初》にして《最高》の作品。

1712 八六頁 一〇〇〇〇円

③ ドン・キホーテ [後篇]

岡村一訳 本田誠二注

出版された『ドン・キホーテ』前篇を《登場人物》たちが読み、主従の冒険のすべてを知り、二人を周到に愚弄するが、《愚弄する者》と《愚弄される者》の境界はしだいに曖昧になり……《夢》と《現実》が交錯する、世界文学史上初、前代未聞のメタ・フィクション。

1714 八二九頁 一〇〇〇〇円

④ 模範小説集

樋口正義 十斎藤文子 十井尻直志 十鈴木正士 訳・注

哲学的議論を戦わせる犬、誰よりも真理に近い狂人——ありえない出来事がありそうに思わせる、短篇作家セルバンテスの技が光る珠玉の一二編。日々の暮らしに倦み疲れた人々に「罪のない気晴らし」を提供するためにセルバンテスが書き上げたという、短編小説集。

1718 七二五頁 一〇〇〇〇円

⑤ 戯曲集

田尻陽一 十三倉康博 十野村竜仁 十高橋博幸 十岡本淳子 他訳・注

捕虜生活から解放されたセルバンテスが最初に手がけたのは、自由を讃える演劇作品だった。当時の流行と異なる古典主義的な作風のために日の目を見ることはなかったものの、演劇を人生の《写し》と考えたセルバンテスが精魂を込めて書き上げた、戯曲十八作品を集成する。

188 一〇六九頁 一四〇〇〇円

⑥ パルナソ山への旅および詩作品

本田誠二訳・注

死期の迫るセルバンテスが自らの不遇な文学生活を空想的な叙事詩に託し、アイロニーを込めて懐古した一小『ドン・キホーテ』とも称される作品。当時の詩壇に対する批判を赤裸々に綴り、真の詩才を欠いた者たちへ「本の戦争」を仕掛けるという、著者の面目躍如たる文学的遺書。

181 一五三頁 八〇〇〇円

⑦ ペルシーレスとシヒスムンダの冒険

荻内勝之訳・注

死後出版になる隠れた大作。北欧の王子と王女が身分を隠し、巡礼となって、さまざまな障害を克服しながらローマを目指す大冒険譚。リアリズムから再び奇想に富む空想小説に回帰したこの作品を、作者自身は「スペイン語で書かれた最良の書ないしは最悪の書」と評している。

1712 五六〇頁 八〇〇〇円

フィクションの楽しみ

海外のもっとも新しい小説、実験的精神にあふれるフィクションの数々を最速の訳者によって贈る、新しい翻訳小説シリーズ。

四六判上製

もどつてきた鏡

アラン・ロブグリエ 芳川泰久訳

幼少期の思い出から、デビュー作『消しゴム』を執筆のころ、そして作家になってからの講演旅行まで——ヌーヴォー・ロマンの旗手として、実験的な文学を世に送りつづけてきた作家による、幻想的なフィクションの織り交ぜられた新感覚の自伝！

1810 三〇二頁 二八〇〇円

ある感傷的な小説

アラン・ロブグリエ 的場寿光訳

少女に対する偏愛！ 強迫的なまでにサディスティックな性癖!! 常軌を逸した過激で暴力的な描写によって、少女たちの監禁や虐待の場面をはじめ、露骨なまでに作家に取り憑いた妄想を描き出す、遺作となったへ大人のためのファンタジー。

1912 二二六頁 二五〇〇円

パッサカリア

ロペール・パンジエ 堀千晶訳

不可解な死をめぐる展開する謎めいたエクサリチュール。錯綜した言葉の森の果てにぼんやりと立ち現れる……破局……解体……ロブグリエやベケットの絶賛をあげた極北のヌーヴォー・ロマン。

216 一六〇頁 二〇〇〇円

ステュディオ

フィリップ・ソレルス 齋藤豊訳

パリの〈ステュディオ〉で暮らす主人公の日常に現われる謎めいたミイラ、そしてプログラム化された世界への糾弾、ヘルダーリンとランボオの人生をめぐってあふれだす豊饒なことば……。現代フランス文学の極北を歩む著者のポリアルティックな小説。

二五六頁 二五〇〇円

環

ジャック・ルーボ 田中淳一訳

ウリボ・メンバーならではの凝った構成からなる、「記憶の破壊」を試みた規格外の自伝的フィクション。写真家だった妻の早逝の空虚を埋めるべく書かれた大作〈ロンドンの大火〉シリーズの一冊にして、著者の代表作！ 第二十七回日仏翻訳文学賞受賞。

207 四八九頁 四〇〇〇円

傭兵隊長

ジョルジュ・ペレック 塩塚秀一郎訳

創作、殺人、地下からの脱走……。原作者ガスパールが、過去の傑作を真に創造しようとして、ダ・メッシーナの『傭兵隊長』に挑んだことで、破滅への序曲が始まる。作家の原点であり、作家の没後三十年に発見された、幻の〈処女作〉！

166 一一二頁 二五〇〇円

眠る男

ジョルジュ・ペレック 海老坂武訳

パリを彷徨する一人の青年の日常を細部にいたるまで活写しながら、六〇年代のフランスにただよう〈空気〉と〈孤独〉を描く、言語遊戯の奇才によるカフカの世界観を彷彿とさせる初期の秀作。

166 一九三頁 二二〇〇円

煙滅

ジュールジュ・ペレック 塩塚秀一郎訳

（い）段がない！ 失踪した男と失踪した（文字）をめぐる前代未聞のミステリー。E抜きで執筆され翻訳不可能とまで言われた、パリの実験文学集団（ヘウリポ）の最高の作家の幻の代表作、ついに刊行！ 小社創立三十周年記念出版。

101 三十二頁 三〇〇円

美術愛好家の陳列室

ジュールジュ・ペレック 塩塚秀一郎訳

一九一三年、一枚の絵に全米は騒然となった。そして、あふれかえる数々の名画。ドラクローワ、ルノワール……。フランスにおける実験文学の旗手が、美術市場を巻き込んだ大騒動をめぐる綴る鮮やかな中編。

一五四頁 一五〇円

人生 使用法

ジュールジュ・ペレック 酒詰治男訳

ウリポを代表する小説家があらゆる形式の物語と多彩な言語遊戯の収集の果てに、ルーセル、カフカ、ジョイス、ボルヘス等々からの《剽窃》を、極めて緊密な構成のうちに散種した前代未聞の破天荒な大長篇。第三回日仏翻訳文学賞受賞。

1010 七三三頁 五〇〇円

家出の道筋

ジュールジュ・ペレック 酒詰治男訳

なぜ書くのか、そしてどのように書いたのか？ 短篇小説、自伝的テキスト、ヌーヴォー・ロマン論、対話等、十九のテキストによって、『人生使用法』、『煙滅』によって知られる前代未聞の怪物的作家の知られざる一面を明かす。

117 二二七頁 二五〇円

Wあるいは子供の頃の思い出

ジュールジュ・ペレック 酒詰治男訳

少年時代の回想がときに微笑ましく、ときに哀切に綴られる「子供の頃の思い出」。虚構と現実、歴史と記憶とが（読むことによって）架橋される、鬼才ペレックの痛切な自伝的小説。

1311 二三四頁 二八〇円

ぼくは思い出す

ジュールジュ・ペレック 酒詰治男訳

ジョー・ブレインード「ぼくは覚えている」に想を得て、四八〇の「忘れられた、どうでもいい凡庸な思い出」を列挙しつづける、言語遊戯の作家ならではの「記憶」をめぐる奇妙な試み。戦後から六〇年代にかけてのフランス版枕草子!!

154 二九二頁 二八〇円

パリの片隅を状況中継する試み ありふれた物事をめぐる人類学

ジュールジュ・ペレック 塩塚秀一郎訳

コンセプチュアル・アート？ 小説？ 人類学？ パリ版路上観察学？ パリのサン＝シュルピス教会前の広場を三日間ひたすら描写し続けてみた——あまりにもありふれた、誰もが見落としてしまうような瑣末な日常を捉えようとする（フアクトグラフィ）の試み。

1810 一五二頁 一八〇円

『失われた時を求めて』殺人事件

アンヌ・ガレタ 高柳和美訳

完全犯罪という大いなる使命を抱いた主人公によって『失われた時を求めて』の登場人物たちが、ある一定のルールに基づいて、一人、また一人と殺されていく。実験文学集団ウリポ（潜在文学工房）の数少ない女性会員による、奇想天外な犯罪小説。

1811 二三四頁 三三〇円

秘められた生

パスカル・キニヤール 小川美登里訳

〈かつての愛〉から、異郷を求めて自己、外部へと〈出立〉する愛の物語。ことばと沈黙、秘事、セクシュアリティの蠱惑から人間の官能と〈再生〉に迫る愛のエクリチュール。

1311 五二頁 四八〇〇円

エクリプス

エリック・ファアユ 松田浩則訳

ありふれた日常から突如として連れ去られた人々は、海の向こうの閉ざされた世界へ〈北朝鮮〉で何を見たのか？ 拉致被害者たちとその家族、新聞記者、さらには北朝鮮工作員たちの運命を半世紀という時間の中に交錯させ、〈拉致〉という悲劇の核心に迫る。

1612 二四三頁 二五〇〇円

骨の山

アントワーヌ・ヴォロディーヌ 濱野耕一郎訳

SF? 恋愛小説? 《ポスト・エグゾチスム》的ロマンス! 革命の希望さえ失われた終末論的世界で、マリアとジャンの紡ぐ、もの悲しくも美しい夢想の書。複数のペンネームで独自の世界観を生み出し続ける奇才による、〈監禁学〉小説。

151 一八五頁 二二〇〇円

長崎

エリック・ファアユ 松田浩則訳

平凡な独身男シムラはある日、自宅の押し入れに見知らぬ女性が潜んでいるのを知る。彼女はいつたい何者なのか……。日本で実際に起きた出来事を題材に、現代社会に生きる人々の孤独な宿命を描きます、奇妙にして哀切な物語。

1310 一四二頁 一八〇〇円

1914

ジャン・エシノーズ 内藤伸夫訳

「せいぜい二週間で片がつくさ」一九一四年の夏、こういって男たちは戦地へ赴き、女たちに留守を頼んだのだが……。端正な構成をときに揺るがず、緊密にして軽妙な文体とアイロニーを併せ持つ作家が、〈第一次大戦〉下の日常を描く。

1511 一四四頁 二〇〇〇円

わたしは灯台守

エリック・ファアユ 松田浩則訳

《灯台を除けば、この風景の中で永遠に変わらないものなど何もないだろう》……世界から隔絶された男の魂の叫びと囁きを、陰鬱でありながらユーモラスに綴る表題作をはじめ、不条理で幻想的、ときに切なくノスタルジックな珠玉の九編を収録。

149 二四八頁 二五〇〇円

プラハのシヨパン

エリック・ファアユ 松田浩則訳

一九九五年のプラハ、シヨパンの幽霊と交信できるという女が現れた。メディアは囁し立て、レコード会社は音源化を画策する。真相の解明に乗り出したTVディレクターは信じがたい出来事に次々と遭遇し……。日常と非日常の境を巧みにゆるがすストーリーテラーの最新作!

226 四六判二七二頁 二五〇〇円

家族手帳

パトリック・モディアノ 安永愛訳

父になったパトリックは娘の出生が記録された「家族手帳」を手にする。しかし彼は自分がどこで生まれたのか、父母が何という名前だったのか、知らないのだった……。断片的記憶を手がかりに、失われた自らの〈出生〉を事実とフィクションを織り交ぜて物語る鮮烈な自伝的小説。

131 二二三頁 二五〇〇円

地平線

パトリック・モディアノ 小谷奈津子訳

青春時代の思い出の断片から浮かびあがる亡霊のようなシルエット。かつての恋人の足跡を求めて、パリの街を彷徨するひとりの男。かすかな記憶の糸が、四〇年の時を経て、恋人の生まれたベルリンへと誘う…… ノーベル賞作家モディアノによる記憶と夢想の物語。

152 一八七頁 一八〇〇円

あなたがこの辺りで迷わないように

パトリック・モディアノ 余田安広訳

両親の愛情に恵まれることになかった少年時代。苦悩に満ちた青年時代。そして、小説家となった現在の謎めいた交錯のうちに立ち現われる孤独な生の歩み。ノーベル賞作家の〈自伝〉的フィクションの新しい地平！

155 一七二頁 二〇〇〇円

デルフィーヌの友情

デルフィーヌ・ド・ヴィガン 湯原かの子訳

作家は名づけがたい闇の領域からやってくる。スランブに陥った新進作家デルフィーヌのまえに現れた、謎めいたゴースト・ライターL。エクリチュールを通して急速に親しくなっていく二人の女性をめぐる、恐怖のメタフィクション！

172 二五六頁 二二〇〇円

赤外線

ナンシー・ヒューストン いぶきけい訳

《わたし》を貫く男たちのあの瞬間を赤外線カメラで撮る……。世界を駆けめぐる女性写真家の自由奔放な男性遍歴。女の視点から男の性をあからさまに描き、フランスでセンセーショナルな話題を呼んだ、バイリンガル作家の過激な最新小説。

112 三五六頁 二八〇〇円

草原讃歌

ナンシー・ヒューストン 永井遼訳

ヨーロッパからの移民／土地を追われるカナダ・インディアン。自然を支配する西欧文明／自然との共存をめざす土着の文化。堅実な妻／奔放な愛人。相反する価値観にひきさかれたカナダ移民の四代にわたる波乱にとんだ家族の歴史を背景に、人間の再生そして救済を物語る。

131 二七六頁 二八〇〇円

モンテスキューの孤独

シャードルト・ジャヴァン 白井成雄訳

テヘランからイスタンブール、そしてパリへと逃れてきた少女は、孤独のうちに、十八世紀の思想家モンテスキューにあてて手紙を書く。いまわしい過去の世界を忘れられるだろうか、新しい国、新しい言葉のなかで……

101 二八三頁 二八〇〇円

トランジット

アブドウラマン・アリ・ワベリ 林俊訳

欧米列強による強権支配、部族対立による混乱から内戦へと、混迷を深めるジブチ現代史を背景に、「難民たち」「亡命者たち」の論理と心理を内側から活写する先鋭な政治小説。

191 一九三頁 二五〇〇円

涙の通り路

アブドウラマン・アリ・ワベリ 林俊訳

かつて西欧の帝国主義に翻弄された〈アフリカの角〉、ジブチ共和国。そこで生まれた双子の兄弟は、西欧とイスラムへ、別々の道を行っていたのだが…… 現代アフリカの政治と思想を、ヴァルター・ベンヤミンの生涯とエクリチュールに透して描き出す。

1510 二四〇頁 二五〇〇円

バルバラ

アブドウラマン・アリ・ワベリ 林俊訳

「死ぬ前に証言する、消滅する前に書く。」植民地時代の悪弊、帝国主義列強の支配、氏族独裁主義の迷妄と内紛……。血塗られたジブチの歴史の悲劇。混迷する日常のなかで格闘する、四人の若者の抵抗を描く実験的心理小説。
P.1 一七六頁 二〇〇〇円

マホガニー 私の最期の時

エドゥアール・グリッサン 塚本昌則訳

ある子供の胎盤とともに植えられた木。その根元には、成長し逃亡ののち統殺された子どもが、埋葬される。無数の声なき声とともに生きたマホガニーが、新たな歴史を語りはじめる……。カリブ海を代表する作家の闘争／逃走の叙事詩。
P.16 一三九頁 二五〇〇円

憤死

エドゥアール・グリッサン 星替守之訳

腐敗した政治、次々と運ばれる遺体、終わることなく倒れては起き上がる三人の失業者たち……シマワゾーに大きな影響を与え、グリッサンの代表作『カリブ海序説』の出発点ともなった、カリブ海文学の歴史的・創造的原点。
P.18 二八二頁 二八〇〇円

ハイチ女へのハレルヤ

ルネ・ドゥペストル 立花英裕・後藤美和子・中野茂訳

古くから伝わる《少女と魚の悲恋》の逸話をなぞるように絶世の美女の叔母に惹かれゆく少年を捉えた表題作をはじめ、規範と差別、偏見に苦悶するなかで邂逅するエロスを晴れやかに描く、現代ハイチ文学の傑作短編集。
P.186 二二〇頁 二八〇〇円

エクエ・ヤンバ・オー

アレホ・カルペンティエール 平田渡訳

サトウキビ畑で生まれ育ち、人妻と恋におち、殺人未遂をおこし、ウードゥー教につながる秘密結社にはいり、その結社間の抗争に巻き込まれてゆく青年メネヒルドの運命。あらゆる出来事が魔術的な性格をおびてゆくキューバの黒人社会を躍動的に描く著者のデビュー作。
P.219 二六四頁 二五〇〇円

石蹴り遊び

フリオ・コルタサル 土岐恒二訳

読者を共犯者に、旅の道連れに、仕立てあげること——『ユリシーズ』の実験的技法を用いながら、パリ、そしてブエノスアイレスを舞台に現代人の苦悩を描いた、ラテンアメリカ文学屈指の野心作。
P.168 五八〇頁 四〇〇〇円

モレルの発明

A・ピオイリカサレス 清水徹十牛島信明訳

二つの太陽、二つの月が輝く絶海の孤島での亡命者と若い女の奇妙な恋物語のうちに、現実とイマジネ、現実と虚構とを巡る形而上的思考を封印し、『去年、マリエンバートで』、『ピアノ・チューナー・オブ・アースクエイク』の靈感源ともなった、ボルヘスの盟友による異色の中篇小説。
P.197 一五〇〇円

テラ・ノストラ

カルロス・フエンテス 本田誠二訳

征服者スペインによって始まったメキシコ成立の物語を、神話・小説的な想像力で批判的に読解／創造する現代ラテンアメリカ小説の傑作。実在の人物たちと架空の登場人物たちを斬新な手法で錯綜させ、イペロアメリカ全体に影響を及ぼす征服者の悲劇を三部構成で物語る世紀の叙事詩！
P.165 二〇九頁 六〇〇〇円

わが人生の小説

レオナルド・パドゥーラ 久野量一訳

故国キューバから追放された文学研究者のフェルナンド・テリーは、十九世紀の詩人ホセ・マリア・エレディアの「回想録」にまつわる情報を得て、一時帰国したハバナで「回想録」の手がかりを探すのだが……。キューバ独立運動にまつわる事件をミステリー仕立てに描き出す傑作長編。

224 四九六頁 四〇〇〇円

連邦区マドリード

J・J・アルマス・マルセルロ 大西亮訳

妄想と現実が混ざりあった都市（マドリード）を背景に、嫉妬、偽装、計略、篡奪が織りなされる美しくも謎めいた物語。《洪水のように溢れ出る言葉の奔流》（バルガス・リヨサ）。

144 三四四頁 三五〇〇円

大売ります

ファン・パブロ・ビジャロボス 平田渡訳

元タコス屋テオは、アドルノの『美の理論』を座右の書として日常の諸問題に対処している。テオ、読書会を主催するフランチェスカ、八百屋の女将の三角関係、モルモン教徒、毛沢東主義者、ゴキブリの大量によってメキシコ・シティーでくりひろげられるメタフィクション。

206 三三三頁 三〇〇〇円

暮れなずむ女

ドリス・レスリング 山崎勉訳

長く家庭に束縛されていたケイトは、ある夏、海外で单身生活を送ることになった。新しい体験を経て、彼女が見出した自由とは？「目を開ければそこに戦争があり、憎み合う人間がいる。そういう時代にあつて人間とは何なのか？」本年度ノーベル文学賞作家の代表作。

二八五頁 二五〇〇円

古書収集家

グスタボ・ファベロンIIパトリアウ 高野雅司訳

ペルーの言語学者が北米産ミステリーと六〇年代南米小説の実験精神を融合させた驚異のデビュー作！《本書は野心的な小説だ……読むことを通じて作品の創造に加わり、この小説に秘められた緻密な意味と謎を享受することができる読者はこの本を忘れることはないだろう》（バルガス・リヨサ）。

1412 二八四頁 二八〇〇円

生存者の回想

ドリス・レスリング 大社淑子訳

破壊と暴力が蔓延する近未来都市に生きる老女のもとに、少女が届けられた。荒廃した現実と、「壁」の向こうに広がる異世界を往還しつつ、未来を信じる少女たちのサヴァイヴアルが今、はじまる……。

三三七頁 二二〇〇円

リトル・ボーイ

マリーナ・ペレサグア 内田吉彦訳

広島への原爆投下によって被爆し、その後数奇な体験を重ねた女性の半生をめぐる表題作をはじめ、傷つけられ、虐げられ、極限状態で苦悩する人々の不条理な姿を幻想的筆致のうちに描き出し、生の淵源をまばゆく照射する十三の物語。

165 二二九頁 二五〇〇円

シカスタアルゴ座のカノープス

ドリス・レスリング 大社淑子訳

今や野蠻と殺戮が支配する星シカスタ。この星の再生のために送り込まれたジョホリアだったが……。宇宙的視点から一つの星の命運を描き出す、現代社会への痛烈な批判にみちた、壮大な黙示録。

五二二頁 三八〇〇円

沈黙

ドン・デリーロ 日吉信貴訳

二〇二二年二月、原因不明の大停電が日常を覆った。電子機器の故障、ネットや電話など通信の途絶、暗闇と静寂、暴動に揺れる大都会。闇を怖れるように集った五人は何を思い、何を語り、何を求めるのか……？ 危機と昏迷の日常を抉る問題作。

21.6 一五〇頁 二〇〇〇円

ゼロK

ドン・デリーロ 日吉信貴訳

大富豪ロス・ロックハートは、難病に冒された愛妻の身体を凍結し、未来の医療に託そうと目論むが……。科学の進歩は肉体の復活と人類の更新、永遠への到達を約束しうるのはか。愛は絶対零度の世界でも生き長らえるのか。極限状況における人間の限界を問う異色の恋愛小説。

23.6 三二二頁 三〇〇〇円

ホワイトノイズ

ドン・デリーロ 都甲幸治 十日吉信貴訳

甚大な被害を及ぼす空中汚染事故、消費社会の猛威、情報メディアの氾濫、謎の新薬〈ダイラー〉の魔手、いびつな家族関係、来るべき〈死〉に対する底なしの恐怖……。現代アメリカ文学の鬼才の代表作にして問題作、そして今なお人間の実存を穿つポストモダン文学随一の傑作。

22.2 三三七頁 三〇〇〇円

ポイント・オメガ

ドン・デリーロ 都甲幸治訳

戦争、記憶、意識、宇宙をめぐる対話。砂の彼方に消える声。溶けてゆく時間。臆に閃く欲望。そして、少女は消えた……。虚空を領する絶対の静寂が、アメリカの光と闇、人間精神の孤独を穿つ。

19.1 一五六頁 一八〇〇円

これは小説ではない

デイヴィッド・マークソン 木原善彦訳

「これは小説か、あるいは究極の反小説か？」作家、芸術家を襲う病氣、狂気、不遇、死因……トリビアルな伝記的記述が積み重ねられていく、未曾有の「へ死の類別目録」小説にして、ジョイス、ペケットに比せられる実験的な「まつたく物語のない小説」。

13.10 三三〇頁 二八〇〇円

神の息に吹かれる羽根

シークリット・ヌーネス 杉浦悦子訳

愛を、そして言葉を不器用にしか表わすことのできない貧しい移民たちの不安と苦悩、そしてマンハッタンに生きるひとりの女性の孤独と焦燥を繊細な感覚で描く、全米で話題沸騰のアジア系作家のデビュー作。

二二.三三頁 二二〇〇円

ミッツヴァージニア・ウルフのマーモセット

シークリット・ヌーネス 杉浦悦子訳

第二次世界大戦前夜。ブラジルの密林からやってきた世界一小さなサル「ミッツ」。ウルフの小説、日記、書簡などを縦横に駆使して織りなす、ユーモアと悲哀にみちた新しいフィクションの試み。ウルフの伝記？ サルの伝記？

一八.七頁 一八〇〇円

ライオンの皮をまとうて

マイケル・オンダーチェ 福岡健二訳

橋から落ちる尼僧、受けとめる命知らずの男。失踪した大金持ち、あとを追うラジオ女優……。カナダの人気小説家がオムニバス映画のように切り替わる詩情豊かな場面のなかに織りなす官能と労働の物語。

三三.六頁 二八〇〇円

メルラーナ街の混沌たる殺人事件

カルロ・エミリオ・ガッダ 千種堅訳

ムッソリーニ政権下のローマ。成金街の宝石盗難―殺人事件。奮闘する敏腕警部。迷走する捜査劇。混乱。脱線。紛糾…… ジョイス、ブルースト、カフカに比肩する、イタリヤ・ポストモダン小説の金字塔。

1112 四二頁 三五〇〇円

地獄の裏切り者

パーヴェル・ベツベルシテイン 岩本和久訳

冷戦時代、ソ連の全住民を瞬時に天国の救済へと送る〈音響麻酔兵器〉がアメリカで開発され……平和な最終兵器をめぐる応酬を描く表題作ほか、モスクワ・コンセプチュアリズムのアーティストによる、混沌として軽やかなロシア・ポストモダン短編小説七編。

2112 二七頁 二二〇〇円

オレデシユ沿いの村

アナイト・グリゴリヤン 高田映介訳

飲んだくれて無職の父親。仕事に疲れきった母親。たくさんの幼い子供たち……社会が崩壊の瀬戸際にあつた一九九〇年代ロシアの郊外の村を、森と水辺の妖怪に憧れながら日々を暮らす少女の目から、郷愁と虚無感を込めて描き出す現代ロシア小説。

2118 三三五頁 三〇〇〇円

欠落ある写本 デデ・コルクトの失われた書

カマル・アブドゥウツラ 伊東一郎訳

騎馬民族オグズの内部で暗躍するスパイと、サファヴィー朝の王の影武者をめぐる逸話、無関係な二つの物語が一冊の写本の中で混ざり合う。チュルク叙事詩の最高傑作『デデ・コルクトの書』を題材に、現代アゼルバイジャンを代表する小説家―文学研究者が書き上げた歴史幻想小説。

1710 三七六頁 三〇〇〇円

叢書 エル・アトラス

列強支配からの独立後、アラブ・イスラムの伝統に根ざしながらも押し寄せる近代化の波のなかで《声》を発信し続けるマグレブ諸国。激動の政情に揺れる北アフリカの新しい文学を紹介する異色のシリーズ。

四六判上製

貧者の息子 カビリーの教師メンラド

ムルド・フェラウン 青柳悦子訳

フランス占領下のアルジェリア、カビリー地方で農民の子として生まれたメンラド。フルルは、貧しいながらも勉学に励み、努力して教師となる……子供時代の極貧、田舎の生活風景、家族への思いなどをふり返りながら、みずからの属する社会を負をもつて描きたす現代アルジェリア文学の古典。

252 二八〇頁 二八〇〇円

部族の誇り

ラシード・ミムニ 下境真由美訳

アルジェリア独立後、近代化の波は否応なしに辺境の村ジトウナの部族にも押し寄せてくる。伝統は変わり、生活は便利になり、村は豊かになっていくのか？ 創建時代からの村の物語を、そして部族の命運に関わるエル・マブルーク家の秘密を長老が物語る一大サーガ。

189 二二〇頁 二五〇〇円

シャアバの子供

アズーズ・ベガング 下境真由美訳

かつてフランスのリヨン郊外にあったスラム街《シャアバ》。幼少時にマグレブから移住してきた少年は、貧困家庭から勉学によって身を起し、大臣にまで登りつめ、作家となったが……。作家自身が体験した青春時代を描きだした代表作。

2112 二七七頁 二八〇〇円

もうひとつの『異邦人』 ムルソー再捜査

カメル・ダーウド 鵜戸聡訳

カミュの『異邦人』を反転させ、ムルソーによって殺害されたアラブ人の弟が紡ぐ《もうひとつの物語》とはなにか!? 世界でもっとも読まれたフランス小説をアラブ人の視点から創造し想像的に捉え返す衝撃作。

191 二二〇頁 二〇〇〇円

移民の記憶 マグレブの遺産

ヤミナ・ベンギギ 石川清子訳

単身でフランスにわたり、悲惨な住環境で働く《父たち》。自国の伝統と異国への統合の軋轢に苦しむ《母たち》。ふたつの文化のあいだで自らのアイデンティティを問い直す《子どもたち》。マグレブ移民たちが直面する困難な現実を重層的に可視化するノンフィクション。

289 二二七頁 二五〇〇円

ドイツ人の村 シラー兄弟の日記

ブアレム・サンサール 青柳悦子訳

前途有望な兄の突然の自殺に見舞われた弟は、遺品として兄の日記を手渡される。日記をめぐることに明らかになる兄の心境と自殺の動機、そしてナチスに加担した過去をもつ父親の存在……。孤独の闇と、人への信頼という希望の光を物語る傑作。

204 三四七頁 三〇〇〇円

ファティマ辻公園のアルジェリア女たち

レイラ・セパール 石川清子訳

ムスリム移民が多く暮らすパリ郊外の集合団地、行き交う母親たちがおしゃべりに興じるなか、ひとりの少女が女たちの内輪話に耳を傾ける……。《はざま》に暮らす女性たちの声を重層的に響かせる、著者の代表作。

237 二二八頁 二五〇〇円

大きな家

モアメド・デイブ
茨木博史訳

近刊

救世軍

アブデッラー・タイイア
鵜戸聡訳

近刊

叢書 エル・アトラス

現代ウィーン・ミステリー・シリーズ

ドイツ語圏におけるミステリーの一大中心地、ウィーン発、異色のミステリー・シリーズ。ウィーンっ子に人気の若手作家からおなじみの中堅作家までの野心的作、話題作をとりそろえ続々紹介。登場地名を網羅した、豪華ミステリー・ガイドマップ付き！

内容見本呈 四六変判並製

『ケルズの書』のもとに

ペーター・R・ヴィーニガー 松村国隆訳

中世の装飾写本『ケルズの書』が辿る教奇な運命と、そこに密かに刻まれた謎の文字。かたや現代のウィーンでひき逃げ事故を起こした男のもとに舞い戻る無傷の愛車——時空を超えて、二つの謎が出会うとき、明らかになる一つの《真実》とは？

二六頁 一八〇〇円

ペスト記念柱

ロツテ・イングリツシュ 城田千鶴子訳

突如失踪した親友フアニーの行方を追う女子大生のフロローは、失踪の謎を探るうち、身辺で錯綜する人間心理の迷宮に迷い込む。そう言えばウィーンは「心理学の街」だった。わたしは一体、誰？ フロー？ それともフアニー？

一九八頁 一四〇〇円

マン嬢は死にました。彼女からよろしくとの

ヘルムート・ツェンカー 上松美和子訳

私立探偵ミニー・マン嬢は身長一〇センチで体に障害を持つが、頭はとびきの切れ者。ある日二人の男にトランクに押し込まれ運ばれた先に待っていた依頼人は、指名手配中の女実業家だった。トレード・マークの（松葉杖）を武器に事件解明に大暴れ！

一八〇頁 一四〇〇円

きたれ、甘き死よ

ヴォルフ・ハース 福本義憲訳

白昼のウィーン中心街で、血液銀行社長とその恋人が狙撃される。続いて赤十字救護隊のドライバーが絞殺される。その背後には、（人命救助）を賭けて熾烈なライバル争いを繰り広げる二つの救急隊組織の存在が……。ドイツ・ミステリー大賞最優秀賞受賞作品。

二七八頁 一六〇〇円

消えた心臓

ユルゲン・ベンヴェヌーティ 唐沢徹訳

閑静な住宅街で犬や猫の惨殺事件が続発。人間までもが同じ手口の犠牲者となる。おまけに遺体からは心臓がえぐり取られていた。三流大衆紙の若きカメラマン、ブライトマイアーは、持ち前の好奇心と粘り強さで事件の裏側へと潜入。ある事実突きあたるが……。

二四頁 一五〇〇円

小さな花

エルンスト・ヒンターベルガー 鈴木隆雄訳

雪もよいの薄ら寒いある日、行方不明の幼女がドナウ河岸に死体となって漂着する。司法解剖の結果、児童虐待の事実が判明し、犯人の目星もすぐ付いたかに思えた。しかし事態は急転、重要参考人が次々と撲殺され……。

三〇九頁 一八〇〇円

カルトの影

クルト・ブラハルツ 郷正文訳

カルト教団に入信して消息を絶った資産家の娘の捜索を依頼されたが、信所員は、調査を進めるうち、そのセックスカルトに大いに関心をそそられ、グルの言葉に誘われるまま、甘美で異次元の女性の迷宮へと足を踏み入れる。娘捜しの件はどうなる？！

一七三頁 一四〇〇円

病んだハイエナの胃のなかで

マルティン・アマンズハウザー 須藤正美訳

ウイーンの地下鉄で偶然、謎のミステリー小説を手にしたのが運のつき。二十三区を順番に巡る先々で出没するキテレッツな人たちが、素っ頓狂な出来事、忍び寄る魔の手。可笑しくて、ちよつと不気味な異色のヘンテコ・ミステリー。

一八二頁 一四〇〇円

血のバセーナ 八人の女性ミステリー作家による短篇集

ミヒヤエル・ホルヴァート編 伊藤直子・須藤直子訳

美しい、青きドナウを流れる死体、それを引き上げるひとりの老女。中年男の怪しげな恋心。突如、失踪した声楽家の行方は？ 個性豊かなウイーンの女性作家たちが紡ぎだす、ミステリアスなタペストリー。

三〇七頁 一八〇〇円

全巻完結 全九冊セット定価一四、一〇〇円

アンデスの風叢書

編集 桑名一博 篠田一十 清水徹十 鼓直

破天荒な物語への意志、方法論のラディカルな探求、言語実験……今日の世界文学の最も熱い中心のひとつ、ラテンアメリカから吹き送られてきた言語の爆風。本邦でもようやく知られ始めた現代ラテンアメリカ文学の息吹きを伝える文学シリーズ。
四六判上製

ボルヘス、オラル

ホルヘ・ルイス・ボルヘス 木村栄一訳

ラテンアメリカ文学の名を世界に轟かせたあのボルヘスが、幻想的なまでの博識と苦いユーモアのうちに、半世紀にわたって追求し続けてきた書物、時間、そして不死性の問題へと肉迫する、故国アルゼンチンにおける最晩年の連続講演。
一七五頁 二〇〇〇円

天国・地獄百科

ボルヘス・ピオイ・カサールス 牛島信明・内田吉彦・斎藤博士訳

天国とはそして地獄とは何か。人類の宗教的感情とともに古いこの問いに答えるべく、アルゼンチンの二人の国際的作家が編んだ古今東西の文学者・哲学者・宗教家等の珠玉のアンソロジー。天国に憧れ地獄を恐れる全ての読書人に贈る奇書。
一七七頁 二〇〇〇円

光の世紀

アレホ・カルペンティエル 杉浦勉訳

カリブ海域にフランス大革命の理想を広めるべくハバナを訪れたビクトル・ユーグと三人のキューバ青年の波瀾にみちた運命を語りつつ、《革命》への限りない情熱と深い幻滅を描ききった現代キューバを代表する小説家の待望久しい大長篇小説。
三五〇頁 二五〇〇円

この世の王国

アレホ・カルペンティエル 木村栄一 十平田渡訳

ウードゥー教がいまだに根強く生き延び、圧制と反乱のうち続くカリブ海の島ハイチで、世にも数奇な運命を辿った一黒人奴隷の眼に映った新大陸の驚くべき現実。シュルレアリスト 魔術的レアリストとして知られる著者の初期の傑作中篇。
一六五頁 一五〇〇円

追跡

アレホ・カルペンティエル 杉浦勉訳

《かれ》はかつて革命のために暗殺を敢行した《英雄》。しかし、今は庇護なき逃亡者。次第に明かされる、魂の救済を希求する一人の男の血塗られた歴史とその末路。物語構造の中に大胆に《音楽》を編みこんだことでも有名な異色の中篇。
一六三頁 二〇〇〇円

すべての火は火

フリオ・コルタサル 木村栄一訳

侵犯する幻想……崩壊する日常……。洗練された実験的手法と幻想的な技巧を駆使して、日常と非日常が混濁する不可思議な小説空間を構築する現代アルゼンチン作家による、脱出不可能な八つの迷宮的短篇。
二四七頁 二三〇〇円

ファラブウフ

サルバドル・エリソンド 田澤耕訳

パタイユの『エロスの涙』に触発され、耐えがたい苦痛であると同時に恍惚的な愛の儀式を執拗に描きだした未聞の残酷怪奇譚。解剖学、写真術、心霊術、中国幻想、性愛術をめぐる言語が強迫的に読者を襲うメキシコのヌーヴオー・ロマン。
二〇四頁 二〇〇〇円

セルバンテスまたは読みの批判

カルロス・フエンテス 牛島信明訳

現代メキシコ最大の小説家が、近代の意味における《小説》そのものの創始者にしてその変革者セルバンテスを、その時代的文脈において、そしてとりわけジョイス等の現代の文学的冒険との関連において論じたセルバンテス論の白眉。

一四三頁 二〇〇〇円

ある遭難者の物語

G・ガルシア・マルケス 堀内研二訳

一九八二年度のノーベル文学賞を受賞し、コロンビアの、というよりは、今日のラテンアメリカ文学の代表者ともいえるべき著者が、あの『百年の孤独』の直後に発表した、英雄的冒険が『商売になる』時代の奇妙な苦い漂流譚。

一三九頁 一五〇〇円

泥の子供たち

オクタビオ・パス 竹村文彦訳

理性の時代Ⅱ《近代》にあつて、感性と情熱の言語Ⅱ《詩》とは何であったのか。シュルレアリスムの洗礼をうけたメキシコのノーベル賞詩人が、ロマン派からアヴァンギャルドに至る近代詩の中から《近代性の終焉》を剔抉する根源的詩論。

二八五頁 二八〇〇円

燃える平原

フアン・ルルフォ 杉山晃訳

灼熱の太陽が照りつける荒涼とした大地を舞台に、人間の愛憎、孤独、欲望、宿命を禁欲的な文体で描き、意識の奥深くに抗道を掘り込むが如き神話的な物語にまで昇華した、現代メキシコの伝説的な前衛作家の唯一の短篇集。

一三三頁 二〇〇〇円

フィクションのエル・ドラード

編集 寺尾隆吉

欧米を席卷したラテンアメリカ文学の〈ブーム〉から半世紀を経た現在も、政治と社会の混乱のなから、陸続と新しい小説、新しい小説家たちが現れつづけている。〈ブーム〉の巨匠たちから異色の新鋭まで、フィクションの未来を告げる新シリーズ。
四六判上製

襲撃

レイナルド・アレナス 山辺弦詠

非人道的な抑圧システムが張り巡らされたディストピア社会で、禁止された囁きを密告する主人公は、首都を離れ各地を肅清して回る旅に出る。その狙いはただ一つ、母親を探し出して亡き者にするという妄執的な渴望だった……。自伝的五部作の最後を飾る衝撃作。
16.11 二〇〇頁 二二〇〇円

英雄たちの夢

アドルフオ・ピオイ・カサレス 大西亮詠

カーニバルに沸くブエノスアイレスの夜、主人公は仲間たちとのどんちゃん騒ぎのすえに、意識もおぼろのまま、《仮面の女》と邂逅する……。ラプラタ幻想文学の旗手ピオイ・カサレスによる、ボルヘスが《世界で一番美しい物語》と評した傑作。
21.5 二九六頁 二八〇〇円

気まぐれニラ

ギジェルモ・カブレラ・インファンテ 山辺弦詠

魅力あふれる十六歳の少女エスタラとの運命的な出会いから愛の逃避行におよぶ主人公。ハバナの街を巡るひと夏のアヴァンチュールの終着点とは？ 永遠の《ニンフ》との思い出を言葉遊びに溢れた軽妙洒落な会話で描き出す、言葉の曲芸師カブレラ・インファンテの快作。
20.12 三三三頁 三〇〇〇円

時との戦い

アレホ・カルペンティエール 鼓直・寺尾隆吉訳

亡くなつたはずの館主の生涯をその死から誕生へと遡る傑作「種への旅」をはじめ、「夜の如くに」「聖ヤコブの道」の三篇に、「選ばれた人びと」「闇夜の祈禱」「逃亡者たち」「庇護権」の四篇を加えた決定版カルペンティエール短篇集。
20.12 一九二頁 二二〇〇円

バロック協奏曲

アレホ・カルペンティエール 鼓直訳

銀鯨で成り上がったメキシコ生まれの主人と従者の出立から始まる物語はやがて、街頭を轟かす謝肉祭の喧噪、ヴィジュアルディのオペラ、アームストロングのトランペットへと、変幻するテンポのうちに秩序は多元的に錯綜していく……。響きわたる雑多な楽音で読者を圧倒する傑作。
17.1 一六八頁 一八〇〇円

方法異説

アレホ・カルペンティエール 寺尾隆吉訳

太平洋と大西洋の両方に海岸線をもつ架空の国を舞台に、独裁者〈第一執政官〉を主人公に据え、デカルト的理性的パロディとして「啓蒙的暴君」というラテンアメリカ世界の類型的独裁者の墮落・腐敗を象徴的に描き出す、カルペンティエール随一の傑作長篇。
16.10 三三八頁 二八〇〇円

対岸

フリオ・コルタサル 寺尾隆吉訳

ボルヘスと並ぶ、アルゼンチンを代表する作家による幻の処女短編集。怪奇・幻想的な作品からSF的な作品まで、フィクションと現実のあいだで戯れる珠玉の十三編。貴重な講演「短編小説の諸相」もあわせて収録。
14.2 一八四頁 二〇〇〇円

八面体

フリオ・コルタサル 寺尾隆吉訳

日常のなかに突如として闖入してくる《鮮烈な夢のイメージ》を作品へと昇華させるコルタサルが、実験的な語り的手法を用いて幻想と日常の交錯を多面的に描き出した傑作短篇八篇を収録。実践的な短篇小説論(『短篇小説とその周辺』)を併録。
14.8 二三五頁 二二〇〇円

夜のみだらな鳥

ホセ・ドノソ 鼓直訳

畸形児《ボーイ》の養育を託された名家の秘書ウンベルトは、宿病の胃病で病み衰え、使用人たちが余生を過ごす修道院へと送られ悪夢のような自身の伝記を語り始める……。『百年の孤独』と双璧をなすラテンアメリカ文学の最高傑作。
18.2 五八六頁 三五〇〇円

帝国の動向

フェルナンド・デル・パソ 寺尾隆吉訳

うち続く動乱に揺れるメキシコ近代史に束の間君臨したマクシミリアン皇帝夫妻の辿った悲劇的運命を、史実とフィクションを織り交せて描き出したメキシコ文学史に冠たる記念碑的大長篇! ラテンアメリカ文学に厳然と聳え立つ《壮麗なる言葉の城》!
21.1 八六六頁 五〇〇〇円

ガラスの国境

カルロス・フエンテス 寺尾隆吉訳

国境を接するメキシコとアメリカ。(こちら側)と(あちら側)の人間たちが生きる世界を九つの物語によつて多層的に描き出し、登場人物たちの声を響かせ、祖国《メキシコ》を高らかに謳いあげる、現代版《人間喜劇》。
15.3 三四二頁 三〇〇〇円

境界なき土地

ホセ・ドノソ 寺尾隆吉訳

大農園主に支配された小村を舞台に、性的(異常者)たちの繰り広げる奇行を猟奇的に描き出し、《錯綜した神経症的世界と豊かな文学的想像力》(バルガスII ジョサ)と評された、チリの《グロテスク・リアリズム》の知られざる傑作。
13.7 一七一頁 二〇〇〇円

案内係

フェリスベルト・エルナンデス 浜田和範訳

暗闇で目が光る能力を手にした語り手が密かな愉しみに興じる表題作をはじめ、シユベルヴィエルに絶賛された自伝的作品「クレメンテ・コリングのころ」などを収録する、《ブーム》の作家たちに多大な影響を与えたウルグアイの奇才による日本版オリジナル短篇集。
19.6 三〇二頁 二八〇〇円

ロリア侯爵夫人の失踪

ホセ・ドノソ 寺尾隆吉訳

若さ、富、美貌すべてを備えた侯爵夫人に唯一欠けていたのは、夫との(愛の達成)だった。未亡人となりながらも快樂を追求し続け、さまざまな男性を経験するプランカにおとずれるものとは……? 軽妙なタッチで人間の際限ない性欲を捉え、その破壊的魔力を歪に描き出す、ドノソの官能小説! 17.1 一六九頁 二〇〇〇円

ライオンを殺せ

ホルヘ・イバルグエンゴイティア 寺尾隆吉訳

恐怖政治で権力を掌握する独裁者が治める国アレバの《真の独立》は成し遂げられるのか? 陰謀、クーデター、暗殺計画…… さまざまな思想が入り乱れるハードボイルド小説さながらの「政治喜劇」。
18.10 二五五頁 一五〇〇円

場所

マリオ・レブレロ 寺尾隆吉訳

見ず知らずの部屋で目覚めた男は、そこから脱出しようと試みるも、行く先々は見知らぬ部屋があるばかり。迷宮のような《場所》を彷徨するうちに、男は悪夢のような数々の場面に立ち会ってゆく……。カルト的な人気を誇るウルグアイの異才レブレロの代表作。

173 一九二頁 二〇〇〇円

吐き気

オラシオ・カステジャーノス・モヤ 浜田和範訳

祖国エルサルバドルへの呪詛ゆえに作者の亡命さえ招いた表題作に加え、虚無的な生を描き出す「フランシスコ・オルメド殺害をめぐる変奏」、罪なき市民が暴力の渦に巻き込まれる「過ぎし嵐の苦痛ゆえに」を取めた、鬼才の物語世界を凝縮した中・短篇集。

206 二〇〇頁 一三〇〇円

別れ

ファン・カルロス・オネッテイ 寺尾隆吉訳

語り手の視点から言葉巧みに読み手作品世界へと誘う、作者自身が偏愛した秀逸な表題作のほか、モンテビデオで起きた実話を愛憎と復讐の物語へと変貌させた「この恐ろしい地獄」、婚礼というオプセッションに取り憑かれた狂友を幻想的に描く「失われた花嫁」の三篇を収録。

1310 一六八頁 二〇〇〇円

犬を愛した男

レオナルド・パドウーラ 寺尾隆吉訳

世界革命を夢見るレフ・ダヴィドヴィチ（トロツキー）の亡命、暗殺者モルナルに成り代わるスペイン人民戦線の闘士メルカデル、そして舞台はメキシコへ。イデオロギーの欺瞞とユートピア革命が打ち碎かれる歴史Ⅱ物語を力強い筆致で描く、現代キューバ文学の金字塔。

1912 六六四頁 四〇〇〇円

燃やされた現ナマ

リカルド・ピグリア 大西亮訳

ブエノスアイレス郊外、命知らずの四人の若者たちが現金輸送車を襲撃する。大金の《現ナマ》をせしめた強盗団は警察からの逃走をはかり、籠城作戦のすえに取った行動とは……？ 《社会を震撼させた衝撃的事件》をフィクションの力で再構築する傑作。

222 二二九頁 二四〇〇円

人工呼吸

リカルド・ピグリア 大西亮訳

迫り来る死の相貌を《不在》のもとに刻印し、祖国の未来を照射する書簡体による第一部から、《語りえぬもの》について語られる第二部を通して、封じ込められた歴史の運動に息を吹き込む現代アルゼンチン文学の傑作。

159 三二八頁 二八〇〇円

圧力とダイヤモンド

ビルヒリオ・ピエーラ 山辺弦訳

競売でダイヤモンドを競り落としてしまった主人公は、惑星規模の陰謀に巻き込まれてしまう。《圧力者》、ルージュ・メル、そして人工冬眠計画とは？ SF的な想像力によって現代世界を皮肉とユーモアで描き出す、キューバの現代作家の代表作。

1712 一八四頁 二〇〇〇円

レオノーラ

エレナ・ポニアトウスカ 富田広樹訳

精霊が見える不思議なヴィジョンの持ち主のレオノーラは、マックス・エルンストとの運命の出会いによってめくるめく冒険へと投げ出される…… 不世出の画家レオノーラ・キャリントンの生涯を現実とフィクションのあわいに描き出す傑作長篇。

2012 五五二頁 三五〇〇円

ただ影だけ

セルヒオ・ラミレス 寺尾隆吉訳

鮮烈な描写と圧倒的な語り技法のもと、ニカラグアでの歴史的事件の裏側をフィクションの力によって再構築する南米文学の新たな傑作。ヘアロニーと距離感、内面性とユーモア。ラミレスは銅のような三面記事から言葉と想像力で黄金を生み出す錬金術師だ。(C・フエンテス)。134 三三四頁 二八〇〇円

グロサ

ファン・ホセ・サエール 浜田和範訳

一九六一年十月二十三日の朝、二人の青年アンヘル・レトとマテマティコが〈街〉の目抜き通り二十一ブロックを一時間ほど共に散歩する。両者とも出席が叶わなかった詩人ワシントンの誕生日会の詳細を耳にしたマテマティコは、散歩のさなかその真相をレトに語って聞かせるが…… 232 二七三頁 三〇〇〇円

孤児

ファン・ホセ・サエール 寺尾隆吉訳

ボルヘス以後のアルゼンチン小説の代表者が、無から生まれ、親もなく、名前もない、この世の孤児となった語り手を通して、現実と夢幻の狭間で揺れる存在の儚さを描き出す破格の物語。(現実世界の強烈な存在感。サエールは現代世界の超重要作家になるだろう)(ロプ・グリエ)。135 一八六頁 二二〇〇円

傷痕

ファン・ホセ・サエール 大西亮訳

妻殺しの容疑者が取調中に窓から身を投げた……。〈出口なし〉となったアルゼンチンの政治状況を背景に、〈傷〉を抱えた登場人物たちの複数の視点からひとつの事件を浮かび上がらせた初期の傑作長篇。

172 三三八頁 二八〇〇円

マイタの物語

マリオ・バルガス・ジョサ 寺尾隆吉訳

一九五八年、ベルー山間部でこく小規模な反乱があった。とある作家はこの事件を小説で再現しようと、事件の証言者たちを辿ってインタビューを試みるのだが……。ノーベル賞作家によるメタ・フィクション。

181 三三六頁 二八〇〇円

コスタグアナ秘史

ファン・ガブリエル・バスケス 久野量一訳

ジョゼフ・コンラッドが描き出した架空の国コスタグアナ、それは歪曲されたコロンビアの歴史だった……。『ノストロモ』創作の陰に隠蔽されたコロンビア人の存在を浮かび上がらせ、語られなかった物語、歴史を南米側から暴き出すコロンビア文学の新星が放つ傑作長篇。

161 三二八頁 二八〇〇円

廃墟の形

ファン・ガブリエル・バスケス 寺尾隆吉訳

ガイタン暗殺にジョン・F・ケネディ暗殺が関係する……。すべてに陰謀を嗅ぎつける謎の男、カルロス・カルバージョを通してコロンビアの歴史に迫り、入念な調査を元に過去あまりにも深い闇をスリリングに描き出す。

217 四九〇頁 三五〇〇円

証人

ファン・ビジョーロ 山辺弦訳

ヨーロッパの大学で文学を研究するフリオ・バルディエソはサバティカル休暇を取得し、二十四年ぶりに祖国メキシコへと帰還する。従妹ニエベスとの淡い記憶、親族との再会、旧友との思いがけぬ邂逅を経るうちに、無数の思惑に囲まれたフリオは不穏な事件に巻き込まれていく……。

237 五九四頁 四〇〇〇円

イスパノ・アメリカ文学関連書

méme / borges [メム・ボルヘス]

牛島信明十鼓直十土岐恒二編

執筆||ボルヘス/M・プリヨン/G・ジュネット/ジョン・バース他 物語ることへの情熱と物語の方法のラディカルな探求とによって驚くべき小宇宙をつくり上げるアルゼンチンの前衛作家ボルヘスへの最良の入門書。

A5判並製七二頁 一五〇〇円

ブエノスアイレスの熱情 初期詩集成 1923-1929

ホルヘ・ルイス・ボルヘス 斎藤幸男訳

「ブエノスアイレスの明りよ、／お前だけが友だった、／この街の明りでわたしの生と／死を歌うのだ。／色褪せぬ大いなる街よ、／わたしの生が知る／唯一の音楽よ。」ながいヨーロッパ滞在から戻った、後の学匠詩人||小説家の初期の三詩集を完訳、集成する。

四六判三六頁 二八〇〇円

闇を讃えて

ホルヘ・ルイス・ボルヘス 斎藤幸男訳

《私は今すべてを忘れようとする。私の中心に、私の代数学、私の鍵、私の鏡に達するのだ。私は誰か、今それを知らるだろう》初期三詩集の刊行から四十年、アルゼンチンの傾学が満を持して放った第四詩集。本邦初訳。

四六判一七七頁 二〇〇〇円

エル・オトロ、エル・ミスモ

ホルヘ・ルイス・ボルヘス 斎藤幸男訳

古今東西の文学作品のなかを、そして現実と虚構のあいだをたくみに往還する、二十世紀文学の《魂》とも言うべき著者の第五詩集。他者は自身であり、自身は他者であり……。

四六判二九七頁 二五〇〇円

疎外と叛逆 ガルシア・マルケスとバルガス・ジョサの対話

寺尾隆吉訳

厳密な理論派のバルガス・ジョサと、諧謔的ユーモアを繰り出すガルシア・マルケス、現代ラテンアメリカ作家の頂点二人による若かりし頃の貴重な対話。「アラカタカからマコンドへ」(バルガス・ジョサ)、「バルガス・ジョサへのインタビュー」も収録。

143 四六判一七六頁 一八〇〇円

ガルシア・マルケス論 神殺しの物語

マリオ・バルガス・ジョサ 寺尾隆吉訳

ガルシア・マルケスの小説世界はいかなるものか、絶頂期にある作家の作品ひとつひとつを丁寧に読み解いてみせるのみならず、自身の創作の方法についても明かした壮大な文学探求の試み。

221 四六判五三八頁 四五〇〇円

水を得た魚 マリオ・バルガス・ジョサ自伝

マリオ・バルガス・ジョサ 寺尾隆吉訳

ノーベル賞作家にして政治家という、二つの貌をもつ著者が、幼年時代から職業作家になるまでを回想する《青春期》、そしてペルー大統領選挙立候補から僅差での敗北に至るまでを描く《壮年期》を交互に語る、小説的自伝。

163 四六判五〇八頁 四〇〇〇円

ブラジル現代文学コレクション

編集 武田千香

三十代の新鋭から巨匠にいたるまで、いまだわが国では知られることのすくない(現代ブラジル文学)の力強く熱い息吹きを伝える小説コレクション。

四六判上製

乾いた人びと

グラシリアノ・ハーモス 高橋都彦訳

搾取に喘ぐ牛飼いとその一家は、干魃により土地を追われ、焼けつくような太陽のもと、荒野へと歩みを進めるのだが……。沈黙の世界に住まう登場人物たちの孤独と渴きを巧みに描き出す、ブラジル・モデルニズモを代表する作家の心理小説。

222 一七三頁 二〇〇〇円

最初の物語

ジョアン・ギマランイス・ホーザ 高橋都彦訳

古代から現代の言葉にいたるまで広範な語彙を駆使し、新語の創造、あるいは語順の転倒や独特な電報的な構文など、さまざまな言語的革新に挑む「ブラジルのジェイムズ・ジョイス」が描く、「死」と「不滅」についての二の物語。

185 二七二頁 二二〇〇円

老練な船乗りたち

ジョルジ・アマード 高橋都彦訳

虚実をないまぜにした巧みな文体をあやつり、神秘的で怪しげなバイーアの下町を、ボヘミアンや娼婦らの強烈な個性とともに描いた「キンカス・ペーロ・ダグアの二度の死」他一篇を含む、現代ブラジルの世界的作家ジョルジ・アマードの代表作。

17・11 三三二頁 三〇〇〇円

三人の女たち

リジア・ファグンジス・テーリス 江口佳子訳

一九六〇年代後半の政治的・社会的騒乱の最中、異なる社会階層を生きる女性たちがそれぞれの《声》を響かせあう、ポリフォニックな物語。家父長制と軍事政権が支配する社会における女性の苦悶を鋭く描き出す、ブラジル女性作家の代表作。

229 二六九頁 三〇〇〇円

あけましておめでとう

フーベン・フォンセッカ 江口佳子訳

大都会リオデジャネイロを舞台に暴力と性を描き、ブラジル軍事政権から発禁処分をうけた問題作。大晦日を祝うパーティーを貧困の憎悪が破壊する表題作「あけましておめでとう」等、十四篇を収録。

18・12 二五六頁 二五〇〇円

家宝

ズウミール・ヒベイロ・タヴァーリス 武田千香訳

二〇世紀後半のサンパウロ。長年判事を務めた夫の死後、一人残された老女マリア・ブラウリアは、愛人からもらった宝石を胸に抱きながら自らの過去を振り返る……。人間の嘘やいつわり、社会の擬装や欺瞞を、ブラジル文学を代表する女性作家があげく。

17・12 一四二頁 一八〇〇円

エルドラードの孤児

ミウトン・ハトウン 武田千香訳

舞台はアマゾンの中流域「エルドラード」。コルドヴィウは、急死した父親の事業を継ぐが労働に意識は向かず、一夜をともにしたインディオの女を忘れられずにいた……。現代のブラジル文学を代表する作家が描く、文明と神話的世界が交錯した愛の物語。

17・11 一八八頁 二〇〇〇円

九夜

ベルナルド・カルヴァーリーヨ 宮入亮訳

第二次世界大戦勃発間近の一九三九年八月二日、ヴァルカスの独裁政権が支配し不穏な空気が漂うブラジルの奥地で、ルース・ペネディクトに師事していた人類学者が村へ戻っていくのだが……。現実とフィクションの裂け目から、若き人類学者の死の真相を暴く。

2012 二五七頁 三〇〇〇円

ニホンジン

オスカー・ナカザト 武田千香訳

一九〇八年六月一八日、ブラジルのサントス港に、七八一人の労働移民を乗せた一隻の船「笠戸丸」が到着する――。後に世界最大の日系人コミュニティが形成されることになるかの地で、主人公ヒデオ・イナバタは、農場オウロ・ウエルジで身を粉にして働くことになるのだが……。 NS 2012 二七頁 二〇〇〇円

曲がった鋤

イタマル・ヴィエイラ・ジュニオール 武田千香十江口佳子訳

二十世紀後半、奴隷制が色濃く残るバイーア州奥地のアグア・ネグラ農場、この地で暮らすふたりの幼い姉妹は、祖母が隠していたナイフを見つけ、舌にあってがって……。現代のアフロ・ブラジル作家が描き出す《傷跡》の物語。

2212 三三三頁 三〇〇〇円

ブラジル文学傑作短篇集

アニーバル・マシャード・マルケス・ヘーロほか 岐部雅之編

逃げだしたいと口にする褐色の肌の女と、それを引き止めようとする男をみずみずしい筆致で描き出すマルケス・ヘーロ「扉を開けてくれたステラ」をはじめ、人種・階級・ジェンダーを問い直し、二十世紀ブラジル社会の活力と喧噪を伝える全十二篇。

223 二〇七頁 二〇〇〇円

現代ブラジル文学関連書

めずらしい花 ありふれた花 ロタと詩人ピシヨップとラ

ラジルの人々の物語 カルメン・L・オリヴェイラ 小口未散訳

二十世紀半ば、ブラジル。リオデジャネイロの新公園造成を発案したロタとアメリカの桂冠詩人エリザベス・ピシヨップとの十六年にわたる愛と別れ。先駆的女性の一生を蘇らせ詩人の飛躍を促したブラジル生活を、ロタの親友たちの証言をもとに描く評伝。

162 四六判三五二頁十別丁図版一六頁 三五〇〇円

女囚たち ブラジルの女性刑務所の真実

ドラウジオ・ヴァレーラ 伊藤秋仁訳

近刊

批評の小径

四六判上製

ロートレアモンとサド

モーリス・ブランシヨ 石井洋二郎訳

作品の読解と批評を創造行為のうちに共鳴させ、批評に新たな地平を切り拓いたモーリス・ブランシヨ。ロートレアモン／サドの作品の分析をとおして、生成過程にある開かれた作品経験を《創造的批評》として実践してみせる画期的著作。
236 三三三頁 三五〇〇円

文学の政治

ジャック・ランシエール 森本淳生訳

エクリチュールの民主主義が成立する近代以降、《文学》によってラディカルな次元で可能となる既存の「分配」分割（バルタージュ）への異議申し立てを提示する、メタ・ポリティークの詩学。
236 四〇二頁 四二〇〇円

マラルメ セイレーンの政治学

ジャック・ランシエール 坂巻康司・森本淳生訳

詩を未来の宗教に変え、出現と消滅とを分節化するフィクションの力とは何か。エクリチュールによる〈共同体〉を作り出すことを夢見た詩人を稀代の哲学者が詳細に解読する。
145 一三三三頁 二五〇〇円

アイデンティティ断片、率直さ

ジャン＝リュック・ナンシー 伊藤潤一郎訳

行政による管理が全般化する社会において、いかにしてアイデンティティを思考することができるのか。フランスの統合と移民の規制をはかるサルコジの政策に抗して執筆された、アイデンティティの可能性の条件を開く十二の断片。
20・12 一四〇頁 二〇〇〇円

モーリス・ブランシヨ 政治的パッション

ジャン＝リュック・ナンシー 安原伸一朗訳

ブランシヨの「転向」とは？ 一九三〇年代から戦中にかけての自らの活動をあけすけに語るブランシヨの書簡、さらに同時期のブランシヨについてのデオニス・マスコロの書簡、そしてナンシーの長文の解説からなる、同時代人たちの証言。
206 一七四頁 二〇〇〇円

氷山へ

J・M・G・ル・クレジオ 中村隆之訳

二〇〇八年にノーベル文学賞を受賞したル・クレジオの思考と実践に大きな影響を与えた孤高の詩人アンリ・ミシヨールの至高の詩編「氷山」について、多読むことは旅すること。だと語るル・クレジオが、包括的かつ詩的に綴る珠玉の批評「エッセイ」。
153 一四三頁 二〇〇〇円

オペラティック

ミシェル・レリス 大原宣久・三枝大修訳

作家／民族学者／美術批評家／闘牛愛好家などさまざまな顔をもつレリス。彼はオペラに何を見て、何を得たのか？ 幼少期からオペラに親しみ、深い影響を受けてきた作家の未発表草稿をまとめた、異色のオペラ論。レリス美学の精髓がここに！
14・10 二六五頁 三〇〇〇円

日本のうしろ姿

クリスチャン・ドゥメ 鈴木和彦訳

日本について何の予備知識も持たないフランス人作家が、ある日突然、京都という町が見せる日本のイメージに直面することになった。私たちの日常生活にまぎれこんだ何気ない瞬間の数々が、新たな輝きを帯びて立ち現われる、異色の日本論。

1311 二六〇頁 二〇〇〇円

みどりの国 滞在日記

エリック・ファーク 三野博司訳

注目のフランス人作家が、南は屋久島から北は宗谷岬まで、その眼と耳と肌で日本各地を味わいながら、所々に隠れた異国の神秘に触れてうつろう内面を、率直に綴った美しい「日記」。著者への最新インタビューを収録。

1422 一九五頁 二五〇〇円

夢かもしれない娯楽の技術

ボリス・ヴィアン 原野葉子編訳

現実と虚構のあわいで軽やかに綴られたエッセイを、「くらす」「でかける」「まなぶ」の三部に収録。ささやかな日々の暮らしとびきり贅沢に過すための、突拍子もないアイデア満載のエッセイ集。

1499 二五五頁 二八〇〇円

フロベールにおけるフォルムの創造

ジャン・ピエール・リシャール 芳川泰久・山崎敦訳

「恋する者は、液化するまえに、愛のなかでねばつく。」「生地」と「ねばつくもの」をめぐり、「フロベールの存在」の様態を鮮やかに描き出す。二十世紀の文学批評を一変させた主題論的批評の核心的書物。

1311 二四〇頁 三〇〇〇円

ロラン・バルト 最後の風景

ジャン・ピエール・リシャール 芳川泰久・堀千晶訳

波状模様（モアレ）、きらめくもの、ニュアンスといったバルトが愛したモチーフのあいだを、軽やかに飛翔し、この大いなる「変容の思想家」に迫る、テーマ批評の第一人者による、ロラン・バルト入門。

0812 二〇〇頁 二〇〇〇円

記憶は闇の中の狩りを好む

ジェラルド・マセ 桑田光平訳

森の中で一瞬の闇ののち、獲物を捕らえる狩人。写真家。ひとたび目を開ければ、そこに残るのはただ、鮮やかに仕立て上げられた死者たち。詩人であり、写真家でもある著者による、記憶、死者、神話、作家たちの交錯する、幻想的でシュルレアリスティックな写真論。

1311 一六八頁 二〇〇〇円

つれづれ草

ジェラルド・マセ 桑田光平訳

マンディアルグに「闇のなかの、孤独で美しい詩」と称賛され、デビューした詩人が、博覧強記ぶりを発揮しながら、哲学から文化人類学にいたるまで、古今東西の事物を魔力を帯びた断章で綴る。

1312 二九〇頁 二八〇〇円

帝国の地図 つれづれ草 II

ジェラルド・マセ 千葉文夫訳

シュルレアリスム的な詩でデビューした作家・写真家が、ボルヘスの『創造者』に想を得て、書物、映画、写真を巡るあらゆる主題を追通し、簡潔な言葉で描き出す（簡潔（シンブル）な思索）シリーズの第二巻。

1312 一八二頁 二〇〇〇円

オーダーメイドの幻想

ジェラール・マセ 鈴木和彦訳

写真家、作家、エッセイストとして独自の作品を生み出してきた著者が、世界各地を旅しながら、夢と幻、文学と幻想のあわいを追憶する、紀行エッセイ。

204 一六八頁 二〇〇〇円

ラマンタンの入江

エドゥアール・グリッサン 立花英裕・工藤晋・廣田郷士訳

カリブ海を代表する作家が生まれ育ち、少年時代の記憶を留めるラマンタンの入江。そのさざ波から銀河へと想像力を共鳴させながら、支配と困難に満ちた〈世界〉を思考する、〈ゆらぎ〉をめぐる詩的評論。

19.12 二七三頁 二八〇〇円

ポストメディア人類学に向けて 集会的知性

P・レヴィ 米山優十清水高志十曾我千亜紀十井上寛雄訳

実現されるべき未来がここにある——。人類学的スケールの視野をもって、二一世紀におけるポストメディア時代の到来を予感させる、マーシャル・マクルーハンの「メディア論」以降、最高の情報哲学の書。

153 三六二頁 四〇〇〇円

エコクリティシズム・コレクション

四六判上製

他火のほうへ 食と文学のインターフェイス

結城正美

汚染、エコロジーブーム、失われる季節感……。〈良〉に関する意識が問われる現在、石牟礼道子、田口ランディ、森崎和江、梨木香歩の四人の文学者との対話を通じて、食と人間の関係、人間と環境の関係の再考をうながす新しい文学批評。
124頁 二六七頁 二八〇〇円

感応の呪文（人間以上の世界）における知覚と言語

デイヴィッド・エイブラム 結城正美訳

言語のない非人間の世界、自然に知性を見る時、世界は大いなる多義性に満たされている。エコロジスト、思想家である著者が身体的に野生とかわることで「生きていく大地との関わり合いから流れる情熱、困惑、喜び」について語りつつ「高水準の理論的・学術的精度を維持」した議論を展開する試み。
179頁 四六頁 四五〇〇円

〈故郷〉のトポロジ― 場所と居場所の環境文学論

喜納育江

言葉のない場所に言葉を、生命のない場所に生命を感じとる。アメリカ先住民や沖縄の民らの表現を媒介に、重層化する彼らのアイデンティティを問う清冽な環境文学論。
117頁 二三四頁 二五〇〇円

失われるのは、ぼくらのほうだ 自然・沈黙・他者

野田研一

自己投影としての自然ではなく、他者としての自然。近代文学の流れのひとつを継承するネイチャーライティング（エマソン『自然』、ソロー『ワォールデン』、宮崎駿『もののけ姫』、藤原新也『東京漂流』など）を概観し、その〈自然／他者〉と〈自己〉との交感を多面的に考察する。
163頁 三七三頁 四〇〇〇円

動物とは「誰」か？ 文学・詩学・社会学との対話

波戸岡景太

古川日出男、大澤真幸、管啓次郎の三人の表現者との白熱の対話！ 人間に限りなく身近でかつ遠い他者『《動物たち》』を通して『《文学》』と『《人間》』の現在を問い直す『《クリティカル・アニマル・スタディーズ》』の実践。
124頁 二〇〇頁 二二〇〇円

いつかはみんな野生にもどる 環境の現象学

河野哲也

メキシコのカエチエン・イツア、パタゴニア、モニユメント・バレー、ヨセミテ渓谷、コルシカ島、そしてフクシマ……。その土地、その時間のなかでの経験を、そして自然と文明のあり方を、エマソン、ソロー、ミューア、和辻哲郎、串田孫一、林京子らの作品を読み解きながら考える新しい哲学。
166頁 二七四頁 三〇〇〇円

ピンチョンの動物園

波戸岡景太

壮麗無比なピンチョン文学の奇想天外なサブキャラクター！ 動物たちに着目し、処女長篇『V.』から最新作『インヒアレント・ヴァイス』にいたる全作品を徹底的に読み解く。
117頁 二四八頁 二八〇〇円

ポスト〈3・11〉小説論 遅い暴力に抗する人新世の思想

芳賀浩一

東日本大震災に触発され書かれた小説(「神様はもう」「還れぬ家」「献灯使」)「東京叙伝」、「さよならクリストファー・ロビン」等々)を天災と人災が不可分になつた人新世の時代の文学として、ジェーン・ベネット、テイム・シロー・モートンらに言及しつつ環境批評の視点から読み解く。181 三九八頁 四〇〇〇円

反復のレトリック 梨木香歩と石牟礼道子と

山田悠介

梨木香歩の「西の魔女が死んだ」、石牟礼道子の「苦海浄土」、リチャード・ネルソンの「内なる島」をはじめ日米の著名な環境文学作品を、「反復」という〈あや〉を糸口に読み解くエコクリティシズムの新しい試み。環境文学はもとより、文体論、コミュニケーション論への入門書としても最適。181 三七五頁 四〇〇〇円

環境から生まれ出る言葉 日米環境表象文学の

風景探訪

小谷一明

環境は文学でしか語りえないのではないか。アプトン・シンクレア、ダンバー・オーティーズ、カレン・テイ・ヤマシタ、林京子、水上勉、日野啓三らの作品を読み解き、環境への意識がどのように生じ、いかにその〈場〉の力に触発された言葉がうまれるのか、その意識の変容をたどる。201 三三六頁 三三〇〇円

ことばにうつす風景 近代日本の文章表現における美辞麗句集

湯本優希

《白雲の飄蕩たるが如く、紅錦の幃幕をめぐらしたるが如し》。明治期に隆盛をきわめた美辞麗句集。大町桂月、小島烏水らにも用いられた美辞麗句表現が、文学作品のみならず、時代の流れのなかでいかに受容され、文章の近代化にどのような作用をもたらしたのかを考究する。204 三二〇頁 三五〇〇円

エコクリティシズム関連書

水の音の記憶 エコクリティシズムの試み

結城正美

文学表現は、はたして《環境》と共生しうるのか。田口ランディ、石牟礼道子、T・ウィリアムスらの再読を通して《人―自然》の新たな結びつきを検証する。鮮烈な環境文学論の誕生。

107 四六判二六七頁 三〇〇〇円

イタリアルネサンス文学・哲学コレクション

編集 澤井繁男

都市の経済的發展を背景に、市民たちの間で思想、文学、美術において新たな潮流が生まれ、ギリシア、ローマの古典の再評価が図られた文化運動「ルネサンス」。本邦でその思想と業績が十分に知られていない代表的作家・思想家を選出し、中心の著作を収録する。

内容見本呈 A5判上製

① 都市盛衰原因論

ジヨヴァンニ・ボテロ 石黒盛久訳

古代ローマ帝国から幻想の中国の都まで、古今東西の都市が栄える要因を地理的条件と政治政策の面から考察する。陸上の領土の拡大ではなく交易を通じた国富の増大を主張して、海洋帝国時代の幕開けを告げた知られざる傑作。

193 二〇八頁 三〇〇〇円

② 詩作論

トルクアート・タツソ 村瀬有司訳

最高の英雄詩にふさわしい題材、ジャンル、文体とは何か。ホメロスやウエルギリウスの古典作品から騎士道物語までを検討し、最良の技法を探索する。実作と並行して詩論の研究に生涯取り組んだ詩人が、明快に解きあかす詩作の方法。

195 一五六頁 二五〇〇円

③ 哲学詩集

トンマーゾ・カンパネッラ 澤井繁男訳

ユートピア論『太陽の都』を著し、体制転覆を計画した自然哲学者・カトリック僧が、ギリシア哲学と融合した独自の神学、専制支配と教会の腐敗への怒り、苦難の末に生じた信仰への疑心を、獄中で書き継いだ驚くべき詩集。二〇二〇年度日本翻訳家協会賞（翻訳特別賞）受賞。

204 五三三頁 六〇〇〇円

④ コルティジャーナ 宮廷生活

ピエトロ・アレティーノ 栗原俊秀訳

ローマに蠢くベテン師たちが、宮仕えを夢見る若者と人妻に思いを寄せる宮廷人に手のこんだ悪ふざけを企み……。諷刺の鋭さで恐れられた雑文家（ポリアラフォ）アレティーノが、華麗な宮廷生活の幻想を猥雑なパロディによって貶め、人々の虚栄を笑いに包んで描き出す傑作喜劇。199 二一九頁 三〇〇〇円

⑤ ガリレオ書簡集 天文学的発見から聖書解釈まで

小林満訳

天文学の分野での新発見の熱を帯びた報告にはじまり、地動説に反対する勢力に対抗して展開した、科学的真理と聖書解釈の関係の捉え直しをはかる革新的議論まで、ガリレオの知的活動の軌跡を立体的に浮かび上がらせる書簡を収録。詳細な訳注と年譜を付す。

212 二四六頁 三五〇〇円

⑥ 人間の生について

マルシリオ・フィチーノ 河合成雄訳

「魂の医者」と自称した人文主義者・哲学者が、健康維持、長寿、星辰と人間との関係を論じた著作。医学・植物学から占星術・魔術に至る幅広い知の領域を包含する、混沌として見えるルネサンスの思想を体現するが如き書物。

近刊

午前四時のブルーIII 蜻蛉の愛、そのレッスン

責任編集 小林康夫

巻頭写真は《現代のピカソ》ミケル・バルセロによる蜻蛉の絵画、およびルシール・レイボーズが写す舞踏家・工藤文輝の連作。ユダヤ学の泰斗ウァクニンによる「だから人は蜻蛉を愛する……」も掲載。執筆 小林康夫、工藤文輝、千種さつき、永井晋、ヴァンサン・シユミット、大瀧智。1998 A5判並製二八頁 一五〇〇円

午前四時のブルーIV いま夜が明ける

責任編集 小林康夫

巻頭に吉増剛造詩篇原稿を掲載。「いま、夜が明ける!——音楽の光」のコンサートと連動した対談・テクストを収める。執筆 吉増剛造、田中彩子、木許裕介、高山花子、齊藤颯人、オノセイゲン、千種さつき、清水靖晃、イレニス・ボワゾペール、小林康夫。2010 A5判並製二八頁 一五〇〇円

えうゐ ①〜⑩号★

北海道大学ロシア文学研究室編

ロシアの文学、思想を多角的に考察するための専門誌。主な執筆者 外川継男、鷲尾繁男、小平武、内村剛介、渡辺武、矢沢英一、安井侑子、北岡誠司他。A5判並製 平均二六〇頁 七五〇円(1〜14号)／八五〇円(15〜16号)(品切 17、20号)

文学／雑誌

午前四時のブルーI 謎、それは自分

責任編集 小林康夫

パスカル・キニヤールの一文「謎、それは自分である」に導かれた対話、テクストを収録。執筆 小林康夫、高木由利子、パスカル・キニヤール、朝吹亮二、山田せつ子、ボヤン・マンチェフ、千種さつき、桑田光平、星野太、菊間晴子、松浦寿夫。1984 A5判並製二八頁 一五〇〇円

午前四時のブルーII 夜、その明るさ

責任編集 小林康夫

巻頭は平山隆雄によるステンドグラス作品、および写真家・宮本隆司によるスカイツリーの連作。哲学の未来を予感させる園分功一郎と小林康夫の対話も掲載。執筆 小林康夫、野村喜和夫、岩川ありさ、大石和欣、福島亮、鈴木和彦、安藤朋子、千種さつき、園分功一郎。1991 A5判並製二八頁 一五〇〇円

語学

ロシア語文法の基礎

杉山麻子十藤沼敦子

近年のロシア語学、ロシア語教授法の発展に則しつつ、約百点の図表を用いて、初心者向きに、わかりやすくオーソドックスに説いたロシア語文法への好入門書。

菊判二三三頁 二五〇〇円／別売カセット・テープ（リュドミラ古田吹込み）三〇〇〇円

ロシア文法の要点

原求作

初級のロシア語文法を終えた学習者を対象にした、古今の様々なテキストからの豊富な例文をまじえた中級レベルのロシア語文法書。これまで存在しなかった、日本人による日本人のためのロシア語中級文法の決定版。

A5判並製三〇二頁 四〇〇〇円

ロシア語の体の用法

原求作

ロシア語の動詞範疇のなかでも初学者にとってとりわけ難解とされる「完了体」「不完了体」の使い分け方、その意味、用法を懇切丁寧にときあかさ総合的な概説書。「体」の問題への親しみやすく画期的な入門書。

A5判並製二二九頁 三〇〇〇円

ロシア語の体の用法【練習問題編】

原求作

ロシア語文法の難所「体」の用法を親しみやすい解説で論じ好評を博した「ロシア語の体の用法」の続編。練習問題編。初級から応用まで、幅広いレベルに対応する練習問題によってロシア語特有の表現の修得を目指す実践的問題集。

A5判並製一六三頁 二五〇〇円

ロシア語動詞の構造

原求作

旧来しばしば行なわれてきた動詞分類の方法のある種の便宜主義、「覚えさせるための整理」といった方法を避け、動詞の「構造」を理解することにより「ロシア語動詞」をより深く学習するための一冊。

A5判並製二六七頁 三五〇〇円

ロシア語の運動の動詞

原求作

従来、まとまったかたちで論じられることのほとんどなかった（ロシア語の運動の動詞）の用法を、語用論の観点からの理論的な説明をもまじえつつ詳述する本邦初の包括的概説書。

A5判並製二二六頁 三〇〇〇円

ロシア語史講話

原求作

ロシア語の歴史を印欧諸語、スラヴ諸語の歴史のなかに位置づけるとともに、とりわけ現代ロシア語との関連の面で重要なトピックスを中心に平易に論じた、ロシア語歴史文法への読んで楽しめる入門書。

A5判並製三五八頁 五〇〇〇円

共通スラヴ語音韻論概説

原求作

個々の方言に分化せず同一性を保っていた時代のスラヴ語、共通スラヴ語の音韻構造の概要を、現代ロシア語のよりよき理解のために、主として現代ロシア語との関係の中で説く。

A 5判並製三二八頁 四五〇〇円

The Hamlet Tradition by John Gielgud (ハムレットの演技伝統)

編注 加藤誠

長年ハムレットを演じてきた今世紀イギリスを代表する男優が、自らの経験をもとに伝統的ハムレット像の演出の歴史と自らの新しい解釈について、そして演技方法や公演記録について詳述する貴重な書。

「英語語学教科書」 A 5判並製八七頁 一五〇〇円

古代教会スラヴ語入門

原求作

全てのスラヴ文章語の母体となった言語である古代教会スラヴ語の文法を、従来の入門書に比較してロシア語との関連の理解にもっとも重点をおいて説き明かす。多数の例文を付した、親しみやすい解説で送るロシア語学習者のための決定版入門書。

218 A 5判並製三七六頁 六〇〇〇円

The Craft of Fiction by Percy Lubbock (フィクションの技術)

編注 諸坂成利

トルストイ「戦争と平和」やフローベール「ボヴァリー夫人」を精緻に読み解きながら、フィクションにおける「技術」の問題を鋭く捉え直し、構造論的小説理論の先駆ともなった英国文芸批評の古典。

「英語語学教科書」 A 5判並製八六頁 一五〇〇円

古代教会スラヴ語入門【選文集】

原求作

ロシア語学習者のために古代教会スラヴ語の文法を分かりやすく解き明かした『古代教会スラヴ語入門』の別冊「選文集」。詳細な注釈を付したテクスト十二篇と語彙集を取り、実際の表現に触れながら古代教会スラヴ語読解の実践力をつける。

近刊

The Stuarts in Love by Maurice Ashley (恋する王様たち)

編注 大西章夫

「恋愛への対応ほど、男の人間性の深層をあらわにするものはない」というフロイトの言葉をヒントに、歴史を動かした英国国王たちの言動と決断の鍵とを、その生い立ちと結婚生活に求める、碩学の英国王朝史。

「英語語学教科書」 A 5判並製二六頁 一五〇〇円

詳解ポーランド語文法

川井正彦

ポーランド語文法の音声論、形態論、統語論の体系的な理解を目指し、夥しい例文と名詞、数詞、動詞の活用変化表を挙げながら、なかでも複雑なその形態論の解明に重点をおいた、本邦で最も詳細なポーランド語文法の解説書。

1910 A 5判上製七四二頁 一〇〇〇〇円

The Faerie Queene, Book III, Cantos I - VI, by Edmund Spenser (妖精の女王 第三卷第一篇～第六篇)

編注 内田市五郎・植月恵一郎他

シェイクスピアと双壁をなす、十六世紀イギリスが生んだ偉大な詩人スペンサーの代表的長篇詩を、個々の語の意味や歴史的背景を詳述する注釈によって解説する。

「英語語学教科書」 A 5判並製二三頁 二〇〇〇円

The Faerie Queene, Book III, Cantos VII - XII, by Edmund Spenser

(妖精の女王 第三卷第七篇～第十篇) 編注Ⅱ内田市五郎・植月恵一郎他

「第一篇～第六篇」につづき、この有名な詩篇を詳細な注釈付きで解説。妖精と騎士が織りなす幻想的な物語を、現代語で読みこなす助けとなる入門書。

『英語語学教科書』 A5判並製二〇二頁 二〇〇〇円

Invitation à la Grammaire Française par K. Seto et Sh. Tanaka

(フランス語をやってみよう)

瀬戸和子・田中成和

フランス語の基礎的な文法事項を簡潔に網羅した、仏語初級文法の決定版。必要以上の文法事項を省き、基礎のみに徹した、わかりやすい初級文法書。

『フランス語語学教科書』 A5判並製七七頁 一五七五円
別売カセット・テープ(フランス・ドルヌ吹込み)一五〇〇円

芸術／美術、写真、絵本

美術史とその言説「ディスクール」

宮川淳

近代美術を再現性と造形性の絶えざる相剋と葛藤、そして表現概念の転換を求めての苦悶とみる著者が、印象派を中心とする近代画家たち（セザンヌ、スーラ、シニャック、ゴッホ、ルソー、ゴーギャン、モロー）の歩みを克明にたどる。

四六判四〇〇頁 三八〇〇円

紙片と眼差とのあいだに

宮川淳

《引用とは読むことなのだろうか、書くことなのだろうか》。引用について考えながら、近代的な意味における《芸術》と《主体》の概念を、そしてついには《われわれがそのなかで語りつづけてきた文脈そのもの》を問い直そうとする。著者の思考の極点。

四六判二八八頁 一五〇〇円

三鷹天命反転住宅

荒川修作十マドリン・ギンズの死に抗する建築

三鷹の地に出現した極彩色の建築の全貌を多数のカラー図版と気鋭の批評家たちのテキストによって明かす。《私たちはいまだ能力の二〇〜三〇％しか活用できていない。人間の、生命としての能力を最大限に発揮させる建築、天命反転住宅は人類最大の革命である》（河本英夫）

B4変判総一六八頁 五〇〇〇円

建築―宿命反転の場

荒川修作十マドリン・ギンズ 工藤順一十塚本明子訳

ダイアグラム絵画によって知られる国際的なアヴァンギャルド画家がついに建築へと向かった。岐阜県養老公園をはじめ世界各地で進行中の著者の建築プロジェクトの思想を、最先端のCGを用いて著者自らが明かす。

内容見本呈 B4変判並製オールカラー一三三頁 六五〇〇円

生命の建築

荒川修作十藤井博巳

臨海副都心の住宅プロジェクトに果敢に挑み続ける根源的《建築家》荒川修作と、これまでプロブレマティックな建築作品を国内外に発表し続けてきた建築家、藤井博巳の、真の《建築革命》へ向けての白熱の対話。

A5判並製一九八頁 二五〇〇円

藤井博巳に関するあるいは藤井博巳による七

つの建築試論

藤井博巳

常にラディカルな思考を続ける建築家藤井の、これまでの建築プロジェクトをめぐるポートフォリオ。多数の建築写真、設計図、模型等の図版と、自身の論文と寄稿文により、建築の解体を目指すその思考の根幹が明らかになる。

B4変判並製一八八頁 三〇〇〇円

世界拡大計画

高松次郎

戦後美術の最も先端的な部分を代表する美術家の未完の思考の軌跡を二冊にまとめる。本書にはハイレッド・センター結成前夜に書かれた「不在体のために」に始まり、六〇年代の活動と並行して構想された「世界拡大計画」を中心とした理論的テキストを集成する。

内容見本呈 A5判二八八頁 四〇〇〇円

不在への問い

高松次郎

セザンヌからハイレッド・センターまで、近現代の美術。同時代の美術、そして自作をめぐるテクスト……作家とその時代を新たに浮かびあがらせる批評とエッセイを収める。

内容見本呈 A 5判三五六頁 四五〇〇円

高松次郎を読む

真武真喜子・神山亮子・沢山遼・野田吉郎・森啓輔編

四〇年にわたり「現代美術」を牽引しつづけた高松の六〇年代の「一点影」遠近法」のシリーズ、ハイレッド・センターのイベントから九〇年代の絵画作品まですべてを考察する。執筆：宮川淳、針生一郎、中原佑介、李禹煥、菅木志雄、寺山修司、石子順造、川俣正、東野芳明、高梨豊他

全二冊 A 5判二八一頁 四〇〇〇円

高松次郎 制作の軌跡

国立国際美術館編

「一点影」遠近法「単体」複合体「平面上の空間」形」といったテーマにそって、絵画、版画、立体作品、写真、多数のドローイングを詳細に読み解くことによつて、言葉とものの関係を問い続けた高松次郎の思考の推移を探る。四〇〇点以上の作品をカラー図版で収録。

154 B 5変判並製二二三頁 三五〇〇円

無十

斎藤義重著 千石英世編

戦後の貧苦のなか、二人の幼い息子たちを施設にあずけざるをえなかった状況を切々と綴る、戦後の美術を牽引してきた美術家による未発表の日記体小説。自作に対する冷徹な注解、家族・友人との関係、文学・映画・社会問題への関心を率直に記した、一九四五年から五六年にかけての新発見の記録を併載する。

167 A 5判二九九頁 四五〇〇円

高松次郎 リアリティ／アクチュアリティの美学

大澤慶久

高松次郎の多様な作品に内在する、「リアリティ」真実／「アクチュアリティ」事実」の美学とは何か。作品と言説の詳細な分析から、作家の思考の根底に潜む問題意識を描き出し、現代美術に通底する枠組みを明らかにする野心作。

231 A 5判二五六頁十別丁カラー図版八頁 四〇〇〇円

加納光於論

大岡信

銅版画から亜鉛板レリーフ、オブジェ、油彩へと果敢な冒険を重ねる加納光於に捧げられた十篇の詩と散文。言葉に憑かれた詩人と物質に憑かれた画家の二十年に及ぶ稀有の共感と友情の美しい結晶。造本：菊地信義。

A 5判二七頁十別丁カラー図版一六頁 二二〇〇円

高松次郎 言葉ともの 日本の現代美術 1961-72

光田由里

ハイレッド・センターのパフォーマンス、そして「影」の画家として戦後美術を駆け抜けた高松次郎。後期資本主義が終わりにさしかかった現在、へかつては存在したが今はずでに断絶してしまった「現代美術」の本質を、高松次郎を通して考察する。図版多数。

1110 A 5変判二七七頁 三〇〇〇円

日本における銅版画のメティエ 一九六〇年以降の

日本現代銅版画表現のひろがりからの考察 大矢雅章

銅版画とは何か。作家の「うちなる思い」を具現化するために描くのではなく、創ること。戦後日本の銅版画作家、駒井哲郎、加納光於、深沢幸雄、長谷川潔、浜口陽三らの作品を読みと、自作品の制作行程を詳細にたどりつづその魅力をさぐる。

1912 A 5判三三二頁 四〇〇〇円

瀧口修造 沈黙する球体

岩崎美弥子

前衛芸術の擁護者、詩人として知られる瀧口が生涯をかけて取り組んだ「詩的」な「実験」とは？『妖精の距離』『物質のまなざし』など、瀧口の詩的テクスからその表現衝動の根幹を見極めるテクスト読解の試み。造本Ⅱ加納光於。
四六判三二頁 二八〇〇円

生きている前衛 山口勝弘評論集

井口壽乃編

前衛美術、建築、デザイン、ファッション、テクノロジー、都市環境……芸術家の創造力は社会を変革することができるのか？現代アートの泰斗が創作の傍ら歩んだ半世紀の思考の軌跡。堂々の一二編を収録！
17.10 A5判五七〇頁 八〇〇〇円

ヨーコ・オノ 人と作品

飯村隆彦

日本を代表する実験的な映像作家が、ジョン・レノンの夫人という以上に、ダダ的な芸術家Ⅱパフォーマーとしてのオノ・ヨーコの人と作品に鋭く迫る。レノンを交えた鼎談、オリジナル写真約一〇〇点、詳細年譜等をも付す。
四六判二九四頁 二二〇〇円

反覆する岡本太郎 あるいは「絵画のテロル」

北澤憲昭

前衛か？ 伝統主義者か？〈岡本太郎〉とは、誰だったのか。戦前の〈アセファル〉から〈3・11〉までも貫く類稀なアーティストの思想と実践、そして作品の緻密な分析を通してその両義性を問い、昨今の〈岡本ブーム〉を葬送する挑発的作家論。
12.11 四六判二〇頁十別丁図版八頁 二五〇〇円

中平卓馬論 来たるべき写真の極限を求めて

江澤健一郎

一九六〇年代から写真家、そして批評家として注目を集める存在となった中平卓馬（一九三八—二〇一五）。初期から晩年までの撮影行為と執筆活動の軌跡をたどり、『記憶』を鍵に写真が存在する地平そのものの条件をラディカルに思考する、出色の写真論。 21.1 A5変判三三頁十別丁図版八頁 三〇〇〇円

ジャパノラマ一九七〇年以降の日本の現代アート

長谷川祐子編

六つの〈群島〉というコンセプトのもと、現代日本の視覚文化をパノラマとして描き出した「JAPANORAMA: NEW VISION ON ART SINCE 1970」展のフランス語版カタログに多数の作品・展示写真を追加し、展覧会記録資料を大幅に増補した待望の日本語版。 21.5 A5変判並製オールカラー二〇四頁 三〇〇〇円

JAPANORAMA NEW VISION ON ART SINCE

1970

Yuko Hasegawa (ed.)

前記の「JAPANORAMA: NEW VISION ON ART SINCE 1970」展のフランス語版カタログに大幅な追加・増補を施した日本語版に基づいた英語版。

21.6 A5変判並製オールカラー二〇〇頁 三〇〇〇円

余白とフレーム 私の美術ノート

今井祝雄

〈具体〉から半世紀の軌跡。吉原治良に師事し、最年少で「具体美術協会」に参加、「空間」と「時間」を自在に往還し、造形、写真、ビデオ、サウンドと多岐にわたる作品を制作し続ける美術家のインタビュアー、図録論考、自作解説等と多数の作品図版（1C/4C）を収録。 22.10 A5判一八四頁 三五〇〇円

タイムコレクション

今井祝雄

構成・テキスト執筆 大日方欣一

《真体》の作家として出発した今井が、さまざまな映像メディアを駆使して「時間」という不可視な存在をとらえようとした実験的作品、《RED LIGHT》《ビデオスナップ》《タイムコレクション》《時間の衣裳》…… これらの作品をおして、「映像」と「時間」を考察する。 153 A5判 二六頁 三三〇〇円

富井大裕 みるための時間

富井大裕 新潟市美術館編

紙袋、ダンボールなど多様な日用品がその色、形、性能をもったまま、モノから作品へ変換する。その「モノ」を介して「作品」が始まるという出来事作家は見続ける。その造型を、その出来事をどのようにみることができなのか。新潟市美術館での富井展の公式図録。 237 A5変判 三六頁 二〇〇〇円

今日の彫刻 富井大裕

富井大裕 十栃木県立美術館編

スパーボール、画鋲、ハンガーなどを積み上げる、束ねる、折り曲げる、寝かせる等の日常的行為によって、モノを作品、彫刻に変容させ、それをまた日常にかえす。そのことよって、誰もが彫刻家になりうる可能性を探る。栃木県立美術館での富井展の公式図録。 238 A5判並製五六頁十別丁 図版二八頁 三〇〇〇円

山城知佳子 リフレミネング

東京都写真美術館編

故郷沖縄を舞台に、見る者の身体感覚を揺さぶり、詩的なイメージと同時代への鋭い批評性をあわせもち、現在、国内外でもっとも注目を集める映像アーティストの一人、山城知佳子の作品世界を通覧する。 218 B5変判並製 三六頁 二七〇〇円

ミヤギフトシ 物語を紡ぐ

浅沼敬子編

フェミニズム・クイア理論を援用しながら、インスタレーションから小説まで、様々な手法を横断して《物語》を紡ぎ出すという唯一無二のスタイルで注目を集める沖縄出身の美術家・小説家、ミヤギフトシ。気鋭の執筆陣による、待望のモノグラフ！ 232 四六判 一八八頁十別丁 カラー 図版二六頁 二五〇〇円

TANKURI 創造性を撃つ

郡司ベギオ幸夫 十中村恭子

芸術作品の《解説》が《構想》になり、《構想》が《解説》となる。その相互運動は解説と実践の両輪をもたらし、創造とは何かを狙い撃つ。中村恭子の代表作をフルカラーで一挙掲載。日本画家と理論生命科学者が、まばゆいばかりに光輝く創造性の本源に鋭く迫る！ 1812 B5判オールカラー 一九八頁 四〇〇〇円

岸田劉生 実在の神秘、その謎を追う

ふくやま美術館、豊橋市美術館編

西洋の新しい表現と日本の伝統美術との相克に立ち向かった画家、岸田劉生。風景画《橋》、肖像画《自画像》《画家の妻》、麗子像《二人麗子像》《麗子肖像》《麗子五歳之像》などをはじめ青年期から晩年までの作品九四点を掲載。岸田夏子のエッセイほか論考三篇を付す。 187 B5変判並製オールカラー 一六〇頁 二〇〇〇円

田中青坪 永遠のモダンボーイ

アーツ前橋編

大正・昭和とモダニズムを追究し、晩年は自然観照による風景画へと至った異色の日本画家の七十年にわたる画業をたどる、アーツ前橋での初の回顧展の公式カタログ。代表作「春到」「花による少女」「浅間」シリーズなど、七〇余点の作品をカラー 図版で収録。 163 B5判並製オールカラー 一〇三頁 二〇〇〇円

祭りばやしのなかで 評伝 高橋秀

谷藤史彦

一九六一年から三十余年、ローマでフォンタナに衝撃をうけつつ、絵画、版画、立体等幅広く美術活動をつづけ、やがて、独自の線とフォルムで「エロスの画家」と称されるようになる。そしてその後、琳派の伝統美を継承する新たな絵画を創作しつづけている美術家の軌跡をたどる。 1512 A 5判 四三頁十別丁カラー 図版六頁 三八〇〇円

藤井厚二の和風モダン 後山山荘・聴竹居・日本趣味をめぐって

谷藤史彦

昭和初期に西洋式の椅子の暮らしをとりいれ、日本の気候、風土にふさわしい和風住宅の在り方を探究し、京都・大山崎に「聴竹居」（重要文化財）、生地福山・鞆の浦に「後山山荘」を残した環境工学の先駆者とも言える近代建築家の本格的評伝。 197 A 5判 九五頁 三〇〇〇円

武田五二的なる装飾の極意 茶室からアール・ヌーヴオーをめぐる建築意匠

谷藤史彦

山口県庁、京都大学などの公共施設をはじめ、明治村に移築された芝川又右衛門邸など数多の作品を残し、帝国議会議事堂の建設にも関わり、明治末期の欧州留学後アール・ヌーヴォー、ウイーン分離派などの新しいデザインを日本で紹介した武田五二。近代日本を牽引した装飾家、建築家の軌跡をたどる。 175 A 5判 三〇五頁 三三〇〇円

近代かな書を切り拓く 評伝 桑田笹舟

谷藤史彦

「書は芸術たりうるか」という根本問題を探求し続け、昭和のかな書界を牽引した書家の本格的評伝。古筆・料紙研究の第一人者でもあり、王朝の料紙を再現し、その成果をいかした現代作品を残したその生涯、業績、書法、理論を明らかにする。 204 菊判変形二四四頁十別丁図版一六頁 三五〇〇円

明治初期洋画家の留学とフランスのジャポニスム

ム 大手前大学比較文化研究叢書 14

小林宣之編

山本芳翠、五姓田義松ら明治初期洋画家の渡仏、およびフランスでのジャポニスムの流行を比較・検討し、日仏双方の文化的視線とその交錯を探る。執筆 小林宣之、角田拓朗、吉田典子、六人部昭典、吉川一義 193 A 5判 三四頁十別丁カラー 図版八頁 二八〇〇円

狩野友信 最後の奥絵師、幕末・明治を生きる

山田久美子

十九世紀の遣欧使節がフランスにおくった「紅葉に青馬図」を制作し、維新後はフェノロサの日本美術研究に協力しつつ東京美術学校で教鞭をとった曾祖父狩野友信の軌跡を、アイルランド文学、文化交流史の研究者たる著者がたどる。 2112 A 5判 二九六頁うち三三頁カラー 五〇〇〇円

甦る江戸肉筆画 トロンコフ・コレクシオンを読み解く

柏木隆雄・柏木加代子編

明治日本に滞在した一人のフランス人が本国に持ち帰った膨大な日本美術品から成る〈トロンコフ・コレクシオン〉。歌麿、北斎、河鍋晩斎など有名画家の落款のある諸作品の全貌を明らかにする。フランスに眠っていた日本美術コレクションの一二三点を初公開。〔図版多数〕 191 A 5判 三三八頁 四〇〇〇円

彫刻の呼び声

峯村敏明

〈真の彫刻は、関係を破壊する実践からしか生まれまいだろう〉。オブジェの世紀のただなかで彫刻をみつめつづけた批評家の彫刻論を集成する。ジャッドからロツンへ、そしてまだ見ぬ彫刻へ。

A 5判 三〇五頁 四〇〇〇円

絵画逍遙

山梨俊夫

一枚の絵が語りかける言葉。画家たちの思いに触発されて湧き出る想いを綴り、また自己を絵に反映させ思索する日々。ゴッホ、ジャコモメッティ、セザンヌ、モネ、マティス、クレレ、そして蕪村、広重、劉生らを自在にめぐる書き下ろしエッセイ。「カラー図版多数」 No.1 A5判別カラー三三六頁 三〇〇〇円

静かに狂う眼差し 現代美術覚書

林道郎

ルネサンス以来、その規模と深さにおいて大きく転換した二十世紀の芸術とはいかなるものか? 「密室」、「表象の零度」、「(反)色彩グレイ」、「表面」の四つのテーマを道標に、現代美術の脈を探る書き下ろしエッセイ!

167 A5判一七六頁+別カラー図版三三頁 二五〇〇円

アートはどこへ行く? 小倉正史著作選集

『小倉正史著作選集』編集委員会編

混迷する時代の中で、アーティストに何ができるのか。アートに何の意味があるのか。時代状況に迎合することなく、アート、そして社会のあり方を鋭く問い続けた孤高のアナキスト―批評家の軌跡。四十九編のテクストに加え、詳細な関連資料を収録。

223 A5判三三四頁 四五〇〇円

現代美術／パラダイム・ロスト

中村敬治

国立国際美術館に勤務しつつ現代美術の批評の第一線にたつ著者がジャスパー・ジョーンズ、ウォーホルから荒川修作、李禹煥に至る内外二百余名の現代画家を論じつつ、パラダイムなき現代美術の混沌を鋭く撃つ。装幀Ⅱ森村泰昌。

A5判四八九頁 五〇〇〇円

現代美術／パラダイム・ロストⅡ

中村敬治

世紀末的カオスが世界的規模で加速度的な展開をみせた残酷な〈失楽園〉Ⅱ現代美術。一九七五―八七年を扱った前著に続き、八七―九七年にかけての現代美術の状況を、いわば定点観測した最も新しい美術批評。装幀Ⅱ森村泰昌。

A5判四四三頁 五〇〇〇円

現代美術巷談

中村敬治

内外の現代美術、映像、メディア・アートから建築、文学、思想まで、犀利な切開、老練な縫合でつづる現代美術クロニクル(一九九七―二〇〇三年)、あるいは諧謔のすすめ。(芸術)と(アート)のはざままで、批評は生き残れるかな。装幀Ⅱ戸田ツトム。

A5判並製三四九頁 四〇〇〇円

現代美術巷談 その後

中村敬治

パラダイムなき混沌の現代美術を静かな情熱で見続け、語り続けた著者の最後の言葉。彦坂尚嘉、栗原一成との鼎談。二〇〇四年の日記、画廊・美術館めぐりの自筆ノート等も収録。

A5判並製一四四頁 二〇〇〇円

アート・ジャングル 主体から(時空体)へ

中村英樹

アート(美術/芸術)とは、離れて自己を見つめ、「未来の現在化」を企図する「異空間」の体験装置だ。モダン・アートに潜在するポストモダンの萌芽を読み解き、モダンとポストモダンの対立を越えて、今後の実践のための理論的根拠を問う。

四六判二六七頁 三〇〇〇円

生体から飛翔するアート

中村英樹

近代の遺産である「個人」という枠組みに秘められた視点システムを変換し（「間知覚的メタ・セルフ」）の確立をめざす、現代美術の果敢な営みを気鋭の批評家が鮮やかに読みとく！

A5判二四八頁 三〇〇〇円

視覚文化とデザインメディア、リソース、アーカイヴズ

井口壽乃編

モダンデザインはいかにして創造・越境・集積されたのか？ モダニズム期から現在まで、視覚文化を構成するタイポグラフィ、ピクトグラム、アイソタイプ、写真、ポスター、ホログラフィなどの例を取りあげ、デザイン思想の趨勢を浮き彫りにする最新の研究成果。

194 四六判三四頁 三五〇〇円

開かれた時空 遠近法から本のアートへ

森田一

我々は世界をどのように認識し、アートはそれをいかに表象しているのか？（「遠近法」と「本のアート」）における世界の表象をテーマに、そこに秘められた近代を超出する新たな時空の可能性を探る美術論集。著者が携わった二つの美術館についての覚え書きを付す。

2210 A5判四五六頁 六〇〇〇円

エクソダスアートとデザインをめぐる批評

暮沢剛巳

現代アート／デザインの批評の分野で注目されてきた著者が、新聞・雑誌・展覧会カタログなどに寄せた長短さまざまな批評・エッセイを集成する批評集。国内外の展覧会をフィールドワークする（現代アートの履歴書）。

166 四六判三三三頁 三三〇〇円

想起のかたち 記憶アートの歴史意識

香川檀

ナチズム／ホロコーストという負の記憶を作品に据えイメージの（「想起」）を促す（後から生まれた世代）の四人の美術家たち——ボルタンスキー、ゲルツ、ホルン、ジグルドソンの作品を通して美術家たちによる（歴史の表象）への扉を開く。

1211 A5判三五六頁＋別丁カラー図版二頁 四五〇〇円

人形の文化史 ヨーロッパの諸相から

香川檀編

古来より自らの似姿としてつくりだし、様々な関係を切り結んできた（「人形」）がもつ意義とは何か？ 宗教・民俗・文学・芸術・思想など、豊かな文化的土壌をもつヨーロッパの諸相から人形文化の深淵に迫る論集。

163 四六判三四四頁 三〇〇〇円

見ることの力 二十世紀絵画の周縁に

中林和雄

《観る者の側の時間とものとしての絵画の時間が交錯するなかで、いつしか紡がれていく成長の実感。感情の母として私たちの人間性にも徐々に影響を与える絵画の力》。ゴッキャン、カンディンスキー、マティスらの絵画はなぜ私たちを魅了するのか。絵画とはなにかを問いつける観者／絵画論。

177 A5判四九頁 六〇〇〇円

発見する力 現代美術の時空間

黒岩恭介

《さまざまな時間に関与しながらも、作品は作品であるかぎり、時間に抵抗し永遠を目指さざるをえない》。加納光於、河原温、桑山忠明ら、戦後美術史に異彩を放つアーティストたちの新たな一面を現場から照射し、視覚芸術の水脈と諸相を問い直す鮮烈な美術批評。

102 A5判二二二頁 四〇〇〇円

時の品相 1960-70年代の芸術家たちとの私的交友

馬場駿吉

瀧口修造 武満徹 瀧澤龍彦 土方巽 寺山修司……芸術の最前線で内なる想像力を爆発させた(カオスの驍将たち)と、名古屋にあって現代美術への熱い批評を書きつづける著者との数十年に及ぶ貴重な交友録。

四六判 二六九頁 二五〇〇円

コロナ・エポック

スタシス・エイドリゲーヴィチユス作品 中川素子文

二〇一九年二月にはじまり、またたく間に世界中に広がった新型コロナ禍。マスクという言葉が社会に浸透し激変した日常を振り返りつつ、ポーランドの芸術家、スタシスのマスク、仮面にまつわる作品をとりあげ、美術批評家の中川がエッセイを付したアーティストブック。 2021.7. A4変判全六四頁カラー 二二〇〇円

森の子レオ

スタシス・エイドリゲーヴィチユス写真・ドローイング 中川素子文

インスタレーション、彫刻、ブックアートなど多岐にわたる創作活動を続けるリトアニア生まれのポーランド作家の写真・ドローイングに、日本の美術批評家が文を付し、森や水辺で豊かな自然と対話し、伸び伸びと遊ぶレオの日々を描く。

2025. A4変判全三三頁カラー 一五〇〇円

共振

絵Ⅱ町田久美 文Ⅱ中川素子

自己と世界との関係性をえがく現代美術家の町田久美の絵画作品(二八〇点)に触発され、現代美術批評家の中川素子が文を綴る。絵画と言葉がふれあい生まれる「共振」は、あなたとの共振になるにちがいない。

2011. A4変判オールカラー六四頁 二八〇〇円

スクール・アート 現代美術が開示する学校・教育・

社会

中川素子

〈子どもたち〉と〈教育〉の現状を鋭く、ときにユーモラスに表現した今日の美術作品を読みとぎながら、学校・教育・社会のあるべき姿をさぐる。登場する主な美術家たちⅡ浅田政志、沢田知子、石田徹也、豊島康子、島田寛昭、河口龍夫、みかんぐみ、山本高之他 12.7. A5判二二五頁+別丁図版一六頁 二八〇〇円

ブック・アートの世界 絵本からインスタレーションまで

中川素子+坂本満編

絵本からブック・オブジェ、インスタレーションまで、《本》の概念を揺るがし破砕する三十二の驚くべき作品によって、《本》と《美術》の新しい世界へと誘う。図版多数。

A5判 二六五頁 三〇〇〇円

気配、その美

千種さつき

Chirahis of Tat Now. ニューヨーク、パリ、ローマ、東京……世界各地で友情の《花》が開く。Tachibana SATSUKIのピュアな魂が放つ《美》の茶会のすべて。

14.10. A5判並製オールカラー二二頁 二八〇〇円

美術・記憶・生

白川昌生

〈公共の美術〉とは何か? 〈美術〉の〈公共性〉とは何か? 民衆に《歴史》を忘却させ、民衆の《記憶》を抑圧し、抹殺する美術ではなく、新たな《想起》、新たな《治療》、新たな《覚醒》のための美術を求めて苦闘する美術家の果敢な思考の歩み。

四六判 二六〇頁 二五〇〇円

美術・マイノリティ・実践 もうひとつの公共圏を

求めて

白川昌生

新しい美術は新しい公共性、新しい社会、新しい政治の探求と同時的でありえない。クラストル、ブルデュー、スピノザ等によりつつ、《ホスピタリティ》としての芸術を求めて苦悶する現代美術家による《近代―美術》批判。

四六判二五八頁 二五〇〇円

日本のダダ 1920-1970

白川昌生編 テクストⅡ阿部良雄・中原佑介・針生一郎他

美術の《制度》への全面的反抗を《ダダ》と名づけるならば、日本においてもその歴史は短くはない。大正年間の《マヴォ》から六〇年代の前衛群に至る運動を、三百余葉の貴重な写真と関係者の証言によって検証する。

A4判五九頁クロス装製本 七〇〇〇円/並製本 三八〇〇円

白川昌生 ダダ、ダダ、ダ

アーツ前橋編

前橋で活動する白川昌生の初期作品から最新作「駅家の木馬祭り」「プラットフォーム計画」「Tomoko」までを網羅したアーツ前橋での大回顧展を機に編まれた充実したカタログ。白川の批評家としての処女作、「日本現代美術序説―その端的覚え書」を併録。

149 A4判並製二〇〇頁 二五〇〇円

フィールド・キャラバン計画へ 白川昌生 2000-2007

松浦寿夫・北澤憲昭・稲賀繁美・白川昌生他

《美術―制度》のダダ的破壊者にして、地域の歴史―文化の活性化をめざす《場所・群馬》の果敢なオルガナイザー、そして謎めいた構成主義的作品の作者が到達した《フィールド・キャラバン計画》の全貌と、白川の出発から現在までを克明に跡づける。

A5判一七六頁＋別丁図版一六頁＋DVD付 二五〇〇円

芸術と労働

白川昌生＋杉田敦編

現代社会における芸術活動について、美術作家、批評家などが様々な視点（フィールドワーク、作品制作、討議等）から捉え、芸術、労働、社会との関わりを考察し、これからの関わり方、意識、行動を喚起する論集。

184 A5判二二六頁 三〇〇〇円

村山知義とクルト・シュヴァイツターズ

マルク・ダシー＋松浦寿夫＋白川昌生＋塚原史十田中純

《ダダ》はいったい何であろうか。その根本的な基準は美的なものではなく、《マヴォ》が言う三つの言葉に表されている。過激さ、創造、革命である。《近代日本最大のアヴァンギャルド村山とダダの異端児シュヴァイツターズからダダへ迫る》。

A5判一八五頁＋別丁図版三二頁 二五〇〇円

《凶案対象》を読む 天折のアヴァンギャルド画家、

久保克彦とその時代

黒田和子

太平洋戦争下の中国戦線で、二十六歳の若さで天逝した、アヴァンギャルド画家久保克彦の畢生の大作《凶案対象》とそれに至るまでの作品と思考の歩み、シュルレアリスム、構成主義をはじめとする同時代のヨーロッパ美術との関連のうちに位置づける稀有な試み。

184 A5判一四三頁＋別丁図版一六頁 二五〇〇円

絵を書く

マリアンヌ・シモンⅡ及川編

画家、作家、作家にして画家……彼らが言語とイメージを通して、あるいはその狭間で生みだしたさまざまな言語的、絵画的表象を読みとぎ、《創造》の核心に迫る。執筆ⅡA・M・クリスタン、A・アルベルル・ピロー、E・ペレ、千葉文夫、桑田光平、寺田寅彦、塚本昌則他

126 A5判二二七頁 四〇〇〇円

詩とイメージ マラルメ以降のテキストとイメージ

マリアンヌ・シモン II 及川編

書物挿絵/タイポグラフィ/視覚詩において記念碑的な作品を生み出したマラルメの影響のもと、〈詩とイメージ〉の表現はどのように多様化してきたのか。日仏の研究者たちがその本質を究明する。執筆 II 三浦篤十 鈴木雅雄 十千葉文夫 + 塚本昌則他

156 A5判二四六頁 四〇〇〇円

テキストとイメージ アンヌ II マリー・クリスタンへの

オマージュ

マリアンヌ・シモン II 及川編

テキストとイメージはいかなる創造を可能にするのか? 〈作家と芸術家〉の関係、〈イメージと表象空間〉の関係、〈記号と音〉の関係からこの問題を別扶する。この分野の嚆矢となった故アンヌ II マリー・クリスタンに捧げる論文集。

186 A5判二五二頁 四五〇〇円

美術館という幻想 儀礼と権力

キャロル・ダンカン 川口幸也訳

われわれはなぜ美術館へ行くのか。そもそも美術館とは何のためにあるのか。教養の証明か、成金や権力の誇示か、あるいは植民地主義の発露なのか。近代以降の美術館の成立と現在を、〈儀礼〉と〈権力〉をキーワードに、最も挑発的かつ論争的に論じる。

177 A5判三五五頁 三八〇〇円

ミニシアムの憂鬱 揺れる展示とコレクション

川口幸也編

近代が生んだ展示と収集の装置 II 〈ミニシアム〉。歴史をかたる権力を託されたこの〈装置〉は、混迷する世界の中で、いかなる役割を果たしていくのか。さまざまな時代と場所における多角的検証を通じて、これからのミニシアムの(不)可能性を問う。

206 A5判四三三頁 六〇〇〇円

展示の政治学

川口幸也編

博物館 美術館 博覧会、あるいは日常生活のなかで、〈見せること〉と〈見ること〉は、どのような意味をまとうのか? ジャンルや研究領域を越えて多彩な視座から〈展示〉という擬制を解体し、〈見せる〉という共同幻想の再考を促す出色の共同研究。

A5判四〇〇頁 四八〇〇円

鈍色の戦後 芸術運動と展示空間の歴史

辻泰岳

モダニズムが浸透する戦後において、作家 評論家 歴史家たちは分野を超えて共同し、そのプリズムは展示空間に投射された——一九四〇/六〇年代において画期をなした展示空間を綿密に検討し、「伝統」「デザイン」「環境」を論点に〈鈍色の歴史〉を立体的に描き出す。

222 A5判三五三頁 四五〇〇円

余白は芸術に関係がない——が、ひとつのフォルムである。

オクヤナオミ

マルセル・デュシャンとジョルジュ・ペレックのあいだで、絵画とオブジェと言語遊戯を経回りつづける特異なアーティストが、〈五月革命〉前後のバリの思い出と自らの絵画観、芸術観を率直に語る。

A5判二六頁 三〇〇〇円

対角線上の異邦人 ヒトデ方陣とアダム方陣

オクヤナオミ

《芸術と数学の創造的きずなは構造の探求だ——》。数学的知性を源泉にして視覚芸術作品を制作する美術家が、創作活動のために生み出した独自のルール II 方陣のもとに綴った芸術をめぐる思考の軌跡。

A5判一八〇頁 二五〇〇円

花裂ける、廃絵逆めぐり

福山知佐子

枯れるチューリップ、衰微するアネモネ、花開き、朽ち果てるタンポポ、野芥子……。命を終える植物に潜む生命の循環を、二十年以上にわたる鉛筆による素描、水彩、銀箔膠絵で描き続けた画家の集大成ともいうべき画集。テキスト
 〓アガンベン、水沢勉 他 211頁 B5変判一九二頁うち四八頁カラー 三五〇〇円

反絵、触れる、けだもののフラボン 見ること

と絵画をめぐる断片

福山知佐子

大野一雄、中川幸夫、若林奮との出会い、花や動物たちとの全神経細胞を震わせる共振、これら記述不可能な体験の深みに向けて言葉が酷使する、けだものの息による絵画論（書いても描いても尽くせないのちの豊穣に焦がれて生きる……）（谷川俊太郎）。
 1210 四六判一七二頁 二二〇〇円

ジャポニズムの眼

菅沼荘二郎

縄文人の生き方を学び、良寛、芭蕉、雪舟のわび・さび、そして坂田一男、長谷川三郎らをおして、五十年以上にわたる画業をふりかえるとともに、主宰する絵画教室に集うユニークな教え子たちとの交流から現代美術、現代社会のあり方を考える。
 224 A5判並製一三六頁十別丁八頁カラー 二〇〇〇円

フリーアート

菅沼荘二郎

禅の心でよむ現代芸術。悠揚自在にアートする画家が、長年親しんだヘンリー・ミラーの小説、ミラーに影響を与えたニーチェ、そしてジョン・ケージ、ビートルたけしの絵画について、『臨濟録』に学んだ禅の目で見、禅の心で縦横に語る。
 157 A5判並製一五二頁十別丁カラー図版四頁 二〇〇〇円

となり町の寒山

菅沼荘二郎

ニューヨークからとなり町へ、原始美術から現代アートへと自在に往還する画家が年来のテーマである《寒山拾得》を禅とのかかわりで語りながら、混沌とした現代美術の行方を考える。

09.12 A5判並製一五〇頁 二〇〇〇円

ロシア・アヴァンギャルド小百科

夕チヤナ・コトヴィチ 桑野隆監訳

《芸術の革命》をめざして、美術・建築・デザイン・演劇・音楽・詩等、芸術の全領域を横断しつつ激動の二十世紀を駆け抜けた前衛芸術運動の全貌を詳述する本邦初の事典。

A5判五五二頁 八〇〇〇円

ロシア・アヴァンギャルド遊泳

大石雅彦

今世紀初頭のロシアで社会革命と相俟つ形で勃発した芸術革命〓ロシア・アヴァンギャルド運動。全分野の芸術への襲撃と破壊を敢行しながらスターリニズムに抹殺されたこの運動を今日の問題として捉え返す。第二回木村彰一賞受賞。
 四六判三六四頁 三五〇〇円

彼我等位

大石雅彦

マレーヴィチ、ヴェルトフ、ソクローフ、平戸廉吉、神原泰、稲垣足穂、江戸川乱歩……。ジャンルやメディアを超えて、時代に先駆けた二十世紀の表現者たち。日本―ロシアを往還しながら、《前衛》を駆け抜けた彼らの前史／後史を精緻に読み解く。
 四六判三二八頁 三五〇〇円

ロシア・アヴァンギャルドの映画と演劇

岩本憲児

二人の革命的映像作家、ヴェルトフとエイゼンシュタインを中心に、一九二〇年代の（ロシア・アヴァンギャルド）運動が生み出した映画、演劇、写真、ポスターなどの多くの作品を細密に検証した、気鋭の映画学者による斬新な論考集。
四六判三五〇頁 三〇〇〇円

ロトチェンコとソヴィエト文化の建設

河村彩

視覚表現を刷新してきたロトチェンコの抽象絵画やフォト・ルポルタージュなどを分析しながら、同時代の芸術家・批評家の理論／実践との関係をたどり、アートを超えた社会主義社会の生活文化の創造の（夢）を明らかにする。
一六二 A5判三七二頁＋別丁カラー図版八頁 六〇〇〇円

革命の印刷術 ロシア構成主義、生産主義のグラフィック

ク論 エリ・リシツキー＋ニコライ・トラブーキン他 河村彩編訳

優れたデザイナーは印刷物資の不足を克服する！ ソ連の理想に賛同した芸術家と批評家たちは、純粹芸術を捨てて識字率の低いロシアの民衆に（伝える）ためのグラフィック・デザインの方法を模索した。初期ソ連の傑出した印刷メディア論を集成。
二一五 四六判二五八頁＋カラー別丁図版八頁 三三〇〇円

ロシア・アヴァンギャルドの世紀 構成×事実×記

録 江村公

ロシア革命から全体主義への過渡期を生きたアレクサンドル・ロトチェンコの、絵画からモンタージュ写真へといたる軌跡をたどりつつ、今日の美術と文化への根底的な批判を企てる。
一一一 A5判二六七頁 四〇〇〇円

最後の絵画

ニコライ・トラブーキン 江村公訳

ロトチェンコのモノクローム絵画を「最後の絵画」と呼び、ロシア・アヴァンギャルドの、構成主義から生産主義への転換を決定づけた芸術理論家の二論文を収録し、アヴァンギャルド芸術の核心に迫る。
A5判二四四頁 三〇〇〇円

全体主義芸術

イーゴリ・ゴロムシトク 貝沢哉訳

独裁者たちの嗜好あるいは民族文化的伝統の枠組みを超え、あらゆる全体主義国家に共通して出現したスタイルとそのメカニズムを、ヒットラー、ムッソリーニ、スターリン、毛沢東の統治下の事例を横断しながら検証する。闘争とテロル、そして沈黙の二十世紀芸術史。
A5判六〇二頁 七〇〇〇円

ソヴィエト宮殿 建設計画の誕生から頓挫まで

鈴木佑也

ソ連邦の国家理念の象徴として期待された巨大建築プロジェクトはなぜ破棄されたのか？ 膨大なアーカイブ資料の調査をもとに、計画の誕生から消滅に至る過程を丹念に辿る。競技設計に提出された六十名を超える建築家たちの設計プランを収録。
二一一 A5判四四四頁 六〇〇〇円

風景の哲学 芸術・環境・共同体

パオロ・ダンジェロ 鯖江秀樹訳

あらゆる場所で出くわす（風景）という言葉はいったい何を意味しているのだろうか。イタリアを代表する美学者が、風景を根本から捉え直し、映画、美術、法制度まで、環境美学の成果に応答しながら横断的に思考することで、〈風景〉の問題に美学の側からアプローチする。
二〇二 四六判二九七頁 三〇〇〇円

イタリア・ファシズムの芸術政治

鯖江秀樹

〈ファシズムの芸術〉とは何か？ 政治権力による権柄のもと、グラムシ、ゴッティらの卓抜な批評によって浮上するモダン・アートの可能性／不可能性を実例を通して検証する。第三回表象文化論学会賞奨励賞受賞。

116 A5判二七六頁 四〇〇〇円

マルセル・デュシャン論

オクタビオ・パス 宮川淳・柳瀬尚紀訳

九〇年度のノーベル文学賞をうけたメキシコの詩人が、今世紀の最も謎めいた画家の生涯と作品を辿りつつ、今日における《絵画》の在り方に、そして断末魔の《近代》というこの時代そのものに根底的な転換を迫る。

四六判三三三頁十別丁図版八頁 一五〇〇円

糸玉の近代 二〇世紀の造形史

鯖江秀樹

絵画や彫刻のみならず、都市や建築、商品、衣服、版画、料理、サバイバル、手仕事装丁まで……造形性をともなう「モノ」にまつわる技術をその思想とともに解きほぐす。近代によって産み落とされ、置き去りにされたものに新たな光を当てる14の扉。

284 A5判三四四頁 三八〇〇円

マン・レイとの対話

ピエール・ブルジャツド 松田憲次郎十平出和子訳

シュルレアリスム写真の代表者にして、絵画、版画、映画等の既成のジャンルを常に挑発し、横断し続けた米国生まれの芸術家が、その晩年にフランス人作家を相手に、自らの人生と作品について率直に語ったエスプリ溢れる貴重な対話。

銀紙書房との共同出版 四六判一九五頁 二〇〇〇円

〈ニグロ芸術〉の思想文化史 フランス美術界から

グリチュードへ

柳沢史明

文化史上のトピックとなった〈ニグロ芸術〉。黒人文化運動において自らのアイデンティティを示す「抵抗のための武器」にもなりえたこの概念について、同時代の文脈から「支配と抵抗の歴史」を反省的に再構築する。第一六回木村重信民族芸術学会賞受賞。

183 A5判三七六頁 五〇〇〇円

シュルレアリスムと《手》

松田和子

シュルレアリスム芸術において頻出する《手》のイメージについて、美術史を踏まえつつ、精神分析学、身体論、文化史などのさまざまな視点から総合的に考察し、二五〇点以上にのぼる図版とともに解き明かす、初の本格的論考。

A5判四七五頁 七〇〇〇円

帝国の祭典 博覧会と〈人間の展示〉

小原真史

十九世紀に始まった万博は、商品と娯楽の殿堂であり、植民地帝国の威容を示す舞台装置にして異文化との出会いの場となった。人々は新たな出会った他者をどのように展示し、世界を認識しようとしたのか。膨大な博覧会資料から、見ること）をめぐる欲望を問う。

229 B5変判並製二二〇頁 三〇〇〇円

クリムトとピカソ、一九〇七年 裸体と規範

ジャン・クレール 松浦寿夫訳

規範と逸脱、秩序と冒険。その人生においても、美術史の言説においても、決して相まみえることのなかった二人の画家の作品を大胆に横断しつつ、二十世紀芸術が孕まざるを得なかった矛盾と葛藤を精緻に炙り出す。

四六判一四四頁 二〇〇〇円

ピカソと闘牛

須藤哲生

この二十世紀芸術の巨人の生涯と作品を貫く《闘牛》のテーマのなかにピカソ芸術の秘められた鍵を探索する、現代フランス文学の泰斗による鮮烈なピカソ論。《ピカソは闘牛士にして雄牛なのだ》(コクトー)。収録図版、八十六点。四六判三七頁 三五〇〇円

ジョルジョ・デ・キリコ神の死、形而上絵画、シュルレアリスム

アリスム

長尾天

一度目にしたら忘れがたい、あの神秘的で不穏なヴィジョンを発現するデ・キリコの「形而上絵画」について、ニーチェの「神の死」にまで遡り、真実なき世界の解釈可能性を賭けて、画家とシュルレアリスムとの邂逅と断絶までを究明する。2012 A5判二八六頁+別丁カラー図版八頁 四五〇〇円

パウル・クレーとシュルレアリスム

宮下誠

一九二五年、パリにはじまる「クレー＝シュルレアリスト」像の起源と伝播の実態を緻密に描き出し、美術批評という言説が、いかに政治的、党派的装置となりうるかを浮き彫りにする、スリリングなクレー受容史研究の記念碑的大著。図版多数。A5判六三三頁 七〇〇〇円

ルネ・マグリット 国家を背負わされた画家

利根川由奈

シュルレアリスムを代表する画家は、詩と思考の絵画を《孤高に》描きつつけたのだろうか？ ペルギー王立航空会社の広告、王立施設の壁画、教育省主催の企画展……文化政策によって「ペルギー美術史」へと巻き込まれたもう一人のマグリット！ 17.3 A5判二七三頁+別丁図版八頁 四〇〇〇円

語るタンギー

長尾天編訳

シュルレアリスムの画家としては珍しく理論的なテキストを書かなかったタンギーにも、わずかな言葉が残された資料は存在する。そこに聞きたれる彼の声は、何を語り、何を語らないのか。アンケートへの回答・インタビュアー・書簡等を網羅した、寡黙な画家のテキスト集成。16.1 四六判二六〇頁 二八〇〇円

イヴ・タンギーアーチの増殖

長尾天

なぜ、イヴ・タンギーのイメージはこれほどまでに語りにくいのだろうか？ デ・キリコ、心霊学、バイオモーフイズム、エスと集合的無意識、ゲイ・セージ……シュルレアリスム絵画の極限がもつ構造を説き明かす。14.12 A5判三三三頁+別丁カラー図版八頁 五〇〇〇円

レメデイオス・バロ 絵画のエクリチュール・フェミニン

カトリヌ・ガルシア 湯原かの子訳

人間として、芸術家として、女性であるということは何なのかという根源的問い。シュルレアリスムの実験的手法、秘教思想に学びつつ、死と再生、人間と世界の宇宙的循環を、画布の上で自由に織りなすバロの独創的な幻想世界を、女性性による創造の秘密から探究する。14.11 A5判二六五頁+別丁カラー図版八頁 四〇〇〇円

実践としての芸術

アントニ・タピエス 田澤耕訳

フランコ独裁の抑圧に苦悶したカタルーニャにあつて、ピカソとミロの、そしてダダとシュルレアリスムの衣鉢をつぐ現代画家が、芸術と社会の根底的な変革をめざして書きついだ戦闘的現代美術論。

四六判二八九頁 三〇〇〇円

ジョン・ハートフィールド

ウィラント・ヘルツフェルド 針生一郎訳

写真を切り裂け！ イメージの収集／操作／破壊によって、芸術／帝国／大衆に挑んだ、フォトモンタージュの創始者の生涯と作品を実弟が克明に描く。《モンタージュという方法は二十世紀芸術の最大の発明だ》（プロッホ）。図版多数。

A 5判一九三頁 四〇〇〇円

ハンナ・ヘーヒ透視のイメージ遊戯

香川檀

ベルリン・ダダ唯一の女性メンバー、ヘーヒ。フォトモンタージュをはじめつねに実験的な作品をつくりだした背景には驚くべきヴィジョンに貫かれた創作意識があった。波乱万丈のその生涯とともに、女性美術家のうちにあるイメージ思考を解きほぐす初のモノグラフ。

198 A 5判三〇九頁 四〇〇〇円

ハンス・ペルメール 身体イメージの解剖学

松岡佳世

ダダ・シュルレアリスムの運動を背景にしながらも、独自の芸術を探索し続けたハンス・ペルメール。多様なメディアを通して取り組んだ「身体イメージ」とはいかなるものなのか？ 「交換可能性」という視点から包括的に論じる。

21.10 A 5判三三八頁＋別丁カラー図版二頁 四五〇〇円

オスカー・シュレンマー バウハウスの舞台芸術

柴田隆子

バウハウスの教育者にして舞台芸術家オスカー・シュレンマー（一八八八—一九四三）。両大戦間の時代に実験的なパースペクティヴを取り入れたバウハウスのマイスターは、いかなる舞台芸術を構想したのか。芸術の可能性を切り拓いた空間創造の力学を明らかにする。

21.3 A 5判二八六頁 四〇〇〇円

クリスチャン・ボルタンスキーの可能な人生

ボルタンスキー＋カトリクス・グルニエ 佐藤京子訳

気鋭の美術批評家を相手に作家自身が自らの《生》と《作品》の全てを語り下ろす。《かつてクリスチャン・ボルタンスキーという人間がいて、作品は残っていないけれどいろいろな問いを投げかけた人間、物語を語った人間がいたという……》

10.7 A 5判三七頁 四五〇〇円

クリスチャン・ボルタンスキー 死者のモノユメント

湯沢英彦

【増補新版】

二〇〇四年に刊行され第十四回吉田秀和賞を受賞した初版に、二〇一八年までの世界各地での作家の活動「新たに」「発言する」、「ベルソヌヌ」、「ミステリオス」、そして瀬戸内・豊島の「心臓音のアーカイヴ」、「ささやきの森」等の読解を増補した比類なきモノグラフィ。

19.7 (改訂) A 5判三九六頁 六〇〇〇円

クリスチャン・ボルタンスキー Lifetime

国立新美術館＋国立国際美術館十長崎県美術館編

自己／他者の記憶、生／死、人間の存在／不在の痕跡をテーマに、さまざまな素材、表現方法を用いて創作活動を続けてきたボルタンスキー。一九六〇年代後半の初期作品から最新作《ミステリオス》《黒いモノユメント、来世》等）までを紹介する大回顧展の公式図録。

19.2 B 5判変型オールカラー二〇八頁 三〇〇〇円

ミケル・バルセロ

国立国際美術館十長崎県美術館

十三重県立美術館十東京オペラシティアートギャラリー編

現代スペインを代表する画家ミケル・バルセロの国内初の回顧展の公式図録。マジョルカの海、アフリカの砂漠、イタリアの火山、ヒマラヤの山中…世界の自然から着想を得た絵画、彫刻などで表現しつづける《現代のピカソ》と謳われる美術家の全貌に迫る。

21.3 A 4変判オールカラー二二四頁 二八〇〇円

ドナルド・ジャッド 風景とミニマリズム

荒川徹

ジャッドの絵画 オブジェクト、リノベーション建築から家具制作に至る作品の構造と形態の変化を辿りながら、ミニマリズムの芸術が人工的な風景や工学的構造に触発されてきた様相を探る。第十一回表象文化論学会奨励賞受賞、第三十回吉田秀和賞受賞。

198 A 5判二四〇頁 三〇〇〇円

艾未未アート「戦略」アートが「政治」を超えるとき

宮本真左美

「すべては芸術 すべては政治」艾未未を前にして、もはや「アート」が逃げ込める「聖域」はない。艾未未にとってアートとは、その「生きる」現実を見えるかたちにして残すこと。「全身アーティスト」の全貌に迫る本格的モノグラフ。

285 A 5判五六〇頁十別丁図版八頁 七〇〇〇円

カルティエ・ブレッソン 二十世紀写真の言説空間

佐々木悠介

写真の美的価値を左右する言説においてつねにその中心にいたカルティエ・ブレッソン。二十世紀を代表する写真家はいかなる言説によって受容されていたのか？ 言説分析とイメージ分析のクロスジャンルのなアプローチによって新たな写真家像を提示する。第三回日本比較文学学会賞受賞。A 5判四〇〇頁十別丁図版二四頁 六〇〇〇円

芸術の脱定義

ハロルド・ローゼンバーク 桑田光平・桑名真吾訳

「アクション・ペインティング」という概念を生み、サルトルやドゥルーズにも影響を与えた美術批評家による、戦後の現代美術の動向を追う、パフォーミング・アートな「脱」芸術批評。

209 四六判三〇五頁 三三〇〇円

ヴィジョンとデザイン

ロジャー・フライ 蜂巣泉十堀川麗子訳

当時眼をむけられていなかったポスト印象派のセザンヌ、ピカソ、ゴッカン、マティスらを一九二〇年に初めてロンドンで紹介し、その後のイギリス絵画の近代化を担ったブルームズベリー・グループの一員でもある画家／美術批評家によるエッセイ集。

196 四六判三八頁 三五〇〇円

印象主義運動

レオニード・アンドレーエフ 貝沢哉訳

《印象主義》を単に美術の一流派としてではなく、絵画・文学・音楽等の諸ジャンルを包括するものとして捉え直し、自然主義から象徴派までの世紀末芸術の隠された内的原理を剔出し、印象主義研究に新しい地平をひらく。

四六判二七五頁 二八〇〇円

ポストメダイウム時代の芸術 マルセル・ブロータース

《北海航行》について ロザリンド・クラウス 井上康彦訳

マルセル・ブロータースの作品の精緻な分析とベンヤミンの考古学的方法を深く交差させながら、現代における芸術そして「メダイウム」の可能性を探究する。必読の理論書、待望の邦訳。解説／林道郎

233 四六判二八二頁 二五〇〇円

没入と演劇性 デイドロの時代の絵画と観者

マイケル・フリード 伊藤亜紗訳

ミニマリズム作品を批判した概念として名高い「演劇性」は、十八世紀のフランス絵画の成立条件に関わる問題として登場した。当時の美術批評家たちの言説を読み解きながら、いかにして観者という存在が問題視されるようになったか、その理論的枠組を提示する。

207 A 5判三三四頁 五〇〇〇円

起源の物語 クールへの《世界の起源》をめぐる

ベルナル・テセードル 中畑寛之訳

クールベによって《世界の起源》が描かれた一八六六年から、オルセーに寄贈される一九五五年までのあいだに、この絵画がたどってきた数奇な運命を、オークシヨンの記録、個人の日記、企業の帳簿、雑誌論文、新聞記事、最新の学術論文等、あらゆる資料から綿密に跡づける。180頁 A5判四三二頁 六〇〇〇円

諷刺画家グランヴィル テクストとイメージの19世紀

野村正人

十九世紀の視覚文化を体現した諷刺画家グランヴィル。親相学、骨相学の影響下、獣頭人間を使って政治や社会風俗を諷刺した肖像画や風俗画、挿絵等の世界を読み解き、出版・文化史的観点から考察する。第六十五回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。145頁 A5判四一八頁十別丁図版八頁 六〇〇〇円

フーゴ・フォン・チューデイドイツ美術のモダニズム

仲間裕子

普仏戦争と第一次世界大戦のはざままで、高まるナショナリズムや皇帝からの圧力、芸術アカデミーの保守主義に抗し、美術史研究にもとづく鑑識眼と独自のネットワークを武器に闘った〈モダニズムの殉教者〉の姿を力強く描き出す。

223頁 A5判二五三頁十別丁カラー八頁 四〇〇〇円

リーメンシュナイダー その人と作品

杉田達雄

宗教改革から農民戦争へとつづく動乱の十六世紀ドイツ。静と動、重量感と浮遊感、官能と理知、瞑想と法悦が渾然一体となった大規模な祭壇彫刻をはじめ、多数の作品を残したリーメンシュナイダーの生涯と作品を、七十余点の図版とともに克明にたどる。178頁 A5判二二五頁十別丁図版三二頁 四〇〇〇円

愛の女神 アプロディテの姿を追って

ジエフリー・グリグスン 沓掛良彦十榎本武文訳

一般には「ヴィーナス」の名で知られる古代異教の女神アプロディテ。先史時代から古代ギリシアを経て近代芸術の中にまで生き延びているこの女神の姿容と系譜を古典文学・神話・美術の探査を通じてたおやかに描く。

A5判三二二頁十別丁図版二六頁 三五〇〇円

経営者 柳宗悦

長井誠

いまなお注目を集める民芸運動を起こした柳宗悦の「経営」的手腕に着目し、残された四千七百通もの書簡の分析をもとに、梅棹忠夫との比較や富山県での活躍の検討を通じて、民芸運動の空間的・地理的拡大を支えた組織運営の実態を明らかにする！ 221頁 四六判二六〇頁 三〇〇〇円

アフリカからアートを売り込む 企業×研究

柳沢史明・緒方しらへ編

アフリカにおいて、アートはどのような意味を持ち、それはどのように日本へ伝えられてきたのだろうか。人びとの経験と研究から、アートが紡ぐつながりを詳らかにし、西洋中心的な美術観を問いなおす。それぞれの視点から多角的に描き出す、アフリカのアートへの招待。 216頁 A5判並製オールカラー三四頁 三〇〇〇円

写真集・絵本・絵本論等

まなざしに触れる(特装版)

鷹野隆大(写真) + 新城郁夫(文)

木村伊兵衛賞受賞の写真家による七八点の写真と、ジェンダー／文学研究者による鷹野隆大論を収録する作品集の刊行を記念する特装版。

149 A5判クロス装、クロス貼函入／四九頁／オリジナルプリント二葉十サイン＋エディションナンバー入／収録作品七八点／限定三〇部／八〇〇〇円

フトマニクシロ・ランドスケープ 建國の原像を問う

写真家集団 phenomena

あなただけが知らない日本の姿がここにある！ 日本国創建の地となった古代の霊地「フトマニクシロ」を写真で辿る壮大な試み、ついに完成！ 我が國の原像、撮影全二八カ所・計五六〇枚の写真を完全収録。

1712 B5変判並製六四〇頁 一三〇〇〇円

落葉伽藍

武内理能作品集

街路で、公園で、都市のはずれの黄昏時の鉛色の河のほとりで拾い上げられた植物界のフラグメントによる「紋章学」。この微小で精巧で嚴肅な構造物たち。十年間にわたって「蒐集」された五十三葉の作品が開く写真表現の新しい可能性。

B5変判貼函入六四頁 三三〇〇円

フランス12カ月の贈り物 パリ郊外シヴルーズのママ

ム・コリタ・ジェロミから 文〓武田尚子／写真〓村松史郎

復活祭、万聖節、ノエル……ヨーロッパの文化に息づく歳時記に合わせて、家族や友人たちに手作りの贈り物をする——人生を楽しみ、美しく生活することにこだわるフランス人の一年を、四季折々のカリタ家の風景を収めた多数の写真とともに紹介する。

B5判オールカラー九二頁 二八〇〇円

cameraChimera [カメラ・キメラ]

オノデラユキ作品集「テキスト〓前田英樹」

カメラのメカニズム〓身体性を絶えず挑発しながら、現代アートと写真の境界線を超え軽やかに活動し続ける写真家待望の作品集。代表作「古着のポートレート」を初め、一九九四〜二〇〇一年までに発表された九シリーズを収録。第二十八回木村伊兵衛賞受賞。

A4変判二二八頁 五〇〇〇円

cameraChimera (特装版)

オノデラユキ作品集「テキスト〓前田英樹」

実験的な手法を用いた先鋭的な写真表現の企てによって、写真界・美術界から注目を集め、国際的に活躍する写真家初の作品集刊行を記念する特装版。

内容見本呈 限定二〇〇部／作家サイン＋エディションナンバー入オリジナルプリント (300 x 205mm) 一点／A4変判クロス装クロス箱入二八頁 五〇、〇〇〇円

まなざしに触れる

鷹野隆大(写真) + 新城郁夫(文)

主に男性モードを撮ることでジェンダーを問う写真家と、その写真のもつ社会へのエロスの侵犯を論じるジェンダー／日本現代文学研究者によるコラボレーション。二人の著者のまなざしはどのように交わり、どのように接するのか。鷹野の写真作品七八点を収録。

14.9 A5判二四九頁 三〇〇〇円

絵本で読みとくSDGs

中川素子十浅野由子編

未来の子どもたちにかげがえのない地球を残すためにできることは何だろうか。絵本研究、美術研究等多角的な視点から、絵本を通してSDGsを読みとつき、「17の達成目標」について考え、それを実行していくためのヒントを探る。

2212 A5判三二五頁 二八〇〇円

絵本の子どもたち 十四人の絵本作家の世界

寺村摩耶子

絵本を舞台に、個性あふれる美しい作品をつくりつづける絵本作家たち。圧倒的な輝きをはなつクリエイターたちの魅力をも、二百点以上の絵本をとおして語る、注目の絵本作家論。

104 A5判三三四頁十別丁図版八頁 三五〇〇円

オテサーネク

エヴァ・シュヴァンクマイエロヴァー 矢川澄子訳

チエコで活躍するアニメーション作家ヤン・シュヴァンクマイエルの『オテサーネク』の劇中絵本が、映画を飛び出し実際の絵本になった。グリムよりも恐ろしいチエコの民話を美術監督を務めたエヴァのシニールで幻想味溢れるイメージで読む。

A4判オールカラー三〇頁 一六〇〇円

海辺のネコ

A・ウサキエヴィチ作 A・オチコ絵 渡辺克義訳

あたたかな春の日。浜辺で、左の耳に白いブチのある、真つ黒な子ネコが砂だらけになっていました。このかわいい子ネコはどこからやってきたのでしょうか？ ポーランドで活躍中の絵本作家が贈る、心温まる八篇の小さな小さな物語。

115 B5判オールカラー六三頁 一八〇〇円

ドングリトプスとマックロサルス

中川淳

鉛筆でこすりだした真つ黒なほらあな。そこにいたのは？ ぼくといぬのブッチ、そして身近な素材から生まれたカラージュのドングリトプス、フロッタージュのマックロサルスとの楽しい冒険の一日をえがいた絵本。

126 A4判オールカラー三二頁 一五〇〇円

子象のエルフィー

昭和女子大学短期大学部文化創造学科

森で助けたおじいさんサルからもらった、何でも願いがかなうという三つの魔法の種。それを手にしたエルフィーは……。森のみんなを幸せにした、心優しい象のお話。

A4判オールカラー四〇頁 二〇〇〇円

ねずみのハーデル

昭和女子大学短期大学部文化創造学科

まっ赤な鼻のために、いつも仲間と違うことを悩んでいたねずみのハーデル。自分探しの旅に出て、いろいろな生き物やサーカスの一団と出会う。そして見つけた大切なものとは……。

A4判オールカラー四四頁 二〇〇〇円／英語版(A Mouse Named Hader) 二〇〇円

音楽

実験音楽 ケージとその後

マイケル・ナイマン 椎名亮輔訳

今日のイギリス現代音楽の第一人者が、ケージを嚆矢とする《実験音楽》の歴史を、サティ等の前史から、フルクサス派、ライヴ・エレクトロニク・ミュージック、ミニマル派に至るまで、多数の図版を駆使して解説する唯一の通史。

四六判三二六頁 三〇〇〇円

サイレンス

ジョン・ケージ 柿沼敏江訳

二十世紀音楽最大の革命家が《コラージュ》的手法を縦横無尽に駆使した破格のテクスト形式の中で、自らの芸術哲学そしてその作品と技法の全てを語り尽くす。著者の処女作にして現代音楽を考えるための最も重要な著作。

A5判四五六頁 四〇〇〇円

ジャ・パノイズサーキュレーション終端の音楽

デヴィッド・ノヴァック 若尾裕・落見子訳

一九九〇年代に北米で独自の理想の音楽を実践する世界として注目された、日本のノイズの多様性およびその創造性に迫る日本の第一線で活躍するノイズジャンと交流を持つ民族音楽学／人類学の研究者による、十年に渡るフィールドワークの成果。

191頁 A5判三二八頁 四〇〇〇円

ジョン・ケージ伝 新たな挑戦の軌跡

ケネス・シルヴァーマン 柿沼敏江訳

キノコ博士、『易经』で作曲した男、ピアノにハンマーを投げ込んで弾いた男……ジョン・ケージとはいったい誰か？ 沈黙も音楽だとし、音楽の概念を一変させてしまった、二十世紀を代表する音楽家の、本邦初の伝記。坂本龍一氏推薦！ 論創社との共同出版。

167頁 A5判五〇六頁 五八〇〇円

ミニージャッキング 音楽は（行為）である【新装版】

クリストファー・スモール 野沢豊 十西島千尋訳

音楽とは作品やモノのことではない。行為であり、実践なのだ。《音楽すること》の担い手を演奏家と聴衆に限定せず、広く《関係》として捉えることで既成概念を根底から覆し、《音の現場》へといざなう。音楽を愛するすべての人の必読書。

237頁(18) 四六判四三六頁 四〇〇〇円

音楽のピクニック

小杉武久 序文Ⅱナム・ジョン・パイク

ケージ等とともにカニングハム舞踊団の専属音楽家として、また現代日本の最も多岐的な作曲／演奏家として知られる著者が、制度的音楽への吊鐘を鳴らし、無名の《音》と《波動》の存在へ向けて激しく越境する未聞の現代音楽論集。

四六判二二六頁 二五〇〇円

ミニージャック・アズ・ソーシャルライフ 歌い踊ること

をめぐる政治 トマス・トウリノ 野澤豊 十西島千尋訳

音楽家であり、大学で民族学を講ずる教育者としても名高い著者が、ペルー、ジンバブエ、アメリカでのフィールドワークで得た経験をもとに、パースやバートソンなどの理論を用いながら、《音楽》の社会性Ⅱ政治性を鋭く分析する、音楽民族学の理論的入門書。

158頁 A5判四四一頁＋CDD付 六〇〇〇円

音楽をひらくアート・ケア・文化のトリロジー

中村美亜

なぜ私たちは〈音楽〉から〈生きるよろこび〉を得るのか。現代の多文化社会で、音楽はいかにして他者理解を可能にするのか。音楽を〈生きるのびるための叡智〉として再発見し、〈実践としての音楽〉を問う。

129 四六判二五〇頁 三〇〇〇円

魔術的音楽のために 魂の宿す声、音に宿る神秘

滑川英達

音楽の力によって近代が抑圧した魔術的世界を呼び覚ます、音楽と肉体の形而上化。《カオスとしての現実と、通常僕らが現実と呼んでいるもの、という二つの領域を繋ぎ止めているのが、宗教であり、音楽であると言えるのかもしれない。》

211 四六判一六四頁 二〇〇〇円

音の海

デイヴィッド・トウープ 佐々木直子訳

一八八九年、ドビュッシーはジャワ音楽に魅せられた。そしてそれ以降、音楽は異文化、自然、環境の放つ音と対峙しつづ大きく変容してゆく。二十世紀音楽の実験的潮流を克明に追う。

四六判三九三頁 三五〇〇円

現代音楽のポリティクス

ウォルフ、ノーノ、エロワ、グロボカール、近藤譲他 小林康夫編

音楽、とりわけ現代音楽は、一体何のために、誰のためにあるのか？ 現代音楽のカオスの中から鋭く政治化した（あるいはしなかった）五人の第一線作曲家が、今日の社会における音楽の意味を問い、自らの方法論を語る。

四六判二〇九頁 二〇〇〇円

ベル・エポックの音楽家たちセザール・フランクから

映画の音楽まで

フランソワ・ポルシル 安川智子訳

一八七〇年から一九四〇年までのフランス音楽黄金期には、ドビュッシー、サティ、ラヴェル、「六人組」、メシアンのみならず、数多くの才能が花開いた……。文学・美術・舞台・映画との交感に満ち溢れた、知られざる百花繚乱のフランス音楽を総覧する！ ミニ事典収録。

108 四六判九五五頁 五〇〇〇円

ロシア・アヴァンギャルドの宇宙論的音楽論

言語・美術・音楽をつらぬく四次元思想 高橋健一郎

前衛音楽家たちが物した音楽論、音楽作品の内奥に〈生〉の有機的受容を指向する〈宇宙論的〉哲学を読み取り、音楽学的側面からは既に研究しつくされたとされている〈ロシア・アヴァンギャルド音楽〉研究の新天地を切り開く。

1812 A5判三〇〇頁 三〇〇〇円

ラフマニノフの想い出

沓掛良彦監訳 A・ゴリデンヴェイゼル他

同時代のロシア人芸術家や家族によるラフマニノフの回想録十二篇を、一冊に集成。寡黙で控えめだが、冗談好きで寛大、時に自分の才能を疑い不安に苛まれる、一人の人間としてのラフマニノフの姿が克明に浮かび上がる。ロシア革命前後の芸術文化や音楽生活を知る上でも貴重な資料。

177 A5判四〇三頁 四五〇〇円

第三帝国と音楽

明石政紀

ナチスは、どのようにしてドイツ音楽界を掌握していったのか。ナチスは音楽のいかなる「効用」に期待したのか。膨大な資料をもとに、ナチスと音楽の錯綜した関係に様々な角度から光をあてる新鋭の書き下ろし芸術/政治論。

四六判二三三頁 二五〇〇円

音楽史に刻まれたロック 英国プログレッシブ・ロックと反体制文化

エドワード・マツカン 余田安広訳

一九六〇年代後半イギリスで産声を上げ、瞬く間に一大ムーブメントを巻き起こしたプログレッシブ・ロックとは一体何だったのか？ ルーツからスタイル、歌詞、楽曲構成、ビジュアル、カウンセラーカルチャーとの関係性まで包括的に分析した画期的研究！

2008 A5判四五二頁 六〇〇〇円

ドイツのロック音楽

明石政紀

九〇年代のテクノ・ブレイク以降、その源泉として再評価が始まったジャーマン・ロックの歴史を、クラフトワーク、カン、ファウストを中心に、鋭利な問題設定と徹底した調査によって捉え直す本邦初のドイツ・ロック史！

四六判二〇〇頁 二五〇〇円

クラフトワーク

パスカル・ビュッシー 明石政紀訳

テクノ・ポップの元祖というだけでなく、ニューウェイヴ、ヒップ・ホップ、ハウス等の、その後の新しい音楽の動向にも多大な影響を与え続けるドイツのロック・ポップ・ユニットの二十余年の足跡を追う初の評伝。

四六判二八〇頁十別丁図版八頁 二八〇〇円

クレイジー・ダイヤモンド／シド・バレット

マイク・ワトキンソン他 小山景子訳

ピンク・フロイドの初期中心メンバーにして音楽的リーダーでありながら、ファーストアルバム発表後に脱退してしまっただ伝説のミュージシャン、シド・バレットの生涯をたどる決定版評伝。親族へのインタビューや貴重な写真も多数収録。装幀＝常盤響。

四六判二七五頁 二二〇〇円

ポピュラー音楽理論入門

キース・ニーガス 安田昌弘訳

アドルノの大衆文化批判の検討から、音楽生産と音楽消費の相互関係、そしてそれをつなぐ媒介（音楽産業、活字メディア、録音媒体、テレビ、ラジオ、映画、インターネット等）の問題に着目し、今日のポピュラー音楽研究の到達点を明らかにする。

四六判並製三九八頁 三五〇〇円

ファイル・アンダー・ポピュラー

クリス・カトラー 小林善美訳

ヘンリー・カウ等のバンドで革新的なロックを実践する一方、RIO、レコメンデッド・レコーズ等のオーガナイザーとしても知られる著者が、音楽創造の現場体験を踏まえた上での厳密な思考によって、ポピュラー音楽の意味を問う。

四六判三〇八頁 三〇〇〇円

ソニク・エティック

陣野俊史

パンク以降の、八〇―九〇年代のポップス（ハウス、テクノ、グランジ）の歴史Ⅱ運動を、ヴァレリーの身体論を武器に、ポスト構造主義的地平から解明し、ハウス以後の世紀末ポップスの相貌をも予見する新鋭の書下し本格的ロック論。

四六判二三三頁 二二〇〇円

ソニク・ユース

デイヴィッド・ブラウン 岡田正樹訳

二十世紀の音楽シーンを駆け抜け、アート／ノイズ／ロックの垣根を根こそぎにした、オルタナティブ・ロックの先駆者であり、ニルヴァーナを発掘したことで知られる伝説のバンドの決定版評伝。

196 A5判並製三七七頁 三八〇〇円

ブライアン・イーノ

エリック・タム 小山景子訳

初期ロキシ・ミュージックでの活動、R・フリップとの共同作業『環境音楽』(アルバム)『ピエント』の案出等、ロックから現代音楽に至る広い視野で多様体的活動を繰り広げるこの音楽界のトリック・スターの全貌を気鋭の音楽学者が明かす。

四六判 三五二頁 三〇〇〇円

ニルヴァーナ、ネヴァー・フェイド・アウェイ

デイヴ・トンプソン 小山景子訳

ニルヴァーナの世界的大ブレイクによって一躍スターダムを頂上に上り詰めながら、突如、謎の自殺を遂げた悲劇のロックシンガー、カート・コバーン。バンド結成から突然の終焉に至るコバーンの全活動を再現する決定版伝記。

四六判並製一七四頁 一五〇〇円

キャプテン・ビーフハート／ルナ・ノーツ

ズート・ホン・ロク 小山景子訳

フランク・ザッパの盟友にして、最もカルトな音楽家、キャプテン・ビーフハートの唯一の評伝。名盤『トラウトマスク・レプリカ』でマジック・バンドのギタリストだったズート・ホン・ロクが語り尽くす奇書。

四六判二九三頁 二八〇〇円

XTC ソング・ストーリーズ

XTC十ネヴィル・ファーマー 藤本成昌訳

メンバー自身が自らの曲やアルバムについて語り、本作りにも全面的に参加した公認XTCストーリー。バンド結成から最新作『WAST STAR』までの全アルバム、全曲についてのコメント、未発表の作曲構想ノート、イラスト、写真も多数収録。

A5判四七三頁 三五〇〇円

ブラック・コンテンポラリー・ミュージック・ガイド

金沢寿和監修

七〇年代後半から八〇年代にかけて隆盛を極めた異国音楽の新しい形「ブラック・コンテンポラリー・ミュージック」。その名盤四五〇枚を、全点ジャケッ ト写真入りで紹介する、本邦初の包括的ガイドブック。

A5判並製二六四頁 一五〇〇円

エレクトリック・マイルス

ポール・テイゲン 麦谷尊雄訳

五十人を超える関係者へのインタビューから得られた証言の数々をもとに、エレクトリック期以降の四半世紀(一九六七―一九九二)、人跡未踏の音楽の極北に挑み続けた(ジャズの帝王)マイルス・デイヴィスの軌跡を徹底解剖。

四六判 四七八頁 六〇〇〇円

ビル・エヴァンス ジャズ・ピアニストの肖像

ピーター・ペッティンガー 相川京子訳

白人ジャズ・ピアニストの最高峰ビル・エヴァンス。その「生」と「死」と「音楽」の全貌を、多数の記録や、家族/友人/ミュージシャンの証言をもとに克明にたどった、初の本格的評伝。未公開写真、詳細ディスクグラフィイ収録。

A5判三六二頁 三〇〇〇円

チャーリー・パーカー モダン・ジャズを創った男

カール・ヴォイデック 岸本礼美訳

モダン・ジャズの巨匠チャーリー・パーカーの波乱に満ちた生涯を辿るとともに、詳細な分析によってその革新的な音楽のすべてを明らかにする、最新の本格的評伝。日本版独自のディスクグラフィイを付す。

A5判三〇八頁 三〇〇〇円

ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブとキューバ音楽 の手帖

大須賀猛編

ウイム・ヴェンダース監督のドキュメンタリー映画『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』。映画に登場するキューバ音楽界の伝説のミュージシャンたちの豊富な写真とインタビュー、詳しい解説によって、古き良きキューバ音楽界をガイドする。

A5変判一六四頁 二二〇〇円

映画、演劇

リフレクション ヴィデオ・アートの実践的美学

河合政之

技術・メディア・文化の全面的考察からヴィデオの芸術的な可能性を導出し、アナログな電子メディアにおける技術、知性、欲望の様態を明らかにする。今世紀のヴィデオ芸術を牽引する映像作家による贈目の書！

1812 A5判三三頁十別丁図版八頁 三八〇〇円

映画における「語り」について 七人の映画作家の

主題によるカプリッチオ

浅沼圭司

レネ、キューブリック、ゴダール、ヴィスコンティなどの作品における映画の叙述（語り）の問題の美学的、物語論的な深化によって到達されるメタ・シネマの地平。映画美学の第一人者が奏でる、二十世紀映画に捧ぐ七篇の綺想曲。

A5判二九二頁 四〇〇〇円

リメイク映画の創造力

北村匡平・志村三代子編

小津安二郎、黒澤明、溝口健二ら世界的巨匠の名作から、ハリウッドの超大作、そしてジャパニーズ・ホラー、さらには『ゴジラ』まで……時代／国境を越えて再創造される映画のダイナミズムをひもとき、「映画を観る」という身体経験を問い直す。

1712 四六判三〇七頁 三三〇〇円

ロベール・ブレソン研究 シネマの否定

浅沼圭司

映画における「視覚的なもの」と「聴覚的なもの」の関係についてもっとも意識的な映画作家の、『抵抗』『すり』等、主要四作品をめぐる、映画理論のみならず、美学／芸術哲学の観点からの詳細かつ徹底的な解説の試み。

四六判四〇〇頁 四〇〇〇円

映画的最前線 1988-1993

佐々木敦

映画を撮ること、そして映画について書くことはまさしく戦争だ。気鋭の映画批評家が八年から九三年に至る映画の現在を《闘争としての映画》の観点から鋭く撃つ。映画の世紀末にむけて新世代の批評家が放つ《闘争批評》宣言。

四六判並製二六九頁 二二〇〇円

パリⅡ東京 映画日記

飯村隆彦

日本の生んだ国際的な実験映画作家が、自らの極めてコンセプチュアルな作品を携えて、ニューヨーク、ベルリン、パリと移り住んだこの十数年間の思考と行動を、日付のない日記もしくは日記風エッセイによって総括する。

四六判三二頁 二五〇〇円

フィルム・スタディーズ 社会的実践としての映画

グレアム・ターナー 松田憲次郎訳

映画産業の勃興から映画理論の成立、そして今日の映画理論の種々相とその展開までを克明にたどる映画の《カルチュラル・スタディーズ》。《歴史が浅いとはいえずに広大な学問領域となっている》フィルム・スタディーズへの最良の入門書。

124 A5判二七七頁 二八〇〇円

ヌーヴェル・ヴァーグの全体像

ミシェル・マリ 矢橋透訳

映画史上未曾有の大変動＝革命、《ヌーヴェル・ヴァーグ》の実態とはいかなるものだったのか？ 時代背景、経済状況、撮影技術、美学、監督、俳優・女優……さまざまな側面からこの映画革命の真相／深層に迫る、最良の概説書。

1971 四六判二八〇頁 二八〇〇円

フランソワ・トリュフォーの映画

アネット・インスドーフ 和泉涼一・二瓶恵訳

トリュフォー映画の基調をなすテーマとスタイルはなにか？ 初期の作品から自伝的なドワネル・シリーズ、そして晩年の傑作『終電車』まで、師と仰ぐビッチコック／ルノワールとの比較を通してトリュフォー映画の魅力を示すことなく論じるファン必読の書。

1972 四六判五〇四頁 四八〇〇円

トリュフォーの映画術

アンヌ・ジラン編 和泉涼一・二瓶恵訳

龐大なインタビュから浮かび上がる、映画を愛し映画に愛された、《ヌーヴェル・ヴァーグ》の映画作家の感動的な姿。トリュフォーの全作品についての、作家自身の発言を作品別に網羅した決定版インタビュ集。

A5判五〇〇頁 五〇〇〇円

ジャック・ドゥミ、夢のルーツを探して

ジャン・ピエール・ベルトメ 瀧本雅志訳

『シェルブールの雨傘』の世界的ヒットから『ロシユフォールの恋人たち』『ロバと王女』をはじめ世界中のファンを魅了しつづけるジャック・ドゥミ。すべての監督作品をその舞台裏も含め網羅的に紹介し、作品のなかに見え隠れする主題を探究する。

1975 B5変判並製四三三頁 四二〇〇円

ミヒヤエル・ハネケの映画術 彼自身によるハネケ

ミヒヤエル・ハネケ／ミシェル・スイユタ／フィリップ・ルイエ 福島勲訳

生い立ちから最新作『愛・アムール』まで！ カンヌ映画祭で栄誉あるパルム・ドールを二回にわたって受賞した数少ない監督の一人であり、アウシュヴィッツ以降の芸術を追究しつづける異能の映画作家の創作の秘密をあかす、貴重なインタビュ集。

1971 A5判四三三頁 三八〇〇円

タルコフスキイの映画術

アンドレイ・タルコフスキイ 扇千恵訳

世紀を超え、国家を超え、いまなお観客の魂を魅了する映像作家が、映画に対する情熱、そして作劇、演出の実際にいたるまでを肉声で語り尽したソ連時代の貴重な映画講義録。

A5判三二二頁 二五〇〇円

キェシロフスキ映画の全貌

マレク・ハルトフ 吉田はるみ十渡辺克義訳

ポーランド時代のドキュメンタリー『ウッチの街から』『初恋』から、国際的声価を得た『デカログ』『ふたりのペロニカ』『トリコロル』三部作、そして没後、後継者たちによって作られた『ヘヴン』『美しき運命の傷痕』まで、鬼才の全作品を読み解く初の本格的評伝＝作品論。A5判三三〇頁 三〇〇〇円

ふたりのキェシロフスキ

アネット・インスドーフ 和久本みさ子十渡辺克義訳

『トリコロル』三部作、『ふたりのペロニカ』『デカログ』をはじめ、美と愛と輝きにみちた、キェシロフスキの多彩な映像世界が甦る。キェシロフスキ映画をこよなく愛する著者が『ダブル・ライフ／セカンド・チャンス』をキーワードに、天逝した名匠の全体像をあざやかに解明する。

A5判三〇四頁 三〇〇〇円

『フリークス』を撮った男

D・J・スカル、E・サヴァダ 遠藤徹十河原真也十藤原雅子他訳

映画史に屹立する怪作『フリークス』。この禁断の映画を製作するにいたる、監督トッド・ブラウニングの数奇な人生と、公開時の大騒動、そしてその後の悲劇的な結末……恐怖と怪奇に魅せられた映画監督の全貌が今、蘇る。

A5判 二七七頁 二八〇〇円

ラース・フォン・トリアー ステイグ・ビョークマンとの対話

オスターグレン晴子訳

『奇跡の海』で世界を感動の渦に巻き込み、ビョーク主演の新作ダンサー・イン・ザ・ダーク』によってカンヌ映画祭パルムドールを受賞したデンマークの鬼才、トリアーが初めて明かす、みずからの作品と映画製作の秘密。

A5変判並製三四頁 二六〇〇円

フライシャー兄弟の映像的志向 混濁するアニメーションとその空間

宮本裕子

「ベティ・ブープ」や「ポパイ」による成功の傍ら、〈実写〉と〈アニメーション〉の混濁する映像空間に拓かれたフライシャー・アニメーションの創造力を、一九二〇〜三〇年代米国の社会・文化状況、映像制作技術、さらには現代日本のアニメーションへも射程を広げながら解明する。

206 A5判 二九三頁 四〇〇〇円

ジーン・セバーグ

ギャリー・マッキー 石崎一樹訳

ジャン・リュック・ゴダール監督の『勝手にしやがれ』で、いまま観客のこころをとらえて離さない孤高の女優の生涯を暗転させたのは、FBIの謀略だった……。謎の死を遂げた稀代の女優の実像を関係者への取材や膨大な資料から浮かびあがらせる決定版評伝。

113 四六判並製四四九頁 三五〇〇円

FBI vs. ジーン・セバーグ 消されたヒロイン

J・R・ライソン＋G・マッキー 石崎一樹訳

ヌーヴェル・ヴァーグのトップ女優は「政治」に謀殺されたのか？ 個人と国家権力の相剋を、秘められたFBI資料を駆使しつつ徹底検証する迫真のドキュメント。

125 四六版並製二八四頁＋別丁図版八頁 二五〇〇円

混乱と遊戯の香港映画作家性、産業、境界線

雑賀広海

香港映画の黄金期を支えた監督たちは、曖昧で流動的な境界線に囲まれた香港に何を見たのか。混乱状態と戯れることで祝祭的な映画空間を作り上げた、ジャッキー・チェン、ツイ・ハーク、ジョニー・トーの軌跡を手がかりに解き明かす、香港映画史のダイナミクス。

233 A5判 三六五頁 四五〇〇円

小津安二郎はなぜ「日本的」なのか

具慧原

世界の映画シーンを震撼させてきた奇才・黒沢清。『CURE』以降の六つの作品を解体・再構築しながら、断絶と接続の二重性Ⅱ〈断続〉というキーワードによって、黒沢映画の創作の核心に迫る初の本格的黒沢清論。

近刊

黒沢清と〈断続〉の映画

川崎公平

世界の映画シーンを震撼させてきた奇才・黒沢清。『CURE』以降の六つの作品を解体・再構築しながら、断絶と接続の二重性Ⅱ〈断続〉というキーワードによって、黒沢映画の創作の核心に迫る初の本格的黒沢清論。

1412 A5判 三三二頁 五〇〇〇円

川島雄三は一度生まれる

川崎公平・北村匡平・志村三代子編

数多の傑作・奇作・迷作を世に問い、日本映画史に怪光を放つ異才、川島雄三のフィルモグラフィに言葉を与える時がついに訪れた。作品論、女優男優論、映像論から音響論まで、豪華執筆陣が鮮麗に切り拓く、川島雄三の新生紀。

1811 四六判三四六頁 三三〇〇円

渋谷実 巨匠にして異端

志村三代子・角尾宣信編

戦後日本の都会風俗を活写するとともに、人間や時代の深層を軽妙かつ鋭利に、ときに悪辣なまでに風刺する悲喜劇的な作品群を世に問うた渋谷実。混迷を深める現代、細緻な作品分析のもとに今こそ回帰する〈忘れられた巨匠〉の予言的映画美学。

2010 四六判五五四頁 五〇〇〇円

都会喜劇と戦後民主主義 占領期の日本映画に

おける和製ロマンチック・コメディ

具珉姁

若い男女の自由恋愛を描く占領期の〈都会喜劇〉が指し示したのは、敗戦の経験に直面・超克して民主的思想を内面化していく日本人の新しいアイデンティティの姿だった。民主主義イデオロギー下における大衆の想像力／創造力を綿密な調査によって闡明する。

2111 A5判二七二頁 四〇〇〇円

団地映画論 居住空間イメージの戦後史

今井瞳良

新時代・密室・郊外・不気味・懐古など、戦後史において千変万化のイメージをまとってきた団地。映画においてそれは、相貌を変えながらもつねに同時代を代弁／批評する存在だった。戦後映画史・住宅史の新生面を拓くはじめての本格的団地映画論。

213 A5判三八頁 四〇〇〇円

日活ロマンポルノ 性の美学と政治学

志村三代子・十ヨハン・ノルドストロム・十嶋飼未緒編

日本映画界に激震をもたらし、性表現の是非をめぐる権力を挑発し、多彩な若手監督を輩出し、現代日本映画の礎のひとつにもなった驚天動地のプログラム・ピクチャー《日活ロマンポルノ》とは何だったのか？ 毀誉褒貶の作品群を多彩にして斬新な観点から徹底解剖する。

231 四六判三三三頁 三五〇〇円

演劇

劇場としての世界

矢橋透

フランス古典主義演劇を単なる心理劇、風俗劇とする通説をすて、世界の「仮象」化の現象、中世的エピソードの解体と《近代》の創出のドラマとの関連において捉えようとする、気鋭の演劇学者Ⅱフランス文学者の意欲作。

四六判三七頁 三五〇〇円

ギリシア劇と能の再生

佐藤亨・

中條忍・廣木一人・伊達直之・村田真一・堀真理子・外岡尚美

西洋と日本——それぞれの伝統的舞台芸術は、時空を超えていかに融合し、混沌の現代に甦ったのか。〈声〉と〈身体〉をテーマに、古典の現代性、そして東西の二つの劇様式の再生の意義と変容を縦横に考察する。

A5判三〇四頁 四〇〇〇円

エリザベス朝演劇の誕生

玉泉八州男編 執筆Ⅱ荒木正純・井手新・成田篤彦・高田茂樹他

シェイクスピア登場以前の民衆演劇の《起源》を浮き彫りにすべく、十六世紀演劇の文化的コンテクストを捉え直し、「大学才人」の位置づけを再考し、さらには代表的大学才人の詳細な作家論、作品論に及ぶ画期的論文集。

A5判六三七頁 七〇〇〇円

奈落の上の夢舞台 後期シェイクスピア演劇の展開

高田茂樹

『ハムレット』、『オセロー』、『冬物語』などの後期作品を取り上げ、世界とは、人生とはといった問いかけを舞台、役者、観客との交感をおして別扶し、そこに表れる作家の思索、その彷徨の軌跡を辿ることで、シェイクスピア演劇の核心に迫る。

193 A5判二九二頁 四〇〇〇円

仮想現実メディアとしての演劇 フランス古典主義芸術における《演技》と《視覚》

矢橋透

近代的世界観の形成期において、個人の主体化と世界の仮象化の意識をうながした「演劇」ひいては「絵画」というメディアの企てを、モリエールをはじめとするフランス古典主義芸術のうちに読み解き、《演劇的なもの》の普遍的な力を解き放つ。

四六判三〇〇頁 四〇〇〇円

演劇の精神史 バロックからヌーヴェルヴァーグまで

矢橋透

《古来、演劇はみずからを主題化してきた。》ロトルー、マリヴォー、ミュッセから、クローデル、ジュネ、リヴェットに至るフランス演劇の三五〇年を、メタ演劇の歴史、演劇の世界観の革新の歴史として読みかえる気鋭のフランス文学者の野心作。

四六判一八八頁 二五〇〇円

戦争と劇場 第一次世界大戦とフランス演劇

小田中章浩

第一次世界大戦下、威光を放つフランス演劇界が強い変化したとは？愛国心を掻き立て、プロバガンダに与す者、娯楽の中に一抹の真実を見出す観客。風俗劇やレビューの流行、前線で催される軍隊劇場……当時の台本や検閲調査を渉猟し、戦争と演劇の関係の本質に迫る。

234 A5判四三六頁 六〇〇〇円

世界は劇場／人生は夢

磯野守彦・佐竹謙一・矢橋透他

シェイクスピアから能、京劇、ハイナー・ミュラーまで、古今東西のジャンルの垣根を越えた九名の研究者による最新の演劇論集。(劇場Ⅱ世界)の中で繰り広げられる(夢Ⅱ人生)を鮮烈に描き出す。関係年表、参考図版付きで入門者に最適。
四六判二八四頁 二八〇〇円

ピランデッロ 秘密の素顔

フエデリーコ・ヴィットローレ・ナルデッリ 斎藤泰弘訳

二十世紀のイタリアを代表する小説家、劇作家が《自主亡命》中のパリに、出版したダヌンツィオ伝が当人の逆鱗にふれて警察に押取られ、同じく亡命して来た著者が、三カ月にわたるインタビューをもとに書き上げた、半ばピランデッロの自伝とも言いうる詳細な伝記。
203 A5判三〇頁 四〇〇〇円

ピランデッロ戯曲集Ⅰ 役割ごっこ／作者を探す

六人の登場人物 斎藤泰弘編訳

世界大戦の破壊と殺戮の中で、現代演劇を切り開いたピランデッロ。ベルエポック期の市民劇を極限まで推し進めた「役割ごっこ」、自分たちの人生のドラマを上演しようとする異常な一家が訪ねてくる傑作「作者を探す六人の登場人物」を収録。
211 A5判二八八頁 四〇〇〇円

ピランデッロ戯曲集Ⅱ エンリーコ四世／裸体に

衣服を 斎藤泰弘編訳

狂気から覚めた主人公が失った時間に抗おうと、他人を巻き込んで狂人の世界を演じる『エンリーコ四世』、嗜虐本能をテーマに、ある女性に起きた事件の真相が次第に明らかになる『裸体に衣服を』を収録。
229 A5判二八八頁 四〇〇〇円

メイエルホリド 演劇の革命

エドワード・ブローン 浦雅春十伊藤愉訳

ロシア・アヴァンギャルド芸術の中心的存在にして二十世紀演劇史上最大の演出家、メイエルホリド。スターリニズムに抹殺されたその鮮烈な演劇の実際を夥しい図版を駆使しつつ生き生きと再現する決定版評伝。
A5判四五二頁 五〇〇〇円

サーカスと革命 道化師ラザレンコの生涯

大島幹雄

ロシア革命の旗手として民衆の絶大な支持を集めた「赤い道化師」ヴィターリイ・ラザレンコ。その生涯を追うとともに、彼の盟友として同時代のアヴァンギャルド芸術を牽引したマヤコフスキイやメイエルホリドの足跡をもたどる、臨場感あふれるドキュメント。
132 四六判二七二頁 二八〇〇円

モスクワ芸術座の人々 去りゆくソヴィエト時代

アナトリー・スメリャンスキー 木村妙子訳

一九六〇―七〇年代の絶頂期には社会を揺がす震源地ともなったソヴィエト演劇。百年の歴史をもつモスクワ芸術座と関わりつつ、スターリニズム権力と闘いながら自由な表現を求めて時代を抗した演劇人たちの姿をおして、忘れられた(ソヴィエト文明)を検証する。
133 四六判三三九頁 三五〇〇円

「三人姉妹」演出ノート★

「トフストノーゴフ 矢沢英一訳

《今日の演出にはチエーホフが必要である。古くなったのはチエーホフではなく、その演出方法である》。古典の現代的演出で知られるポリシヨイ・ドラマ劇場の演出家がチエーホフ劇場演出の新たな方向を示す。
A5判一四八頁 一五〇〇円

現代ロシア演劇 ソ連邦崩壊からパンデミックとウク

ライナ侵攻まで

岩田貴

ソ連邦崩壊後の束の間の自由の後、市場経済への移行、そして文化統制政策への揺り戻しに直面したロシアの演劇人たちは、いかに演劇を続け、いかなる表現を追求したのか。気鋭の劇作家たちの作品を、三十年間の時代背景のなかで解き明かす。

226 頁 三三〇〇円

安部公房の演劇

高橋信良

一九五〇年代から七〇年代にかけて、自ら劇団を組織し、〈安部システム〉と名付けられた演技体系によって、新劇とも小劇場運動とも異なる独自の道を模索した、〈小説家〉安部公房の演劇に気鋭のアルト研究者が迫る。

A5判三三三頁 四〇〇〇円

六〇年代演劇再考

岡室美奈子・梅山いつき編

六〇年代演劇とはいったいなんだったのか？ 唐十郎、蜷川幸雄、別役実、佐藤信、横尾忠則、扇田昭彦、大笹吉雄、菅孝行といった〈アンゲラ演劇〉の巨人们と批評家たちが語る六〇年代演劇の実像。決定保存版！

123 A5判二八〇頁 三五〇〇円

夜と言葉と世界の果てへの旅 小池博史作品集

小池博史

一九八二年の立ち上げから二〇二二年の解散までの「パバ・タラフマラ」の三〇年間で、「小池博史ブリッジプロジェクト」での舞台作品制作のために書かれた各種テキストや、そのほか短い物語にいたるまで、一五作品をまとめた作品集。

186 四六判三二五頁 二八〇〇円

新・舞台芸術論 21世紀風姿花伝

小池博史

舞台芸術とは何か、そのあり方を根本的に探り、総合的舞台芸術作品の姿をあぶりだす。一九八二年から独自の手法で次々と新しい作品を制作し続けながら、世界的知名度を得てきた著者による画期的な舞台芸術論。

1712 四六判二五〇頁 二五〇〇円

戯曲

クローデル小喜劇集

ティエリ・マレ編 石井咲十岡村正太郎十永田翔希十中山慎太郎他訳
歓喜と哄笑が渦巻くフアンタジックな喜劇世界！ 英雄メネラオスとヘレネをめぐるギリシア悲劇を喜劇に仕立てた『プロテウス』ほか、笑いを恩寵と見なしたクローデルが自らの陰鬱な神学的思考や歴史観の枠を越えて書き上げた、小戯曲五編。
1972 A5判二八九頁 四〇〇〇円

タンバレイン

クリストファー・マーロウ 高田茂樹訳

〈獲るか、獲られるか。死か、生か〉。十五世紀初頭、中央アジアに興り、地中海沿岸からインドにまで版図を拡げた覇者ティムール大帝の野心とあくなき欲望を壮大に描き、エリザベス朝演劇の幕開けとなった傑作戯曲。
1212 A5判二八五頁 四〇〇〇円

グランニギニョル傑作選 ベル・エポックの恐怖演劇

真野倫平編訳

硫酸をかけられ脳髓を切り刻まれ、生皮を剥かれる人間たち、そしてギロチン、人体改造、拷問……グランニギニョル座を中心にベル・エポックのバリを震撼させた恐怖の演劇がいま甦る。
1011 A5判二六七頁 三八〇〇円

セレスティーナ カリストとメリベアアの悲喜劇

フェルナンド・デ・ロハス 岡村一訳

売春の取り持ちから産婆、悪魔使いまで、あらゆる仕事を請け負う老婆セレスティーナ。貴族の若者の恋の仲立ちを依頼されるが、事態は悲劇的結末へと向かい……人間の欲望、衝動、情念を生々しく描き切ったスペイン中世文学の傑作。詳細な注と解説を付した新訳決定版。
208 A5判三九頁 四〇〇〇円

どうにもこうにも

ジョルジュ・フェードー 桑原隆行訳

歌姫リュセットは貧しくも魅力的な青年ボワダンギアンに夢中。一方のボワダンギアンは彼女への未練を残しながらも、舞産家令嬢ヴィヴィアンヌとの結婚を決めていた……。世紀末のバリ社交界を舞台に歯痒い恋の駆け引きを描く、フランス式艶笑コメディの傑作。
175 四六判二五三頁 三〇〇〇円

夢は人生 四幕のメルヘン劇

フランツ・グリルパルツァー 城田千鶴子訳

古代ペルシャを舞台に繰り広げられる《権力》と《愛》と《夢》をめぐる四幕の戯曲。十九世紀オーストリアの最高の劇作家と評される著者が帝都ウィーンを騒然とさせた代表作。

チエーフ戯曲選

松下裕訳

いまなお世界中で上演され続けているチエーフ戯劇。演劇史上の傑作として名高い四大劇「かもめ」「ワーニャおじさん」「三人姉妹」「桜の園」を含む戯曲、全十四篇を一巻に収めた、著者の没後一〇〇年を記念する愛蔵本。
A5判六二九頁 六〇〇〇円

198 四六判一六四頁 二〇〇〇円

演劇

現代スペイン演劇選集

ミウラ、ブエロ・バリエホ、サストレ 佐竹謙一編訳

内戦に「勝利」したフランコ独裁体制下の検閲の嵐の中でも、演劇活動がやむことはなかった。この困難な時代の演劇的抵抗精神のありかを示す三人の劇作家の代表作三篇に、今世紀スペイン演劇の歩みを詳細に跡付けた解説を付す。

A5判並製二六七頁 三五〇〇円

オペラ

21世紀のスペイン演劇①

J・C・ルビオ、B・ドメネク、J・M・モラ他 田尻陽一他訳

息子がかつて父親に恋をした男と語り合い、娘は母親という存在に抱く嫌悪感を述べ立てる。恋人を、友人を、友人を喪い、心に傷を抱えて生きる人々——二十一世紀という時代と切り結ぶスペイン演劇最前線の七人の作家たちが多彩な手法で生の混沌を剔出する戯曲七編。

191頁 A5判三三三頁 四〇〇〇円

オペラのメデイア 近代ヨーロッパのミソジニー

梅野りんこ

ルイ十四世の威光を称えるべく誕生したフランス・オペラ。そこに幾度となく登場する魔女メデイアは、父を裏切り、子を殺し、夫を懲罰し続ける……近代ヨーロッパに底流するミソジニーの一端を、オペラの台本を通して浮き彫りにする。

141頁 A5判三〇六頁 四五〇〇円

ラテンアメリカ現代演劇集

レネー・マルケス ホセ・トリアーナ他 佐竹謙一編訳

欧米の新しい演劇の影響をうけつつラテンアメリカの《現実》を鋭利に抉りだしながらも、小説や詩に比して知られることの少なかったラテンアメリカの現代演劇を一九六〇年前後の作品を中心に紹介する、本邦初のアンソロジー。

A5判二九九頁 四〇〇〇円

フランス・オペラの美学 音楽と言語の邂逅

内藤義博

十七世紀には悲劇よりも劣るとされていたが、次第に観客を魅了し、十八世紀には独自の美学を洗練させたフランス・オペラ。ドラマトウルギー、韻律、調性、朗唱、仕掛けの問題を通してラシーヌにもヴォルテールにも書けなかった「音楽悲劇」の秘密に迫る。

1710 A5判二六六頁 四〇〇〇円

変貌するフランス・オペラ ブフォン論争の功罪

内藤義博

十八世紀半ば、パリ音楽界を二分し、イタリア・オペラとフランス・オペラの優劣をめぐる展開された「ブフォン論争」とは何だったのか。グリム、ダランベール、デイドロ、ラモー、そしてルソーまで、喧しい論戦をかきわけて、その全容を明らかにする。

2012 A5判三八頁 四五〇〇円

ロッシーニ《セビーリヤの理髪師》 名作を究める十

の扉

水谷彰良

二百年間たえず上演されてきたオペラ《セビーリヤの理髪師》には、いまだ知られざる謎があった。初演失敗の真実、一世紀以上も流行した改変の理由、自筆譜に残された意図、日本での特異な受容——ロッシーニ研究の第一人者が名曲の舞台裏と隠された真実に迫る。

172 A5判三〇頁 三五〇〇円

オペラ／音楽劇研究の現在 創造と伝播のダイナ

ミズム

佐藤英・大西由紀・岡本佳子編

音楽・テキスト・舞台が一体となった音楽劇にどのようにアプローチすればよいか。作品解釈や演出手法のみならず、劇場の運営から上演作品の選定、政治経済との関わりやマスメディアによる流通、地域毎の特色から教育事業までを考察するオペラ／音楽劇研究の幕開け！

213 A5判三七九頁 四五〇〇円

現代美術スタディーズ

編集委員 Ⅱ 島敦彦・山梨俊夫

二十一世紀に突入し、一層多様化・変容しつづける現代美術の世界。今日の美術の状況を理解し、多角的に読むためのあらたな展望をひらく。現代美術研究の最前線がここに！

A5判上製

現代美術の誕生と変容

山梨俊夫

「絵画が自らの物質的性格を露にし始めた」二十世紀後半から二十一世紀初頭までの主に日本の現代美術の変転を、物質性、自律性、獨創性、現実性の四つの視点から読みとぎ、それに関わる作家、作品を評述する。

226 三二六頁＋別丁八頁カラー 四〇〇〇円

ゲルハルト・リヒター 絵画の未来へ

林寿美

「絵画の終焉」がささやかれて久しい現代においてなお、絵画を描きつづけること。写真を描きうつつす（フォト・ペインティング）から、デジタルイメージをもちいた近作（ストリップ）まで、多岐にわたる作品を横断し、「現代最高峰の画家」の制作理念を明らかにする。

228 一六四頁 二五〇〇円

シュルレアリスムの25時

内部ではないはずなのに外部でもない場所、もはや今日ではないが、明日にも譲り渡すことのできない時間のうちに何度でも書きこまれていくシュルレアリスム。日本ではほとんど知られていない異端のシュルレアリストたちを紹介する書下しのシリーズ。小社創立三十周年記念出版。 内容見本呈 四六判上製

ジヨゼフ・シマ 無音の光

谷口亜沙子

《彼が目をさませば、岩は砕けちる》(オクタビオ・パス)。ポヘミアからパリへ、再び冷戦下のチェコへ。境界を生き抜き一切が溶けあう光の表現へ達した異色画家の全貌。

111 総二六九頁(別丁図版三三頁) 三三〇〇円

クロード・カーアン 鏡のなかのあなた

永井敦子

女ではなく、男でもなく……。仮面や鏡を使って偽装したセルフポートレート等によってジェンダー・アイデンティティを問う革命的な写真家/作家/思想家。一九八〇年代後半に再発見された、特異なシュルレアリストの実像に迫る。

102 一七三頁 二五〇〇円

マクシム・アレクサンドル 夢の可能性、回心の不可

能性

鈴木雅雄

ユダヤ教/キリスト教、独語/仏語、夢/現実、そしてシュルレアリスム……あらゆるものに引き裂かれ、その内部にも、外部にも生きることができないまま詩を書き続けたひとりの(凡庸)な詩人の足跡をたどりながら、シュルレアリスムが個人にもたらしたものを再考する。

121 二八三頁 二八〇〇円

ルネ・クルヴェル ちりぢりの生

鈴木大悟

典型的なプチ・ブル。同性愛者。結核患者。コミュニスト……矛盾にみちた生を駆け抜けた異端のシュルレアリストにして絶対的自由を渴望する生粋のロマンチスト。かつての仲間とも決別せんとしたその激烈な生涯と作品を、さまざまな角度から読み解く。

123 二九二頁 三〇〇〇円

ヴィクトル・ブローネル 燐光するイメージ

齊藤哲也

いまもなお、深い闇の中で鈍い光を発する《魔術的画家》の全貌。ルーマニアに生まれ、疾走するシュルレアリスムの時代を《遅れ》のアヴァンギャルドとして生き、そして左目を失った画家の実像に肉薄する野心的な試み。

0812 総三七九頁(別丁図版二八頁) 三五〇〇円

ロジェ・シルベール 虚無へ誘う風

谷昌親

なぜシュルレアリスムなのか——ルネ・ドーマルらと《大いなる賭け》グループを主宰し、ブルトンと対立しながらも、シュルレアリスムにこだわり続けたスキヤンダラスな詩人の肖像。生を壊し、死を導き入れる異端のシュルレアリストの全貌。

107 三五六頁 三五〇〇円

ヴォルフガング・パーレン 幻視する横断者

齊藤哲也

ウィーンに生を享け、パリでシュルレアリスム運動に身を投じ、第二次大戦中にはメキシコへ亡命した理知の画家にして思想家、沸騰するインスピレーションによって哲学、物理学を吸収し、ブルトンを驚倒させながらも自裁に至るその五十四年の生涯を追う。

1212 二七六頁+別丁図版四〇頁 三五〇〇円

ゲラシム・ルカノシイオイディプスの戦略

鈴木雅雄

つかえ切り裂き、攪乱する「吃音」言語！ 圧倒的な「吃音」詩群を遺し、「アンチイオイディプス」とも比較される「アンシイオイディプス」の概念を生み出した謎めいた詩人の生涯とテクストを追いながら、無名の詩人がシュルレアリスムをどう作りかえたのかを読みとく。

09.12 二四九頁 二五〇〇円

ジヨルジュ・エナン 追放者の取り分

中田健太郎

編集者、批評家、活動家、そして詩人…… 数多の顔をもつコスモポリタンにしてエジプト・シュルレアリスム運動の主導者、ジヨルジュ・エナン。詩篇を読解しながら波瀾万丈の生涯と思想の足跡をたどる。

13.11 二九六頁 三〇〇〇円

ジャン・ピエール・デュブレイ 黒い太陽

星椋守之

〈心揺さぶる絶望のなかの無垢〉(マンディアルグ)。二十九歳で自ら命を断つたシュルレアリスト詩人の生涯を追い、語の解体／捏造／増殖による言語の新しい可能性を考える。

10.10 二三五頁 二五〇〇円

全巻完結 全十冊セット定価三〇、〇〇〇円

カレル・タイゲ ポエジーの探求者

阿部賢一

前衛芸術を牽引し、雑誌を創刊し、装幀を手がけ、コラージュを残した、チェコ・シュルレアリスム運動の最重要人物。モスクワとパリに挟まれたプラハという磁場で終生〈ポエジー〉を謳い、いまだグループの精神的支柱であり続ける理論家の全貌を明らかにする。 17.12 三四〇頁+別丁図版八頁 三五〇〇円

ミシェル・ファルドウーリス ラグランジュ 神話の

國分俊宏

声、非人称の声
 バタイユやレリスの激賞を受け、グループの傍らで秘教的な言語世界を構築したカイロ生まれのギリシア人。事物の根源をまなざす難解きわまりない詩的散文をつぶさに辿り、人称という装置に収まりきらない詩人の「声」に耳を傾ける。

17.12 二八四頁 三〇〇〇円

ジャン・クロード・シルベルマン フィギュールの危険な

齊藤哲也

誘惑
 五〇—六〇年代のパリ・グループの一翼を担い、ブルトンの死、五月革命そしてグループ解体を経てなお〈シュルレアリスト〉であり、タブローを切り抜いて「看板」を作り、デッサンに詩をつけて「絵本」を描く画家・詩人の生き様を追う！

18.2 二八三頁+別丁図版六頁 三三〇〇円

フルーリ・ジョゼフ・クレパン 日常の魔術

長谷川晶子

「三百枚の絵を描けば戦争は終わる」——突然聞こえた〈声〉にしたがつて描きはじめると、三百枚目を描き終えた翌日にナチス・ドイツが降伏……デュッペルに見出され、ブルトンに称賛された霊媒画家の謎めいた生涯と魔術的な作品を解明する。

1810 二四三頁十別丁図版八頁 三〇〇〇円

ジゼル・プラシノス ファムII アンファンの逆説

鈴木雅雄

シュルレアリストたちに見出された自動記述の天才少女は、一度は文学から離れるも、やがて小説家、また特異な壁掛けの作り手として再び自らを見出す子ども／大人の狭間で、運れてきたシュルレアリスムと出会いなおす逆説的な生を追う！

1812 三〇九頁十別丁図版四頁 三五〇〇円

ルネ・ドーマル 根源的な体験

谷口亜沙子

聖なる山の登攀をめざすユーモラスな冒険小説『類推の山』を書いたルネ・ドーマルは、いかにしてあの清澄な筆致にたどり着いたのか。彼岸体験で得た確信を導き、生と言葉に一切の偽りを許さなかった詩人の歩みから、真に人生を照らすポエジーが立ち現れる！

1971 二八七頁 三三〇〇円

ジュール・モヌロ サンチマンからの解放

永井敦子

『シュルレアリスムと聖なるもの』を著したこと以外、その全体像が謎に包まれているモヌロ。フランス文化・思想の潮目に常に顔を覗かせながら、セゼールともバタイユともブルトンともドゴールともすれ違い、黙殺の憂き目にあった知識人の知られざる生涯に光をあてる。

2011 二八三頁 三五〇〇円

ミシェル・カルージュ 至高点をめざす二つの道

新島進

カトリックながらシュルレアリスムに深く傾倒した作家。人の機械化と孤独化が進む現代を先見する〈独身者機械〉論をはじめ、神秘思想とシュルレアリスムが一人の知識人のなかで錯綜した様相から、至高点をめざした二つの道の方を追う。

近刊

エルヴェ・テレマック 形象の冒険

中田健太郎

五〇年代後半のニューヨークで美術を学び、人種差別を感じて六〇年代初頭にパリへと移り、抽象表現主義や抒情的抽象を横目に、フィギュラシオン・ナラティヴに加わったその足跡をたどり、現代美術における具象的形態の可能性を浮かびあがらせる。

近刊

クロード・タルノー 逃走線と神話

鈴木雅雄

四七年の展覧会や機関紙『ネオン』において中心的な役割を果たしながらブローネルらとともに脱退、その後世界各地を転々とし、一つの神話を生きるように自らのシュルレアリスムを生きた芸術家。「客観的偶然」の理論と実践を更新した秘められたシュルレアリストの軌跡。

近刊

ロックの名盤！

洋楽ロックの名盤をまるまる一冊で語り尽くし、あの興奮をよみがえらせる話題のシリーズ！ 欧米の名だたる批評家／研究者たちが、歌詞やサウンド、ジャケットなど、そのアルバムの魅力のすべてを徹底解説する。日本語版オリジナルの解説とデイスコグラフィ付き。

内容見本呈 四六判並製

アバ・ゴールド

エリザベス・ヴィンセントリ 石本哲子訳

「チキチータ」「ダンシング・クイーン」を収録し、全世界で二八〇〇万枚を売り上げた、アバ再評価のきっかけともなった一九九二年のベスト盤。スウェーデンから世界を席卷したヒット曲の数々はどのようにして生み出されたのか。ファン待望の一冊。

131 一七九頁 一五〇〇円

レッド・ツチペリンⅣ

エリック・デイヴィス 石崎一樹訳

「ブラック・ドッグ」「天国への階段」を収録し、三七〇〇万枚を売り上げた一九七一年のモンスター・アルバム。タイトルや歌詞、ジャケットに至るまでちりばめられた数々の謎と秘密を解き明かしつつ、「史上最高」とも評されるこのアルバムを解体する。

131 二二九頁 一八〇〇円

レット・イット・ビー

ステイヴ・マッテオ 石崎一樹訳

なぜ、これがビートルズ「最後のアルバム」なのか。(ビートルズのアルバムの中で唯一、結末が用意されていない)へあらゆる点で不完全なこのアルバムはそれ故にこそ、多くの人を魅了する。貴重な証言と取材によって毀誉褒貶のスタジオセッションを紙上再現する。

135 一八九頁 一五〇〇円

メイン・ストリートのならず者

ビル・ヤノヴィッツ 石本哲子訳

混迷の六〇年代末を抜け、亡命先での伝説的なレコーディングはストーンズのサウンドに新境地をもたらした。ジャケット、歌詞、関係者の証言を手がかりに、その奇跡の足跡をたどる。ロックンロールの神髄ここにあり！

1612 二八頁 一八〇〇円

サイン・オブ・ザ・タイムズ

ミケランジェロ・マトス 石本哲子訳

ポップ・ミュージックをアートにした男、プリンス。その代表作の奥深さに分け入りながら、いかにして人がその虜になっていくのかを綴ったドキュメント。プリンスはいったって新しい！

1612 一六四頁 一五〇〇円

人文科学

思考の最前線

浅沼圭司 十谷内田浩正 編

執筆 有田英也・石原千秋・岩井克人・宇野邦一・小田亮・姜尚中・隅研吾・黒崎宏・黒崎政男・小谷真理・高橋哲哉・高山宏・田崎英明・巽孝之・富山太佳夫・西谷修・前田英樹・宮本陽一郎 現代思想ガイドの決定版！

A5判並製三二〇頁 一五〇〇円

記憶術

フランスス・A・エイツ 玉泉八州男監訳

印刷術の発達とともに滅び、完全に忘れさられた《記憶術》の、ギリシアにおける発生からルネサンス期のヘルメス主義的、隠秘主義的展開に至る二千年の歴史と理論を丹念に掘り起した西歐思想史研究の記念碑的大著。

A5判五一九頁十別丁図版二四頁 六〇〇〇円

想起の空間

アライダ・アスマン 安川晴基訳

記憶、歴史、忘却、想起……二十世紀の破壊と忘却を経て先鋭化する《記憶》をめぐる問題を、古代から今日のデジタル時代に至る文化的記憶の形態とその変遷を概観しつつ論じつくす記憶の思想史。

A5判五七五頁 六〇〇〇円

集会的記憶と想起文化メモリー・スタディーズ入門

アストリッド・エアル 山名淳訳

我々の営為の根底に流れ、同時に文化全体を包み込む現象でもある《記憶と想起》に対して、諸学問はいかにアプローチしてきたのか。多様な領域にまたがる《記憶研究》の現状をマッピングし、《記憶と想起》を社会文化的な視点からひもとく。

228 A5判三八八頁 四五〇〇円

書物の現在

吉本隆明・蓮實重彦・清水徹・浅沼圭司

映像の優位、活字文化の衰退という俗説を排し、グーテンベルクから電子出版に至る《書物》の歴史と現在を二人の研究者（浅沼/清水）が検証するとともに、今日の出版の問題を二人の《編集者》（蓮實/吉本）が鋭く剔抉する。

四六判並製二八二頁 二二〇〇円

読書について

浅沼圭司

印刷術の登場によって革命的な変化をこうむった《読書》の問題を、菅原孝標女、ドン・キホーテ、サルトル、ロラン・バルトの四人の典型的「読者」の考察を通じて、電子出版の未来をも射程に入れ、徹底的に問いつめる読書/書物論。

四六判三三二頁 三五〇〇円

書物の迷宮

西沢栄美子

小説、詩、絵画、映画など、様々な場面に現れる「文字」、それが担う《意味》とは何か。文字を、単なる意味伝達の手段にとどまらない「イメージ」として捉え、あざやかに読み解く、気鋭の美学者の斬新な書物/芸術論。

四六判二〇九頁 二五〇〇円

18世紀印刷職人物語

二二〇・コンタ 宮下志朗訳

産業革命前夜のバリ、見習い印刷工ジェロームの笑いあり涙ありの修業時代を描きながら、工房への入会儀礼、印刷工の組合とその規定、地下印刷の裏側など、著者自身の体験をもとに、十八世紀印刷工房の様子をいきいきと詳細に伝える貴重なドキュメント。

133 四六判二〇五頁 二五〇〇円

狂気と権力 フーコーの精神医学批判

佐々木滋子

《私は知の系譜学的歴史を書いているのだと考えていた。しかし真の導きの糸は、この権力の問題にあったのだ》『狂気の歴史』の自己批判的再構成ともいえるべき一九七三―七四年度の講義を徹底的かつ明快に読み解き、フーコーの思想の核心に迫る。

A5判二八二頁 三五〇〇円

ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』 を読む

佐藤嘉幸・立木康介編

瞠目の著作群を著す傍ら、十三年にわたって続けられたコレージュ・ド・フランス講義。苛烈な知性が遺したためく言説の歷程を前期・中期・後期に分け、各時期の中核的テーマを際立たせつつ、フーコー理論の真の骨格を抉出する初の試み！

219 A5判三八六頁 六〇〇〇円

ジル・ドゥルーズの哲学と芸術 ノヴァ・フィグラ

黒木秀房

独自のスタイルで哲学を一新したドゥルーズは、なぜ芸術を語り続けたのか？個人が特異な生のスタイルを求めながら共同体を創出することの可能性を切り開いたドゥルーズの哲学的生を、〈フイギュール〉の問題系として捉え直し、概念の創造―変奏のドラマを目撃する。

202 A5判二五八頁 四〇〇〇円

スピノザとわたしたち

アントニオ・ネグリ 信友建志訳

スピノザという異形の運命に立ち戻り、その批判的／転覆の意味としてその《共》の哲学を今ここに布置する。〈ポスト近代の政治的地平を展望しようとするネグリの思想の精髓〉。

112 四六判二七頁 二五〇〇円

精神病院と社会のはざままで 分析的实践と社会的実践の交差路

フェリックス・ガタリ 杉村昌昭訳

ギリシャのレロス島から、パリ郊外のラポルド精神病院へ――。稀代の哲学者の原点を知るための、もつともコンパクトなガイダンス。ガタリのテキスト、日記、さらには、盟友ジャン・ウリによる追悼文や貴重な写真などをモンタージュする。

128 四六判二八八頁 二五〇〇円

アンチ・オイディプスの使用マニエール

ステファヌ・ナドー 信友建志訳

ポップ心理学、資本主義、そして死。混沌が支配する日常を生き抜くために、ドゥルーズ・ガタリの思想はいかに実践しうるのか。気鋭の哲学者の出色の論考。

104 四六判三四七頁 三八〇〇円

美学のプラクティス

星野太

たえず懐疑的な視線にさらされ、「居心地の悪さ」を指摘されてきた学問領域、美学……。『崇高』『関係』『生命』という三つのテーマをめぐって、抽象と具体のあいだで宙吊りにされてきた美学の営為を問い直す、ひとつの実践の記録。

2112 四六判二三三頁 二五〇〇円

フッサールにおける価値と実践 善さはいかにして
構成されるのか
八重樫徹

初期の『論理学研究』から未公開の草稿まで、フッサールの哲学に見いだせるものとは（よく生きること）への問いであった。フッサールにおける「価値論」を丹念にたどることにより、それが「感情」と切り離せないものであることを解明し、フッサール倫理学にひとつの筋道を見出す。
1912 四六判三〇四頁 三五〇〇円

イマージュの肉 絵画と映画のあいだのメルロ＝ポンティ

マウロ・カルボネ 西村和泉訳
創成期の映画分析を通してイマージュの核心に迫ろうとしたメルロ＝ポンティの遺志を継ぎ、『見えるものと見えないもの』の中心的主題である「肉」の概念を再考し、世界の現実を知覚と想像の両面でもとらえる、まったく新しい存在哲学の書。
1912 四六判二七九頁 三〇〇〇円

経験と出来事 メルロ＝ポンティとドゥルーズにおける
身体の哲学
小林徹

経験と出来事のあいだを揺れ動く――。「経験」に根差したメルロ＝ポンティの思考と「絶えず「出来事」へと滑り込んでいくドゥルーズの思考とを何度もしながら、現代における（身体）の在り処を指し示す。
1910 A5判四〇五頁 六〇〇〇円

愛の世紀

アラン・バディウ十二コラ・トリュオング 市川崇訳
出会い系サイトとプラトンにおける、そして今日の芸術・宗教・政治における《愛》の諸相を、難解をもってなる現代フランスの哲学者が語り尽くす。《愛》は最小のコミュニズムだ！
126 四六判一七二頁 二二〇〇円

議論して何になるのか
ナシヨナル・アイデンティティ、イスラエル、68年5月、コミュニズム
の場 寿光十杉浦順子訳

アラン・バディウ＋アラン・フィンケルクロート
根本的に相反する二人の哲学者が、緊張に満ち、火花散るような、時に激昂に達するほどの雰囲気の中で、ナシヨナル・アイデンティティ、イスラエル、68年5月、コミュニズムについて、白熱の議論を闘わせる。
1984 四六判二二頁 二八〇〇円

思考する芸術 非美学への手引き

アラン・バディウ 坂口周輔訳
芸術と哲学の関係はいかなるものなのか？ 芸術を真理との関係から問いつし、ダンス、映画、演劇、散文、詩を例に、作品でも作者でもなく出来事的な切断によって先導される《芸術的布置》の次元を見定める渾身の芸術論。
216 四六判二九二頁 三三〇〇円

推移的存在論

アラン・バディウ 近藤和敬＋松井久訳
宗教とも、形而上学とも、ロマン主義とも手を切つて、存在を思考することはいかにして可能か。主著「存在と出来事」のエッセンスから出発して、集合論と圏論を携えてプラトンからカントまでを一挙に横断し、数学＝存在論を宣言したバディウ哲学の転回点！
1812 四六判二五二頁 三〇〇〇円

コミュニズムの仮説

アラン・バディウ 市川崇訳
二十一世紀の《共産主義》を闘え！ パリ・コミュニオン、文化大革命、五月革命……それらは果たして「敗北」だったのか？ コミュニズムの「理念」の復権を試み、解放の政治の可能性を問う《論争的》状況論。
1310 四六判二六七頁 三〇〇〇円

サルコジとは誰か？ 移民国家フランスの臨界

フラン・バディウ 榊原達哉訳

フランス大統領の欺瞞を暴け！パリ郊外の移民たちを「社会のクズ」と呼んだ男が、なぜフランス大統領に選ばれたのか？現代フランスの碩学が、新自由主義と排外主義を標榜する現職大統領を徹底的に批判し、新たな（コミュニズム）を提起する。フランスでベストセラーとなった話題の本。 四六判二四頁 二二〇〇円

共産主義の理念

長原豊監訳 C・ドゥズイーナス＋S・ジジエク編 冲公祐＋比嘉徹徳＋松本潤一郎訳

蔓延するグローバリズムへ向けて放たれた二十一世紀の「コミュニズム宣言」！大反響をよんだ二〇〇九年、ロンドンでのシンポジウムの全記録。執筆J・L・ナンシー、A・ネグリ、J・ランシエール、A・バディウ、T・イーグルトン、M・ハート他 126 四六判四三四頁 四五〇〇円

ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か「黒ノート」をめぐる討議

ペーター・トラヴニク中田光雄十齋藤元紀編

死後四十年を経て公刊された哲学的手記「黒ノート」によって「反ユダヤ主義」疑惑が浮上したハイデガー。ナチス関与問題以来ふたたび世界的な議論を惹起するハイデガー哲学の真相／真価を問い直し、現代哲学、そしてわれわれの未来を模索する。 159 A5判並製二九六頁 三〇〇〇円

意味と脱—意味 ソシユール、現代哲学、そして…

中田光雄

ソシユール（言語）とハイデガー（真理）の間から広がり、フランス二十世紀思想史の中軸を貫き、これからのグローバル・デモクラシーの普遍的媒介項となる「意味」の地平。「意味」批判の思惟をも包摂しつつ、この「第四の地平」の開削に着手する。 182 A5判二八八頁 四〇〇〇円

ドゥルーズ魂の技術と時空・生起—動

〈意味〉を現働化する

中田光雄

ドゥルーズ初期の主要著作「差異と反覆」「意味の論理学」の精読に基づき、「魂の奥底」や「時空・生起—動」において潜勢的に蠢く力動の顕勢化・現働化として「意味」をとらえ、プラトン・カントの系譜上にドゥルーズを位置づけ、未来への途を探る。 199 A5判三二〇頁 五〇〇〇円

ドゥルーズ—ガタリ 資本主義、開起せよ、幾千のプラト—

中田光雄

「アンチ・オイディプス」「千のプラト—」は資本主義、歴史、未来に何をもちますのか。社会的欲求充足レヴェルの精神分析とマルクス主義に見切りをつけ、無償の産出衝動から地成学的開展を通じて宇宙論的シンセサイザーへと至るプロセスに人類の未来を託す。 210 A5判四〇二頁 五〇〇〇円

ドゥルーズ—ガタリ 哲学、真理か、創造か

中田光雄

ひところ、西欧／歴史／人間の終わりとともに、哲学の終わりが宣言されたことがあったが、現代世界と現代学術界はさらなる哲学人口を輩出しつつある。何を終わらせ、何を開始するのか。主著「哲学とは何か」に人類史再建の方途を探る。 225 A5判二四九頁 二七〇〇円

デリダ 脱—構築の創造力 メタポリアを裁ち起

こす

中田光雄

デリダ哲学の根幹をなす「脱—構築」概念を〈創造力〉の哲学として位置づけ、アポリア概念をめぐる仔細な検討を経ながら、今日および今後の哲学思想や文化価値創造、さらには世界社会運営へのデリダ哲学の積極的な貢献可能性の如何を問う。 175 A5判三四〇頁 五〇〇〇円

哲学とナシヨナリズムハイデガー結審

中田光雄

ハイデガーにとってナシヨナリズムとは、ナチズムとは何だったのか？ そして彼の哲学は《現実》といかに切り結んだのか？ ナシヨナリズムの理念と存在概念の再検討を通して、いまなお議論を誘発しつづける〈ハイデガーとナチズム〉の問題を刷新する。

144 A5判二九八頁 四〇〇〇円

現代思想と〈幾何学の起源〉超越論的主観から

超越論的客観へ

中田光雄

数多の哲学者たちを魅了した人類の思考の起源『幾何学の起源』の問題をフッサール、メルロワポンティ、デリダ、ミシェル・セーラーの思考をたどることにより再検証し、今日そして今後の「知」と「学」の営為を問う。

144 A5判二七二頁 四〇〇〇円

差異と協成 B・ステイグレルと新ヨーロッパ構想

中田光雄

現代のデジタル情報文明を、哲学はいかに受け止め、人心や社会の向上に向けてどのように導くのか。ベルナル・ステイグレルの説く「ハイパー産業社会」の概念をもとに、ヨーロッパ共同体の運命を探る思索の集積。

144 A5判三六八頁 五〇〇〇円

存在の探究

相沢義男

世界から意味を抜き取るとき、純粹な存在が現出する。この観点から、グレアム・ハーマン、マルクス・ガブリエラ、意味に依存し、存在を現出せしめることのない実在論を批判的に検討。さらに、返す刀でハイデガーの実在論を両断する！

226 四六判二八五頁 三〇〇〇円

脱近代宣言

落合陽一・清水高志・上妻世海

落合陽一が同時代を疾駆する哲学者清水高志、キュレーター・上妻世海とともに、脱近代、デジタルネイチャーの〈哲学〉、アート、仏教などのあらゆる関心領域を語りつくし、応酬しあう。新しいカルチャーの誕生を予感させる、密度と速度と深い喜びに満ちた、三者の歴史的对話！

189 四六判並装二〇四頁 二〇〇〇円

マザリナード 言葉のフロンド

クリスチアン・ジュオー 嶋中博章・野呂康訳

〈マザリナード〉が飛び交い文芸が政治行為をテキスト化し、街が劇場となった十七世紀フランスのフロンドの乱。政治における〈行為〉と〈行為者〉と〈言葉〉に着目し、歴史記述に新たな地平を開く。

1210 A5判三七〇頁 五〇〇〇円

歴史とエクリチュール 過去の記述

クリスチアン・ジュオー 嶋中博章・杉浦順子・中畑寛之・野呂康訳

歴史資料／文学作品の背後の〈行為〉を読み解き、歴史解釈の新たな方法論を提示するフランス歴史学の新潮流の初めての紹介。著者の代表的論文に、日本での講演、未発表論文等を取めた日本語オリジナル編集版。

211 A5判三〇四頁 四〇〇〇円

オーラルヒストリーとは何か

アレクサンドロ・ポルテッリ 朴沙羅訳

語られた記憶を、歴史として書く――。第二次世界大戦後のイタリアと、兩大戦間期のアメリカの知られざる一面を描きつつ、口述資料の考察に新たな視点と方法をもたらした、オーラルヒストリー研究の基本文献。

162 A5判四四九頁 七〇〇〇円

メディアの近代史 公共空間と私生活のゆらぎのなかで

パトリス・フリッシー 江下雅之・十山本淑子訳

今日の基幹メディアの原型は近代国家建設の熱気のなかで生れた。腕木通信から携帯電話へ至るコミュニケーション・システムの生成過程を社会と技術革新のダイナミックな相互作用の歴史として描く近代メディア史の決定版。

四六判三四三頁 三〇〇〇円

褐色の世界史 第三世界とはなにか

ヴィジャイ・プラシヤド 栗飯原文子訳

〈第三世界というプロジェクト、それはこれまでヨーロッパが答えられなかった問題を解決することなのだ〉(フランツ・ファノン)。激動の二十世紀をへ第三世界の視座から描き出し、その未発の歴史／運動／現在をトータルに概括する。

134 四六判並製四四七頁 四〇〇〇円

クレオール想像力 ネグリチユードから群島の思考へ

立花英裕編

一九九〇年代から盛んに紹介され、グローバル化の浸透しきった昨今においてこそ私たちの現実にかける潜在力を秘めるクレオールの文学・思想を、いま改めて読み直す。詳細な文献目録・年表・フランス語圏作家小事典を収録。

203 A5判四七五頁 六〇〇〇円

〈他者〉としてのカニバリズム

橋本一径編

近代西洋が発見し、また目を背けようとしてきたカニバリズムは、一方で並々ならぬ耳目を集めてきた。しかし、問題は人肉を口にしようかとのだろうか。文明批判、自我の変容、倫理と禁忌、そしてテクノロジの観点からいまい度問い直す。

193 四六判二九頁 二五〇〇円

21世紀のソシユール

松澤和宏編

一世を風靡した「ソシユールの思想」とは、膨大な草稿を残した言語学者の企図にかなっていったのだろうか。『講義』の校訂、理論的虚構としての「ラング」と「パロール」、神話・伝説研究にみる歴史観、認知言語学との類縁性……新たなソシユール像の萌芽。

181 A5判三四〇頁 五〇〇〇円

テクストの解釈学

松澤和宏編

文学・哲学・言語学・歴史学の研究者たちが人文学を横断する〈テクスト解釈〉の営みを通して専門知に潜む暗黙の前提を問い糾す絶え間ない解釈／自己理解の先鋭な試み。執筆∥佐藤彰一・小川正廣・戸松泉・金山弥平・釘貫亨・鎌田隆行・井上隆史他

123 A5判四四四頁 六〇〇〇円

言語の中動態、思考の中動態

小野文十条田文編

言語と主体と認識の枠組みをゆさぶり、思索を誘発してやまない「中動態」——近年、再注目されているこの異貌の概念に、言語学、心理学、哲学、思想、文学、芸術の観点から肉迫し、中動態概念の軌道と圏域を見極めようとする意欲的な試み。

222 四六判二五七頁 三〇〇〇円

比較から世界文学へ

張隆溪 鈴木章能訳

「比較文学」の世界的研究者にしてノーベル文学賞の選考にも関わる著者が、これまでのヨーロッパ中心主義を乗り越え、真にグローバルな視座にたつて語った、「世界文学」の可能性と、そのあるべき姿。

189 A5判二六一頁 四〇〇〇円

アレゴレンス 東洋と西洋の文学と文学理論の翻訳可能性

能性

張隆溪 鈴木章能十鳥飼真人訳

古今東西の様々な文学が、異なる時代と文化・政治的状况においていかに類似した読み方をされ、またいかに類似した過程をもって書かれるのかを考察し、文学や文学理論の翻訳可能性を示した、「世界文学」の世界的研究者による理論書。

1612 A5判三九六頁 五〇〇〇円

翻訳家たちの挑戦 日仏交流から世界文学へ

澤田直・坂井セシル編

〈世界文学〉を支える翻訳はいかにして行われるのか——古典、詩歌、小説、思想、映画、そして創作にいたるまで、ある言語が別の言語と通いあう道なき道を模索し、苦闘の末に言葉を見出した翻訳家たちの冒険の記録！

197 四六判三〇五頁 三三〇〇円

耳のなかの魚 翻訳Ⅱ 通訳をめぐる驚くべき冒険

デイヴィッド・ペロス 松田憲次郎訳

吹き替え映画、前衛文学、自動翻訳機、ニュルンベルク裁判、聖書翻訳……あらゆる時代と場所をめぐる、翻訳不可能性に抗いながら〈翻訳Ⅱ通訳〉が何をなすものかを明らかにする。博覧強記の著者による、空前絶後の翻訳論！

214 四六判三五二頁 三三〇〇円

文化の翻訳あるいは周縁の詩学

近藤昌夫十内田慶市十鼓宗十柏木治十角伸明

ユーラシア大陸に興った中国、イスラーム、西欧、そして日本という四つの文明の〈接触〉〈衝突〉そして〈翻訳〉の諸相を、西学東漸、ビザンツ帝国の崩壊と活版印刷術の発明、レコンキスタ、帝国主義と反ユダヤ主義、明治維新という激動の時代を背景に活写する。

129 A5判二三三頁 二八〇〇円

複数の「感覚・言語・文化」のインターフェイス 境界面での変化と創造に関する新しい見方

広島市立大学国際学部編

言語学を柱とし、言語・コミュニケーション・文化・社会などにおける近・現代の諸問題を隣接諸分野と繋がるインターフェイスとして捉え直し、日本語教育や英語教育などの現場における実践をも含めて幅広い議論を展開する。【広島市立大学国際学部叢書9】

194 A5判二五五頁 四〇〇〇円

創造と情報 現代形而上学叙説

道躰章弘

二者の形而上学から「結合」の形而上学へ。「創造」を抑圧してきたギリシヤ哲学的形而上学の歴史を、実証科学・基礎生物学と、ヘブライ思想の斬新な解釈によって書き替える新しい存在論の試み。

A5判四八二頁 六〇〇〇円

哲学のエチュード 九つのテーマからなる入門書

道躰滋穂子

「存在の究極原因」、「人間と自由」といった根本的命題を古今の哲学者たちは如何に問うたのか。九つの普遍的な問いを端緒に、哲学へと読者を誘う〈永遠の相の下に〉編まれた入門書。タレスからではない、〈私〉から始まる哲学のために。

四六判一五四頁 一八〇〇円

国家研究

イーデイト・シュタイン 道躰章弘訳

アウシュヴィッツのガス室にて凄絶な死を遂げるまで、哲学者として、またカレル会修道女として、思索の道を真摯に歩み続けた、フツサールの直弟子シュタインによる、犀利な現象学的共同体論Ⅱ国家論

四六判二六一頁 三〇〇〇円

有限存在と永遠存在 存在の意味への登攀の試み

【改訳決定版】

エーデイト・シュタイン 道躰章弘訳

有限の諸原因をめぐる数多の知識を足場にして、永遠無限の存在としての〈神〉という山頂を目指す、フッサールの高弟にしてカルメル会修道女、エーデイト・シュタインの哲学の到達点。

2211 (1933) A5判六〇二頁 八〇〇〇円

聖エーデイト・シュタインの永遠哲学 存在の意味

を求めて

道躰章弘

フッサールに師事した後カルメル会修道女として活動し、アウシュヴィツのガス室に斃れた至高のユダヤ人哲学者エーデイト・シュタイン。鋭敏な知性が現象学と中世哲学の批判的統合を以て存在論の深奥に挑んだ、その主著『有限存在と永遠存在』を読み解く。

2211 A5判二六九頁 四〇〇〇円

現代科学にもとづく形而上学 今日、神の存在の問題

題はいかに提出されるか C・トレスモンタン 道躰章弘訳

アリストテレス、ベルクソン、テイヤールの系譜に連なるフランス現代哲学の巨星が実証科学に基づく新たな時代の形而上学を提起する衝撃の一冊。宇宙物理学、基礎生物学の知見をもとに〈宇宙・生命・思考〉の究極の根拠に迫る最先端の存在論。

A5判五三八頁 六〇〇〇円

〈ブライ人キリスト

クロード・トレスモンタン 道躰章弘訳

福音書はギリシャ語ではなく、ヘブライ語で書かれたものであった。フランス語、ギリシャ語、ヘブライ語を往還しながら、新約聖書の内奥に隠された真の姿「ヘブライ語文書」へと肉迫する、キリスト教研究の新たな地平を切り拓く画期的論考。

1310 A5判三六四頁 五〇〇〇円

フランス十六世紀における抵抗の諸相 ドービ

ニエからコキークへ

高橋薫

宗教戦争期の詩人・宗教学者・知識人は支配的の理念と、いかに格闘したのか。混沌の時代に生きた詩人・歴史家のアグリッパ・ドービニエの韻文・散文作品をはじめ、デュ・ロジエ、コキークらの著作を考証し、十六世紀人の心性をたどる。著者積年の研究の集大成。

2011 A5判七六九頁 八〇〇〇円

〈フランス〉の誕生 十六世紀における心性のありかた

高橋薫

〈フランス〉の人々はなぜ王国の統一をめざしたのか。それはなぜ可能だったのか。ルネサンス後期のフランスの庶民、王侯貴族、文学者などの心性を読みとき、ロンサル、モンクレチアン、フェビュス等の作品をひきつつ動乱の時代を生きた人々の暮し方から考察する。

1217 A5判五七六頁 八〇〇〇円

歴史の可能性に向けて フランス宗教戦争期における歴史記述の問題

高橋薫

ルネサンス／宗教改革から「考証の時代」へ——フランス十六世紀の後期に「歴史考証」の洗礼を受けた五人の歴史家の残した膨大な歴史記述を仔細に読み解く。動乱の時代、フランス十六世紀に魅せられた著者による、宗教戦争期フランス史研究の集大成。

A5判六〇〇頁 八〇〇〇円

「コンスタンティヌスの寄進状」を論ず

ロレンツォ・ヴァッラ 高橋薫訳

中世最大の偽書「コンスタンティヌスの寄進状」。かつてローマ皇帝コンスタンティヌスが教皇シルヴェステルに教皇領を寄進した証拠とされたこの文書の真正性を、徹底的な文献学的・歴史学的考証により否定した論争の書。

144 A5判二〇〇頁 三〇〇〇円

奴隷制を生きた男たち

ジエームズ・ウオルヴィン 池田年穂訳

「アメージング・グレース」を作詞した奴隷商 農園主として君臨した奴隷所有者、自伝で奴隷制を告発した元奴隷。奴隷制をめぐる三人の人生を生きいきと描き出す、現代史を考えるうえで必読のバラレ・ヒストリー。

103 四六判三三三頁 三五〇〇円

日系人を救った政治家ラルフ・カー 信念のコロ

ラド州知事 アダム・シユレイガー 池田年穂訳

第二次大戦下のアメリカ合衆国で、合衆国民を差別することは憲法に反するという確固とした信念から、各州が嫌がった日系人を引き受け、その強制収容にも「頑固に」反対した、「アメリカの杉原千畝」の軌跡を追う。序文 藤崎一郎

137 四六判四五二頁 四五〇〇円

石が叫ぶだろう アメリカに渡った日本人牧師の

自伝 シゲオ・シマダ 池田年穂訳

日系人強制収容所での苦難、父への授洗、ワシントン州での布教活動……。息子として、夫として、親として、そしてキリスト者としての思いを、アメリカに渡った日本人牧師がいっきと語る自伝。《神の子になるのに遅すぎることは決してない。》

四六判三三八頁 三五〇〇円

ユダヤ人を救え！ デンマークからスウェーデンへ

エミー・E・ワーナー 池田年穂訳

第二次大戦のさなか、ナチ占領下にあつて、国内のほとんどすべてのユダヤ人をスウェーデンに逃亡させたデンマークの民衆の知られざる決断と行動。生きのびたユダヤ人たちの手紙や体験記、インタヴュー等々を駆使して、生き生きと描く救助劇の全貌。

1011 四六判二六八頁 二八〇〇円

ホロコーストを逃れて ウクライナのレジスタンス

ジエー・ウイテリック 池田年穂訳

三〇〇/六〇〇、奇跡のような確率でわずかに生き残ったソルカ（ウクライナ）のユダヤ人。そこには、ある母娘の知られざる活動があつた……。ナチをあざむく母の知恵と武力に頼らぬ闘いの日常とそれぞれの家族の絆の物語。

147 四六判二四四頁 二五〇〇円

ホロコーストとナクバ 歴史とトラウマについての新たな

話法 バシール・バシール＋アモス・ゴールドバーグ編 小森謙一郎訳

ユダヤ人絶滅政策（ホロコースト）とイスラエル建国に伴うパレスチナ人への迫害（ナクバ）が、連続した一つの出来事だとしたら？ ユダヤ人とアラブ人双方の学者・作家が協同してユダヤ・中東史の深層を読み解き、政治的・歴史的分断を超えて語るための新たな（話法）を探索する。

83 A5判四七六頁 六〇〇〇円

ヴェネツィア、最初のゲット

アリス・ベツケルIIホー 木下誠訳

ユダヤ人迫害の象徴として流布する《ゲット》は、その誕生の地である都市国家ヴェネツィアでは、経済と文化の花開く、国際交流の一大拠点だった。様々な書物を引用しながらその語源を究明し、《ゲット》理解を刷新する！

163 四六判二四〇頁 二八〇〇円

ヴァイマル共和国史 民主主義の崩壊とナチスの

台頭 ハンス・モムゼン 関口宏道訳

第一次大戦終戦から第二次大戦開戦まで、ドイツ・ヴァイマル共和国における政治的変遷を、社会、経済、外交、政治的力関係などの多方面の事実をもとに克明に分析する。ヴァイマル共和国史研究の基礎ともいえるべき大著。

A5判五〇〇頁 七〇〇〇円

ナチスのキッチン「食べること」の環境史

藤原辰史

システムキッチン、家事労働から、レシビ、食材 エネルギーにいたるまで、ナチス体制下の〈食〉の制度と政策の現代への深い影響を暴き、来るべき〈食〉を展望する。第一回河合隼雄学芸賞受賞。

125 四六判四五〇頁 四〇〇〇円

この時代の遺産

エルンスト・ブロッホ 池田浩士訳

なぜファシズムが勝利するのか？ サラリーマン文化、通俗読物、表現主義、ニーチェ、そして映画。〈黄金の二〇年代〉に民衆を陶醉させたサブカルチャーをモニタージュシ、ナチス前夜の危機の瞬間に空洞をとらえた〈思想的実験〉。

A5判六七七頁 七〇〇〇円

ナチズム地獄と神々の黄昏

エルンスト・ブロッホ 池田浩士・藤原辰史・本庄史明訳

ナチズム・ファシズムはいかにして批判可能なのか？「もはや意識されていないもの」と「まだ意識されていないもの」をキーワードに、ヒトラー政権下の三〇年代の日常を鋭く批判し、瞞着者たちの暴力と野蠻をあばく。

A5判四二七頁 四五〇〇円

宗教とファシズム

竹沢尚一郎編 執筆 川村邦光・深澤英隆・松村一男他

陶酔、非合理、翼賛。ナチスや大本教、イタリアにおける実践など、その類縁性を指摘される宗教とファシズムの関係を歴史的・文化的に捉え直し、この時代の経験へと逆照射する。

107 A5判三六七頁 五〇〇〇円

ベンヤミンと精神分析 ボードレールからラカンへ

三原弟平

二十一世紀という強制収容所的日常のなかで、どのようにして「性関係」はありえるのか？ ベンヤミンの精神分析解釈をプリズムに、ボードレールのヒステリー論、ラカンの性別式へと反射する書き下ろし批評。パサージュ強制収容所―現代を横断する新しい精神史の試み。

四六判二五六頁 二五〇〇円

ベンヤミン 媒質の哲学

森田團

初期言語論、イメージ論から歴史哲学にいたるベンヤミンの思考の根柢には、〈媒質〉の概念があった。同時代の哲学者たちとの対比を通じて、その足跡を辿り、伝統の刷新を企てたベンヤミンの哲学の核心に迫る。

113 A5判五三三頁 七〇〇〇円

ベンヤミンにおける「純化」の思考 「アンファング」

から「カール・クラウス」まで 小林哲也

「純粋さ」から「純化」へ。これまであまり顧みられることのなかった初期のテクストから、後期の難解な「カール・クラウス」まで、多様なテクストのなかで繰り返され進化していくベンヤミンの思想を丁寧に追う、俊英の研究者によるモノグラフィイ。

154 A5判四八八頁 六五〇〇円

赤いナデシコ《職業革命家》アーシヤの回想録

アンナ・ラーツイス 桑野隆訳

ヴァルター・ベンヤミンの〈恋人〉として知られる、プロレタリア演劇に生涯を捧げた女優／コミュニスト／《職業革命家》が、波乱に満ちた演劇活動の軌跡を語り、実践により培ったその芸術観を明らかにする。知性と闘争心にあふれた一人の〈新しい女性〉の自伝。

211 四六判二九〇頁 三〇〇〇円

言語と狂気 シュレーバーと世紀転換期ドイツ

熊谷哲哉

フロイト、ラカンの精神医学、キットラーのメディア論、心霊科学、進化思想など、多領域へと接続するシュレーバー『回想録』の「根源言語」の現代意義を問う。自己／他者、意味／無意味、雑音／音楽を聴取する、シュレーバーによる神経言語の試みを解き明かす。

143 A5判三〇五頁 四五〇〇円

狂気のお、狂女への愛、狂気のなかの愛

立木康介

精神分析が愛を語るうえで必ず行きあたるラカンの名高いテーゼ、「性関係はない」。フロイトの発見をこのテーゼに昇華させたラカンは、しかし、愛について語ることをやめなかった。愛を描いたブルトンやデュラスを導き、このテーゼの奥へ迫る。

163 四六判二四〇頁 二五〇〇円

メランコリーのゆくえ フロイトの欲動論からクライ

ンの対象関係論へ

藤井あゆみ

フロイトに欲動論の更新を迫り、クラインの対象関係論に寄与したメランコリー研究。その理論的変遷を、アープラハムとデュラスを介することで初めて克明に描出し、メランコリーを昇華へと導く理路を拓く。

193 A5判二五五頁 四五〇〇円

ロシア哲学史〈絶対者〉と〈人格の生〉の相克

イーゴリ・エヴラーム・ピエフ 下里俊行十坂庭淳史十渡辺圭十

小俣智史十齋須直人訳

キリスト教的プラトニズムとゲノーシス主義的神秘主義の対立の系譜としてロシア哲学史の総体を読み解き、永遠不朽の精神性と時限的な地上性を兼ね備える存在としての人間が孕む根源的矛盾に正面から対峙する、豊かな問題意識の体系を抽出する。

224 A5判六四〇頁 八〇〇〇円

〈超越性〉と〈生〉との接続 近現代ロシア思想史の

批判的再構築に向けて

貝澤哉十杉浦秀一十下里俊行編

国民・民族・宗教の文化的伝統に基づく〈国民思想史〉の枠組みからロシア思想を解放し、同時代の西欧の広い歴史的コンテクストにおいてその真価を問います。文学、哲学、法哲学、教育思想、教会史、科学史を網羅するロシア思想研究の最新の成果。

223 A5判三三三頁 四〇〇〇円

フョードロフ伝

スヴェトラナ・セミョーノヴァ

安岡治子・亀山郁夫訳

宗教的かつ科学的なその夢想的理念によって、あらゆるものを分離分化する近代の知に異を唱え、特異な〈統合〉の思想を説く、十九世紀末ロシアの〈幻の思想家〉フョードロフの生涯と思想の全貌を明らかにする、本邦初の本格的評伝。

A5判三五五頁 四〇〇〇円

ポリシェヴィズムと〈新しい人間〉二〇世紀ロシア

の宇宙進化論

佐藤正則

ポリシェヴィズムの思想的根幹として強い影響力をもちながら、レーニンとの関係でしか語られることのなかった思想家アレクサンドル・ボグダーノフの思想を考察するとともに、ポリシェヴィズムの宇宙観と人間観を探り、その今日的意味を問う。

四六判二八〇頁 三五〇〇円

サイボーグ・ダイアローグズ

D・ハラウェイ／T・N・グッドイヴ 高橋透・北村有紀子訳

いまなお絶大なインパクトをもつ「サイボーグ宣言」の著者自身が語る、科学史、フェミニズム理論からバイオ・ポリティクス、トランスジェニック生物、サイボーグまで。最前線で越境を続けるハラウェイの思想への格好の入門書。

四六判二九六頁 二五〇〇円

サイボーグ・フェミニズム「増補版」

巽孝之編

執筆：D・ハラウェイ、S・ディレイター、J・A・サーモンズ 巽孝之・小谷真理訳
いまや〈カルチュラル・スタディーズ〉の正典ともなった、ダナ・ハラウェイの論文「サイボーグ宣言」を中心に、ふたたび問われる越境の思想！ 九一年に刊行され、多方面に影響を与えた画期的な翻訳アンソロジー、大幅な増補を加えて完全復活！

四六判三五二頁 三〇〇〇円

カンブリア革命

永澤護

いまこの現実とは世界の終焉なのか、あるいははじまりなのか？ 〈Archbook〉ではすでに知る人ぞ知る人物の全貌が ажきらかに。《カンブリア革命》とはなにか？ ページをひらけばそこに、まばゆい思考が待っている。（酒井隆史）

136 四六判二七三頁 三〇〇〇円

山高帽の男 歴史とイコノグラフィ

フレッド・ミラー・ロビンソン 赤塚若樹訳

文学・絵画・映画・演劇に現れる、山高帽をかぶった男たち／女たち。その姿・振舞い・視線が語りかけてくるものとは何か？ 山高帽の起源とその歴史の変遷を多くの図版とともに綿密に辿る、興味豊かな異色のカルチュラル・スタディーズ。

A5判三五〇頁 四〇〇〇円

江戸知識人の世界認識

井田清子

太田南畝、志筑忠雄といった国際的な視野をもった江戸の知識人たちは鎖国下にあつて、「世界」といかに対峙したのか。鎖国下日本の〈世界体験〉を膨大な資料によって検証する。

A5判二二頁 三五〇〇円

未完の国 近代を超克できない日本

アラン・マルク・リウー 久保田亮訳

江戸期 明治維新 転向と敗戦、高度経済成長。そして東日本大震災。一開かれた国であるがゆえに未だ生成途上にあるこの国の歴史と未来を、フランス人哲学者が浮き彫りにする。

136 A5判三八二頁 六〇〇〇円

超克の思想

岩本真一

日本思想史上、最大のアポリアともいうべき〈近代の超克〉の問題と激しく格闘した三人の批評家（小林秀雄／中村光夫／福田恆存）の思考と精神に肉薄し、新たな〈思想史〉へと向かう。

A5判二七九頁 三五〇〇円

戦争のある暮らし

乾淑子編

子ども茶碗、木像、幻燈、ひな人形、アニメ、美術。そして着物……。生活雑貨やメディアにあふれる戦争のイメージを、豊富な図版とともに検証し、日々の暮らしの視点から戦争を捉え直す。執筆：武田雅哉・草原真知子・浅川範之・手島仁・田中正流・木村智哉・辻千春・平瀬礼太 A5判二八四頁 三〇〇〇円

占領期の都市空間を考える 大手前大学比較文化研究叢

小林宣之・玉田浩之編

占領時代の記憶は思わぬ形で我々の生活に刻まれている。占領下の日本を撮影する外国人の眼差し、横浜・神戸の接収事情と都市計画との関係、接収された豪邸の事例検証、そして占領期研究における資料収集・保管の問題まで、占領期研究に新たな視点を提示する！

2011 A5判一七七頁 二五〇〇円

コンテンツツリーリズムと文化遺産

大手前大学比較文化研

究叢書 18

石毛弓十谷村要編

映画、アニメ、小説などの「コンテンツ」の舞台を旅して追体験することを目的とする観光「コンテンツツリーリズム」は、過疎化する地方の共同体の記憶や文化の継承を支えることができるのか。日本各地の多様な事例を報告し、その潜勢力を描き出す。 N22 A5判二七二頁＋別丁カラー図版四頁 二八〇〇円

危機の時代からみた都市歴史・美術・構想

坂上桂子編

グローバルゼーション後、環境問題、経済格差、人口問題の悪化は加速し、災厄は地球規模となった。自然災害、戦争、テロ、未曾有の感染症といった危機が都市を覆い尽くす今、建築、土木、都市計画、社会学、美術史、文学、思想の観点から都市の過去を辿り、未来の姿を探る。 N23 A5判四四五頁 六〇〇〇円

やっぱりあきらめられない民主主義

内田樹十平川克美十奈須りえ

なにかにつけて耳にする「民主主義」とは、そもそも一体何なのか。今の日本ではどのように扱われ、そして何が問題となっているのか。あらためて民主主義を語る語法を、思想家・文筆家・政治家が身近なところから探る。民主主義「再」入門！ N26 四六判並製一六三頁 一五〇〇円

フェアな民主主義へ地方自治のリアル

奈須りえ

小泉構造改革によって進んだ地方分権・民営化・規制緩和は、私たちの暮らしに何をもたらしたのか？ 公共施設の営利的利用、説明不足の大規模開発、企業を監督できない行政、議論が尽くされない議会運営……地方自治体から「フェアな民主主義」をいまこそ求める！ N32 四六判並製一七三頁 二〇〇〇円

地球的思考 グローバル・スタディーズの課題

國分功一郎・清水光明編

東京大学教養学部(駒場)の「グローバル・スタディーズ・イニシアティブ」構想の成果を書籍化する。執筆：西崎文子＋石田淳＋大石和欣＋高橋哲哉＋池内恵＋有田伸＋羽田正＋中島隆博＋受田宏之＋遠藤貢＋和田毅＋伊達聖伸＋田辺明生＋馬路智仁 N23 四六判並製四九二頁 二五〇〇円

人文学のレッスン 文学・芸術・歴史

小森謙一郎・戸塚学・北村紗衣編

小説はどう読めばよい？ シェイクスピア劇の異性装？ フロイト先生の記憶違い？ 人文学を代表する「文学」「芸術」「歴史」の三つのパートを具体的に学びながら、考える基礎を身につけるための12のレッスン。学びが広がる「読書案内」付。 N23 四六判並製三二六頁 二五〇〇円

21世紀のリベラルアーツ

石井洋二郎編 執筆：藤垣裕子・國分功一郎・隠岐さや香

「何を学ぶか」から、「学ぶ態度」の養成へ――。複雑化する社会に対応するためのベースとなる〈考え・学び・対話する〉ことの必要性を改めて問い直し、リベラルアーツ教育が向かう先を現場から模索する。各論者による提言に加え、シンポジウムと対談を通して考える。 N22 四六判並製二四六頁 二五〇〇円

リベラルアーツと外国語

石井洋二郎編

外国語教育はなぜ必要なのか？ 中部大学でのシンポジウムと関連分野の専門家の論考から考える。執筆：鳥飼玖美子＋小倉紀蔵＋ロバートキャンベル＋阿部公彦＋佐藤嘉倫＋大野博人＋藤垣裕子＋鈴木順子＋細田衛士＋坂井修一＋國分功一郎＋田中純 N22 四六判並製二八三頁 一五〇〇円

リベラルアーツと自然科学

石井洋二郎編

理系の学問を学ぶうえで必要なりベラルアーツとはなにか？ 第一線で活躍する専門家三名によるシンポジウムに加え、識者八名による論考から理系のためのリベラルアーツを考える。好評の「創造的リベラルアーツ」第三弾。

232 四六判並製二七二頁 二五〇〇円

ユダヤ小百科

ユーリウス・H・シエプス編 鈴木隆雄他訳

世界の文化と歴史に影響を与え続けてきた（ユダヤ）に関わるあらゆる事象を、その発生から現代にいたるまで、歴史、宗教、政治、言語、文学、美術など、あらゆる領域にわたって網羅した小項目の決定版事典。第四十九回日本翻訳出版文化賞特別賞受賞。122 AS判函入二二三頁＋別丁函版八頁 二八〇〇〇円

絶望大国アメリカ コロナ、トランプ、メディア戦争

武隈喜一

二〇二〇年のアメリカ大統領選挙で何が起きていたのか？ 政治化する新型コロナウイルス問題と、トランプ陣営の虚実取り混ぜた情報戦略によって、混沌とするアメリカ・メディア——米国在住の著者が伝える、コロナと大統領選の息詰まる迫真のドキュメント。

211 四六判並製二〇八頁 一五〇〇円

ミハイル・バフチン全著作

責任編集 新谷敬三郎

今世紀ロシア最大の文学理論家 言語学者 哲学者との評価が定まりつつあるバフチンのほとんどすべてのテクストを収録するとともに、いわゆる「バフチン・サークル」の論文のなかで、バフチン自身に関連が深いとされる代表的なものをも収録する決定版著作集。

内容見本呈 A5判上製

① 行為の哲学によせて／美的活動における作者と主人公／他

伊東一郎・佐々木寛訳

【一九二〇年代前半の哲学・美学関係の著作】「芸術と責任（本邦初訳）」「行為の哲学」（本邦初訳）、「作者と主人公」、「言語芸術作品における内容・素材・形式の問題」の四論文によって、若き日の著者の美学と哲学の全体像を明かす。

五二七頁 六五〇〇円

② フロイト主義／文芸学の形式的方法

磯谷孝・佐々木寛訳

【一九二〇年代後半のバフチン・サークルの著作 1】タルトゥ派のイワーノフによってバフチン思想総体の理解にとつて《不可欠》と評された、ヴォロシノフの『フロイト主義』、メドヴェージェフの『文芸学の形式的方法』等の三篇によって謎めいたバフチン・サークルの全貌に迫る。六三三頁 七〇〇〇円

③ マルクス主義と言語の哲学／他

野中進・北岡誠司・斎藤俊雄・佐々木寛訳

【一九二〇年代後半のバフチン・サークルの著作 2】カナエフ名義のバフチンの論文「現代の生氣論」（野中進訳）、ヴォロシノフの論文「生活の言葉と詩の言葉」（斎藤俊雄訳）、「マルクス主義と言語の哲学」（北岡誠司訳）、「発話の構成」（佐々木寛訳）を収める。

近刊

④ 小説の言葉／他

新谷敬三郎・伊東一郎・国松夏紀・佐々木寛訳

【一九三〇年代以降の小説の言葉論・テキスト理論】「小説の言葉」（伊東一郎訳）、「ことばのジャンル」（佐々木寛訳）、「テキストの問題」（佐々木寛訳）、「可能性を大胆に利用すべし」（国松夏紀訳）、「一九七〇—七一年の覚書」（新谷敬三郎訳）などを収める。

近刊

⑤ 小説における時間と時空間の諸形式／他

伊東一郎・北岡誠司・佐々木寛・杉里直人・塚本善也訳

【一九三〇年代以降の小説ジャンル論】古代より近代に至る小説の諸ジャンルの生成を、それぞれのジャンルに固有な時間と空間のタイプの問題として論じた表題作（北岡訳）をはじめ、「教養小説とそのリアリズム史上の意義」（佐々木訳）等、六篇を収める。

六〇四頁 六五〇〇円

⑥ ドストエフスキイ論

新谷敬三郎・伊東一郎訳

一九二九年のドストエフスキイ論の初版に、新たにメニツペア文学ジャンルの考察をくわえた一九六三年の第二版「ドストエフスキイの詩学の問題」（新谷敬三郎訳）を、改稿プラン（伊東一郎訳）とともに収める。

近刊

⑦ フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化

杉里直人訳

ラブレー文学に住まう陽気でグロテスクな民衆のイメージを斬新に読み解き、中世・ルネサンス文化の新たな世界像を打ち立てた、著者の代表作の待望の新訳決定版。初訳（ラブレー）の増補・改訂）を付す。

九五〇頁 一〇〇〇〇円

別巻 書簡・資料集、バフチン論集

バフチン・サークルの活動の全貌とその時代背景をあきらかにすべく、バフチンおよび友人たちの書簡、伝記的資料、関係者たちの回想その他を収める。あわせて、内外の研究者や批評家によるバフチン論を収める。

近刊

バフチン関連書

バフチン、生涯を語る

ミハイル・バフチン＋ヴィクトル・ドゥヴァーキン 佐々木寛訳

自伝を遺さなかつたバフチンが、幼少期、大学時代から、ロシア革命、流刑、大粛清の時代を経た激動の半生と、同時代の学者、詩人、画家、音楽家たちの想い出を存分に語った、非公式のインタビュー録音を全訳。百名を超える関連人物への詳細な訳注を付す。 216 四六判四四七頁十別丁図版三二頁 四〇〇〇円

叢書 二十世紀ロシア文化史再考

責任編集 桑野隆

マルクス主義、レーニン主義だけがロシアの思想ではない。ソヴィエト体制下において、隠蔽され、抑圧されてきた、知られざる二十世紀ロシアの文化／思想を再検討するとともに、その秘められた可能性を探る新叢書。

内容見本呈 四六判上製

逆遠近法の詩学 芸術・言語論集

フロレンスキイ 桑野隆・西中村浩・高橋健一郎訳

中世イコンの精緻な幾何学的読解を試みた芸術論や、ポリグロットならではの周密な固有名詞論などによって、二十世紀ロシア文化史上にひととき異彩を放つ思想家の、言語・芸術分野の代表的論考を収録する。

三九三頁 四〇〇〇円

言葉と文化 ポエジーについて

マンデリシターム 斎藤毅訳

二十世紀ロシア最大の詩人、オシプ・マンデリシタームの唯一の評論集。ロシア詩の百花繚乱と革命の激動の中で、言葉を媒介とした人間と世界との関係を明らかにすべく、言語・芸術・歴史・政治等に関する思考が展開される。

三〇二頁 三五〇〇円

零の形態 スプレマチズム芸術論集

マレーヴィチ 宇佐見多佳子訳

対象、イメージ、意味から解き放たれた純粹な創造行為としての絵画そのものの自立を求めた〈スプレマチズム絵画〉を提唱し、「白地の上の黒い正方形」などの作品を残した、ロシア・アヴァンギャルドを代表する画家の理論論放を集成する。

四〇二頁 四〇〇〇円

記号としての文化 発達心理学と芸術心理学

ヴィゴツキイ 柳町裕子・高柳聡子訳

精神発達や芸術理解のメカニズムを社会的・文化的な観点から考察しながら、スターリン体制下で完全に黙殺された心理学者の思想的エッセンスに迫る。

三四八頁 四〇〇〇円

美学断章

シペート 加藤敏訳

現象学をロシアに導入するとともに、当時隆盛をきわめたマルクス主義とも宗教哲学とも異なる独自の美学、解釈学、言語理論を展開し、ついにはラーゲリで銃殺された悲劇の哲学者が、革命の嵐のなかで書き上げた、芸術と詩と哲学を巡る異色の言語美学。

三二六頁 三五〇〇円

プロットとジャンルの詩学

フレイデンベルグ 杉谷倫枝訳

近刊

ノースフエーラ 惑星現象としての科学的思考

ヴェルナツキイ 梶雅範訳

人類の科学的知識の増大を惑星の「進化」と位置づけ、現代環境思想にも通じる独自の地球観を展開した、地質学者ヴェルナツキイの著作集。絶え間ない科学研究の営為の中に人類の未来への希望を探し求めた、晩年の思想的到達点を示す草稿を本邦初紹介。

一七七 四四二頁 四五〇〇円

言語の政治叢書

《存在はそのあらゆる様相において、意味を携えて出現する文そのものである》。失われた普遍性と統一性への郷愁を断ち、政治的言語ではなく、言語の、言語という政治の新たな在り方を求めて、ポスト構造主義的地平から哲学と芸術に架橋する新叢書。

A5判上製

ユートピア的身体／ヘテロトピア

ミシェル・フーコー 佐藤嘉幸訳

権力による服従化とともに存在し、抵抗へと反転しうる身体を考察する「ユートピア的身体」、権力への抵抗と、権力の解体の可能性を秘めた反一場所を模索する空間論「ヘテロトピア」の二篇を収録。ジュディス・バトラ「フーコーと身体的書き込みのパラドックス」を付す。

136 一四四頁 二五〇〇円

レイモン・アロンとの対話

ミシェル・フーコー 西村和泉訳

権力はいかに行使されるのか？二十世紀を代表する思想家フーコーと、対極的位置にいる社会学者アロンの、歴史の解釈、主体の問題をめぐっての白熱の対話。ジャン＝フランソワ・ペールによる「解説」を付す。

136 九五頁 一八〇〇円

絵葉書Ⅰ ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方

ジャック・デリダ 若森栄樹・大西雅一郎訳

《誰が書いているのか？ 誰に書いているのか？ そして、何を送るために？》ソクラテス、フロイト、精神分析運動を数多の笑い、ユーモア、涙、絶望と歓喜、そして「歌」のうちにたどる、要約不可能な書簡体の哲学。明解な日本語による待望の翻訳。

三八〇頁 四〇〇〇円

絵葉書Ⅱ ソクラテスからフロイトへ、そしてその彼方

ジャック・デリダ 若森栄樹・大西雅一郎訳

フロイト「快原理の彼岸」の未曾有の読解を提示し、ラカンの『盗まれた手紙』読解における「真理」概念を徹底的に批判して、精神分析における郵便的転移の可能性を、ルネ・マジヨールとの対話形式で探る画期的な書。明解な日本語による待望の翻訳。

221頁 三五五頁 五〇〇〇円

メモワール ポール・ド・マンのために

ジャック・デリダ 宮崎裕助十小原拓磨十吉松寛訳

アメリカにおける脱構築とは何だったのか。「アメリカにおける脱構築」の後見人ともいえる、盟友ポール・ド・マンの訃報に接したデリダが、喪の不可能性を思考しながら、ド・マンの記憶論に肉薄する、瞠目の講演集。

221頁 三四四頁 五〇〇〇円

ポスト・モダンの条件

ジャン＝フランソワ・リオタール 小林康夫訳

主体、自由、解放、革命といったあらゆる《大きな物語》が解体しつつも今日のポスト工業化社会の状況を、ウイトゲンシュタインの《言語ゲーム》の概念を用いて分析する、ポスト構造主義の旗手による極北的ポスト・モダン論。

二二三頁 二五〇〇円

聞こえない部屋 マルローの反美学

ジャン＝フランソワ・リオタール 北山研二訳

最初期に問題とされた《文体Ⅱ様式》への愛からモダンの批判へ、そして「モダンの声」を聞こえない作品群から漏れ出てくるものを聴取しようとする仕事までを、過剰と逸脱に充ちたマルローの作品の読解を通じて総括する、著者の最後の著作。

一七二頁 二五〇〇円

受肉した絵画

ジョルジュ・ディディエールユベルマン 桑田光平・鈴木巨訳

生きた絵画とは何か？ セザンヌも愛読したバルザックの短編小説『知られざる傑作』をもとに、色彩という観点から美術史や文学史、思想史を通して絵画の「生」を探究する未聞の絵画論。ラカン、ダミッシュからその彼方へ。

2105 A5判二四四頁 三五〇〇円

カドミウム・イエローの窓 あるいは絵画の下層

ユベール・ダミッシュ 岡本源太十桑田光平十松浦寿夫他訳

『知られざる傑作』を読み解く「絵画の下層」、ボワにより最良のモンドリアン論と呼ばれた「視線の目覚め」、「アンフォルメル」をはじめ、二十世紀の美術が依拠してきた理論と歴史の布置を問い直す、名高い論考の数々を収録。

1912 三四頁 四〇〇〇円

国家に抗する社会

ピエール・クラストル 渡辺公三訳

若くして非業の死を遂げた人類学者が、南米インディアン諸族における《権威なき首長制》、婚姻制度、言語、神話、拷問等を鋭く分析しつつ、《国家機械》の出現の阻止のダイナミズムに肉迫し、西欧中心の未開社会像を根底から転倒する。

三二八頁 三五〇〇円

政治人類学研究

ピエール・クラストル 原毅彦訳

訣別の予感の下でヤノミ滞在を綴った「最後の誓」、未開社会における権力の構造を分析した「未開人戦士の不幸」をはじめ、人類学が真に政治的なものになるための十二篇の論考を収録。

201 三四頁 四〇〇〇円

問いの書

エドモン・ジャベス 鈴木創士訳

《自己になることの不可能性の別名》としての《ユダヤ人》であることを異敢にひきうけつつ、書くことと《書物》への無限の問いを問う引き裂かれた言葉。現代フランスの最もユダヤ的な詩人＝思想家の代表作。われわれはみなユダヤ人だ。

三〇四頁 三五〇〇円

ユーケルの書

エドモン・ジャベス 鈴木創士訳

ユダヤ人たることを、迫害の怒号、追放の辛酸、砂漠での流論を生きぬいた著者が架空のラビによる贋の注釈と引用によって織りなした一組の恋人たちの愛と絶望と狂気の物語。ブランシヨ、デリダらの称賛を浴びた《問いの書》シリーズ第二作。

三三九頁 三〇〇〇円

書物への回帰

エドモン・ジャベス 鈴木創士訳

架空のラビの贋の注釈と引用という遅延を通して、《ユダヤ人》たることを巡る無数の問いを問う類例なき文学の特異点《問いの書》三部作の完結編。過去十年フランスで書かれたものでジャベスのテクストほど独自なものはない（デリダ）。

一七三頁 二五〇〇円

ジョン・ケージ

ダニエル・シャルル 岩佐鉄男訳

メシアンに学んだ作曲家にしてパリ第四大学で美学を講じる哲学者が、単に音楽の革命家という以上に今日の芸術、思想の全体に深い影響を及ぼしつつあるこの現代音楽の神話的巨人の作品と行為の多元性、放浪性、リゾームの様相を解説する。

三三七頁 四〇〇〇円

参照点

ピエール・ブーレーズ 笠羽映子・野平一郎訳

セリー音楽から出発して電子的テクノロジーを駆使する作品にまで至った今日のフランスを代表する作曲家II指揮者が、現代音楽の先駆者たち（メシヤン、ストラヴィンスキー、ベルク等）を讀えるとともに音楽の今日的在り方を根源的に問う。

四二二頁 五〇〇〇円

他者のユマニスム

エマニュエル・レヴィナス 小林康夫訳

今日のフランス哲学のうちに、全く独自の反存在論的な、切迫した《倫理》の哲学を打ち立てた著者が、五月革命の衝撃の中から、自由な《主体》のユマニスムを廃棄し、絶対的に《他なるもの》の、痕跡の《倫理》を問う困難な思考の精華。

一九二頁 二〇〇〇円

芸術の幼年期 フロイト美学の一解釈

サラ・コフマン 赤羽研三訳

精神分析が芸術を説明するのではない。芸術こそが精神分析的言説の成立に寄与するのだ。余技とみなされてきたフロイトの芸術論の斬新さと根源性を精密に読みとぎ、フランスにおけるフロイト再評価の先鞭をつけたデリダ派哲学者の代表作。

二八三頁 三五〇〇円

異邦人のフィギュール

アブデルケビル・ハティビ 渡辺諒訳

モロッコ生まれの《異邦的》著者が、ジュネ、バルト、デュラス、セガレンといった、異国の地で思索と創作を重ねた作家/思想家の幾多のテクストを渉猟し、文学そのものに内在する《異邦性》を摘みとせんとする脱中心的文芸批評。

三三二頁 四〇〇〇円

言語への愛

ジャン・クロード・ミルネル 平出和子・十松岡新一郎訳

言語学とラカン派精神分析の接点を通して明らかになる。言語を《全》の構造として捉えようとする言語学者たちの欲望とそこから常に逃れ出るもの、《ララング》。ラカン派言語学宣言ともいいうべき、気鋭の言語学者による構造主義言語学批判。

二二六頁 三〇〇〇円

近代芸術の五つのパラドックス

アントワーン・コンパニオン 中地義和訳

ボードレールの「モデルニテ」の概念を手掛かりに、印象派から、シュルレアリスム、さらにはポップアートにいたる近代/現代芸術の「伝統」を検証し、それが抱える背理を明らかにする、スリリングな芸術論/ポストモダン論。

二八四頁 三五〇〇円

文学史の誕生 ギュスターヴ・ランソンと文学の第三

共和政 アントワーン・コンパニオン 今井勉訳

「作者の死」の祝祭が終焉して久しい。新批評が反抗した実証主義的な文学史はなぜその回帰をみせたのか？ フランス第三共和政における文学制度史を反省的に構築/脱構築するとともに、「文学とはなにか」を見定める記念碑的著作。

2010 五二四頁 七〇〇〇円

第二の手、または引用の作業

アントワーン・コンパニオン 今井勉訳

引用はいつ、どこで、なぜ始まったのか？ アリストテレスからボルヘスに至る引用史をたどり、現象学、記号学、系譜学などさまざまな観点から、単なることばの反復にとどまらない、戦略的・政治的な実践としての《引用》を分析し、「書くこと」の本質に迫る。

103 五七二頁 八〇〇〇円

スピノザと政治

エニイエンヌ・バリバール 水嶋一憲訳

いまなおきわめて難解な十七世紀オランダの謎めいた哲学者の、ついに、同時代の諸種の問いを徹底的に転位させるに至ったその政治哲学を、マルクスの『相補的な交換性』をも視野に入れながら、ネグリ以降の新たな視点で読み解く。

113 二七八頁 四〇〇〇円

神の身振り スピノザ『エチカ』における場について

A・カリオラート＋J・L・ナンシー 藤井千佳世十的場寿光訳

『エチカ』の一節の綿密な分析により、二元論の枠に収まらないその思想を開かれた存在の可能性として大胆に提示する。倫理と政治を結ぶスピノザ哲学の根源に触れる理論的かつ実践的なマニフェスト。

135 二〇一頁 三〇〇〇円

欺瞞について ジャン＝ジャック・ルソー、文学の嘘と政治の虚構

セルジュ・マルジェル 堀千晶訳

権力に抵抗する戦略的無為とは？ ルソーのテクストを精密に読み解き、緊密に絡みあう文学の権力と政治の権力の構造を暴き解体する、デリダの高弟による新たなルソー論。文学／政治の欺瞞に抵抗する、ルソー／マルジェルの戦闘的エリクチュール。

131 二二八頁 三〇〇〇円

記号学的実践叢書

構造言語学の《影響》下に登場した記号学的思考が人文諸科学に与えた衝撃は
はかり知れない。一九六〇年代から今日に至る記号学の最新の動向を伝えると
ともに、ソシユールとパースに、さらにはストア派の言語理論にまで遡るその
史的展開をも探る。

A5判上製

ソシユールのアナグラム語の下に潜む語

ジャン・スタロバンスキー 金沢忠信訳

あらゆるラテン詩にはアナグラムが潜む……。詩行に秘められた語を探し出す
果てしない作業に憑かれたソシユールの足どりを透徹した読解によって検証
する。構造言語学の、というよりは言語学そのものの創始者の、知られざるも
う一つの《別の貌》。

二二二頁 二五〇〇円

昔話の形態学

ウラジーミル・プロップ 北岡誠司十福田美智代訳

《文》を超えた《テキスト》のレベルにおける《文法》の探究の最初の試みと
して、民話、神話、物語等の記号論的研究において、今や、構造言語学におけ
るソシユール「講義」にも比すべき位置をもつ、記号学の第一の古典。

三八九頁 五五〇〇円

プロップを読む

レヴィイストロース、メレチンスキー他 北岡誠司編

今日でこそあまりにも名高いが、一九二七年の発表以降、スターリニズムの嵐
の中で完全に黙殺されていた「昔話の形態学」の突然の爆発的復興の契機となっ
たレヴィイストロースの「形式と構造」、プロップの精密化を図るメレチンス
キー論文等を取める。

近刊

レーニンの言語

シクロフスキイ十エイヘンバウム十トウイニヤールノフ他 桑野隆訳

二十世紀の言語学革命を主導したロシアのフォルマリストたちが、《詩的な美
しさや文体的な装飾にうんざりし、「美辞麗句」を憎み、「雄弁」を軽蔑する》レ
ニンの政治的デイスクルの言語学的、修辭学的、記号論的な分析に挑む。「レ
フ」誌レーニン特集号の全訳。

二二三頁 二五〇〇円

神話の詩学

エレアザール・メレチンスキー 津久井定雄十直野洋子訳

プロップを《再発見》したロシア神話学の泰斗が、レヴィイストロース、フライ、
キャンベル等の神話理論を検討しつつ、神話の古典的諸形態の構造と生成、さ
らには二十世紀文学における神話主義（ジョイス、カフカ等）を考察する。第
四十三回日本翻訳出版文化賞受賞。

五六三頁 七〇〇〇円

曖昧の七つの型

ウィリアム・エンブソン 岩崎宗治訳

詩の美しさとは、音調の美や靈妙さにあるのではなく、詩を構成する語が同時
にいくつかの意味を持つ多義性にある。それを《曖昧》と呼んで七つに分類し、
チャーサー、シェイクスピア、キーツ、エリットらの古今の英詩を鋭く分析し
た言語分析批評の第一の古典。

211 五六六頁 八〇〇〇円

新言語学試論

ルイ・イエルクスレウ 平田公威訳

近刊

詩の記号学のために

ヤーコブソン、レヴィハーストロース他 花輪光編

構造言語学の巨人ヤーコブソンと構造人類学の創始者レヴィハーストロースが一九六二年に共同で発表したボードレールの詩篇「猫たち」の構造分析を巡る論争を、十二篇の論文によって克明に跡づけつつ詩の記号学への困難な道を探る。

三二六頁 三五〇〇円

意味について

A・J・グレマス 赤羽研三訳

パリ記号論派の重鎮がより普遍的な意味の構造モデルの構築を図るべく、ヤーコブソンの音韻論に触発された「記号論的四角形」の概念を自在に駆使しつつ、意味論、神話学、物語論、詩学を横断するスリリングな記号論的冒険の書。

四二九頁 五〇〇〇円

恋愛のデイスクールセミナーと未刊テキスト

ロラン・バルト 桑田光平十桑名真吾十鈴木亘十須藤健太郎十

内藤真奈十平田周十本田貴久十宮脇永史訳

バルトの思考の生成過程がここに！大学の官僚主義や順応主義を逃れ、フランスの哲学・思想・文学研究に大きな影響を与えてきた高等研究実習院での、一九七四年から一九七六年にかけての「恋愛のデイスクール」に関するセミナーの記録に、未刊のテキストを付す。

二一〇頁 五六一頁 八〇〇〇円

バルザックの『サラジヌ』について

ロラン・バルト 桑田光平十石川典子十金谷壮太十河野美奈子十

佐藤園子十福井有人十村中由美子十森田俊吾訳

高等研究実習院で、一九六八年から一九六九年の二年間にわたって開講された「サラジヌ」に関するセミナーの記録。六八年の歴史的な出来事が排除された「書物」版とは異なる、バルトの創造の舞台裏が、草稿からテキストへの変容の道筋が明らかとなる。

二二二頁 四三三頁 七〇〇〇円

バルトの愚かさ

クロード・コスト 桑田光平十栗脇永翔十中村彩訳

フランス文学史において古くから取り上げられてきた「愚かさ」というテーマをめぐる、政治や旅や文学、そしてテキストなどの多岐にわたる方面から、バルトにおける、バルトのいう、そしてバルト自身の「愚かさ」に迫る！

二二二頁 三〇七頁 四〇〇〇円

フィギュール I

ジェラルド・ジュネット 花輪光監訳

今や、ロラン・バルト亡き後のフランス文学記号学の第一人者ともいえるべき著者が、テーマ論的、構造的文学批評家として鮮やかなデビューを飾った記念すべき処女作。スタンダール、バルザック、ランボオの詩「母音」等への構造的論的接近。

三二二頁 四〇〇〇円

フィギュール II

G・ジュネット 花輪光監訳

構造主義革命の嵐の中で、バルト、トドロフ等とともに《文学の科学》の旗の下に、テマティスムから記号学へと向かった著者の第二論文集。スタンダール、プルーストを巡る、「物語の境界」、「本当らしさと動機づけ」を巡る精緻な論考。

三五一頁 四〇〇〇円

フィギュール III

G・ジュネット 花輪光監訳

文学の科学としての《ポエティック》(詩学)へ向けて、個々のテキストの個性性に拠る《クリティック》(批評)を廃するに至った著者の《詩学宣言》ともいえるべき、シリーズ総決算の書。著者への長篇インタビューと監訳者の解説八十枚を付す。

二八六頁 三三〇〇円

物語のディスコース

G・ジュネット 花輪光・和泉涼一訳

ウラジーミル・プロップからバルトに至る物語の記号論的研究はもとより、広く欧米の文学理論をふまえながら、ブルーストの『失われた時を求めて』を素材に、物語の一般理論、物語の《新たな修辞学》の確立をめざす野心的大著。

四〇五頁 五〇〇〇円

物語の詩学続・物語のディスコース

G・ジュネット 和泉涼一・青柳悦子訳

《物語に関する構造主義的研究の極致》(J・カラー)、《小説テクストの研究のためのもつとも入念で体系的な装置》(R・スコルズ)と評された前著刊行以来十年、欧米各地にまき起った反響をも視野に入れ、理論の精密化へと向う続篇。

二五二頁 三〇〇〇円

アルシテクスト序説

G・ジュネット 和泉涼一訳

アリストテレス以来、西欧の修辞学Ⅱ文学理論の最大の問題のひとつである《ジャンル》の問題、あの《三分法》の問題を、《テーマ》《様式》《形式》の三つのパラメーターの組み合わせによって解明し、ジャンル論の混乱に終止符を打つ。

二二〇頁 二五〇〇円

ミモロジック

G・ジュネット 花輪光監訳

語と物の自然発生的な類似の観念を、プラトンから聖アウグスティヌス、ライブニッツ、さらにはマラルメ、レリスなどへと辿りつつ、ソシユール以後の近代主義的言語観によって打ち捨てられた言語の詩的な力、ミモロジスムの復権へと向う。

六四三頁 七〇〇〇円

パランプセスト

G・ジュネット 和泉涼一訳

パロディ、パステイシユ、風刺、戯作、転移など、著者が《イベルテクスト性》と呼ぶものの壮大な理論化の試み。ホメーロスからバースに至る世界の文学の歴史を、テクストの変形と模倣の観点から読み直す「もうひとつの世界文学史」。

七三二頁 二二〇〇〇円

スイユテクストから書物へ

G・ジュネット 和泉涼一訳

著者名、タイトル、エピグラフ、序文……。テクストを文学作品たらしめ、テクストの存在と受容・消費を「書物」という形で保証するこれら「パラテクスト」の意味と機能を探求する、文学研究において、いまだ手つかずの「大陸」に踏み込んだ、記念碑的大著。

五四四頁 七〇〇〇円

フィクションとディクシオン

G・ジュネット 和泉涼一・尾河直哉訳

『赤と黒』や『アエネイス』が文学作品として認知されるのと同様に、ルソーやミシュレが美的対象として受容されるとき、そこにはいかなる基準が働いているのか。テクストの《文学性》の客観的条件への構造的論、言語行為論的な接近。

一六七頁 二五〇〇円

芸術の作品Ⅰ 内在性と超越性

G・ジュネット 和泉涼一訳

《文学ではなく「文学性」を問いの対象とし、物語論やテクスト論の領域で新たな理論モデルを提示》してきた著者は、詩学を包含するものとしての美学へと向かう。音楽、文学、絵画、彫刻、建築など、芸術の諸領域を横断する一般美学の基礎理論を構築する斬新な試み。

一三・一 三七九頁 五〇〇〇円

フィクションの修辞学

W・C・ブース 米本弘一・服部典之・渡辺克昭訳

《内在する作者》の概念により、古今東西の小説作品が読者に向けて「意味の伝達」の技法すなわち《修辞法》を精緻に読み解き、トドロフやジュネットの物語分析にも多大な影響を与え、今や《シカゴ派》小説理論の古典として屹立する大著。

五七六頁 七〇〇〇円

自伝契約

フィリップ・ルジュンヌ 花輪光監訳 井上範夫・住谷在昶訳

自伝と他の文学的ディスクール（小説、伝記等）とを分かちものは何か？ ルソー、ジッド、サルトル、レリス等の自伝的作品を犀利に分析しながら、フランスの構造論的文学理論家が自伝研究に一時代を画した野心作。

五三三頁 七〇〇〇円

ストーリーとディスコース 小説と映画における物語

構造 シーモア・チャットマン 玉井暁訳

プロップ、バフチン、バルト、ジュネット、ブレモン、トドロフ、ブースをはじめとした、これまでの物語論の卓見を巧みに統合しながら、漫画や映画をふくむ豊富な事例を鮮やかに分析した、英米圏における物語論の古典。

211頁 四〇八頁 五〇〇〇円

小説と映画の修辞学

シーモア・チャットマン 田中秀人訳

アラン・レネ『アメリカの伯父さん』、カレル・ライス『フランス軍中尉の女』などのフィルム／テキストを通して、「小説」と「映画」に通底する物語構造を解剖し、「物語」に潜勢する（語り／騙り）の枠組みを鮮やかに別る。

三九三頁 五〇〇〇円

可能世界・人工知能・物語理論

マリー・ロール・ライアン 岩松正洋訳

人工知能研究のテキストとストーリー自動生成の諸モデルを、言語行為論の成果とともにフィクションの研究に適用し、物語論の新たな展開を示す知的冒険の書。

五二四頁 六〇〇〇円

モニタージュ小説論 文学的モニターの機能と様態

小柏裕俊

「意識の流れ」「カラージュ」「ポリフォニー」など、読書行為が「組み立て」となる小説を「モニタージュ」という概念から捉え直し、作品受容の観点から制作／読解の手法を検討することで、分析装置としての「モニタージュ」を鮮やかに提示する。

191頁 二四四頁 三三〇〇円

映画における意味作用に関する試論

クリスチャン・メッツ 浅沼圭司監訳

《映画の「固有性」》とは、言語活動にならうとする芸術のただなかに、芸術にならうとする言語活動が存在するということなのである。《映画の記号学の研究に決定的な地平をひらいたフランスの高名な映画理論家の記念碑的著作。》

四四〇頁 五〇〇〇円

映画記号学の諸問題

クリスチャン・メッツ 浅沼圭司監訳

《映画言語》というメタフォールを極限まで突きつめ、それに隠されているものを解明することをめざした著者が構造言語学、とりわけイエームスレウの言語学を武器に、映画理論の方法論的基礎を鮮やかに解明する。『試論』の続篇Ⅱ第二巻。

三三三頁 四五〇〇円

映画のためにI

浅沼圭司

今日の映画理論のすさまじい混乱を止揚すべく、現代日本の映画理論の第一人者ともいへべき著者が、コアンシーセア、ミトリ等の映画理論、そしてとりわけバルト、メッツの記号学的方法を駆使しつつ、二十年ぶりに書き下した大著の第一巻。
二六九頁 三〇〇〇円

映画のためにII

浅沼圭司

画とその理論の史的展開を概観した後、《映像》とその意味作用を極めて厳密に論じる第一巻に続き、映像を、《作品》ではなく《テクスト》と捉えつつその技法と受容の問題を徹底的に究明する。今日の映画理論の最高の到達点。全二巻完結。
三五五頁 四〇〇〇円

言語学のアヴァンギャルド ボードアン・ド・クルト

桑野隆

ネからロシア・フォルマリズムへ
激しく燃え盛るロシア・アヴァンギャルドの芸術運動、《詩の革命を唱え展開した未来派詩人たちの緊密な連帯のなから出発したロシア・フォルマリズム運動の翼を担った》言語学者たちの歩みを、詩的言語研究会、モスクワ言語学サークル、プーラ八言語学サークルの動向をも追いつながら克明に辿る。
2012 三二二頁 四〇〇〇円

《力》の思想家ソシュール

立川健二

フロイトの精神分析をも視野に入れつつ、構造言語学の創始者フェルディナン・ド・ソシュールの、とりわけ通時態の概念、言語変化をひき起すその《盲目的な力》に着目し、ソシュール像の転換を図る気鋭の言語理論家の野心的論考。
三三六頁 四〇〇〇円

源氏物語のデイスクール

福田孝

古来、作者複数説さえ唱えられる程に著しい『源氏物語』の前半と後半とを分つ断絶をロシア・フォルマリズム以降の物語論の概念を駆使して明確に測定し、その断絶の巨大さにこそ、この日本文学史上最大の古典の豊饒性をみる進鋭の処女作。
二二三頁 二五〇〇円

物語における時間と語法の比較詩学 日本語

橋本陽介

と中国語からのナラトロジー
これまでの物語論の議論を振り返りながら、テクスト言語学的な見地にもとづき個別言語における物語の言語使用を比較・分析しつつ、現行の物語論を日本語と中国語の立場から更新する。ナラトロジーの新しい地平を拓く気鋭の著者の野心情。
146 五二八頁 七〇〇〇円

闘う衣服

小野原教子

《私とは誰か》という問いと戯れる今日のファッションの多様な様相を、日本のモード雑誌のなかに、そしてヴィヴィアン・ウエストウッドの諸作品、日本ブレスのコスチューム、ゴスロリ・スタイルのなかに探る記号学的モード研究。
115 三八四別丁版二四頁 四五〇〇円

叢書 人類学の転回

四六判上製

インディオの気まぐれな魂

E・ヴィウエイロス・デ・カストロ 近藤宏十里見龍樹訳

宣教師たちによって残されたテクストを丹念に読みながら、彼らとはまったく異なる方法で、インディオ・トゥピナナンバの社会哲学や〈存在論〉を読み解く、〈人類学の存在論的転回〉を主導する著者の初期の代表作。

1511 二二二頁 二五〇〇円

部分的つながり

マリリン・ストラザーン 大杉高司十浜田明範十田口陽子十丹羽充十里見龍樹訳

インシエーション、カヌー、笛、小屋、仮面、編み袋、樹木、ヤム畑などメラネシアの日常に溢れるさまざまな事例や事物と、サイボーグに満ちた私たちの世界との「部分的つながり」を精緻な理論によって見出す、今日もっとも大きな影響力をもつ人類学者の理論的名著。

1511 三四九頁 三〇〇〇円

監査文化の人類学 アカウンタビリティ、倫理、学術界

マリリン・ストラザーン 丹羽充十谷憲一十上村淳志十坂田敦志訳

市場原理と結びついた生産性の追求とペーパーワークの増大によって、社会や人類学は、どのように変容したのか？ 新自由主義に基づく大学再編成の波を背景に、雑務に忙殺される人類学者たちがみずからの職場を描きました！

2212 四〇四頁 五〇〇〇円

自然と文化を越えて

フィリップ・デスコラ 小林徹訳

アチュアル族のインディオとの出逢いをきっかけに、地球規模で広がる四つの存在論を横断し、非人間をも包摂する関係性の分類学を打ち立てる。近代西欧が発明した「自然／文化」という二分法を解体し人類学に〈転回〉をもたらした、レヴィ＝ストロースの高弟による記念碑的著作。

2011 六三七頁 四五〇〇円

わたしの声 一人称単数について

アルフォンソ・リンギス 水野友美子・小林耕二訳

ことばによって、来るべき未来の幻に身をゆだね、計算や利害の支配する世界と訣別すること——。哲学、言語学、人類学、精神分析を横断しながら、かけがえない〈わたし〉の存在をめぐる旅へ。旅する哲学者による声をめぐるエッセイ。

2198 二六三頁 三三〇〇円

暴力と輝き

アルフォンソ・リンギス 水野友美子十金子遊十小林耕二訳

計画と測量に基づく現代社会のなかで、国家によって二元的に管理されてしまった〈暴力〉に、野生の力の顕現と、抑圧された自由を獲得するための積極的な契機を見出す。抑圧された負のイメージから〈暴力〉を解き放ち、その秘められた〈輝き〉によって真の自由を獲得せよ！

1953 三〇二頁 三三〇〇円

変形する身体

アルフォンソ・リンギス 小林徹訳

動物と人間、男性と女性、大人と子供、有機体と無機体、現代と古代、固体と液体、生と死を巧みに越境し、現代における〈身体〉のあり様や倫理的行為のあり方までをも根底的に問う、人類学的エッセイ。

1512 二八七頁 二八〇〇円

美女と野獣

マイケル・タウシグ 上村淳志十田口陽子十浜田明範訳

豊胸 ヒップアップ、フェイスリフト、脂肪吸引、ボトックス注射 処女膜再生……サトウキビ・プランテーションのひろがるコロンビアを舞台に、美容整形に身をゆだねる女たちと暴力に手を染める男たちが織りなす、《自然の支配》のおとぎ話。

199 二八五頁 三三〇〇円

模倣と他者性 感覚における特有の歴史

マイケル・タウシグ 井村俊義訳

異なる文化が出遭う際に生じる化学反応について、ヴァルター・ベンヤミンの「模倣」に関する洞察にインスパイアされながら独自の方法で論じた、米国の人類学者タウシグの名著。「模倣とは共鳴する魔術である」。

186 四二二頁 四〇〇〇円

ヴァルター・ベンヤミンの墓標

マイケル・タウシグ 金子遊十井上里十水野友美子訳

ベンヤミンが没した、フランス・スペイン国境の町ポルトボウについてのエッセイにはじまり、コロンビアの農民詩、悪魔との契約、シャーマンの身体の特質、宗教や道徳上の侵犯、などについて語る、ビートニク小説を思わせる、気鋭の人類学者の民族誌論集。

163 三九二頁 三八〇〇円

ケアのロジック 選択は患者のためになるか

アネマリー・モル 田口陽子十浜田明範訳

市民社会と消費社会の条件であり、主体の自由意志にもとづく「選択」にはいかなる限界があるか？ オランダの大病院における調査をもとに、予測や制御が不可能な事象に向かい合う方法である「ケアのロジック」を描き出す新たな実践の書。

207 二八頁 三三〇〇円

多としての身体 医療実践における存在論

アネマリー・モル 浜田明範十田口陽子訳

アクター・ネットワーク論の旗手の一人である著者が、オランダの大病院を調査し、動脈硬化と呼ばれる一つの病が、様々な行為や場所、診断と治療の相互作用のなかで、複数性を帯びて存在していることを説得的に論じる。人類学の存在論的転回に多大な影響を与えた民族誌。

169 二八六頁 三五〇〇円

作家、学者、哲学者は世界を旅する

ミシエル・セール 清水高志訳

二十一世紀になり新たに勃興したモノやノン・ヒューマンを巡るさまざまな思索や、人類学の存在論的転回（オントロジカル・ターン）とも深く絡み合いながら、諸学問の歴史にまつわる知見の膨大な蓄積を背景に、セールの思想の画期的な新展開が、ここに語られる。

160 二二七頁 二五〇〇円

フレイマー・フレイムド

トリン・Ｔ・ミンハ 小林富久子他訳

映像作家、音楽家、人類学者としても有名な著者が、《前衛映画》と《実験映画》のとらえ方、《詩的言語》の役割、などについて語ったインタヴュー集。著者の映像作品「ルアッサンブラージュ」「ありのままの場所」「姓はヴェト、名はナム」の完全版スタクリプトも収載。

162 四〇七頁 四〇〇〇円

法が作られているとき 近代行政裁判の人類学的

考察 ブルーノ・ラトウール 堀口真司訳

「フランス行政最高裁判所」に、人類学者がさまざまな制約や障害を乗り越えつつ、奥深くまで潜り込む。秘境的ともいえる、その《実務》を支えてきた《高級官僚》たち。ある《部族》がいそしむ婚姻の《儀式》や、火の誕生を祝う《通過儀礼》を調査するかのように、詳細に描きだす。

176 四七三頁 四五〇〇円

流感世界 パンデミックは神話か？

フレデリック・ケック 小林徹訳

「一種の壁」を容易に乗り越え蔓延するインフルエンザウイルスを、香港・中国・日本・カンボジアを股にかけて追跡し、ヒトと動物種とのあいだに広がる諸関係を新たな対角線をひく。ヒトが作り上げる〈社会〉のあり方を、〈危機〉への対応という観点から問い直す。

175 三五四頁 三〇〇〇円

非一場所 スーパーモダニティの人類学に向けて

マルク・オジェ 中川真知子訳

歴史とアイデンティティに根ざした場所と対置される、インターネット空間、スーパーマーケット、空港などを匿名性に満ちた「非一場所」として考察し、二一世紀の「いま・ここ」の新たな理論を立ち上げる。

1710 一七六頁 二五〇〇円

メトロの民族学者

マルク・オジェ 藤岡俊博訳

日々なげなく通り過ぎる地下鉄はいかなる場々空間なのか？ 車内の様子、駅の情景、人々の動きといった具体例をさまざまに取り上げ、パリのメトロを契約的かつ経済的な空間として読み解く。（非一場所）の提唱者による現代都市をめぐる人類学。

222 一四七頁 二〇〇〇円

経済人類学 人間の経済に向けて

クリス・ハンキース・ハート 深田淳太郎十上村淳志訳

世界的な文脈から人類諸社会の経済を俯瞰し、人類学と経済学とのつながりを探り、二〇世紀後半の世界の経済状況を分析。現代社会の中で「経済人類学」が何をなしているのかを深く考察し、「人間の経済」の本質と展望をえがく。

1712 三〇二頁 二八〇〇円

金融人類学への誘い トレーダーたちの日本と夢の終わり

宮崎広和 木村周平十深田淳太郎十早川真悠十高野さやか訳

市場の歪みを解消しやがて《終わり》へと至る裁定推量（アービトラージ）は、不確実性に賭ける投機から区別できるのか？ 十年以上に渡り、日本の証券トレーダーたちの思考と実践に迫った実験的な民族誌。在米日本人人類学者の野心的著作の待望の邦訳。

221 三〇〇頁 三三〇〇円

反政治機械 レソトにおける「開発・脱政治化・官僚支配

ジェームズ・ファーマガソン 石原美奈子十松浦由美子十吉田早悠里訳

アフリカ南部レソトで実施された農村開発プロジェクトの生成過程を系譜学的に描き出し、失敗によって稼働し続けるその不可視の効果を綿密なフィールドワークから明らかにした「開発の人類学」の古典的名著。

203 四六四頁 五〇〇〇円

新型コロナウイルス感染症と人類学 パンデミック

とともに考える 浜田明範・西真如・近藤祉秋・吉田真理子編

世界の人びとが経験しているパンデミックについて、人類学はなにを考えることができるのか？ 二〇一九年から猛威をふるう、新型コロナウイルス感染症が編り成す多様なネットワークを追跡し、人間の変容可能性を描き出す。

213 四六三頁 三三〇〇円

ジカ熱 ブラジル北東部の女性と医師の物語

デボラ・ジニス 奥田若菜・田口陽子訳

二〇一五年ブラジルで流行し、新生児を襲った未知の感染症——ジカ熱。ウイルス特定までの過程を描くなかで、ブラジルの地域格差、リプロダクティブ・ヘルス、孤立する家族といった多角的な問題を浮かび上げらせながら、あらたなケアや連帯を想像させるフェミニスト民族誌。191頁 四六判二五二頁 三〇〇〇円

市民社会と政治社会のあいだ インド、ムンバイの

ミドルクラス市民をめぐる運動

田口陽子

インド都市部の市民運動を事例に、研究者たちの論争、活動家たちの主張、運動の展開を追うことで、「市民」であるとはどのようなことであり、そこではいかなる「政治」が展開されているのかを問う新しい人類学。181頁 A5判二九頁 四〇〇〇円

不信の支える信仰共同体 ネパールのプロテスタン

ティズムについての民族誌的研究

丹羽充

公的弾圧やヒンドゥー・ナシヨナリズムに抗しながらも、近年勢力を拡大しつつあるネパールのプロテスタンティズムは、神の栄光のためにどのような活動を実践しているのだろうか。西洋における宗敎概念との差異を豊富な事例とともに別括しつつ、特異な共同体の姿を自撃させる傑出した民族誌。206 A5判二六七頁 四〇〇〇円

チカーノとは何か 境界線の詩学

井村俊義

メキシコ系アメリカ人としてさまざまな狭間を揺れ動きながらも生き抜く「チカーノ」。彼らの思考と行動を丁寧に追いながら、私たちの来るべき社会を透視する！ 193 四六判二三三頁 二八〇〇円

生きている音楽 キューバ芸術音楽の民族誌

田中理恵子

ボレロ、ルンバ、アフロ・キューバンなどさまざまな音楽を発展・融合させた特異な歴史をもつ音楽大國キューバ。フィールドワークを通してハバナに暮らす人々の語りを集集・分析し、音楽実践が日常生活と親密に関わる国で営まれる生のダイナミズムを描き出す。218 A5判三八八頁 六〇〇〇円

ドゴンの光

小川弘

一九八四年から二〇〇〇年という長い年月をかけ著者が幾度も訪れた、アフリカはマリ共和国のドゴン。今や失われつつあるかの地の風景や建築、そして人々の貴重な姿をおさめた珠玉の写真集。1812 A5判並製オールカラー六四頁 二五〇〇円

今福龍太コレクション「パルティータ」

思想的変奏の組曲^{パルティータ}。世界を切り分ける分界^{パルティータ}。そして新たな出発^{パルティータ}へのいざない。世界が生まれながらにして持つ可变的で即興的な、薄墨色の叡知^{パルティータ}を、吟遊詩人の精神と手技によつて書きとめ、歌い継いできた独創的な人類学者がいざなう思考の冒険。

四六判上製

クレオール主義「パルティータ」

〈混血〉の理念〈意志的な移民〉の倫理〈言語的越境〉の決意とともに、〈わたし〉を世界に住まわせる新たな流儀が鮮やかに描き出される。著者の思想の源流をなす著作にして、ポストコロニアル批評の極北にたつ金字塔。新たに補遺二編を加え、図版を大幅に刷新した完全版。 173 四三九頁 四〇〇〇円

群島ー世界論「パルティータII」

近代世界を支配する大陸的な原理から離れ、一元化された歴史と地理によつて困い込まれた時と場所を解き放ちながら、〈海〉と〈群島〉のヴィジョンによる世界をあらたに認識し、接続するための方法論の更新をめざした著者のはるかなる思想的到達点。 176 五四四頁 四五〇〇円

隠すことの叡智「パルティータIII」

著者の数ある論考の中から、〈文化人類学〉の傍らにおいて書かれたものを集成。初期の瑞々しい論考から単行本未収録の貴重な論文、そしてトリックスター人類学者山口昌男への機知溢れるオマージュに至るまで、著者の独創的な〈人類学的思考〉のエッセンスを凝縮した新アンソロジー。 171 三八八頁 三八〇〇円

ボーダー・クロニクルズ「パルティータIV」

異邦で不意に訪れるいまを描き出す軽やかな〈日誌〉。国境地帯を車で飛ばす旅人の移ろう視線が物語る一人称の〈小説〉。そして、バラ色の砂漠の民が奏でる音楽に目覚めた人類学者が記す鮮烈な〈民族誌〉。読み手によつてさまざまな表情を見せる傑作紀行。 177 二六七頁 二五〇〇円

ないものがある世界「パルティータV」

「進歩」続ける世界に批判的なまなざしを向ける〈わたし〉。人間がもつ原初的なことばや振る舞いが現前する精霊の島で、生命の根源を辿り直す少年〈ノア〉。二人の物語がいつしか一つの大きな物語として昇華していく。批評と創作のはざまで生まれた、希望溢れる未来の寓話。 1712 二四三頁 二二〇〇円

全巻完結 全五冊セット定価一七、〇〇〇円

関連書

小さな夜をこえて 対話集成

今福龍太

多木浩一、山口昌男、高橋悠治、吉増剛造、大塚信と行った先行世代との対話、沢木耕太郎、西谷修、伊藤俊治、沼野充義、巽孝之、港千尋、島田雅彦、上野俊哉といった同世代との対話、さらに近年の中村隆之、松田法子といった若手研究者との対話を自身による改題とともに、時系列順に収録。 194 A5判四二六頁 四〇〇〇円

神秘学

シュタイナーが協会と自由大学に託したこと

ルドルフ・シュタイナー 入間カイ訳

シュタイナーが生涯最後の二年間に心血をそそいだ「アントロポゾフィー協会」と「精神科学自由大学」について残した手紙・講演。

148 四六判二八八頁 三五〇〇円

神秘学小百科

リチャード・キャベンディッシュ 鎌田東二・横山茂雄他訳

J・B・ラインを顧問に迎え、魔術、オカルティズム、超心理学、心靈研究等いわゆる精神世界の全分野、全問題を網羅し、公平で正確な記述によって、現在最も信頼しうると定評のあるエンサイクロペディア。精神世界に興味をもつ人々の必携書。

近刊

アントロポゾフィー協会の進化について

パウル・マツカイ 入間カイ訳

アントロポゾフィー協会はどのように進化するのか？ 三十三年の周期で発展してゆくその過程で発生する課題を示しつつ、時代の運命ときわめて深く結びついた、これからの協会のあり方について語る、ゲーテアナム理事による講演集。

148 四六判二六八頁 二五〇〇円

ルドルフ・シュタイナーと人智学

フランス・カルルグレン 高橋明男訳

この、《シュタイナー教育》の提唱者にして二十世紀最大の神秘学者の生涯と思想を、そして彼の創始した人智学運動の全体像を、平易かつ簡潔に描きだし、広く世界各国で愛読されている定評ある入門書。

四六判三九頁十別丁図版三三頁 一五〇〇円

『魂の暦』とともに【新装版】

マンフレッド・クリューガー 鳥山雅代訳

四季に思づく〈思考〉をたどり、より深い〈私〉へ向かう、ルドルフ・シュタイナーによる十二カ月の魂の言葉。四季を通じた瞑想の道へと誘う、このシュタイナーの『魂の暦』の一篇一篇を、読みながら、そして考える。

233 (062) A5判一四五頁 一八〇〇円

哲学の謎

ルドルフ・シュタイナー 山田明紀訳

ギリシア哲学からカント、ヘーゲル、マルクス、ベルクソンまで、西欧の大哲学者たちの世界観の根底を流れる衝動を深い共感をもって汲み上げ、人間の生にとつての哲学的思考の意味を開示する著者の哲学的な主著。

A5判七二六頁 七〇〇〇円

瞑想 芸術としての認識

マンフレッド・クリューガー 鳥山雅代訳

〈この本が示しているのは、いかに瞑想を通して人間の中の認識の力が目覚め、強くなっていくかということです。〉ドイッの代表的人智学者が現代におけるシュタイナーによる魂の小道。待望の新訳・改訂版。

四六判一六七頁 一八〇〇円

人智学の死生観

ワルター・ビューラー 中村英司訳

近代西洋医学の限界をルドルフ・シュタイナーの思想によって打ち破ろうとする今日の人智学的医学の代表者が、地上の生の意味について、死の恐れとその克服について、そしてカルマと再生について、深い思索を平易に語る。

四六判一八七頁 二〇〇〇円

オイリュトミーの世界

高橋弘子編訳 ハイנטツ・ジンメル十エルゼ・クリンク他

ルドルフ・シュタイナーによって創始された、まったく新しい運動芸術《オイリュトミー》。この新しい舞踊の基本的な考え方、また教育に、治療にと応用されつつある、その多様な側面にも光をあてる最高の入門書。

A5判並製一六〇頁 一五〇〇円

オイリュトミーが育むこころとからだ 動きの教

育学 秦理絵子

オイリュトミーは子供たちにどのように働きかけ、またどのようにしてその成長をひきだすのだろうか。オイリュトミーの原理と基本要素を概観するとともに、シュタイナー学校におけるオイリュトミー教育の実践、そしてその教育的可能性を考える。

121 A5判二五四頁 二二〇〇円

神秘学叢書

編集 高橋巖

古代以来の《影の水脈》ともいうべきオカルティズムに神秘学を抜きにして西欧を語ることはできない。また、東洋、日本においても霊学に神秘学の伝統は長く深い。世紀転換期にあつて、洋の東西のオカルト的思考の在り方を探る異色の叢書。

A5判 / 四六判上製

美術史から神秘学へ

高橋巖

ルドルフ・シュタイナーの思想の日本への紹介者として著名な著者が、原始キリスト教の美術から世紀末芸術、そしてパウエル・クレリーの音楽体験に至る西欧の美的精神のありかを、神秘学の相の下に探求する。

A5判二七〇頁＋別丁図版二八頁 三〇〇〇円

岡田茂吉における宗教と芸術

高橋巖

ヨーロッパのみならず東洋、日本の霊学の伝統にも造詣の深い著者が、ゲーテの色彩論、ユングとパウリの共時性論《濃縮》の理論等をも縦横に援用しつつ、世界救世教の開祖、岡田茂吉の思想へ人智学の立場から肉迫する。

四六判クロス装一八三頁 一九〇〇円

仏陀からキリストへ

ルドルフ・シュタイナー 西川隆範編訳

二十世紀最大の神秘学者が、古代パレスティナにおける仏陀、ゾロアスター、そしてナタン系とソロモン系の《二人のイエス》の劇的な出会いを、さらにはそれら諸教の、とりわけ仏教とキリスト教の内的関連を説く衝撃的な仏教論集。

四六判一八四頁 二〇〇〇円

霊界の境域

R・シュタイナー 西川隆範訳

霊的認識の諸段階と瞑想行を巡る諸問題を包括的に論じ、多くの人智学徒の導きの書ともなっている表題作に、「霊的認識の階梯」、「宇宙論・宗教・哲学」の二論文をも収録して、著者後期の人智学的霊学の核心に迫る重要著作。

四六判二七〇頁 二五〇〇円

蓮華の書

メイベル・コリンズ 西川隆範訳

ブラヴァツキー夫人の親密な友人にして、《神智学協会の最高の作家のひとつ》と称された英国の小説家が、古代エジプトの神殿と都市を舞台に、ひとりの少年の霊的な覚醒と成長、秘儀と闘争の中での転生を描く驚くべき神秘小説。

四六判二六六頁 二〇〇〇円

偉大な秘儀参入者たち

エドゥアール・シュレール

西川隆範十河野和子十槇野かおり十金子孝行十川杉哲子訳
シュタイナーのフランスにおける高弟が、古代の秘儀、そしてラーマ、クリシュナ、ヘルメス、モーセ、オルフェウス、ピュタゴラス、プラトン、そしてイエスの八人の秘儀参入者たちの霊的生涯と思想とを活写し、十九世紀末のオカルト復興に決定的な影響を与えた魂の書。

1911 四六判五二七頁 四八〇〇円

ヒエロニムス・ボッス

ヴィルヘルム・フレンガー 麻原雄訳

ブラド美術館の《快樂の園》によってあまりにも名高いボッスと、当時のオカルト・グループ、さらにはヨーロッパの秘教的伝統との関係を克明に追求し、ボッスの作品に新しく決定的な照明をあてた題目すべき研究。

近刊

パラケルススとその周辺

アレクサンドル・コイレ 鶴岡賀雄訳

後に著名な科学史家となったコイレは、ヤコブ・ペーメを初めとする十六世紀のドイツ神秘主義の犀利な研究者でもあった。パラケルスス、シュヴェンクフェルト、フランク、ヴァイゲルの四人の神秘家たちについての貴重な研究。

四六判二八五頁 三〇〇〇円

ロサ・ミステイカ叢書

近代のオカルトの思考はかつてない拡がりと深さを獲得したのではないだろうか。ルドルフ・シュタイナーの人智学的諸著作から現代日本のオカルト小説まで、現代という切迫した危機の時代における霊的、オカルト的作品を幅広く紹介する。

四六判上製

シュタイナー思想入門

西川隆範

この今世紀最大の神秘学者の劇的な生涯、そして《アカシヤ年代記》に基づいたその壮大な宇宙論、人間論を平易、簡潔に説く好個の入門書。苦難に満ちたこの人生において、霊的認識と修行の道を歩もうとする人々への小さな贈り物。

二二二頁 二〇〇〇円

道元とシュタイナー

塚田幸三

《道元が十三世紀に説いた神秘思想を、シュタイナーが二十世紀に再び説いたと言えるのではないだろうか。『正法眼蔵』とシュタイナーの人智学のなかに《輪廻》と《カルマ》》についての思考をさぐり、道元の仏教とシュタイナー人智学の共通の基盤を探求する斬新な試み。

131 二六五頁 二八〇〇円

聖別された肉体

横山茂雄

ついにユダヤ人大屠殺に至るナチズムと、アドルフ・ランツ（さらにはプラヴァツキー……）等のオカルト進化Ⅱ人種論との深くかつ微妙な関係、現代史の影の部分ともいうべきこの問題に、気鋭の英文学者が夥しい文献を渉猟しつつ迫る。

三九八頁 三五〇〇円

アクアリウムの夜

稲生平太郎

邪教白神教の影の下に、謎めいた老人の《チベット紀行》に導かれて、《ほく》と白子は、水族館の地下へと……。恐るべき《闇の力》に翻弄される若者たちの運命を新進の幻想文学研究家が渾身の力をこめて書下した衝撃のサイキック・ホラー。

二六六頁 二〇〇〇円

四季の宇宙的イマジネーション

R・シュタイナー 西川隆範訳

秘儀参人の道としての四季の魂的、霊的体験のために、四季の秘密を四つの壮大な宇宙的イマジネーションのうちに解明し、四季の中で四人の大神使の協働を讀えた著者最晩年の連続講演。人智学的福音書ペリコーペ「日曜日の福音」を付す。

二二〇頁 二〇〇〇円

輪廻転生とカルマ

R・シュタイナー 西川隆範訳

極めて複雑で錯綜した輪廻転生とカルマの問題を巡って、人類の霊的指導者間でエーテル体等のいかなる讓渡が行われたかを《霊的経済》の名の下に説く、霊的経済の原理、「人智学運動のカルマ」等を収録し、著者のカルマ観の一面を示す。

二四七頁 二五〇〇円

神秘主義と現代の世界観

R・シュタイナー 西川隆範訳

近代の《新しい自然科学の認識に浸透されつつ》、エックハルト、バラケルルス、バームからブルーノ、シレジウスに至る西欧中世の九人の大神秘家たちの思想の今日的意味を問う、著者のオカルト的思考の出発点を示す最初期の重要著作。

二二九頁 二〇〇〇円

黙示録の秘密

R・シュタイナー 西川隆範訳

聖書中、最も難解とされるヨハネ黙示録の驚くべきウィジョンを、来るべき時代、地球がアストラル的天体に変化し、人間が霊界へ再上昇する時代を描いたものと捉え、《六六六》の謎を著者独自の壮大な霊学によって解明する秘教的黙示録論。
二六三頁 二五〇〇円

創世記の秘密

R・シュタイナー 西川隆範訳

旧約聖書創世記冒頭の物語はポラール時代、ヒュベルポレオス時代、レムリア時代の出来事を描いたものだ、とする著者が、創世記の言語の忘れられた霊的な意味を、そして宇宙進化の頂点たる《人間》の責任を深く考察する著者唯一の旧約論。
二〇三頁 二〇〇〇円

世界史の秘密

R・シュタイナー 西川隆範訳

ギルガメッシュとエンキドゥ、ジャンヌ・ダルク、背教者ユリアヌス、コペルニクス、カント等の輪廻転生を極めて具体的に説き明かしつつ、世界史の背後に存在する霊的な力の解明に挑むスリリングな連続講演集。
一四七頁 一五〇〇円

人智学指導原則

R・シュタイナー 西川隆範訳

一般人智学協会の出発に当って、「協会のなかには統一的な意識が生じるべきである」と考えた著者が、病の床にあって、最後の力を振りしぼって人智学の内容をあらためて整理、発展させた人智学徒の必読書。「人智学の共同体形成」を付す。
一三九頁 一五〇〇円

西洋の光のなかの東洋

R・シュタイナー 西川隆範訳

フランス世紀末の神秘学者シュレーの「ルシファーの子供たち」の上演に触発された著者が、インドに代表される東洋の霊性を、西洋の薔薇十字的神秘学によって解明し、信仰からルシファー的霊認識への必然的移行を説く連続講演集。
二五頁 二五〇〇円

霊視と霊聴

R・シュタイナー 西川隆範訳

薔薇十字的瞑想修行によって霊視と霊聴に至るための理論と具体的プロセスを、基礎から、深遠で難解な核心部に至るまで、余すところなく公開する極めて秘教的な連続講演集。《この道を歩む者は確実に超感覚的世界に参入することができ》。
一八七頁 二〇〇〇円

社会改革案

R・シュタイナー 西川隆範訳

勃興する労働運動と迫りくる《世界大戦》の危機を前にして社会問題、労働問題の根本的な解決をめざした著者が、近代の技術と資本によって傷ついた《人間と人間社会を、社会有機体を癒そう》とする《社会有機体三分節化》の試みについて語った四講演を収録する。
二二五頁 二五〇〇円

釈迦・観音・弥勒とは誰か

R・シュタイナー、H・ベック、V・J・シュタイン、R・カルーツ 西川隆範編訳

原始仏教から、《人間の救済》をめざす大乘仏教への発展には、キリストの出現、その死と復活が霊的に大きくかわっているのではないだろうか。シュタイナー派の五人の仏教学者が釈迦・観音・弥勒の宇宙的働きと大乘仏教成立の意味を問う。
二二三頁 二〇〇〇円

シユタイナー教育・医学

小児科診察室 シユタイナー教育・医学からの子育て読本
 M・グレックラー/W・ゲーベル 入間カイ訳

乳児期から青年期まで、「教育と医学のつながり」から子どもの発達全体を支える新しい育児書。数多くの言語に訳されて世界中で読みつがれてきた、子ども一人ひとりの「私らしさ」を育てるための育児百科。増補改訂版
 177 A5判五七六頁十別丁図版四八頁十別刷付録八頁 五〇〇〇円

乳幼児のためのシユタイナー保育

バーナデット・ライチエル 入間カイ訳
 世界で最初にシユタイナー教育にもつづいた保育園をニュージーランドに設立し、運営しつづけてきた著者が、確立されつつある《シユタイナー保育》の可能性——その理論と実践のすべてを語る。
 四六判三二六頁 二五〇〇円

シユタイナー学校の全カリキュラム第1〜第8学年編

ドルナッパ・ゲナアヌム教育部門と自由ワルドルフ連盟教育部門合同プロジェクト
 鳥山雅代十ウイリギリウス・フオーグル訳
 ヴァルドルフ学校の経験豊かな教師たちが、シユタイナーの教育理念をふまえ、教育者の創造性をうながし、子どもの自発的な力を導き、育むために著した実践的な「授業作りの提案」。普遍的な授業実践のための手引き。
 211 A5判二九〇頁 三五〇〇円

シユタイナー教育基本指針 I

ライナー・パツラフ、クラウディア・マッキーン他 入間カイ訳
 ヴァルドルフ教育は、学校・幼稚園・保育園での実践としてのみならず、人びとの自律性と創造性を高めるために何ができるのか？ 日本独自の、乳幼児教育の基本指針を創ってゆくための基本指針。シユタイナー教育に関心をよせるすべての人の必読書。
 142 四六判二四〇頁 二五〇〇円

シユタイナー教育基本指針 II 三歳から九歳まで

ライナー・パツラフ、ヴォルフガング・ザムンスハウゼン 入間カイ訳
 人間の心身の健康を維持するものは何か？ 幼児期から少年期への心身の健全な成長をうながす「健康生成」の理念と実践。保育園・幼稚園教育と学校教育の連携をめざす持続的・統合的なシユタイナー教育のガイドライン。
 152 四六判二九〇頁 二五〇〇円

あるく・はなす・かんがえる ウルリケ・ペッター講

義録 ウルリケ・ペッター 入間カイ訳
 「主体性の基盤」は、子どもが自分の意志で立ち上がり、歩き出し、言葉を発し、その言葉で自己を表現することにある。国や地域をこえて、現代社会の多様性に応じた教育実践の在り方を解く。二〇一六年夏、大阪での二日間にわたる連続講義の記録。
 212 四六判二五七頁 二〇〇〇円

日本のシユタイナー幼稚園

高橋弘子
 日本で最初のシユタイナー幼稚園の創設者が、自らの実践を通じた具体例を豊富にまじえながら、シユタイナー幼児教育の基本的な考え方と、そのユニークな保育の実践を平易に紹介する。シユタイナー幼児教育への最良の入門書。
 四六判二〇〇頁 二〇〇〇円

シュタイナー幼稚園のうた

高橋弘子編

ドイツの、そして日本のシュタイナー幼稚園でうたわれている《流れゆく雲のような》、《雨の降る音のような》美しいうたを、楽譜とともに六十五曲収録する日本でただ一冊のシュタイナー幼稚園歌曲集。おとももどもも、さあ、うたいましょう！

10.6 B5判並製五六頁 一〇〇〇円

シュタイナー教育から「みふじ」の保育へ

高橋明男

日本で最初にシュタイナー教育をとりいれた那須みふじ幼稚園の四十五年をふりかえり、その地域の文化にシュタイナー教育がどのように作用するの、そしてこれからの幼児教育はどうあるべきなのかを、教諭へのインタビュー、日々のカリキュラムをとおして考察する。

21.9 四六判二四〇頁 二五〇〇円

七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育

育 エリザベト・M・グルネリウス 高橋巖・高橋弘子訳

ルドルフ・シュタイナーの遺志をひきつぎ、その思想に基づいて、シュトゥットガルトにおける最初のシュタイナー幼稚園を設立した著者が、未来の教育者に向けて語りかけた、シュタイナー幼児教育の原点。子どもに子どもの世界をかえし、子どもたちの魂の開花に立ち会う喜び。

四六判一五四頁 一五〇〇円

遊びとファンタジー 親子で考えるシュタイナー幼児教育

教育 クリスチアーネ・クーティク 森章吾訳

子供の創造性やファンタジー、そしてのびやかさをどう育んでゆくのか。幼稚園や保育園ばかりではなく、家庭での、また友人たちとのグループでの毎日の育児のなかにシュタイナー教育の考え方をいかにするための新しい育児読本。

四六判並製二六七頁 二五〇〇円

九歳児を考える

ヘルマン・コエプケ 森章吾訳

成長の「節目」である九歳前後の子どもたちをいかに手助けできるのか。具体例を手掛かりに、シュタイナー教育の立場から、危機的状況にある子どもたちを自由と創造性へ向かって導くための考え方と実践的指針を示す。

四六判並製二二六頁 二〇〇〇円

子供の叱り方 子供の教育と自己教育における《罰》

エーリッヒ・ガーベルト／ゲオルク・クニーベ 森章吾訳

子供を《叱る》というこの困難な問題をシュタイナー教育の観点から深く考察し、実践的な指針をも与えてくれる稀有な書。《怒りの背後には、より高次なものが感じとられなくてはならない》。

四六判並製三三三頁 二〇〇〇円

魂の保護を求める子どもたち

トーマス・J・ヴァイス 高橋明男訳

シュタイナーの思想にもとづく障害児のための治療教育共同体《キャンピル》の創立者のひとりが種々の障害を発達の観点から考察し、治療法、対処の基本姿勢、周囲の人々の変化の必要性を説く、シュタイナー治療教育の古典。

四六判二九六頁 二八〇〇円

子どもの絵ことば

ミヒヤエラ・シュトラウス 高橋明男訳

シュタイナー自身に学んだドイツの女性美術教育家による、シュタイナー教育からの児童絵画論。幼児の絵画を身体と心の発達を映し出すものと捉え、児童画の理解に新しい展望を開く画期的論考。

A4変判オールカラー九五頁 三〇〇〇円

シュタイナー学校の算数の時間

エルンスト・シューベルト 森章吾訳

シュタイナー教育の数学の分野の第一人者が、子供たちに初めて算数を教えるさいの基本的な考え方を具体例をまじえて明快に説き、「点数をとるための算数」ではなく、内的な力を育む算数へといたる道を示す。

四六判並製一七三頁 一五〇〇円

シュタイナー学校の英語の時間

ロイ・ウィルキンソン 飯野一彦訳

《子供たちへの取り組み方は芸術的でなければなりません。》シュタイナー教育の研究・実践に七十余年取り組んできた著者が、自らの教師経験をふまえて書いた「英語教育」の実践的な手引。

1311 四六判並製一八四頁 二二〇〇円

シュタイナー学校は教師に何を求めるか 授業形成と内面性

クリストフ・ヴィーヒェルト 入間カイ訳

今日のシュタイナー教育運動の国際的な指導者「ゲテアヌム教育部門代表」が、《子どものなかに現れようとする霊的な個性に対する限りない畏敬の念》をこめて、学校運営の具体的な問題から、教員会議、メディアーションといったきわめて内的な領域までを広く、深く解き明かす。

四六判一九八頁 二〇〇〇円

メルヘン論

ルドルフ・シュタイナー 高橋弘子訳

シュタイナー教育そのものを創始したドイツの思想家・神秘学者が、グリム童話や世界各地の童話を例に、《人間の魂の最奥の深み》から湧き出る最も根源的なものとしての童話メルヘンを独自の霊学的観点から具体的に解明する。

四六判二三三頁 二〇〇〇円

メルヘンの世界観

ヨハネス・シュナイダー 高橋明男訳

ルドルフ・シュタイナーに学んだドイツの人智学者・教育者がメルヘン、とりわけグリム童話と日本の民話に秘められた深い意味、人類の歴史と人間の成長をめぐる深い叡知の意味を説き明かす日本での連続講演集。

四六判二三三頁 二二〇〇円

幼児のためのメルヘン

スーゼ・ケーニツヒ編 高橋弘子訳

子供たちの魂の奥深くに働きかけ、子供たちの主体性と独創性を育むメルヘン。世界中のシュタイナー幼稚園で語り継がれ、また教材として使われている定評あるメルヘン集。

四六判一三〇頁 一八〇〇円

ハンスとリンゴの種

ブロンヤ・ツァーリングン編 高橋弘子訳

メルヘンの果樹園によるこそ！子供たちに生きる喜びと生きる力を与え、創造の泉へと誘うメルヘン。子供たちが輝く笑顔を取り戻すための二十二篇の珠玉のメルヘンを明快で香り高い訳文によっておくる。

四六判一七二頁十別丁図版八頁 二〇〇〇円

バイオグラフィー・ワーク入門【新装版】

グードルン・ブルクハルト 樋原裕子訳

《わたしはどこから来て、どこへ行くのか。》シュタイナー思想にもとづくアントロポゾフィー医学から生まれた、自らの人生を自伝的文章や詩絵などによって振り返り、よりよい人生をおくるための実践の教々を紹介する。

22.9 (06.8) 四六判三一九頁 三〇〇〇円

アントロポゾフィー医学の本質【新装版】

ルドルフ・シュタイナー・ナイター・ヴェーグマン 浅田豊十中谷三恵子訳

〈健康になるためには、体、エーテル体、アストラル体。そして自我の、崩れたバランスを再び取り戻す治療薬を見出さねばならない。〉一九三五年、シュタイナーが迫りくる死の三日前まで、最後の力を振りしぼって推敲を続けた最後の著書。

228 (34) 四六判一八五頁 二五〇〇円

医学は霊学から何を得心することができるか

ルドルフ・シュタイナー 中村正明訳

二十世紀最大の神秘学者として、また〈シュタイナー教育〉の提唱者として知られる著者が、迫りくる死の影の下に、霊学と医学の深いつながりについて語った連続講演。今日あまりにも唯物的な医学の彼方へ歩もうとする人々の必読書。

四六判一〇七頁 一五〇〇円

時代病としての癌の克服

リタ・ルロア 高橋弘子・高橋明男訳

晩年のルドルフ・シュタイナーに出会い、彼の示唆にもとづく癌の研究に長年、従事してきた著者が、シュタイナー医学の基本とヤドリ木製剤（イスカドール）による癌治療の理論と実際について詳述する。付論Ⅱ堀雅明

四六判一五七頁 一八〇〇円

● 小社は一九八二年に『書肆風の藩徽』として創立され、八六年には白馬書房と業務提携し、九年十一月に現在の社名となりました。
● 本目録には、創業以来、二〇二三年七月までの刊行図書全点、および白馬書房の在庫図書全点が収録されています(書名の下に★印を付したものが白馬書房の刊行物です)。

● 価格はすべて二〇二三年七月現在の税抜き価格です。書店店頭でお求めの際等には二〇パーセントの消費税が加算されます。また、増刷時等に価格が変更される場合もありますが、ご了承ください。

● 初版刊行の年月は(二〇〇九年秋以降の新聞についてのみ)判型・定価などの表記の前に、西暦(上二桁は省略)で示してあります。たとえば、『09.12』とあるのは、『二〇〇九年十二月』に第版第刷が発行されたことを示しています。増補版、新版、新装版等の刊行年月も、それらの版の刊行年月を同様に示してあります。()内にあるのは、元の版の刊行年月です。

● 製本様式は(並製とある場合を除き)すべて上製本です。

● 本目録中の本は全国どここの書店でもお求めになれます。書店の店頭には、その書店に御注文ください。

● オンライン書店でもお求めになれます。honto、へーほんでは既刊の全点を取扱っています。英語、仏語等の外国語の書籍、日英・日仏・英仏等の二カ国版の書籍は、小社のサイト(<https://suisichastores.jp>)でも販売しております。ただし、アマゾンには、二〇二四年五月以降、同社が再販契約を遵守し、定価販売を励行するまで、出荷を停止しておりますので、同サイトではお求めになれません。

● 直接御注文いただく場合には、書名・冊数と住所・氏名・電話番号を明記の上、電話・FAX・e-mail (gyo-bu@suisichane) 等でご連絡下さい。そのさい、税込み価格に次の荷造送料を加えた金額をお送り下さい。入金を確認次第、送本致します。また、代金引換郵便でのご注文もうけたまわっております(代引手数料三〇〇円は負担下さい)。

荷造送料…………… (冊数にかかわらず) 税込み価格合計額 三、〇〇〇円まで……五〇〇円
三、〇〇〇円以上……… 小社負担

● 送料は現金書留または郵便振替(名義「水声社」、口座番号〇〇一八〇一四一六五四二〇〇)にてお願い致します。

● 小社のブッククラブ、〈コメント・ブッククラブ〉が二〇二〇年八月に発足致しました。お問い合わせ、入会申し込みは、e-mailで〈comet-bc@suisichane〉までお願い致します。

● 「書店様へ」小社の取次店は、トーン、日販、楽天ブックスネットワーク、中央社、人文・社会科学書流通センター、八木書店の六社です。